千葉県教育振興財団調査報告第596集

流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書2

―流山市西初石五丁目遺跡―

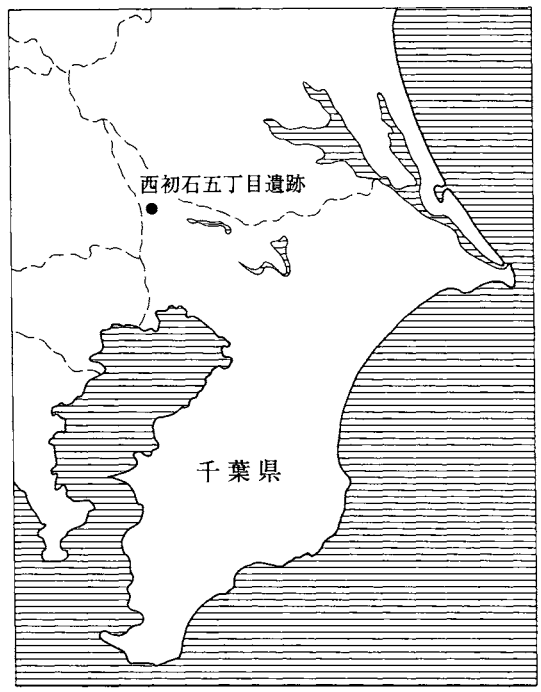
平成20年2月

独立行政法人　都市再生機構

財団法人　千葉県教育振興財団

流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書2

―流山市西初石五丁目遺跡―



SI－007出土素文鏡

竪穴住居跡出土土器（SI－011・012）

序　文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その結果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告書第596集として、独立行政法人都市再生機構の流山新市街地地区土地区画整理事業に伴って実施した流山市西初石五丁目遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、古墳時代前期の集落跡が発見されており、この地域の歴史を知る上で多くの貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理までご苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成20年２月

財団法人　千葉県教育振興財団
理事長　福　島　　義　弘

凡　例

1　本書は、独立行政法人都市再生機構による流山新市街地地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県流山市西初石五丁目59－1ほかに所在する西初石五丁目遺跡（遺跡コード220－045）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆は栗田則久・木島桂子、編集は栗田則久が担当した。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構及び流山市教育委員会の御指導、御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は以下のとおりである。

　第３図　国土地理院発行　1/25,000地形図「流山」（N1－54－25－1－2）

8　周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和48年撮影のものを使用した。

9　本書で使用した図面の方位は、すべて座標北であり、測量値は日本測地系による。

本文目次

序文
凡例
第１章　はじめに…… 1
　第１節　調査の概要…… 1
　　１　調査の経緯と経過…… 1
　　（１）発掘調査 …… 1
　　（２）整理作業 …… 3
　　２　調査の方法と概要…… 3
　第２節　遺跡の位置と環境…… 3
　　１　位置…… 3
　　２　歴史的環境…… 4
第２章 旧石器時代 ……11
　第１節　集中地点……11
　第２節　ブロック外出土石器……21
第３章 縄文時代 ……26
　第１節　竪穴住居跡……26
　第２節　竪穴住居跡出土石器……40
　第３節　土坑……42
　第４節　グリッド出土縄文土器……43
　第５節　グリッド出土石器……48
　第６節　グリッド出土土製品……51
第４章　古墳時代……52
　第１節　竪穴住居跡……52
　第２節　土坑……78
　第３節　溝状遺構……79
　第４節　グリッド出土遺物……81
第５章　奈良・平安時代……89
　第１節　グリッド出土遺物……89
第６章　まとめ……89
　第１節　出土土器と集落の変遷……89
　第２節　竪穴住居跡出土の素文鏡……91

挿図目次

第１図　調査区域と周辺の地形…… 2
第２図　グリッド名称例…… 3
第３図　遺跡の位置と周辺の遺跡…… 6
第４図　確認調査設定図…… 8
第５図　遺構分布図…… 9
第６図　遺構分布図（拡大）……10
第７図　第１地点器種別分布図……12
第８図　第１地点石材別分布及び接合状況……13
第９図　第１地点出土石器（１）……14
第10図　第１地点出土石器（２）……15
第11図　第１地点出土石器（３）……16
第12図　第１・２地点器種別分布図……17
第13図　第２地点出土石器……17
第14図　第３地点遺物分布図……18
第15図　第３地点出土石器……19
第16図　第４地点遺物分布図……20
第17図　第４地点出土石器……21
第18図　ブロック外出土石器……21
第19図　SI－001 ……26
第20図　SI－003 ……27
第21図　SI－024（１）……29
第22図　SI－024（２）……30
第23図　SI－025（１）……32
第24図　SI－025（２）……33
第25図　SI－025（３）……34
第26図　SI－025（４）……35
第27図　SI－025（５）……36
第28図　SI－026 ……38
第29図　SI－027 ……39
第30図　竪穴住居跡出土石器（１）……40
第31図　竪穴住居跡出土石器（２）……41
第32図　SK－008……42
第33図　グリッド出土縄文土器（１）……44
第34図　グリッド出土縄文土器（２）……45
第35図　グリッド出土縄文土器（３）……47
第36図　グリッド出土縄文土器（４）……48
第37図　グリッド出土石器（１）……49
第38図　グリッド出土石器（２）……50
第39図　グリッド出土土製品……51
第40図　SI－004 ……53
第41図　SI－005 ……54
第42図　SI－006 ……55
第43図　SI－007 ……56
第44図　SI－008 ……57
第45図　SI－009 ……58
第46図　SI－010 ……59
第47図　SI－011（１）……60
第48図　SI－011（２）……61
第49図　SI－012（１）……63
第50図　SI－012（２）……64
第51図　SI－013（１）……65
第52図　SI－013（２）……66
第53図　SI－014 ……67
第54図　SI－015 ……68
第55図　SI－016 ……69
第56図　SI－017 ……70
第57図　SI－018 ……71
第58図　SI－019 ……72
第59図　SI－020（１）……73
第60図　SI－020（２）……74
第61図　SI－021 ……76
第62図　SI－022 ……77
第63図　SI－023 ……78
第64図　SK－001～007・009……80
第65図　SD－004出土土器・土製品……81
第66図　グリッド出土土器……82
第67図　グリッド出土土器……89
第68図　「受け口」状口縁 ……90
第69図　各地の素文鏡……91

表 目 次

第１表　発掘調査一覧…… 1
第２表　調査遺構新旧対照表…… 4
第３表　周辺遺跡一覧表…… 7
第４表　第１地点出土石器属性表……22
第５表　第２地点出土石器属性表……24
第６表　第３地点出土石器属性表……24
第７表　第４地点出土石器属性表……25
第８表　ブロック外出土石器属性表……25
第９表　縄文時代石器属性表（１）……42
第10表　縄文時代石器属性表（２）……51
第11表　竪穴住居跡一覧表……83
第12表　古墳時代出土土器観察表……84
第13表　千葉県内出土素文鏡……91

図 版 目 次

巻頭図版　SI－007出土鏡
竪穴住居跡出土土器
図版１　遺跡周辺航空写真
図版２　第１集中地点
第３集中地点
第４集中地点
図版３　SI－001
SI－001炉
SI－003
SI－003遺物出土状況
SI－024
SI－024遺物出土状況
図版４　SI－025
SI－025炉
SI－026
SI－026遺物出土状況
SI－027
SI－027遺物出土状況
図版５　SI－004
SI－005
SI－006
SI－006遺物出土状況
図版６　SI－007
SI－008
SI－009炭化材出土状況
図版７　SI－009
SI－009遺物出土状況
SI－010
SI－010遺物出土状況
SI－011
SI－011遺物出土状況
図版８　SI－012
SI－012遺物出土状況
SI－013
SI－013遺物出土状況
SI－014
SI－014遺物出土状況
図版９　SI－015
SI－016
SI－016炉
SI－017
図版10　SI－018
SI－019
SI－020
SI－020遺物出土状況
図版11　SI－021

SI－021遺物出土状況
SI－022
SI－022遺物出土状況
SI－023
SI－023遺物出土状況
図版12　第１・２集中地点出土石器
図版13　第３・４集中地点、単独出土石器
図版14　竪穴住居跡出土縄文土器（１）
図版15　竪穴住居跡出土縄文土器（２）、グリッド出土縄文土器（１）
図版16　竪穴住居跡出土縄文土器（３）
図版17　竪穴住居跡出土縄文土器（４）
図版18　竪穴住居跡出土縄文土器（５）
図版19　竪穴住居跡出土縄文土器（６）
図版20　竪穴住居跡出土縄文土器（７）
図版21　竪穴住居跡出土縄文土器（８）、グリッド出土縄文土器（２）
図版22　グリッド出土縄文土器（３）
図版23　グリッド出土縄文土器（４）
図版24　グリッド出土縄文土器（５）
図版25　グリッド出土縄文土器（６）、縄文時代石器（１）
図版26　縄文時代石器（２）
図版27　竪穴住居跡出土土器（１）
図版28　竪穴住居跡出土土器（２）
図版29　竪穴住居跡出土土器（３）
図版30　竪穴住居跡出土土器（４）
図版31　竪穴住居跡出土土器（５）
図版32　竪穴住居跡出土土器（６）、グリッド出土土器

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１　調査の経緯と経過

独立行政法人都市再生機構は、常磐新線（つくばエクスプレス）に関連して、流山新市街地地区土地区画整理事業を計画した。実施にあたって、独立行政法人都市再生機構から用地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会あてに提出され、その取り扱いについて、千葉県教育委員会との慎重な協議が重ねられた。その結果、現状保存が困難な地点については、やむを得ず記録保存の措置を講ずることで協議が整い、財団法人千葉県教育振興財団が発掘調査を実施することとなった。本遺跡の発掘調査は、平成12年度から平成17年度にわたって行われた。

調査は、平成12年11月に西初石五丁目遺跡（１）の確認調査から開始され、その後、(17) までの地点を平成17年度まで順次確認調査と本調査を実施した。遺跡の規模136,000㎡のうち、対象外区域となる46,951㎡を除いた89,049㎡を対象に、上層合計9,442㎡、下層合計2,924㎡の確認調査を行った結果、上層については7,234㎡を対象に本調査を実施した。下層については、広がりが認められないため、確認調査で終了した。平成17年12月21日にすべての発掘調査が終了した。

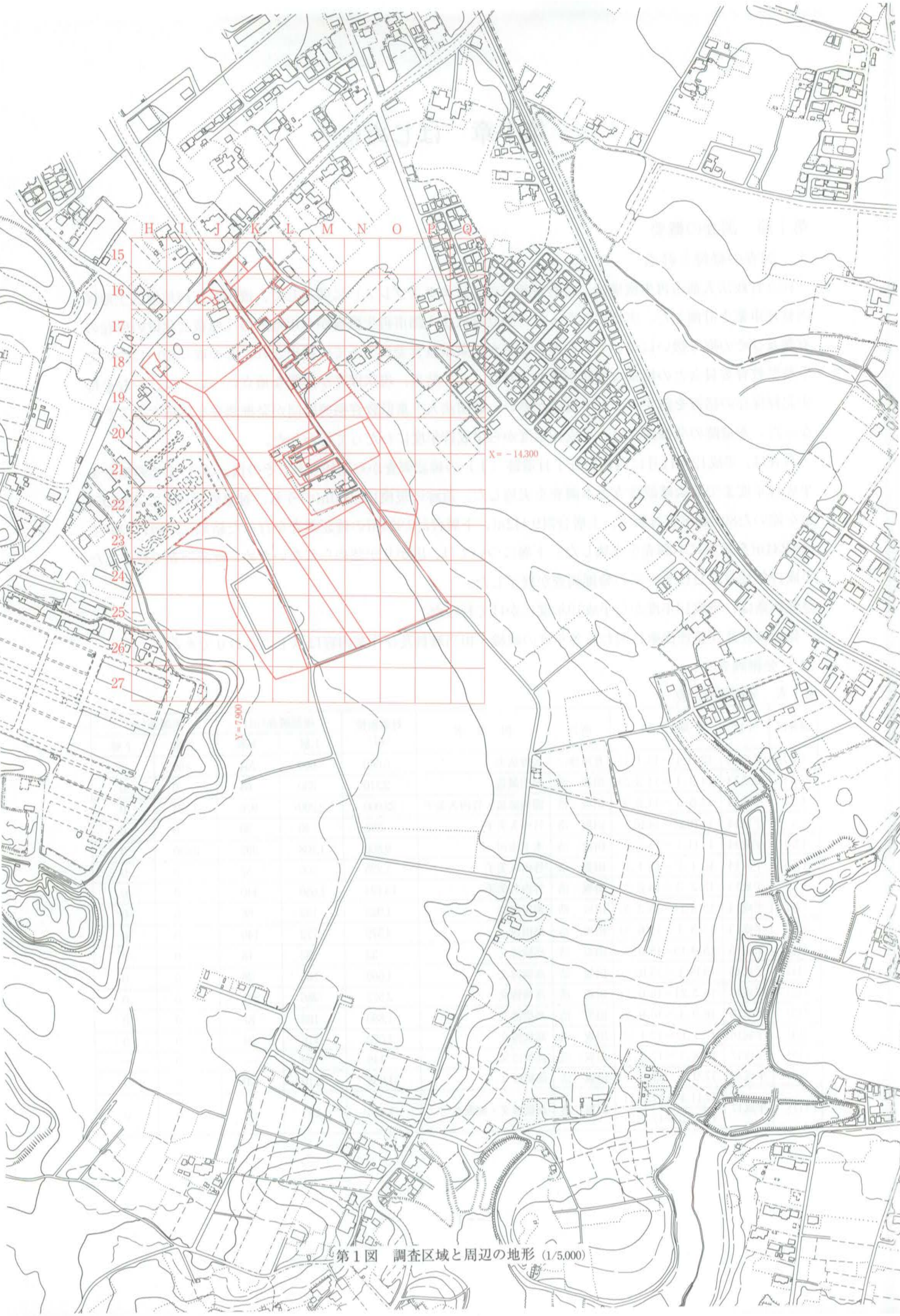
整理作業は、平成18年度から平成19年度にかけて行った。

発掘調査及び整理作業に関わる各年度の組織・担当職員及び作業内容は以下のとおりである。

（１）発掘調査

第１表　発掘調査一覧

調査区	年度	期　間	所長	担　当　者	対象面積(㎡)	確認調査(㎡)		本調査(㎡)	
						上層	下層	上層	下層
(1)	平成12	12.11.1～13.1.31	及川淳一	矢野敬夫	6,600	660	264	860	—
(2)	平成13	14.3.1～14.3.29	田坂　浩	岡田誠造	2,310	230	64	0	0
(3)	平成14	14.5.1～14.9.30	田坂　浩	岡田誠造・竹内久美子	22,000	2,200	976	3,524	0
(4)	平成14	14.10.21～14.10.31	田坂　浩	竹内久美子	398	40	20	0	0
(5)	平成14	14.11.1～15.2.27	田坂　浩	木下圭司	9,800	1,108	392	2,850	0
(6)	平成14	15.1.7～15.1.31	田坂　浩	竹内久美子	1,225	300	52	0	0
(7)	平成14	15.2.3～15.3.26	田坂　浩	竹内久美子	13,494	1,650	440	0	0
(8)	平成14	15.3.14～15.3.26	田坂　浩	岡田誠造	1,925	192	68	0	0
(9)	平成15	15.5.1～15.6.30	田坂　浩	福田誠	4,579	772	140	0	0
(10)	平成15	15.9.19～15.9.30	田坂　浩	高橋博文	32	32	18	0	0
(11)	平成15	15.10.1～15.10.16	田坂　浩	高橋博文	1,660	166	36	0	0
(12)	平成16	16.5.24～16.6.30	田坂　浩	高橋博文	2,573	286	291	0	0
(13)	平成16	16.9.1～16.9.30	田坂　浩	高橋博文	1,880	188	87	0	0
(14)	平成16	17.1.17～17.1.31	田坂　浩	高橋博文	1,070	116	24	0	0
(15)	平成17	17.8.1～17.8.2	田坂　浩	高橋博文	149	149	—	0	—
(16)	平成17	17.9.1～17.9.15	田坂　浩	高橋博文	1,088	110	20	0	0
(17)	平成17	17.11.1～17.11.11 17.12.5～17.12.21	田坂　浩	高橋博文・郷堀英司	1,428	1,243	32	0	0



第１図　調査区域と周辺の地形（1/5,000）

（2）整理作業

平成18年度

内　容：水洗注記から図版作成まで

組　織：調査研究部長　矢戸三男　整理課長　郷田良一

担当者：主席研究員　栗田則久

平成19年度

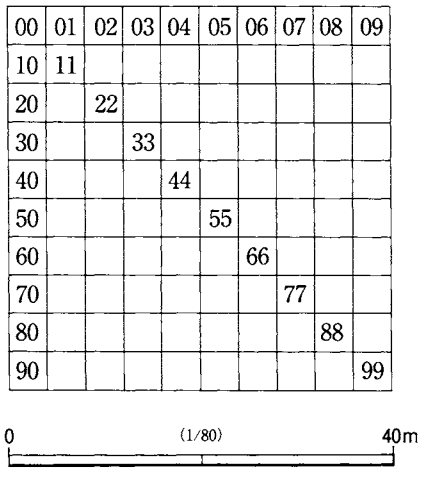
内　容：原稿執筆から報告書刊行まで

組　織：調査研究部長　矢戸三男　整理課長　高田　博

担当者：主席研究員　栗田則久　整理技術員　木島桂子

2　調査の方法と概要

調査にあたっては、国土方眼座標（第Ⅸ座標系）に基づいたグリッドの設定を行っている。新市街地地区内に所在する遺跡群全体に調査対象範囲を覆うように、40m×40mの方眼網を設定し、これを大グリッドとした。大グリッドの名称は、南北方向を北から1、2、3…、東西方向は西からA、B、C…とし、この数字とアルファベットを組み合わせて大グリッド名とした。本遺跡の調査範囲が含まれるグリッドは、東西方向にH～Q、南北方向に15～27である（第1図）。この大グリッドを2m×2mの小グリッドに100分割し、北から00～90、西から00～09とした（第2図）。この大グリッドと小グリッドを組み合わせて、例えば26M－20というように呼称した。



第2図　グリッド名称例

上層の確認調査は、まず調査対象面積の10％について、トレンチ及び一部グリッドを設定して遺構の種類や時期及び遺構の広がりを確認するために行った。このトレンチは、調査地の地形や調査範囲にあわせて東西南北方向に設定し、状況に応じて拡張しながら全体の把握に努めた。その結果、古墳時代前期の竪穴住居跡などを多数検出した。確認調査の結果を受けて、年度ごとに本調査範囲を決定し、順次本調査を実施した。

本調査にあたっては、各遺構に種別ごとの通し番号を付した。各遺構の種別については、アルファベットの略称で、竪穴住居跡にはSI、土坑にはSKを冠し、これに通し番号を付けた。なお、年度ごとに001から番号を付けており、遺跡内で同一番号の遺構が生じてしまうため、整理段階で平成14年度の5次調査を基本に遺構番号を付け替えた。新旧対照表は第2表のとおりである。

上層の本調査終了後、調査対象面積の4％について2m×2mのグリッドを設定し、下層の確認調査を行った。その結果、まとまった遺物の出土が確認された地点は、部分的に拡張し、他は確認調査で終了とした。

第2節　遺跡の位置と環境（第3図）

1　位置

西初石五丁目遺跡の所在する流山市は、千葉県の北西部、東京湾に流入する江戸川の東側、河口からは

第２表　調査遺構新旧対照表

新遺構番号	旧遺構番号	調査区	年度	備考
SI－001	SI－001	（1）	H12年度	
SI－002				欠番
SI－003	SI－003	（1）	H12年度	
SI－004	SI－004	（1）	H12年度	
SI－005	SI－005	（1）	H12年度	
SI－006	（3）－1	（3）	H14年度	
SI－007	（3）－2	（3）	H14年度	
SI－008	（3）－3	（3）	H14年度	
SI－009	（3）－4	（3）	H14年度	
SI－010	（3）－5	（3）	H14年度	
SI－011	（3）－6	（3）	H14年度	
SI－012	（3）－7	（3）	H14年度	
SI－013	（3）－8	（3）	H14年度	
	（5）－11	（5）	H14年度	拡張部
SI－014	（3）－14	（3）	H14年度	
SI－015	（3）－16	（3）	H14年度	
SI－016	（5）－1	（5）	H14年度	
SI－017	（5）－2	（5）	H14年度	
SI－018	（5）－4	（5）	H14年度	
SI－019	（5）－5	（5）	H14年度	
SI－020	（5）－6	（5）	H14年度	
SI－021	（5）－7	（5）	H14年度	
SI－022	（5）－8	（5）	H14年度	
SI－023	（5）－9	（5）	H14年度	
SI－024	（7）－1	（7）	H14年度	
SI－025	（7）－2	（7）	H14年度	
SI－026	（9）－1	（9）	H15年度	
SI－027	(12)－001	(12)	H16年度	
SK－001	（3）－9	（3）	H14年度	
SK－002	（3）－10	（3）	H14年度	
SK－003	（3）－11	（3）	H14年度	
SK－004	（3）－12	（3）	H14年度	
SK－005	（3）－13	（3）	H14年度	
SK－006	（3）－15	（3）	H14年度	
SK－007	（5）－3	（5）	H14年度	
SK－008	（5）－10	（5）	H14年度	
SK－009	（5）－12	（5）	H14年度	
SK－010	（7）－4	（7）	H14年度	
SD－004	溝状遺構Ⅱ	（5）	H14年度	

約30km北側に入る。近年、常磐自動車道流山インターチェンジ周辺の大規模な区画整理やつくばエクスプレスの開通に伴う開発など、急激な都市化が進んでいる。

西初石五丁目遺跡は、流山市のほぼ中央、江戸川の支流によって開析された小支谷に面する標高約20mの台地上に所在する。台地上はほぼ平坦であるが、東側と西側に谷が入り、平坦面は約350mの幅で南北に細長い形状を呈している。

2　歴史的環境

西初石五丁目遺跡の所在する江戸川東岸には数多くの遺跡が確認されている。ここでは、本遺跡に関係する縄文時代から古墳時代の主な遺跡を取り上げることとする。なお、遺跡の名称等については、『千葉県埋蔵文化財分布地図（１）－東葛飾・印旛地区（改訂版)』に従っている。

縄文時代の遺跡はきわめて多い。早期では、三輪野山第Ⅲ遺跡（29）で鵜ヶ島台式の竪穴住居や炉穴が調査されている。他に、加地区遺跡群でも炉穴がみられる。前期になると、多くの遺跡で集落が調査されている。松戸市の幸田貝塚（102）では関山式期を主体とした竪穴住居が多数検出された。流山市内では、隣接する市野谷宮尻遺跡（２）で黒浜期の竪穴住居が１軒と包含層から該期の土器が多く出土している。若葉台遺跡（22）では、黒浜式期の竪穴住居が10軒検出され、内１軒には貝層が含まれている。この貝層を伴う竪穴住居は三輪野山道六神遺跡（31）でも多数調査されている。黒浜式期の竪穴住居は三輪野山北浦遺跡（30）でも検出されている。諸磯式期では、長崎遺跡（89）のやはり貝層を伴う竪穴住居から良好な資料が出土している。中期では、後半に多くの遺跡が見られる。中野久木谷頭遺跡（77）では、中峠式期から加曽利Ｅ式前半期にかけての大規模な環状集落が形成されている。後期の遺跡も中期に引き続き多くの遺跡が所在する。江戸川台第１遺跡（78）や花山東遺跡（12）などで集落が検出されている。貝塚も多く形成され、三輪野山貝塚（74）や上新宿貝塚（26)・上貝塚（19）は大

規模な環状貝塚として知られている。晩期中頃までは資料が確認されているが、以降はほとんどみられなくなる。

弥生時代の遺跡は、縄文時代晩期を受け継ぐように少ない。集落としては、現在のところ、加村台遺跡（42）で中期後半の竪穴住居が５軒検出された程度である。この他に、桐ヶ谷新田第Ⅰ遺跡（23)･下花輪荒井前遺跡（14)・三輪野山道六神遺跡で弥生時代の土器片が確認されているのみである。

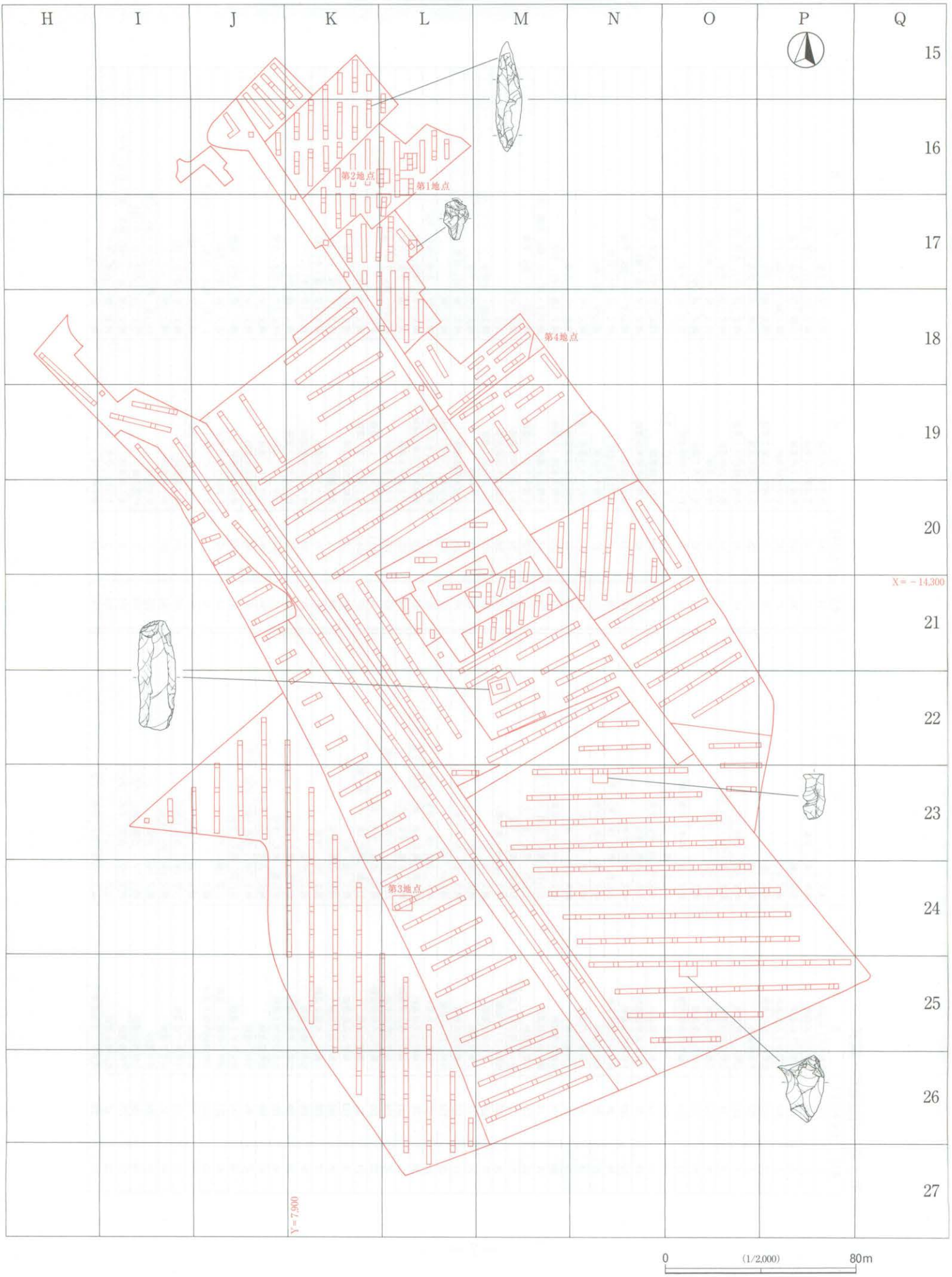
古墳時代になると一変して多くの遺跡が出現してくる。前期の集落では、本遺跡と同一集落になる隣接する市野谷宮尻遺跡から90軒の竪穴住居が検出され、東海系・北陸系・畿内系の土器が含まれる。また、３世紀後半頃と思われる墨書土器も確認され、流山地域の古墳時代前期の動向を究明する上で重要な遺跡となった。三輪野山北浦遺跡では小面積の調査ながら12軒の竪穴住居が検出されており、台地全体を考えればやはり大きな集落となろう。東深井第Ⅰ遺跡（98）では、７軒の竪穴住居と方形周溝墓が調査されている。他に、大畦台遺跡（17）や三輪野山第Ⅲ遺跡（29）などで数軒の竪穴住居が検出されている。中期になると、再び遺跡数が減少してくる。桐ヶ谷新田第Ⅰ遺跡から２軒、三輪野山北浦遺跡、三輪野山八重塚遺跡（36）で各１軒確認された程度である。ただ、整理中ではあるが、西初石五丁目遺跡に隣接する市野谷入台遺跡（３）からは、中期の集落が調査されており、石製模造品の製作跡も含まれている。集落が、西初石五丁目遺跡・市野谷宮尻遺跡から市野谷入台遺跡へと推移していく状況が伺われる。後期になると、再び遺跡数が増加してくる。上貝塚遺跡・上貝塚Ⅱ遺跡・谷遺跡などで集落が調査されており、加遺跡群では比較的大規模な集落もみられる。

第3図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1/25,000）

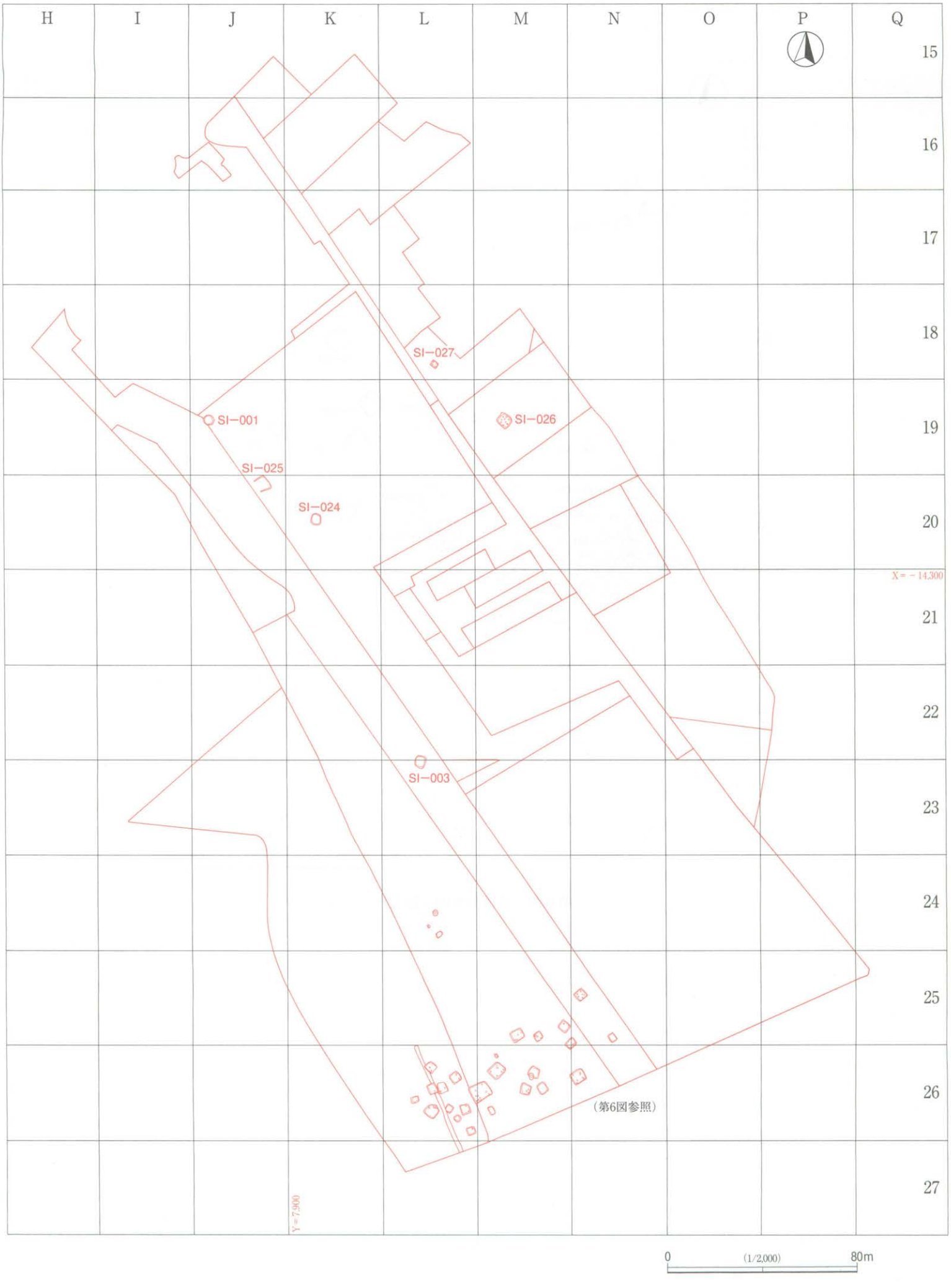
第3表　周辺遺跡一覧表

番号	県分布図番号	遺　跡　名	時　代
1	202	西初石5丁目遺跡	縄文
2	218	市野谷宮尻遺跡	古墳（後）、奈良、平安
3	210	市野谷入台遺跡	古墳（前）
4	219	市野谷芋久保遺跡	縄文（早）
5	222	市野谷二反田遺跡	縄文（前）
6	221	大久保遺跡	縄文（前）
7	223	市野谷立野遺跡	縄文（前）、古墳（後）
8	39	市野谷向山遺跡	縄文（前・中）、古墳（後）
9	156	市野谷中島遺跡	縄文（前・中）、平安
10	220	市野谷宮後遺跡	縄文
11	208	三輪野山向原古墳	縄文（前）、弥生、古墳（前）
12	203	花山東遺跡	旧石器、縄文、奈良、平安
13	152	大畔中ノ割遺跡	縄文(早・前・中)、平安
14	29	下花輪荒井前遺跡	弥生、古墳、平安
15	209	下花輪西山遺跡	縄文、古墳、中世
16	28	桐ヶ谷浅間後遺跡	旧石器、縄文（前・後）、平安
17	80	大畔台遺跡	縄文（前）、古墳、中世
18	27	上貝塚大門遺跡	縄文（前・後）、平安
19	26	上貝塚貝塚	縄文（前・中・後）
20	136	西初桜窪遺跡	縄文(前・中・後)、近世
21	24	桐ヶ谷南割遺跡	旧石器、縄文、古墳（中）、平安
22	130	若葉台遺跡	旧石器、縄文（前・中）
23	135	桐ヶ谷新田第Ⅰ遺跡	旧石器、縄文、平安
24	195	西初石3丁目遺跡	縄文（前·中・後・晩）
25	129	上新宿向宿遺跡	縄文（前・中）
26	23	上新宿貝塚	縄文（後・晩）
27	127	上新宿宿後遺跡	縄文（前・後）、平安
28	134	西初石2丁目遺跡	縄文(中・後)
29	79	三輪野山第Ⅲ遺跡	縄文、古墳（後）、平安、近世
30	78	三輪野山北浦遺跡	旧石器、縄文（前・後）、古墳、平安、近世
31	211	三輪野山道六神遺跡	縄文、古墳、平安、近世
32	154	三輪野山宮前遺跡	縄文（前）、古墳（後）、平安、近世
33	153	三輪野山八幡前遺跡	縄文、古墳、平安、近世
34	31	三輪野山貝塚	旧石器、縄文（前・中・後・晩）
35	213	三輪野山低地遺跡	縄文（後・晩）
36	185	三輪野山八重塚	縄文、古墳、平安
37	197	三輪山八重塚Ⅱ遺跡	縄文（早）、平安
38	190	加若宮第Ⅱ遺跡	縄文、平安
39	188	加北谷津第Ⅰ遺跡	旧石器、縄文、平安
40	189	加北谷津第Ⅱ遺跡	旧石器、縄文、平安
41	186	加町畑遺跡	縄文、古墳、奈良、平安
42	90	加村台遺跡	弥生（中）、古墳（後）、平安、近世
43	187	加若宮第Ⅰ遺跡	旧石器、縄文、平安
44	215	市野谷地蔵谷ッ遺跡	古墳（後）、平安
45	224	市野谷梶内第Ⅱ遺跡	縄文
46	212	加東割遺跡	縄文（前）、中近世
47	225	後平井中道遺跡	古墳（後）、奈良・平安
48	32	前平井遺跡	縄文（前・中）、平安
49	204	宮本遺跡	縄文（早）、平安
50	184	大原神社遺跡	縄文（早）、古墳（後）、平安
51	170	平和台遺跡	縄文（中）、古墳、平安、中近世
52	47	流山廃寺遺跡	奈良
53	228	西平井二階畑遺跡	縄文、古墳（後）、奈良・平安

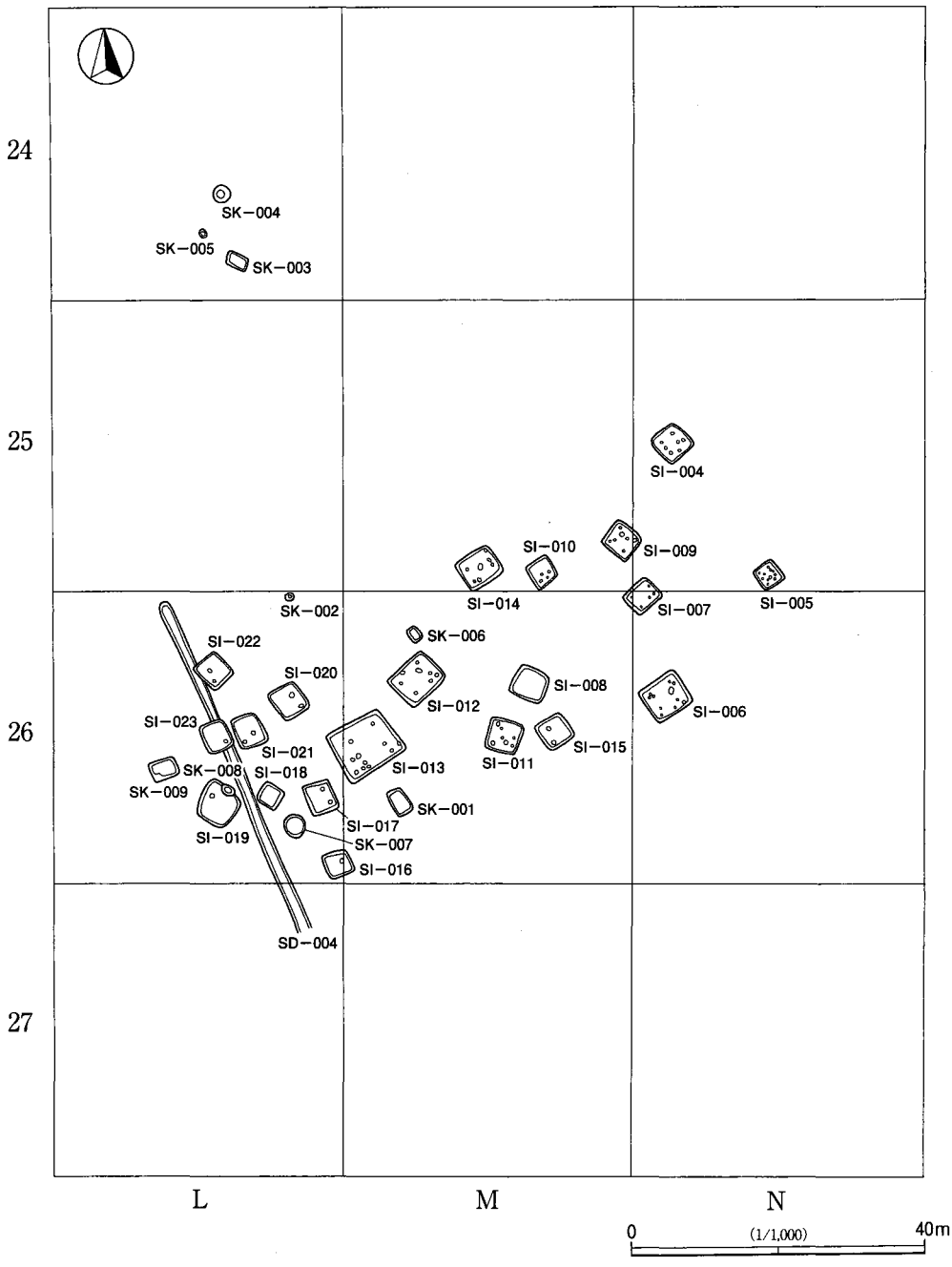
番号	県分布図番号	遺　跡　名	時　代
54	169	思井堀ノ内遺跡	縄文（中）、平安
55	193	思井鷹の見遺跡	縄文（早・前）、古墳、近世
56	229	思井上ノ内遺跡	古墳（後）、奈良・平安
57	167	中中屋敷遺跡	縄文(前・中・後)、平安
58	36	古間木三王第Ⅰ遺跡	縄文（前）、平安
59	226	前平井堀米遺跡	古墳（後）、奈良・平安
60	40	市野谷梶内第Ⅰ遺跡	縄文（前・中）、古墳（中・後）
61	41	野々下山中遺跡	縄文（前）、平安
62	81	野々下貝塚	縄文（前・中・後・晩）
63	42	野々下西方遺跡	縄文（前・中）
64	43	野々下大屋敷遺跡	縄文（後）、平安
65	158	古間木芳賀殿第Ⅰ遺跡	縄文（前・中）、平安
66	159	芝崎大囲遺跡	縄文（前・中）、古墳、平安
67	82	古間木茱萸木谷遺跡	縄文（早・前・後）
68	33	鯖ヶ崎貝塚	縄文(早・中・後)、平安
69	198	美原2丁目遺跡	縄文（前·中）、近世
70	17	中野久木貝塚	縄文(早・前・中)
71	114	中野久木日暮第Ⅰ遺跡	縄文（後）
72	75	中野久木谷頭遺跡	縄文（中）、古墳
73	123	中野久木囲ノ内遺跡	縄文（前・中）、平安
74	18	中野久木遺跡	縄文(早・前・中・後)、古墳（中）
75	139	中野久木米の台遺跡	縄文(前・中・後)、平安
76	20	富士見台第Ⅱ遺跡	奈良・平安
77	205	中野久木谷頭古墳	古墳
78	137	江戸川台第Ⅰ遺跡	縄文(後)、中近世
79	21	小谷貝塚	縄文（中）、平安
80	201	小屋神明脇遺跡	縄文（前·後）、近世
81	119	東初石3丁目第Ⅰ遺跡	縄文（晩）
82	120	東初石3丁目第Ⅱ遺跡	縄文（早）、古墳（後）、平安
83	121	東初石3丁目第Ⅲ遺跡	縄文（早）、平安、近世
84	122	十太夫第Ⅱ遺跡	縄文（前）、平安、近世
85	145	十太夫第Ⅰ遺跡	縄文(中・後)、平安、近世
86	164-1	富士見台（Ⅰ）遺跡	不明
87	164-2	富士見台（Ⅱ）遺跡	縄文（中・後）
88	149	長崎五牧割遺跡	縄文（前・中）、平安
89	51	長崎遺跡	縄文（早・前・中・後）
90	55	野々下長田遺跡	縄文（早・前・中・後）
91	57	野々下御成堤遺跡	縄文（前・中）
92	58	野々下金クソ遺跡	縄文（前・中）
93	168-1	笹原（Ⅰ）遺跡	縄文（中）、弥生、古墳
94	168-2	笹原（Ⅱ）遺跡	縄文（中）
95	66	名都借並木遺跡	縄文（中）
96	162	清流院前遺跡	縄文（前）、平安、近世
97	67	名都借笹堀込遺跡	縄文（前・中）、平安
98	109	東深井一の割第Ⅰ遺跡	旧石器、縄文、奈良、平安、中近世
99	98	こうのす台第Ⅳ遺跡	縄文（早・前・中・後）
100	200	鴻ノ巣遺跡	縄文（早・前·中・後）
101	191	猪ノ尻遺跡	縄文（早）
102	1	幸田貝塚	旧石器、縄文（前·中・後）、古墳
103	2	中芝遺跡	弥生（後）、古墳（前・中·後）
104	4	道六神遺跡	縄文（早・前・中·晩）弥生（後）、奈良・平安
105	3	木戸口（中金）遺跡	縄文（前）、古墳（中）
106	69	前ヶ崎貝塚	縄文（前・中・後）


H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
第1地点
第2地点
第3地点
第4地点
X＝－14,300
Y＝7,900
0
(1/2,000)
80m

第４図　確認調査設定図


H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
SI−027
SI−001
SI−026
SI−025
SI−024
SI−003
X=−14,300
Y=7,900
(第6図参照)
0
(1/2,000)
80m

第５図　遺構分布図


24
25
26
27
L
M
N
SK−004
SK−005
SK−003
SI−004
SI−010
SI−009
SI−014
SI−007
SI−005
SK−002
SK−006
SI−022
SI−020
SI−012
SI−008
SI−006
SI−023
SI−021
SI−013
SI−011
SI−015
SK−008
SI−018
SK−009
SK−001
SI−017
SI−019
SK−007
SI−016
SD−004
0
(1/1,000)
40m

第６図　遺構分布図（拡大）

第２章　旧石器時代

第１節　集中地点

第１地点（第７～11図、図版２・12、第４表）

出土状況　16L－83グリッド付近に分布する。南北７ｍ、東西５ｍの楕円形の範囲にまとまっているが、ほぼ中央が空白部となっており、北側と南側の２か所に分けることができる。石器は、Ⅸ層下部からⅦ層上部にかけて出土しており、特にⅨ層に集中する。剥片及び砕片がほとんどであるが、敲石は北側のみ、石核は両側にみられる。母岩別の分布傾向としては、安山岩が北側、チャートは南側に集中する。また、ガラス質黒色安山岩は南側の北東端のみに分布している。

出土遺物　１～13は剥片である。１～４はやや小形の不定形剥片で、３には頭部調整が施される。５～９、11は縦長剥片で、いずれも原石面を残す。10、12・13は横長剥片となる。やはり原石面を残している。14は、節理で剥落した厚い剥片を素材とした石核である。15・16も石核で、原石面を残す分厚い剥片を素材とし、いずれも小形の不定形剥片を剥離している。17は敲石である。扁平な礫の端部に敲打痕が残る。18・19・22は同一打面から剥離された剥片の接合資料である。21は、１点の頭部が折れているため明確ではないが、やはり同一打面からの剥離と思われる。20は、分割時に節理に当たって剥離したものの接合資料である。石核20dは、その後不定形剥片が剥離されている。23は円盤状石核の接合資料、24は原石面を残す石核に２点の剥片が接合している。石核24cは、接合した部位のほかにも打面を有する。25は不定形剥片同士の接合資料である。25b＋cはさらに剥片剥離がみられるため、石核と考えられる。

第２地点（第13図、図版12、第５表）

出土状況　第１地点の西側に散在しており、第１地点の周辺ブロックとした。点数が少ないため分布傾向はみられないが、第１地点には含まれないナイフ形石器が出土している。

出土遺物　１・２は二側縁加工が施された小形のナイフ形石器である。１は縦長剥片、２は横長剥片を素材としている。３は不定形剥片、４は頭部が折れた縦長剥片で、いずれも微細な剥離が縁辺に認められる。

第３地点（第14・15図、図版２・13、第６表）

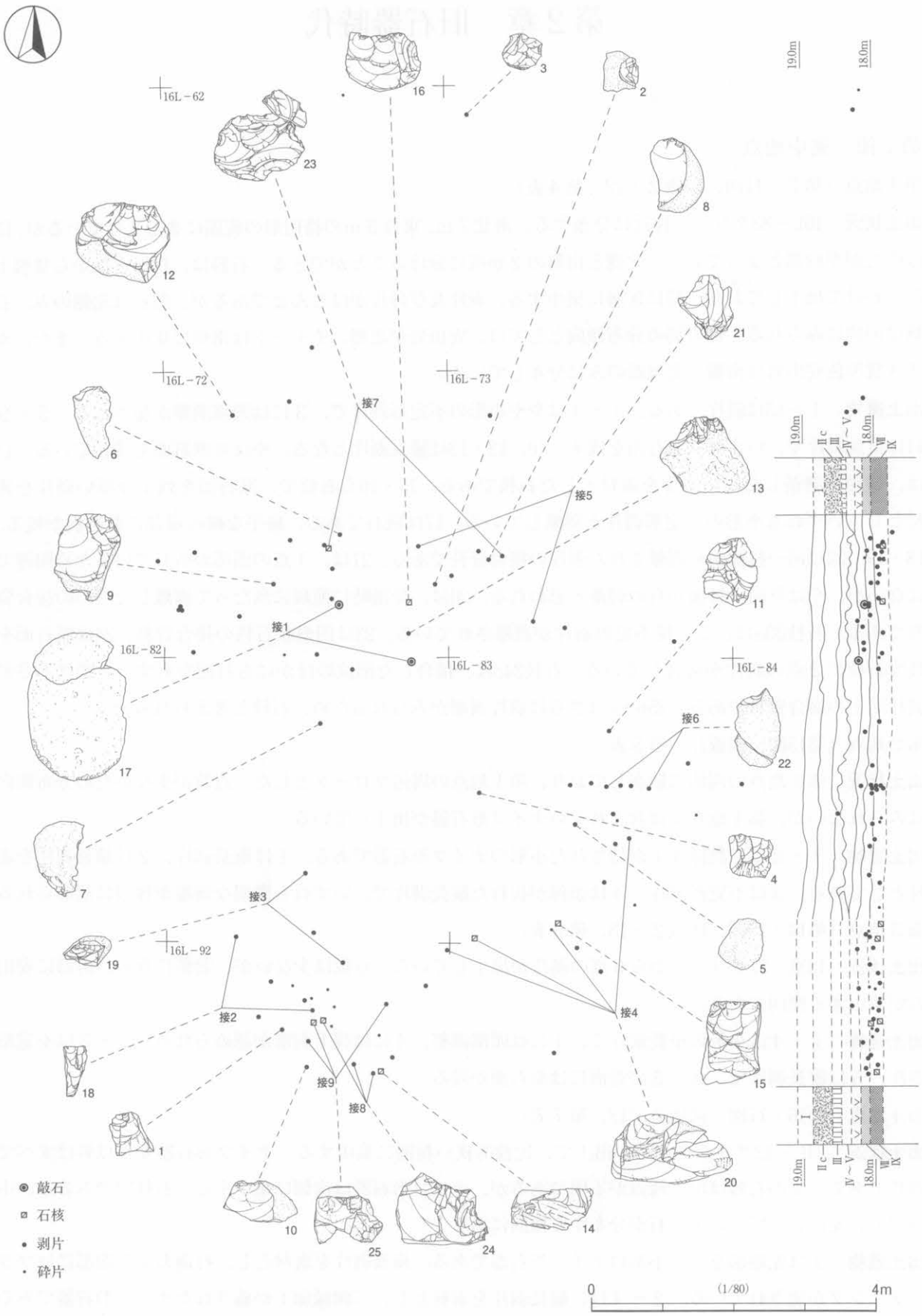
出土状況　18M－57グリッドから６点の剥片が出土している。点数は少ないが、北側に頁岩、南側に安山岩が集中する傾向にある。

出土遺物　１・４は小形の縦長剥片で、１には頭部調整、４には稜上剥離が認められる。２・３は不定形剥片、５は縦長剥片で、３・５の背面には原石面が残る。

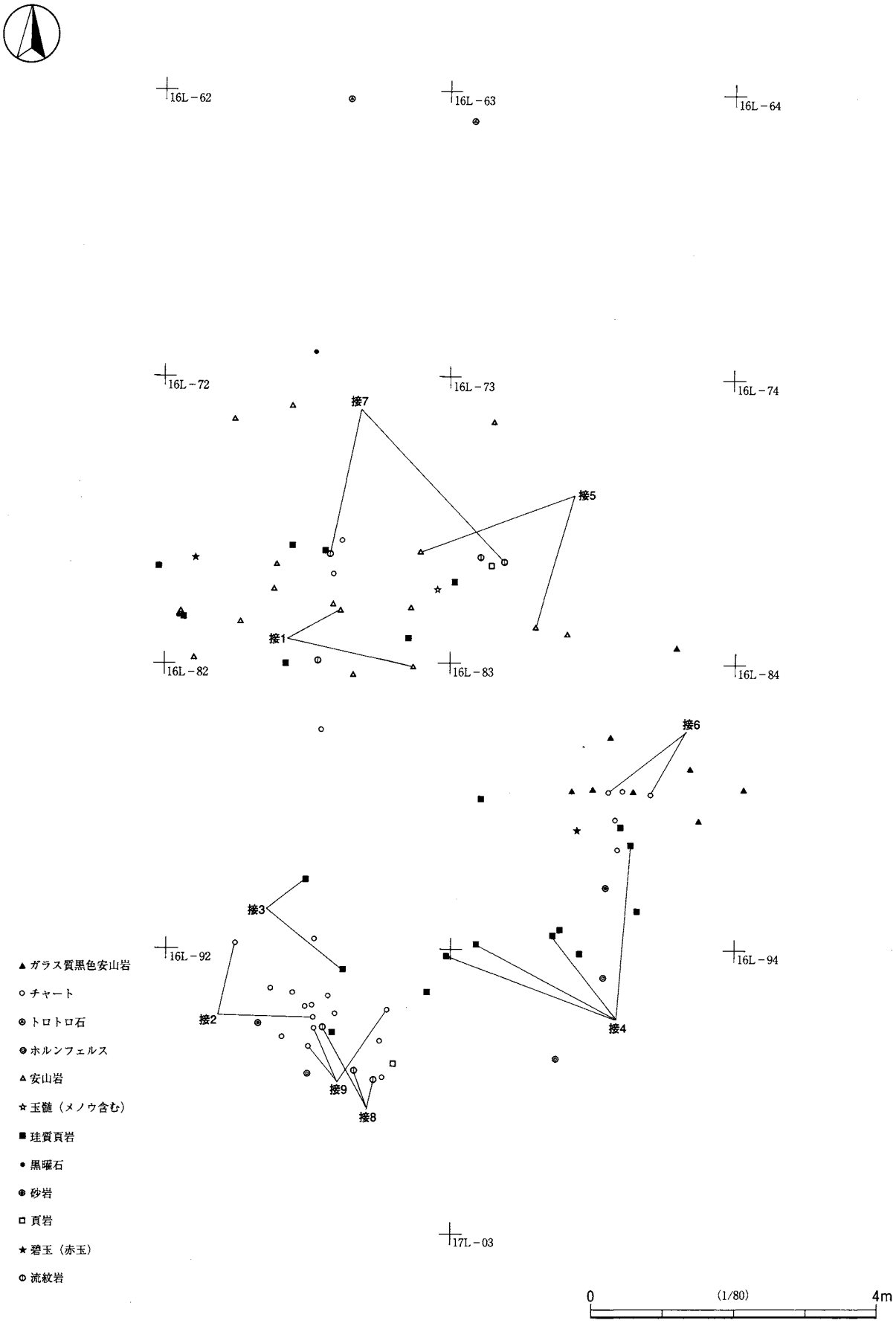
第４地点（第16・17図、図版２・13、第７表）

出土状況　24L－42グリッドからの出土で、比較的狭い範囲に集中する。ナイフ形石器４点以外はすべて剥片である。１の石器は出土地点が不明であるが、ナイフ形石器は南側に集中する。石材別でみると、中央部分に安山岩、周辺に黒曜石が分布する傾向にある。

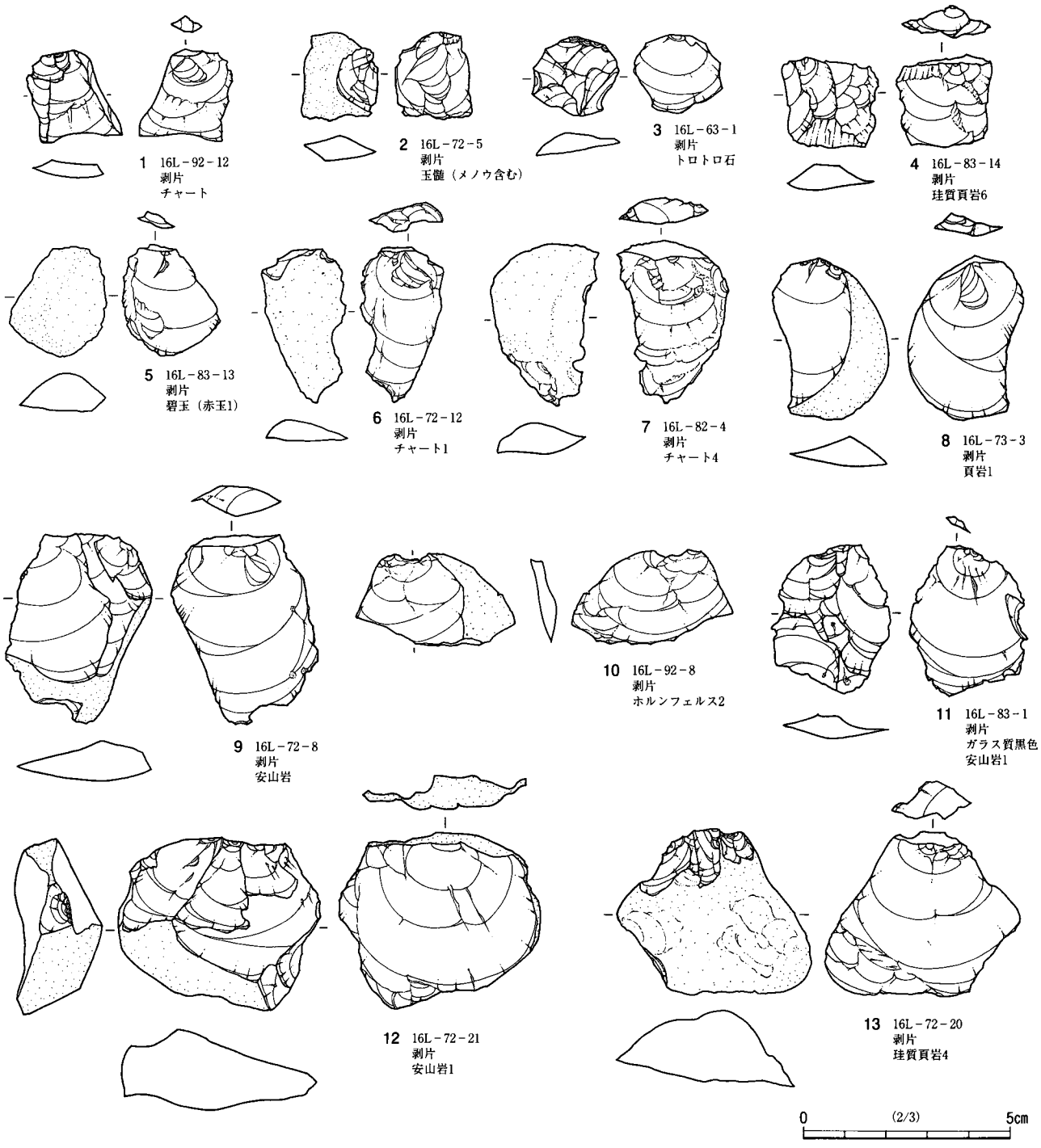
出土遺物　１は先端部を欠く小形のナイフ形石器である。横長剥片を素材とし、打面および端部にはブランティングが施されている。２～４は、縦長剥片を素材とし、二側縁加工が施されたナイフ形石器である。素材の形状をそのまま利用し、打面も残っている。ブランティングの状態はやや荒い。４には側面側から



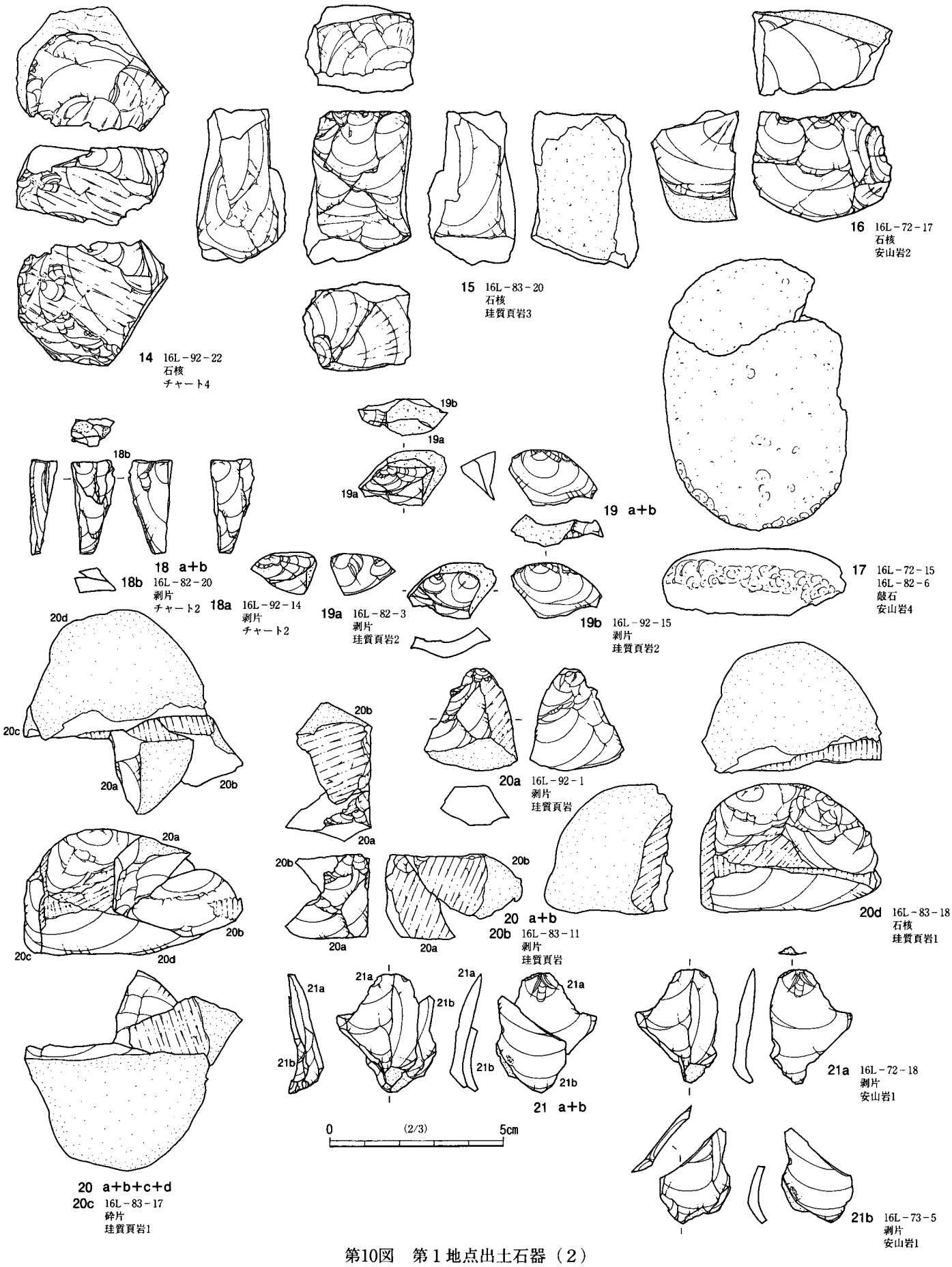
第７図　第１地点器種別分布図



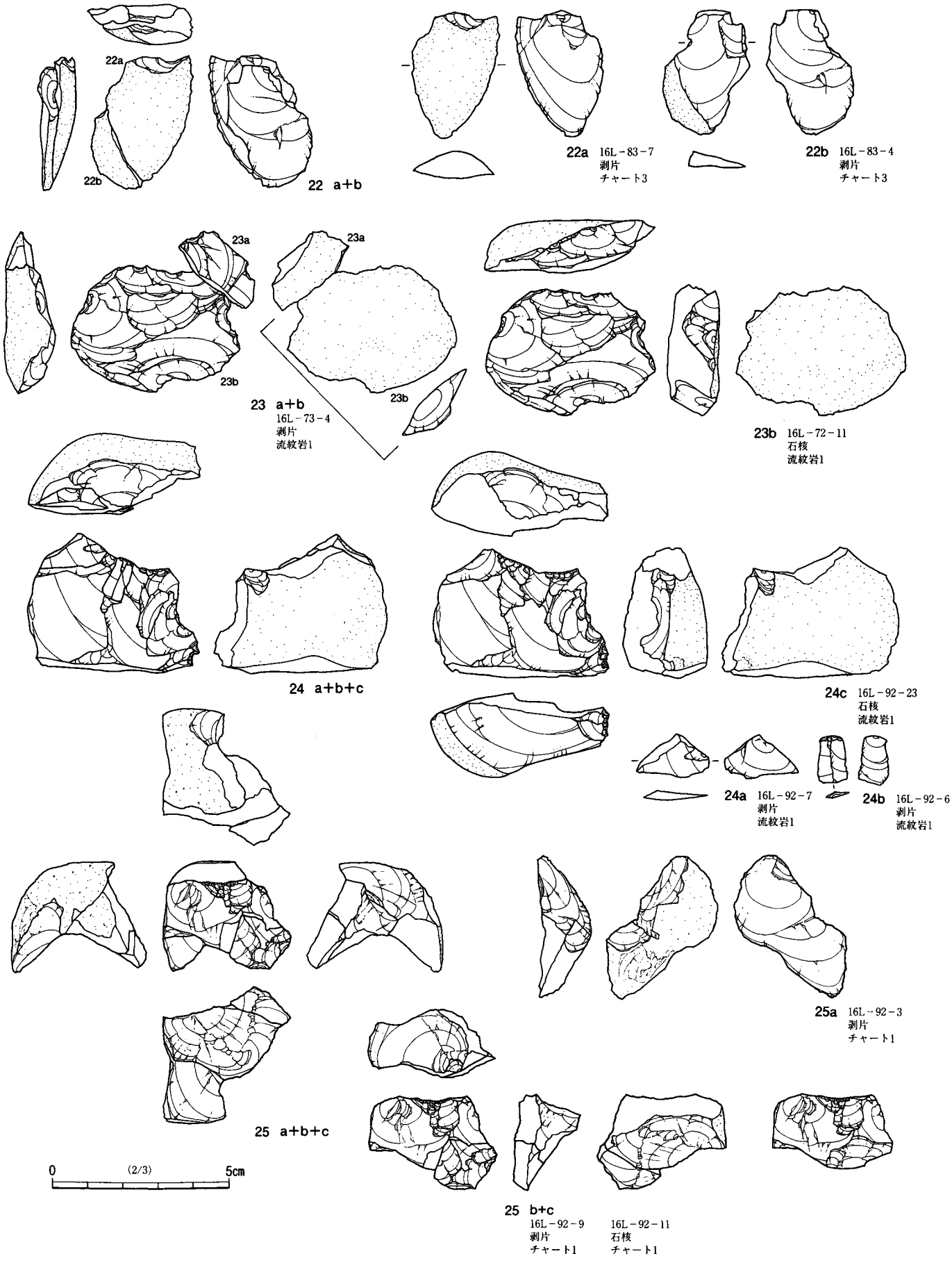
第８図　第１地点石材別分布及び接合状況



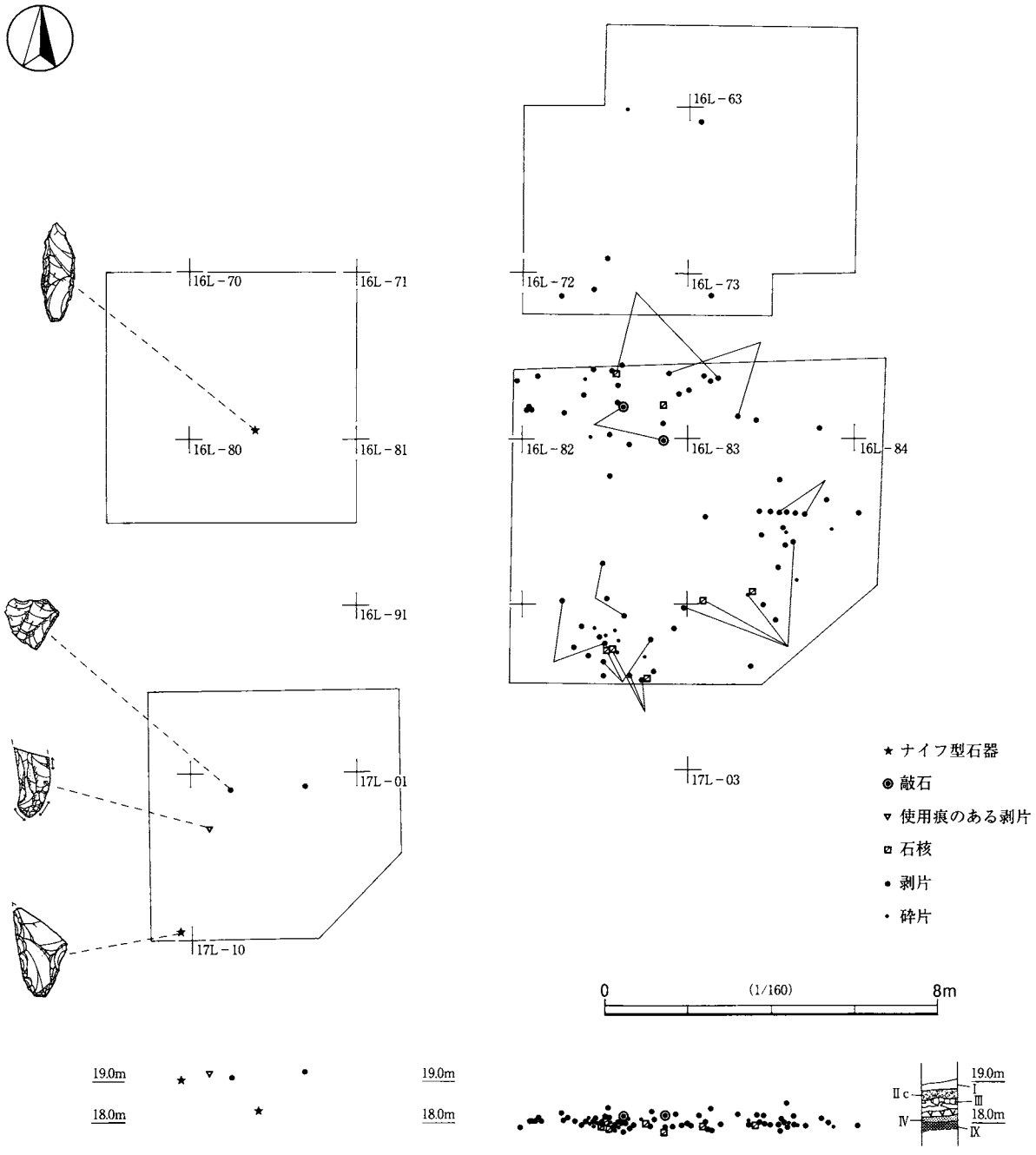
第9図　第1地点出土石器（1）



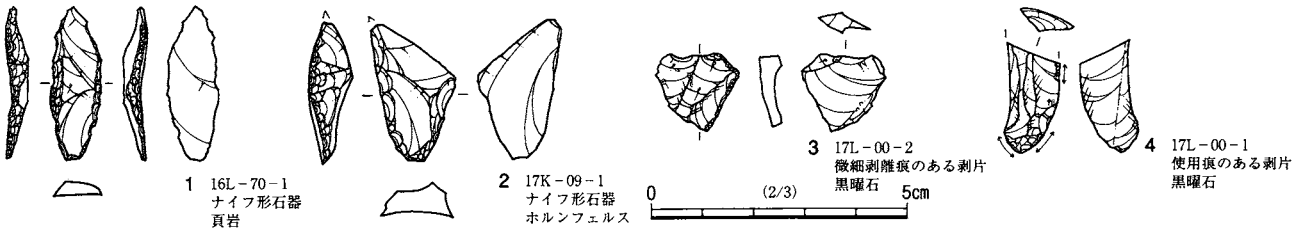
第10図　第１地点出土石器（２）



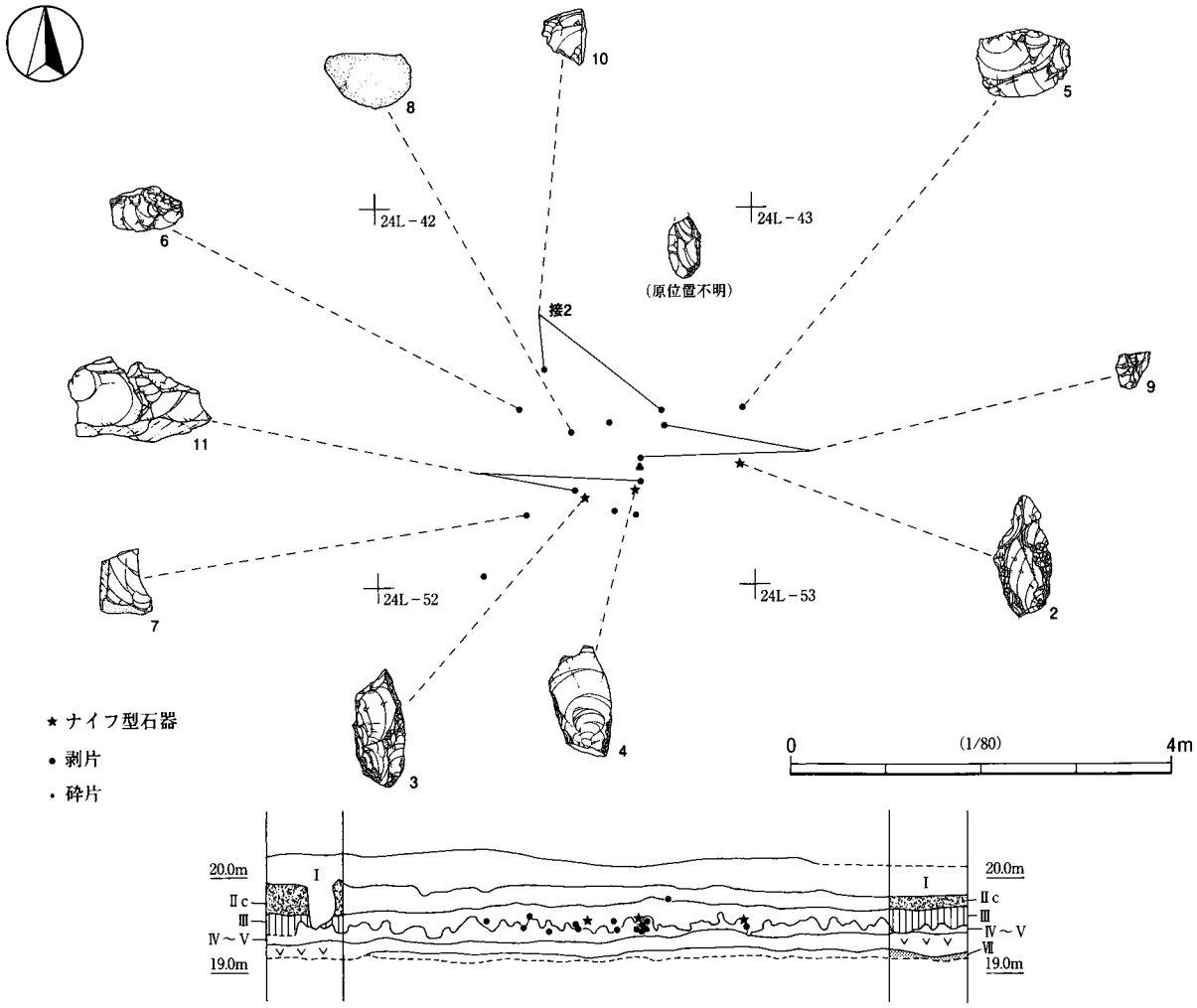
第11図　第１地点出土石器（３）

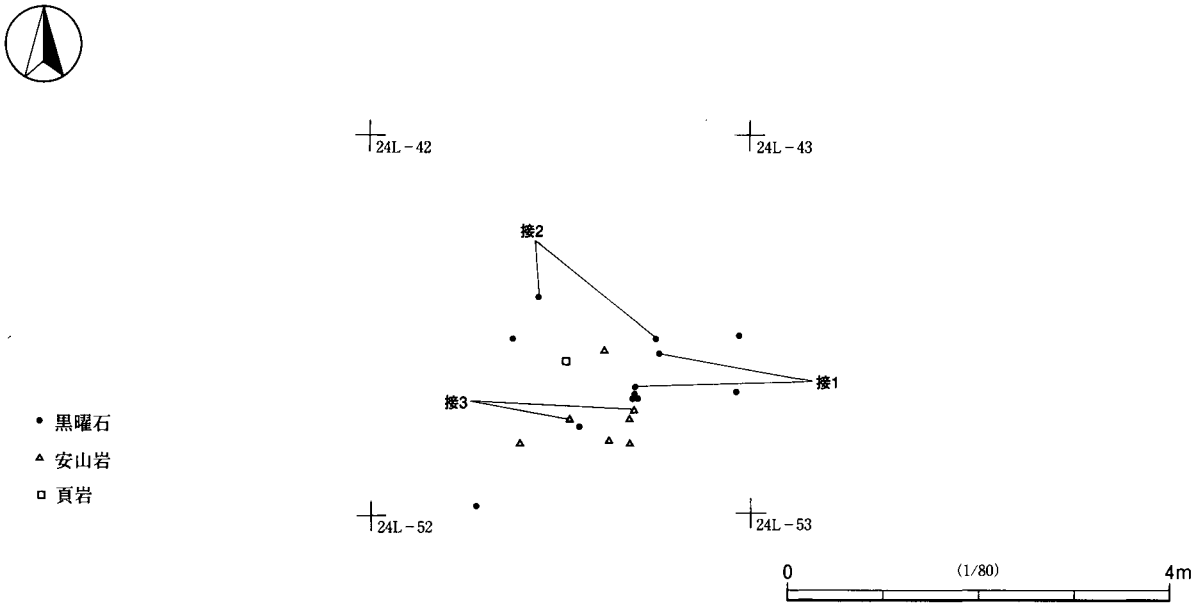


第12図　第１・２地点器種別分布図

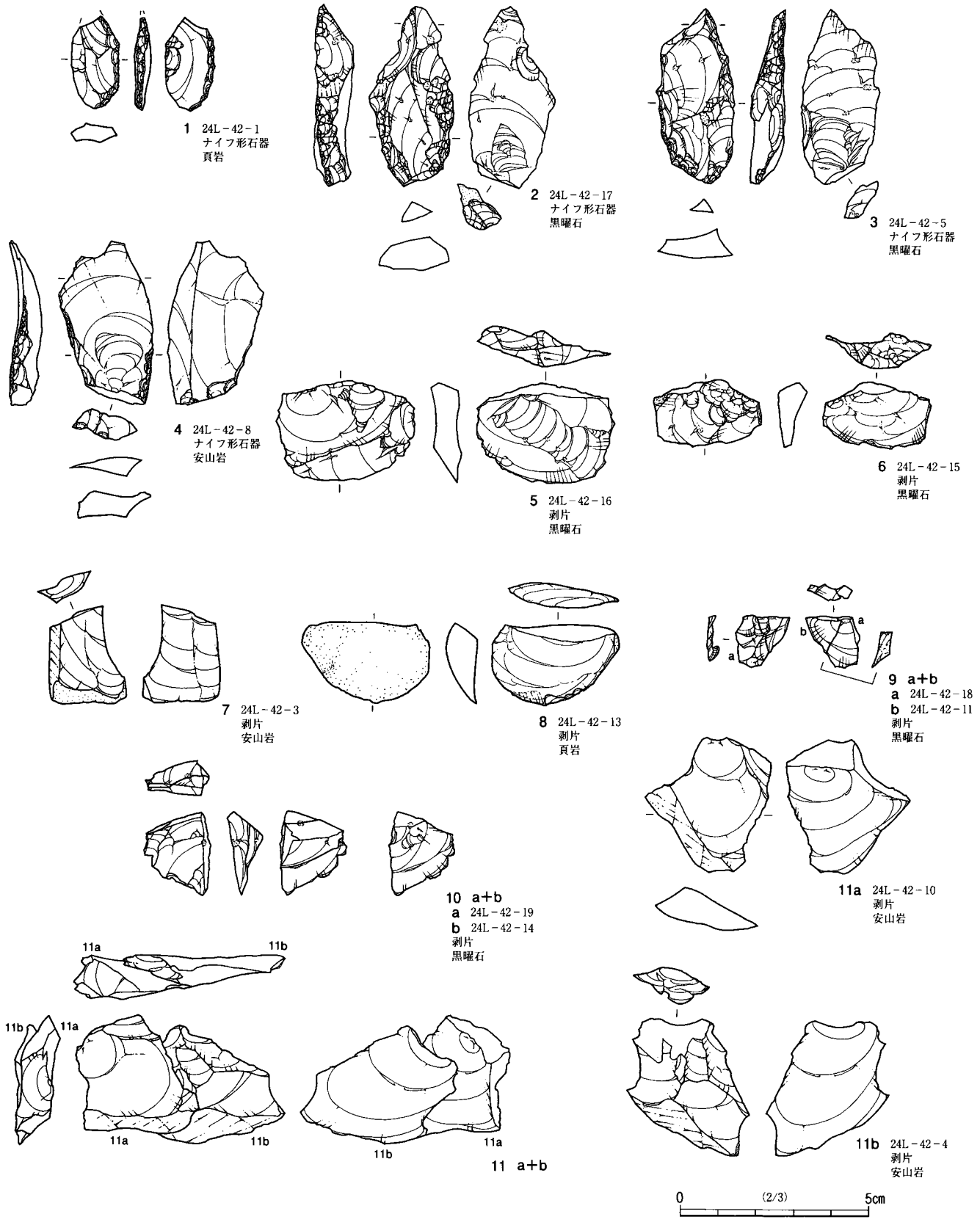


第13図　第２地点出土石器

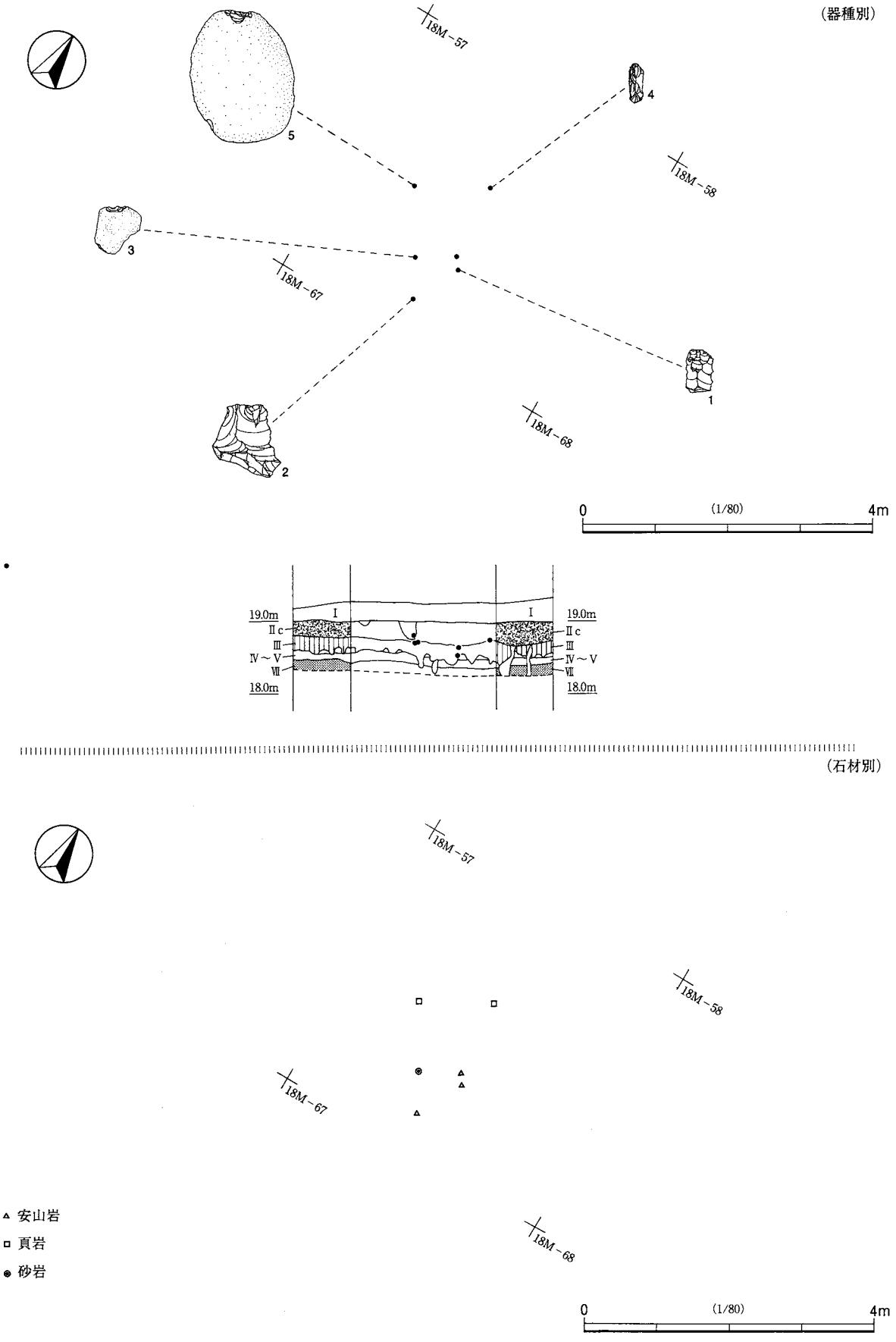




第14図　第３地点遺物分布図



第15図　第３地点出土石器

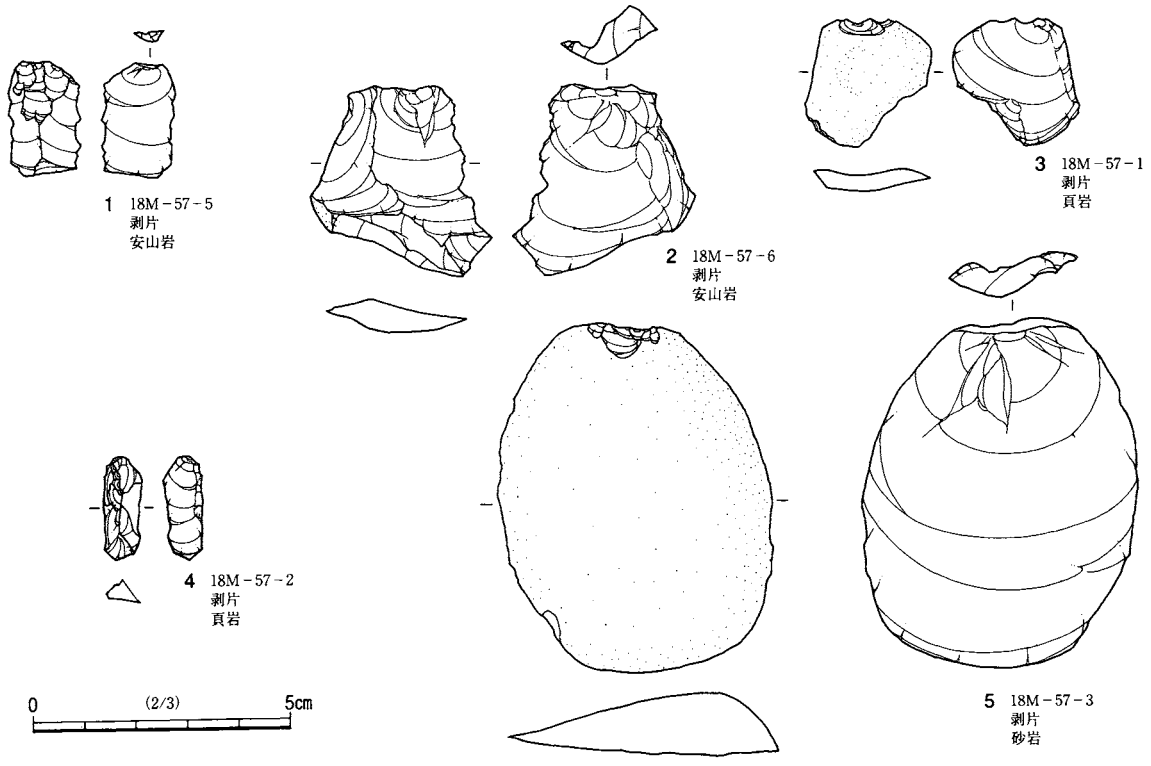


第16図　第４地点遺物分布図

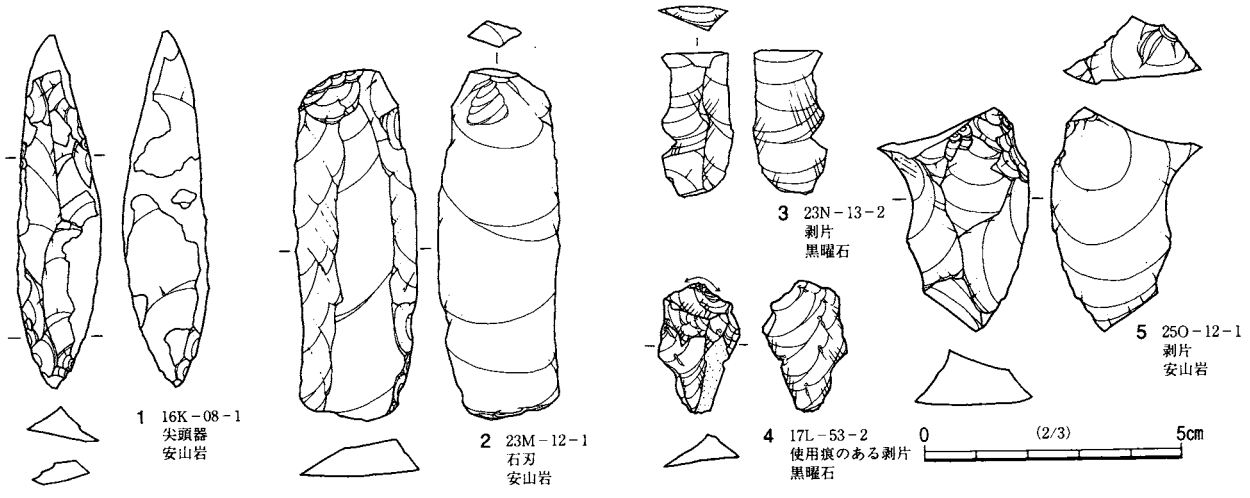
の加工が施される。５・６は横長剥片で、打面が広く残されている。７・８は頭部が折れた剥片である。９・10は剥片剥離時に同時割れを起こした接合資料、11は不定形剥片同士の接合資料である。

第２節　ブロック外出土石器（第18図、図版13、第８表）

出土遺物　１は尖頭器である。剥落部分が多いため断定はできないが、石刃素材で周辺加工が施されているものと思われる。２は大形の石刃、３～５は縦長剥片である。



第17図　第４地点出土石器



第18図　ブロック外出土石器

第４表　第１地点出土石器属性表

層準	グリッド	遺物番号	器種	石　材	母岩番号	挿図	接合	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	打面形状	打角・剥離角	H	T	R	L	D	V	C	J	末端形状	使用痕・被熱痕	遺存部位	標高(m)	備　考
Ⅶ～Ⅸ	16L－62	2	剥片	黒曜石	OB－1			15.10	15.52	5.01	0.84	2	106	○			○					F			18.380	背面に主剥離同時割れあり
Ⅶ～Ⅸ	16L－72	21	剥片	安山岩	AN－1	12		42.62	49.40	19.34	39.71	1	136	○				○		○		F			18.245	1から番号変更
Ⅶ～Ⅸ	16L－72	22	剥片	安山岩	AN－3			19.74	9.80	4.12	0.48			○								F		R	18.145	2から番号変更
Ⅶ～Ⅸ	16L－71	1	剥片	珪質頁岩	KK－5			14.44	24.62	3.83	1.05	1	97	○								O			17.905	
Ⅶ～Ⅸ	16L－72	1	砕片	珪質頁岩	KK－4			6.33	10.55	3.14	0.19	1		○										RH	17.937	背面に主剥離同時割れあり
Ⅶ～Ⅸ	16L－72	2	剥片	安山岩	AN－3			8.38	13.29	4.19	0.35	C	113	○		○						F		R	18.140	背面に主剥離同時割れあり
Ⅶ～Ⅸ	16L－72	3－1	剥片	安山岩	AN－3			29.97	12.93	5.28	1.51	2	98	○	○					○		F			18.060	３点あり
Ⅶ～Ⅸ	16L－72	3－2	剥片	黒曜石	OB－1			12.63	14.95	7.71	1.22	1	119	○										H	18.060	ガジリあり　３点あり・PQ?
Ⅶ～Ⅸ	16L－72	3－3	剥片	珪質頁岩	KK－7			12.3	11.0	3.1	0.25	1	109			○				○		F			18.060	３点あり
Ⅶ～Ⅸ	16L－72	4	剥片	安山岩	AN－3			18.49	15.23	5.69	1.33	1	97	○			○	○				F			18.080	
Ⅶ～Ⅸ	16L－72	5	剥片	玉髄（メノウ含む）	CC－1	2		20.92	19.19	6.57	2.65	C	82	○						○		H			17.953	
Ⅶ～Ⅸ	16L－72	7	剥片	碧玉（赤玉）	RB－1			15.9	15.3	4.6	0.85	2	94	○								S			18.080	背面に主剥離同時割れあり
Ⅶ～Ⅸ	16L－72	8	剥片	安山岩	AN－2	9		46.17	32.34	10.25	14.65	1	117	○						○		F			18.035	
Ⅶ～Ⅸ	16L－72	9	砕片	安山岩	AN－1			16.38	6.01	2.46	0.16	C	109	○			○					F		L	18.152	背面に主剥離同時割れあり
Ⅶ～Ⅸ	16L－72	10	剥片	珪質頁岩	KK－7			7.04	15.68	1.23	0.15			○		○						F		B	18.040	
Ⅶ～Ⅸ	16L－72	11	石核	流紋岩	RH－1	23	7b	35.14	48.88	14.48	23.64	C	71							○					17.877	
Ⅶ～Ⅸ	16L－72	12	剥片	チャート	CH－1	6		37.36	20.12	5.93	4.65	1	103							○				H	17.738	自然面のヒビで末端折れ
Ⅶ～Ⅸ	16L－72	13	剥片	チャート	CH－1			28.5	20.0	9.8	2.38							○	○	○		F		B	17.945	
Ⅶ～Ⅸ	16L－72	14	剥片	安山岩	AN－1			26.42	21.11	9.25	3.82	C	112	○								F			17.920	背面に主剥離同時割れあり
Ⅶ～Ⅸ	16L－72	15	敲石	安山岩	AN－4	17	1	24.83	43.11	9.40	12.03														18.115	
Ⅶ～Ⅸ	16L－72	16	剥片	流紋岩	RH－1			10.74	10.85	1.86	0.19			○								F		RT	17.905	ガジリあり
Ⅶ～Ⅸ	16L－72	17	石核	安山岩	AN－2	16		31.42	41.91	22.10	35.52	1	82												17.878	
Ⅶ～Ⅸ	16L－72	18	剥片	安山岩	AN－1	21	5a	32.51	25.84	4.09	2.46	C	95	○						○		F			17.915	ガジリあり
Ⅶ～Ⅸ	16L－72	19	剥片	珪質頁岩	KK－7			12.88	10.24	2.04	0.19	1	91	○			○					F			17.880	腹面にヒビあり
Ⅶ～Ⅸ	16L－72	20	剥片	珪質頁岩	KK－4	13		40.35	42.48	17.83	26.83	1	111	○						○		S			17.875	
Ⅶ～Ⅸ	16L－73	8	剥片	安山岩	AN－1			11.40	20.10	8.73	1.79	1	126	○		○						F		R	18.368	打点直下縦折れ　1'から番号変更
Ⅶ～Ⅸ	16L－73	1	剥片	珪質頁岩	KK－8			16.84	19.60	4.28	1.37	1	87			○			○					H	17.935	自然面のヒビで末端折れ
Ⅶ～Ⅸ	16L－73	2	剥片	流紋岩	RH－1			11.74	8.58	1.81	0.12	L		○								F			17.881	
Ⅶ～Ⅸ	16L－73	3	剥片	頁岩	SH－1	8		38.90	26.12	7.65	6.66	3	113	○						○		F			17.858	
Ⅶ～Ⅸ	16L－73	4	剥片	流紋岩	RH－1	23	7a	26.02	12.65	7.38	2.33			○			○			○				L	17.995	剥片素材の石核の端が折れたもの
Ⅶ～Ⅸ	16L－73	5	剥片	安山岩	AN－1	21	6b	17.61	26.53	6.65	2.15			○						○		F		B	18.230	
Ⅶ～Ⅸ	16L－73	6	剥片	安山岩	AN－1			28.28	36.45	16.96	13.72	1	82			○				○		F			18.181	
Ⅶ～Ⅸ	16L－73	7	剥片	ガラス質黒色安山岩	GA－1			37.25	16.05	12.66	5.52			○						○		F			18.159	背面に主剥離同時割れあり
Ⅶ～Ⅸ	16L－82	1	剥片	チャート	CH－2	18	2a	8.52	12.85	3.27	0.30	1	70	○								F			18.070	
Ⅶ～Ⅸ	16L－82	2	剥片	チャート	CH－1			18.68	8.25	3.13	0.32			○							○	F			18.131	
Ⅶ～Ⅸ	16L－82	3	剥片	珪質頁岩	KK－2	19	3a	11.77	18.13	5.66	0.79	1C	80	○								F			18.089	

層準	グリッド	遺物番号	器種	石　材	母岩番号	挿図	接合	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	打面形状	打角・剥離角	H	T	R	L	D	V	C	J	末端形状	使用痕・被熱痕	遺存部位	標高(m)	備　考
Ⅶ～Ⅸ	16L－82	4	剥片	チャート	CH－3	7		37.72	26.43	9.39	8.31	1	111							○		F			17.939	
Ⅶ～Ⅸ	16L－82	5	剥片	安山岩	AN－1			21.74	19.16	10.03	4.16	1	105	○			○	○		○		F			17.955	背面に主剥離同時割れあり
Ⅶ～Ⅸ	16L－82	6	敲石	安山岩	AN－4	17	1	61.71	51.32	19.07	71.63														18.224	
Ⅶ～Ⅸ	16L－83	1	剥片	ガラス質黒色安山岩	GA－1	11		34.69	29.23	6.56	5.47	1	103	○	○							F			18.141	
Ⅶ～Ⅸ	16L－83	2	剥片	ガラス質黒色安山岩	GA－1			20.28	21.74	8.62	2.95	1	121	○						○		F			18.025	
Ⅶ～Ⅸ	16L－83	3	剥片	ガラス質黒色安山岩	GA－1			16.32	29.85	7.64	2.60	C	103	○		○	○	○				F			17.992	背面に主剥離同時割れあり
Ⅶ～Ⅸ	16L－83	4	剥片	チャート	CH－3	22	6b	34.37	24.45	4.77	3.69	2	99	○				○			○	F			17.882	
Ⅶ～Ⅸ	16L－83	5	剥片	チャート	CH－1			15.20	9.98	3.66	0.38			○						○	○	F			18.020	
Ⅶ～Ⅸ	16L－83	6	剥片	ガラス質黒色安山岩	GA－1			8.48	10.97	2.87	0.19			○								F		B	18.200	
Ⅶ～Ⅸ	16L－83	7	剥片	チャート	CH－3	22	6a	34.79	24.19	7.06	5.79	1	110	○							○	F			17.985	
Ⅶ～Ⅸ	16L－83	8	剥片	ガラス質黒色安山岩	GA－1			23.89	20.13	8.08	2.49	1C	100			○						F			18.031	ガジリあり
Ⅶ～Ⅸ	16L－83	9	砕片	ガラス質黒色安山岩	GA－1			10.83	8.90	3.04	0.27	3	113	○	○							F			17.916	
Ⅶ～Ⅸ	16L－83	10	剥片	チャート	CH－3			18.97	16.44	4.17	1.18	1	109	○						○		F			18.540	
Ⅶ～Ⅸ	16L－83	11	剥片	珪質頁岩	KK－1	20	4b	24.55	34.99	15.98	9.47	J	72							○	○	F			18.009	
Ⅶ～Ⅸ	16L－83	12	剥片	チャート	CH－3			13.07	6.45	3.15	0.24	L	81							○		F			18.088	
Ⅶ～Ⅸ	16L－83	13	剥片	碧玉（赤玉）	RB－1	5		26.97	21.01	9.00	5.88	1	110							○		F			18.032	
Ⅶ～Ⅸ	16L－83	14	剥片	珪質頁岩	KK－6	4		21.21	23.21	7.65	3.40	1	93	○							○	F			18.024	
Ⅶ～Ⅸ	16L－83	15	剥片	砂岩	SA－1			23.22	25.45	6.71	3.50	P	79							○		F	H		17.952	
Ⅶ～Ⅸ	16L－83	16	砕片	珪質頁岩	KK－5			9.49	12.64	5.26	0.61									○					17.959	節理ではじけた砕片
Ⅶ～Ⅸ	16L－83	17	砕片	珪質頁岩	KK－1	20	4c	7.18	25.66	5.00	0.81	1	67							○		F			18.100	節理ではじけた砕片
Ⅶ～Ⅸ	16L－83	18	石核	珪質頁岩	KK－1	20	4d	36.68	51.52	37.19	91.03	C	98	○							○	H			17.959	
Ⅶ～Ⅸ	16L－83	19	砕片	珪質頁岩	KK－1			10.07	8.86	2.07	0.13	P	98	○										H	17.935	背面に主剥離同時割れあり
Ⅶ～Ⅸ	16L－83	20	石核	珪質頁岩	KK－3	15		41.38	29.89	24.84	47.09	1	93	○							○	H			17.929	
Ⅶ～Ⅸ	16L－84	1	剥片	ガラス質黒色安山岩	GA－1			12.65	16.38	5.26	0.95	1	111	○										H	17.933	背面加撃のヒビで飛んだ剥片
Ⅶ～Ⅸ	16L－92	1	剥片	珪質頁岩	KK－1	20	4a	28.37	26.77	13.20	7.66	J	107	○						○	○	F			18.020	
Ⅶ～Ⅸ	16L－92	2	剥片	珪質頁岩	KK－3			11.82	11.89	2.78	0.31	L	81	○	○							H			18.233	
Ⅶ～Ⅸ	16L－92	3	剥片	チャート	CH－1	25	9a	21.60	43.89	14.48	11.26	C	95							○		F		R	18.315	打点直下縦折れ・節理はじけあり
Ⅶ～Ⅸ	16L－92	4	砕片	チャート	CH－2			4.33	10.46	3.15	0.11									○					18.029	節理ではじけた砕片
Ⅶ～Ⅸ	16L－92	5	剥片	頁岩	SH－2			17.24	18.70	4.95	1.07	1	121							○	○	H			18.120	
Ⅶ～Ⅸ	16L－92	6	剥片	流紋岩	RH－1	24	8b	12.72	7.46	2.29	0.20														18.091	
Ⅶ～Ⅸ	16L－92	7	剥片	流紋岩	RH－1	24	8a	12.04	15.98	3.57	0.49														17.984	
Ⅶ～Ⅸ	16L－92	8	剥片	ホルンフェルス	HO－2	10		22.58	38.76	7.07	4.98	L	97	○						○		F			18.137	ガジリあり
Ⅶ～Ⅸ	16L－92	9	剥片	チャート	CH－1	25	9b	10.21	18.56	12.37	1.35	J	114		○							S			18.177	節理ではじけた剥片
Ⅶ～Ⅸ	16L－92	10	砕片	珪質頁岩	KK－3			12.76	4.42	4.48	0.22	1	106	○							○	H			18.048	
Ⅶ～Ⅸ	16L－92	11	石核	チャート	CH－1	25	9c	21.08	33.56	18.96	10.96	1	72	○											18.045	
Ⅶ～Ⅸ	16L－92	12	剥片	チャート	CH－1	1		21.24	20.44	3.45	1.60	1	105	○	○							F			17.992	
Ⅶ～Ⅸ	16L－92	13	剥片	砂岩	SA－2			20.29	12.86	5.16	1.01									○		F		B	18.012	

層準	グリッド	遺物番号	器種	石　材	母岩番号	挿図	接合	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	打面形状	打角・剥離角	H	T	R	L	D	V	C	J	末端形状	使用痕・被熱痕	遺存部位	標高(m)	備　考
Ⅶ～Ⅸ	16L－92	14	剥片	チャート	CH－2	18	2a	25.94	11.69	5.48	1.65	C	95	○							○			R	17.949	打点直下縦折れ・先端折れあり
Ⅶ～Ⅸ	16L－92	15	剥片	珪質頁岩	KK－2	19	3b	16.30	25.91	9.19	2.14	1C	69	○						○		F			18.072	
Ⅶ～Ⅸ	16L－92	16	砕片	チャート	CH－1			5.03	8.17	2.81	0.08	1C	83	○											18.087	打点部衝撃でとんだ砕片
Ⅶ～Ⅸ	16L－92	17	剥片	チャート	CH－1			32.61	12.27	6.62	2.76	1	105	○					○	○		F		L	17.947	背面に主剥離同時割れあり
Ⅶ～Ⅸ	16L－92	18	砕片	チャート	CH－1			10.70	4.55	2.56	0.10									○	○				17.956	節理ではじけた砕片
Ⅶ～Ⅸ	16L－92	19	剥片	チャート	CH－1			16.08	11.04	3.57	0.50	1	114	○						○		F			17.969	
Ⅶ～Ⅸ	16L－92	20	砕片	チャート	CH－2			5.39	11.27	2.40	0.12			○								H			18.010	打点直下節理縦折れ
Ⅶ～Ⅸ	16L－92	21	砕片	チャート	CH－2			12.69	4.85	3.09	0.19			○						○		F		B	18.035	
Ⅶ～Ⅸ	16L－92	22	石核	チャート	CH－3	14		38.23	44.35	20.22	28.72														17.981	
Ⅶ～Ⅸ	16L－92	23	石核	流紋岩	RH－1	24	8c	36.27	48.92	22.87	38.65														17.954	
Ⅶ～Ⅸ	16L－93	1	剥片	珪質頁岩	KK－1			21.45	16.16	5.76	1.39			○							○	F		B	18.235	背面に主剥離同時割れあり
Ⅶ～Ⅸ	16L－93	2	剥片	ホルンフェルス	HO－1			11.16	23.26	5.84	1.40	1	115	○						○		F		R	17.975	
Ⅶ～Ⅸ	16L－93	3	剥片	ホルンフェルス	HO－1			7.88	10.25	2.23	0.16	1	110	○										H	18.056	背面に主剥離同時割れあり
Ⅶ～Ⅸ	16L－62	1	砕片	トロトロ石	TO－1			8.05	10.52	1.90	0.14	1		○								F			18.130	
Ⅶ～Ⅸ	16L－63	1	剥片	トロトロ石	TO－1	3		19.70	21.95	5.62	1.90	1		○								F			18.227	背面に打面と同時割れあり

第5表　第2地点出土石器属性表

層準	グリッド	遺物番号	器　種	石　材	挿図	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	打面形状	打角・剥離角	H	T	R	L	D	V	C	J	末端形状	調整角	刃部角	使用痕・被熱痕	遺存部位	標高(m)	備　考
Ⅳ～Ⅴ	17K－09	1	ナイフ形石器	ホルンフェルス	2	27.10	16.07	8.36	2.66				○		○			○		F	101	46			19.013	
Ⅳ～Ⅴ	17L－00	1	使用痕のある剥片	黒曜石	4	19.94	11.67	4.85	0.90				○		○				○	F			N	B	19.189	
Ⅳ～Ⅴ	17L－00	2	微細剥離痕のある剥片	黒曜石	3	14.66	16.63	4.02	0.70	2	129	○	○											H	19.109	
Ⅳ～Ⅴ	17L－00	3	剥片	黒曜石		14.30	6.23	2.63	0.11	P	106	○	○		○									H	19.152	
Ⅳ～Ⅴ	16L－70	1	ナイフ形石器	頁岩	1	29.50	10.30	4.59	1.18			○		○	○						83	47			18.336	

第6表　第3地点出土石器属性表

層準	グリッド	遺物番号	器　種	石材	母岩番号	挿図	接合	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重　量(g)	打面形状	打角・剥離角	H	T	R	L	D	V	C	J	末端形状	調整角	刃部角	遺存部位	欠損	標高(m)	備　考
Ⅲ～Ⅳ	24L－42	1	ナイフ形石器	頁岩	SH－1	1		23.90	13.40	4.11	1.56			○	○								82			+		調整剥離が負の方向・刃部ガジリ欠損　上層表採
Ⅲ～Ⅳ	24L－42	2	剥片	黒曜石	OB－3			19.21	15.08	9.14	1.58	1	76				○					F			L		19.508	打面直下折れ
Ⅲ～Ⅳ	24L－42	3	剥片	安山岩	AN－1	7		26.08	20.86	6.39	3.46			○						○	○	F			B		19.565	
Ⅲ～Ⅳ	24L－42	4	剥片	安山岩	AN－1	11b	1	35.86	36.41	8.18	7.99			○							○	F			B		19.433	主要剥離時打面欠損
Ⅲ～Ⅳ	24L－42	5	ナイフ形石器	黒曜石	OB－2	3		46.82	20.52	8.53	7.49	1	123	○		○			○			F	87	67			19.518	
Ⅲ～Ⅳ	24L－42	6	剥片	安山岩	AN－1			7.56	8.86	2.13	0.15	1	105	○							○	F					19.423	
Ⅲ～Ⅳ	24L－42	7	剥片	安山岩	AN－1			13.02	15.23	4.66	0.86			○											V－M		19.438	
Ⅲ～Ⅳ	24L－42	8	ナイフ形石器	安山岩	AN－1	4		43.00	23.22	7.49	7.92	1	108	○			○					F	73	31			19.545	調整剥離が負の方向

層準	グリッド	遺物番号	器種	石材	母岩番号	挿図	接合	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	打面形状	打角・剥離角	H	T	R	L	D	V	C	J	末端形状	調整角	刃部角	遺存部位	欠損	標高(m)	備考
Ⅲ～Ⅳ	24L－42	9	砕片	黒曜石	OB－3			3.85	6.11	2.98	0.06			○								O			B		19.463	3点あり
Ⅲ～Ⅳ	24L－42	9	砕片	黒曜石	OB－3			5.85	2.96	2.74	0.03			○								F			B		19.463	3点あり
Ⅲ～Ⅳ	24L－42	9	砕片	黒曜石	OB－3			4.18	6.19	1.11	0.01				○							F			RT		19.463	3点あり
Ⅲ～Ⅳ	24L－42	10	剥片	安山岩	AN－1	11a	1	34.64	31.91	11.25	9.39	1	129	○				○				S					19.573	
Ⅲ～Ⅳ	24L－42	11	剥片	黒曜石	OB－3	9b	2	9.39	11.50	3.78	0.24			○		○						F			RT		19.744	
Ⅲ～Ⅳ	24L－42	12	剥片	安山岩	AN－1			22.80	13.99	5.93	1.05			○								F			L		19.503	
Ⅲ～Ⅳ	24L－42	13	剥片	頁岩	SH－2	8		21.54	34.49	8.43	6.39									○		F			B		19.478	
Ⅲ～Ⅳ	24L－42	14	剥片	黒曜石	OB－3	10a	3	22.00	17.43	5.68	1.21	2	129			○						F			L		19.418	打面直下折れ
Ⅲ～Ⅳ	24L－42	15	剥片	黒曜石	OB－3	6		18.45	28.65	9.01	3.04	2	99	○		○						F					19.431	
Ⅲ～Ⅳ	24L－42	16	剥片	黒曜石	OB－2	5		26.97	36.90	8.43	7.17	4	117	○		○						F					19.488	ガジリあり
Ⅲ～Ⅳ	24L－42	17	ナイフ形石器	黒曜石	OB－1	2		47.06	22.69	10.47	8.65	2C	116				○		○	○		F	75	57			19.518	
Ⅲ～Ⅳ	24L－42	18	剥片	黒曜石	OB－3	9a	2	8.61	13.75	3.96	0.39	1	52	○		○						F			L		19.466	
Ⅲ～Ⅳ	24L－42	19	剥片	黒曜石	OB－3	10b	3	16.06	12.45	4.72	0.74			○								F			LT		19.593	

第7表　第4地点出土石器属性表

層準	グリッド	遺物番号	器種	石材	挿図	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	打面形状	打角・剥離角	H	T	R	L	D	V	C	J	末端形状	標高(m)	備考
Ⅱ～Ⅲ	18M－57	1	剥片	頁岩	3	25.41	23.27	5.30	2.77	L	71							○		H	18.707	
Ⅱ～Ⅲ	18M－57	2	剥片	頁岩	4	7.64	19.80	5.89	0.66	C	86				○	○	○			F	18.717	
Ⅱ～Ⅲ	18M－57	3	剥片	砂岩	5	67.50	53.25	13.77	59.32	1	115	○						○		H	18.689	ガジリあり・旧石器？
Ⅱ～Ⅲ	18M－57	4	砕片	安山岩		7.86	13.91	1.97	0.16	1	117	○								F	18.522	
Ⅱ～Ⅲ	18M－57	5	剥片	安山岩	1	22.57	13.80	3.54	1.16	1	107	○								H	18.621	
Ⅱ～Ⅲ	18M－57	6	剥片	安山岩	2	37.30	36.11	8.97	9.74	1	100	○						○		F	18.811	

第8表　ブロック外出土石器属性表

ブロック	グリッド	遺物番号	器種	石材	挿図	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	打面形状	打角・剥離角	頭部調整	H	T	R	L	D	V	C	J	末端形状	使用痕・被熱痕	遺存部位	標高(m)	備考
単独	16K－08	1	尖頭器	ホルンフェルス	1	68.26	16.49	6.65	7.39															18.155	全体的に剥落面が多い
単独	22M－12	1	石刃	安山岩	2	68.04	23.30	10.00	18.83	1	115	○	○											18.895	末端折れ
単独	23N－13	2	剥片	黒曜石	3	28.21	14.75	5.09	1.60				○								S		B	18.855	
単独	25O－12	9	剥片	ホルンフェルス	5	41.64	34.60	11.07	11.23	1	119		○	○			○				F			19.087	
	17L－53	1	剥片	黒曜石		13.3	11.0	3.5	0.26				○	○							O		LT	19.100	
	17L－53	2	使用痕のある剥片	黒曜石	4	25.60	15.71	8.75	1.94				○			○			○		H	N	B	19.077	打面部分意図的剥離か？
	17L－53	3	剥片	珪質頁岩		7.98	10.36	2.05	0.17				○								S		LT	19.028	

第３章　縄文時代

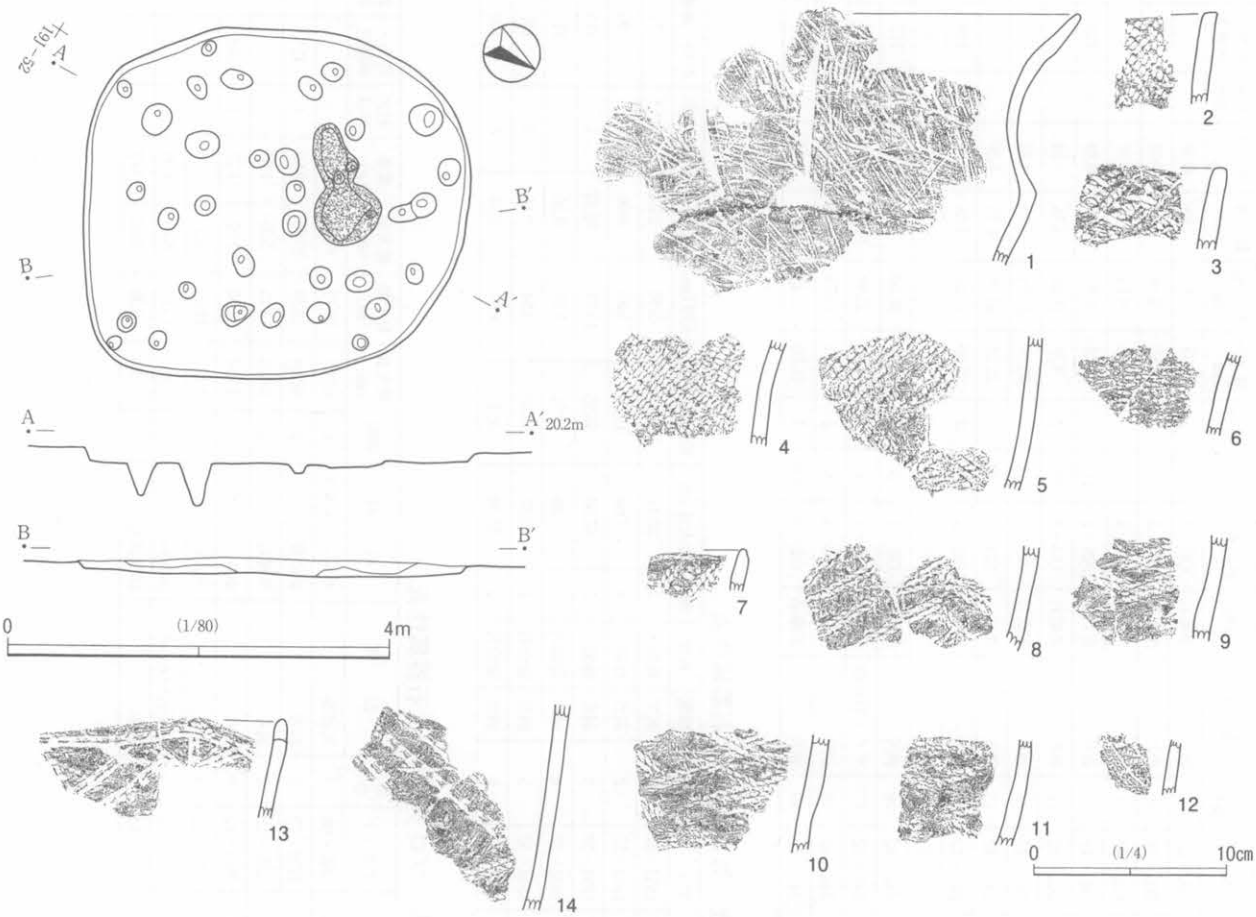
第１節　竪穴住居跡

本遺跡から検出された縄文時代の遺構は、前期の竪穴住居跡６軒及び陥穴状土坑１基である。調査区北側に散在して分布している。

SI－001（第19図、図版３・14・16）

調査区北側、19J－42グリッド付近に所在する。規模は、長径4.1m、短径3.7m、床面積12.5㎡を測り、不整楕円形を呈する。主軸方向は、N－35°－Wを指す。確認面からの深さは、0.1m前後と浅い。床面はほぼ平坦であるが、しまりはあまり良好ではない。柱穴を含むピットは多数掘り込まれているが、ほぼ対角線上に位置する４本のピットが主柱穴になると思われる。主柱穴の規模・深さとも一定していない。炉は北西壁側に位置する。床面からの掘り込みはきわめて浅いが、全体に瓢箪形となる。炉内にもピットが掘り込まれていることから、建て替えに伴って炉が新たに設けられたものと思われる。前述した多くのピットも建て替えを示すものであろう。覆土は自然堆積の様相を呈する。

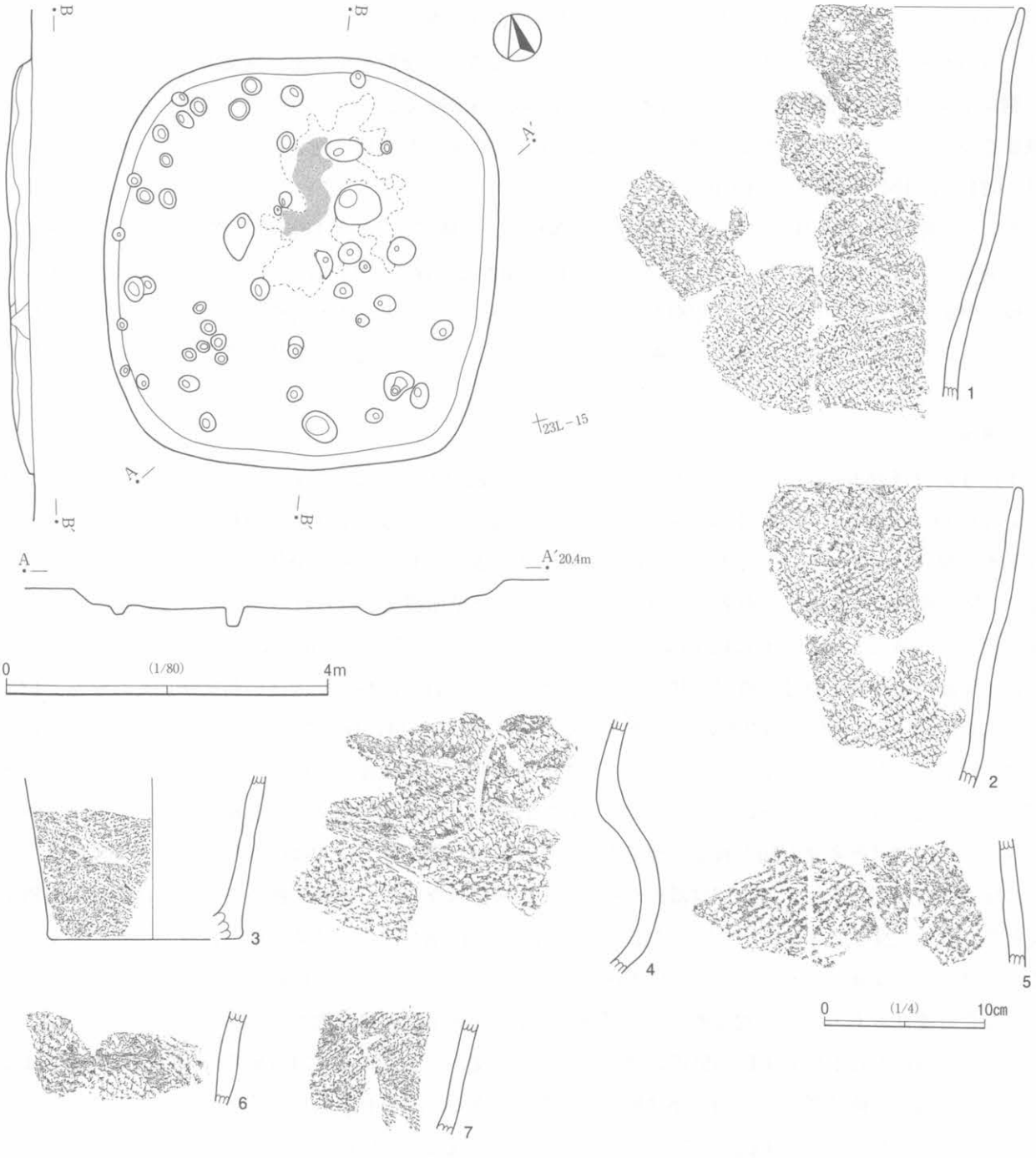
遺物は、全体に散在しており、集中する傾向にはない。



第19図　SI－001

出土遺物

1は早期の条痕文系土器である。外面には粗い条痕がみられるが、内面はナデ調整される。胎土中に繊維を多く含む。2～14は前期黒浜式期の土器群である。2・3は口縁部片で、2はRL縄文、3はLR縄文の原体を軸に撚糸を巻き付けたものであろう。4は単節、5は無節の縄文を異方向に施文して羽状を呈するものである。6は横位の連続刺突文が施される。7～11は撚糸文が施文される土器群である。2条単位の撚糸文で、9・10は格子状を呈する。12は4条単位の撚糸文となる。13・14は半截竹管による連続爪形文で文様を描出する土器である。13は口縁部片で、浅い波状を呈する。



第20図　SI－003

SI－003（第20図、図版３・14・16）

調査区ほぼ中央、23L－04グリッド付近に単独で位置する。規模は、長軸5.2m、短軸4.5m、床面積19.2㎡を測る。主軸方向は、N－21°－Eを指し、隅丸方形状を呈する。確認面からの深さは0.2m前後と比較的浅い。床面はほぼ平坦で、比較的堅緻である。炉の周辺に硬化面が広がる。ピットは床面上に多数掘り込まれているが、全体に浅い。炉は北壁側に位置する。掘り込みはほとんどないが、焼土の堆積がみられる。覆土は自然堆積と思われる。

出土遺物

１・２は深鉢の口縁部で、LRの単節縄文が全体に施文される。胎土中に繊維を多く含む。同一個体となる可能性が高い。３は底部片である。２条１単位の撚糸文が菱形状に配され、施文は底部の立ち上がり部までみられる。４は厚手の土器で、胴部が球形に近くなる特異な形態を示す。施文も特徴的で、口縁部から胴部上半がLRの単節縄文、下半部は不鮮明であるが、LR縄文と反撚りの縄文が観察される。胎土中に繊維を多く含む。５・６は無節の縄文、７は２条単位の撚糸文が羽状に施される。

SI－024（第21図、図版３・14・16・17）

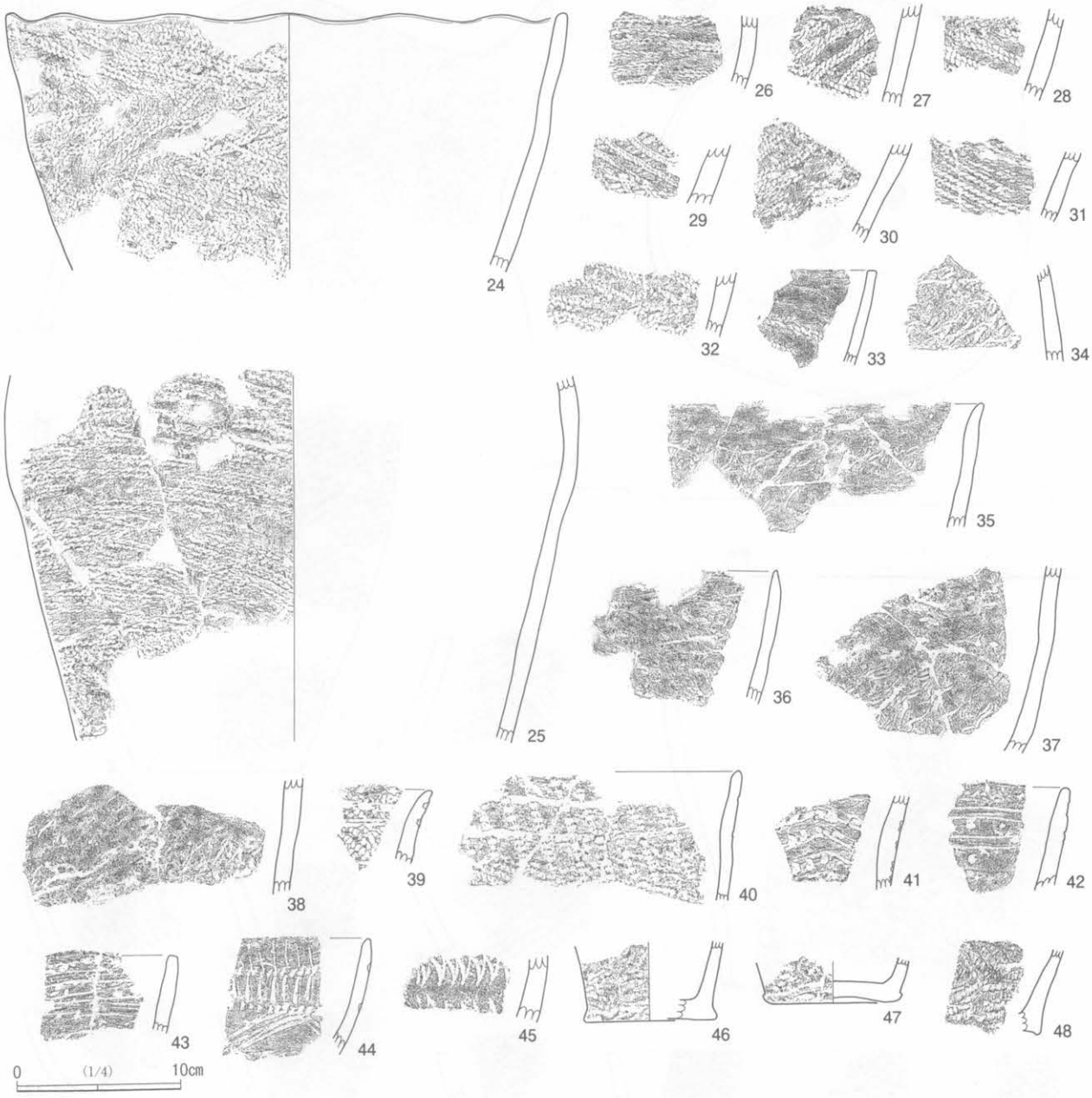
調査区北側20K－34グリッド付近に位置する。規模は、長軸4.7m、短軸4.6mの不整形を呈し、床面積17.1㎡を測る。主軸方向は、N－54.3°－Wを指す。確認面からの深さは0.1mほどと浅い。床面はほぼ平坦で、比較的堅緻である。炉の周辺に硬化面が広がる。ピットはほぼ中央に１か所確認されたが、深さ14cmほどと浅い。炉もほぼ中央部に位置する。掘り込みはほとんどないが、焼土の堆積がみられる。覆土は自然堆積と思われる。

出土遺物

１は推定口径32.4cmを測る波状口縁の深鉢である。施文はRL・LR縄文を交互に施して羽状となる。２は推定底径9.8cmを測る。全体に歪みが激しく、二次的に被熱している。全体に無節Ｒが施文される。３は口縁部から胴部にかけて遺存しており、内面は丁寧にナデ調整される。外面全体に無節Ｌの縄文が施文される。下位に被熱による赤化が顕著に認められる。４～６は単節縄文がみられる一群である。４はRL・LR縄文を用いて羽状とし、５・６はLR縄文となる。７は不鮮明であるが、撚りの弱いLR縄文と思われる。８～11は無節縄文が施される一群で、10には補修孔が穿たれ、11の口唇部には浅い刺突が加えられる。12は、上位に貝殻背圧痕、下位に貝殻腹縁文が施される。13は撚糸文、14は疎らながらLR縄文がみられる。15～17は口縁部片である。15は小さな波状口縁を呈し、単節縄文と無節縄文を併用し、16は２条単位の撚糸文、17は無節縄文が施される。18は底部付近で、二次的に被熱している。施文は不鮮明で、粗い無節縄文がみられる。19～33は撚糸文が施される一群である。19～21は口縁部片で、20は口縁部側から下位に向けて交互に施文され、羽状を呈する。23は器面が粗いため明確ではないが、縄軸に撚糸を巻き付けた付加条撚糸文と思われる。24は小さな波状を呈する深鉢で、推定口径34.5cmを測る。２条単位の撚糸が交互に施文される。25は大形の深鉢で、やはり２条単位の撚糸が単一方向に施文される。棒軸と思われるが、縄軸の付加条となる可能性もある。26～32は撚りの強弱はあるが、２条単位の棒軸撚糸文である。33は平坦な口唇部を有し、口唇部からかなり下位の位置に２条単位の撚糸文が施文される。34は施文が浅いため明瞭ではないが、無節縄文が確認される。35～38は無文の土器群である。35・36の口縁部は尖頭状を呈する。38は胎土中に小砂粒を多く含み、砂質を帯びる。39はRL縄文を地文とし、口縁下に半截竹管による押引き文が２条加えられる。40は、口縁下に２条の半截竹管による沈線施文後にやはり半截竹管による斜位の刺突文が

A
A'
20K-45
A
A' 20.4m
0
(1/80)
4m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
0
(1/4)
10cm

第21図　SI－024（1）



第22図　SI－024（2）

加えられる。竹管文帯の下位には明瞭ではないが、無節縄文が観察される。41～43は半截竹管により文様を表出するもので、41は竹管内に刺突文が充填される。42は２条の連続爪形文と２段の爪形文で文様帯を表出するものである。文様帯下は半截竹管による押引きがみられる。45は連続爪形文で構成されるが、繊維を含んでおらず、浮島式土器となろう。46～48は黒浜式期の土器の底部である。

SI－025（第23～27図、図版４・14・15・17～20）

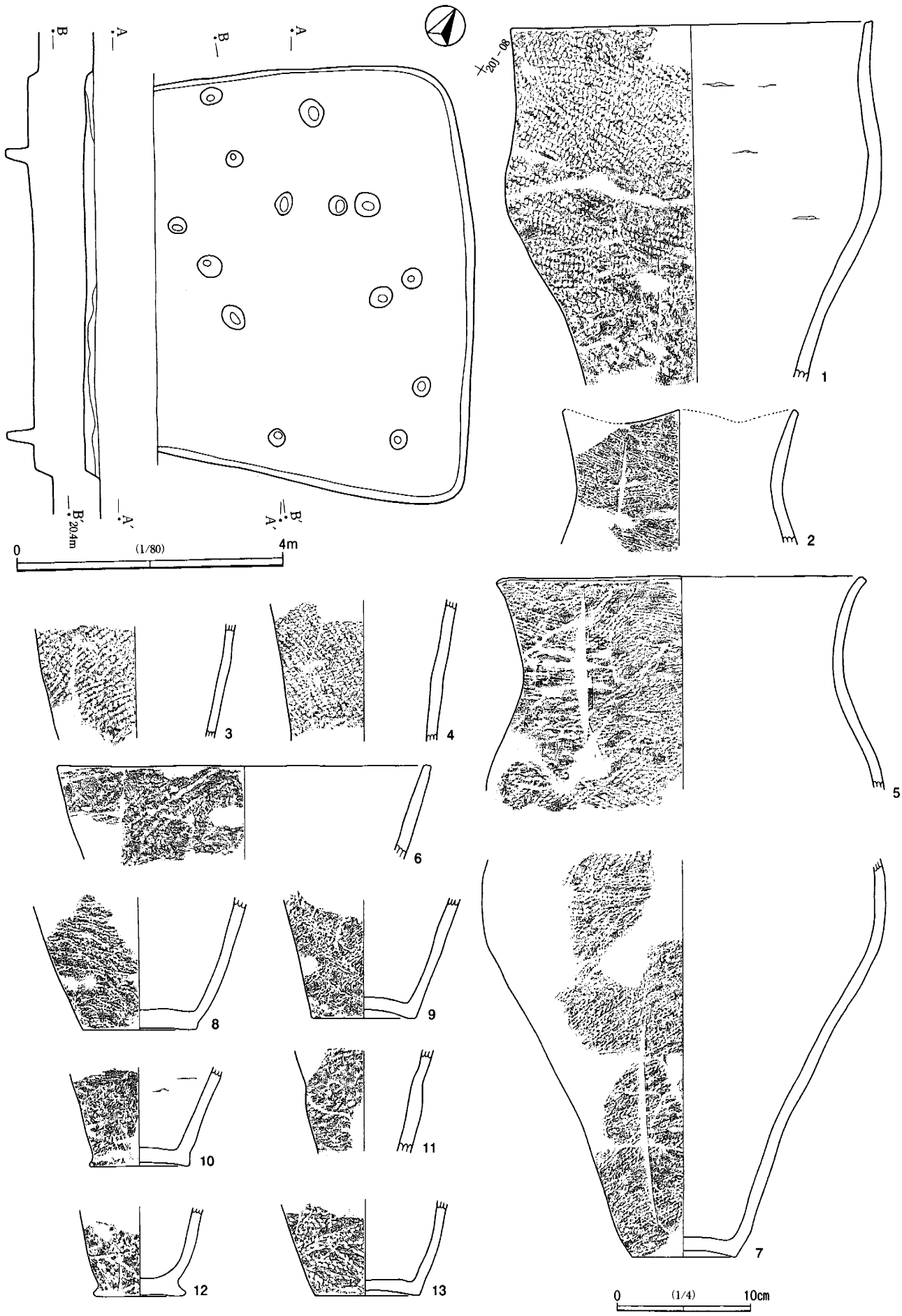
調査区北側20J－07グリッド付近、SI－024の北西25mほどに位置する。規模は、現存する東側で6.2mを測り、ほぼ方形を呈すると思われる。主軸方向は、N－32°－Wを指す。確認面からの深さは0.2mほどと浅い。床面はほぼ平坦で、比較的堅緻である。ピットは床面上に多数掘り込まれており、深さ0.4m前後のピットが多く、柱穴になると思われる。炉は北壁側に位置する。長軸1.3m、短軸0.8mと大きく、皿状に掘

り込まれるが、中央部が一段低くなる。焼土は中央部分にみられる。覆土は自然堆積と思われる。

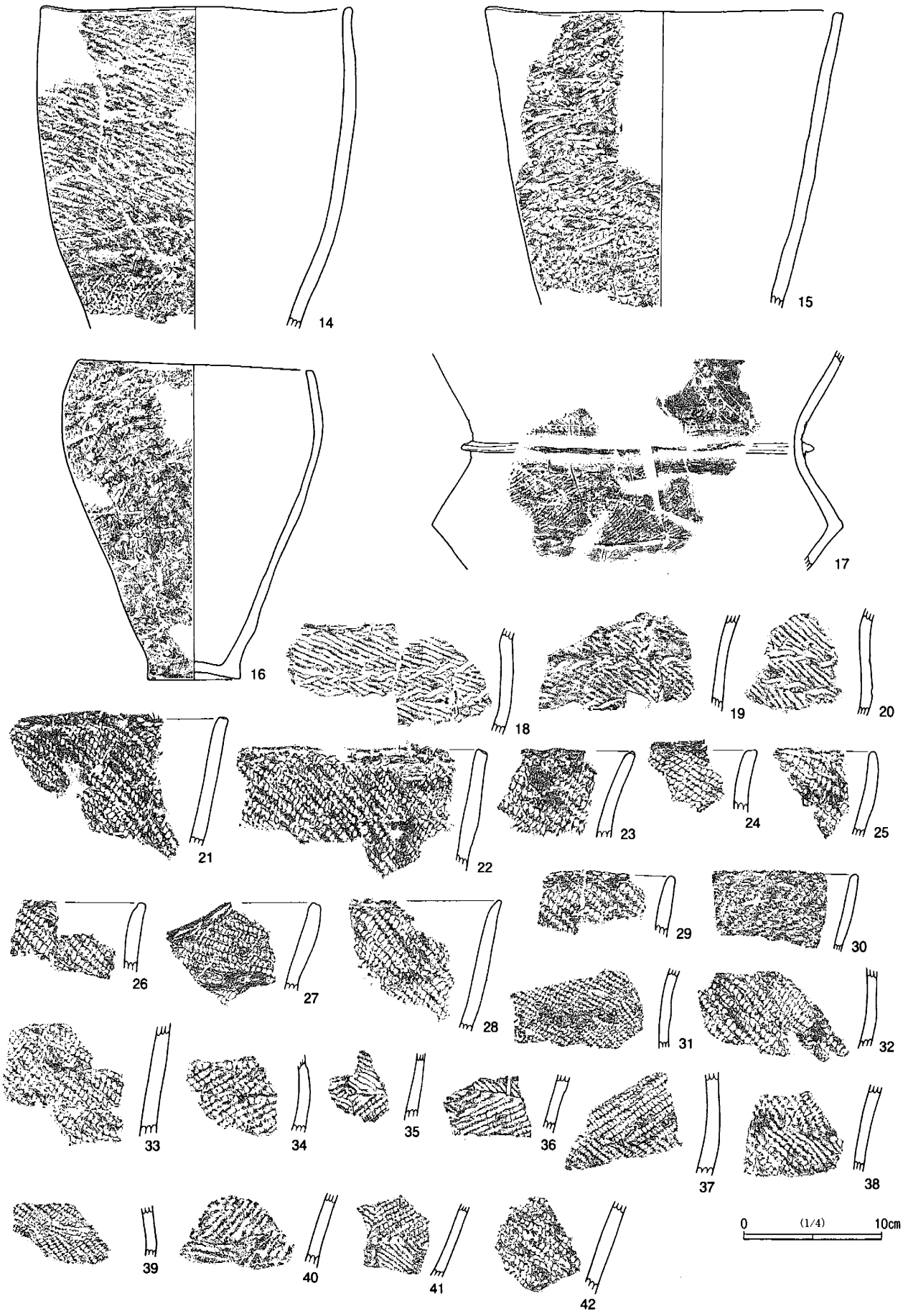
遺物は住居内全面から多量に出土しており、総破片数は2,500点を超す。

出土遺物

1は推定口径27.6cmを測る深鉢である。口縁部はほぼ直立し、胴下半部が急激に窄まる形態を示すが、全体に歪みが顕著である。口縁部から胴部下位にかけて単節RL縄文が施文され、以下は無文となる。口唇部にも縄文が施される。内面は丁寧にナデ調整される。2は波状口縁を呈し、推定口径17.7cmを測る。遺存部分では、2条単位の撚糸文が施され、不鮮明であるが、縄軸に巻き付けていると思われる。胎土中に白色小砂粒を多く含む。3・4は胴部片で、3は無節、4は単節LR・RL縄文を併用して羽状としている。5は口径27.9cmを測る。口唇部は平坦に整形され、胴部に膨らみを有する。外面には3条単位の棒軸撚糸文が全面にみられる。交互に向きを変えて回転しているため、山形及び菱形を呈する。6は推定口径26.8cmを測る深鉢の口縁部である。外面は無節縄文、内面はナデ調整される。口唇部にも施文されるが、器面が粗いため明確ではない。遺存部からすると竹管の刺突の可能性がある。7は上げ底の深鉢である。施文は全体に施され、胴部最大径より上部は3条単位の格子状の撚糸文、下部は2条単位の撚糸文が単一方向にみられる。内面は丁寧にナデ調整される。8～13は底部片である。施文方法には各種あり、9・13は2条単位、10は4条単位の撚糸文が格子状を呈する。8は2条単位の撚糸文を単一方向に施文する。11・12は無節縄文が粗くみられる。14は小波状を呈する。全体に棒軸の無節縄文が施文されるが、底部近くには3条単位の撚糸文が部分的にみられる。15は口縁部に最大径を有する深鉢である。施文が浅いため明確ではないが、縄軸に無節縄文を巻き付けたものと思われる。16は完形に近い深鉢で、全体に歪みがある。15同様文様が不鮮明であるが、無節縄文棒軸と思われる撚糸文が併用されているようである。17は特異な形態を示し、胴部が算盤玉状に屈曲する。口縁部下のくびれ部には鍔状の隆帯が貼り付けられる。口縁部と隆帯上下には沈線間に半截竹管による連続爪形文が充填された文様帯が巡り、胴部全面には無節縄文が施される。胎土中に繊維が多く含まれる。18～20は無節縄文とS字状結節文で文様が構成される一群である。21～38は単節縄文が施された土器群である。21～29はRL単節縄文で施文された口縁部片である。22の口唇部にはヘラ状工具による刺突が巡る。刺突は21にも部分的に観察される。30はLR縄文と思われるが、不鮮明である。31～36はRL縄文の胴部片、37・38はLR及びRL縄文を交互に使って羽状としている。39～42は無節縄文の一群である。43～54は無節縄文が施された口縁部片である。ほとんどが尖頭あるいは丸頭状の形状を示すが、43は平坦な口唇部となり、弱い押捺がみられる。55～68は無節縄文で施文される一群である。多くは無節Lの原体を用いている。55～57は幅広の無節Lの原体で、撚りは弱い。67・68は区画された下位はを交互に施して羽状となる。69～89は棒あるいは縄軸に原体が付加された口縁部の一群である。69・70はLRの縄文原体を軸に2条単位の撚糸を巻き付けたものである。回転方向を変えることによって羽状となる。いずれも胎土中に白色小砂粒を多く含む。71・72は無節L原体を棒に巻き付けたものと思われるが、72にはLRの単節縄文も位みられ、両者を併用しているようである。73には3条単位の撚糸がみられる。74～76は69同様LR原体に無節縄文を巻いたものである。78・79は不鮮明であるが、無節Lの原体が確認される。81は、無節LとRの2種の原体を用いて菱形状の文様構成をする。82は無節Lの比較的太い原体がみられる。85は2条単位の撚糸が密に施される。90～119は撚糸文が施される胴部片である。90・91は無節LとR原体を用いて羽状としている。92・94は無節R、93は無節L原体となる。95～98は、単節縄文を軸に無節縄文を付加しており、付加は2条と思われる。95の軸はLRである。99～104・110は、撚糸文が密



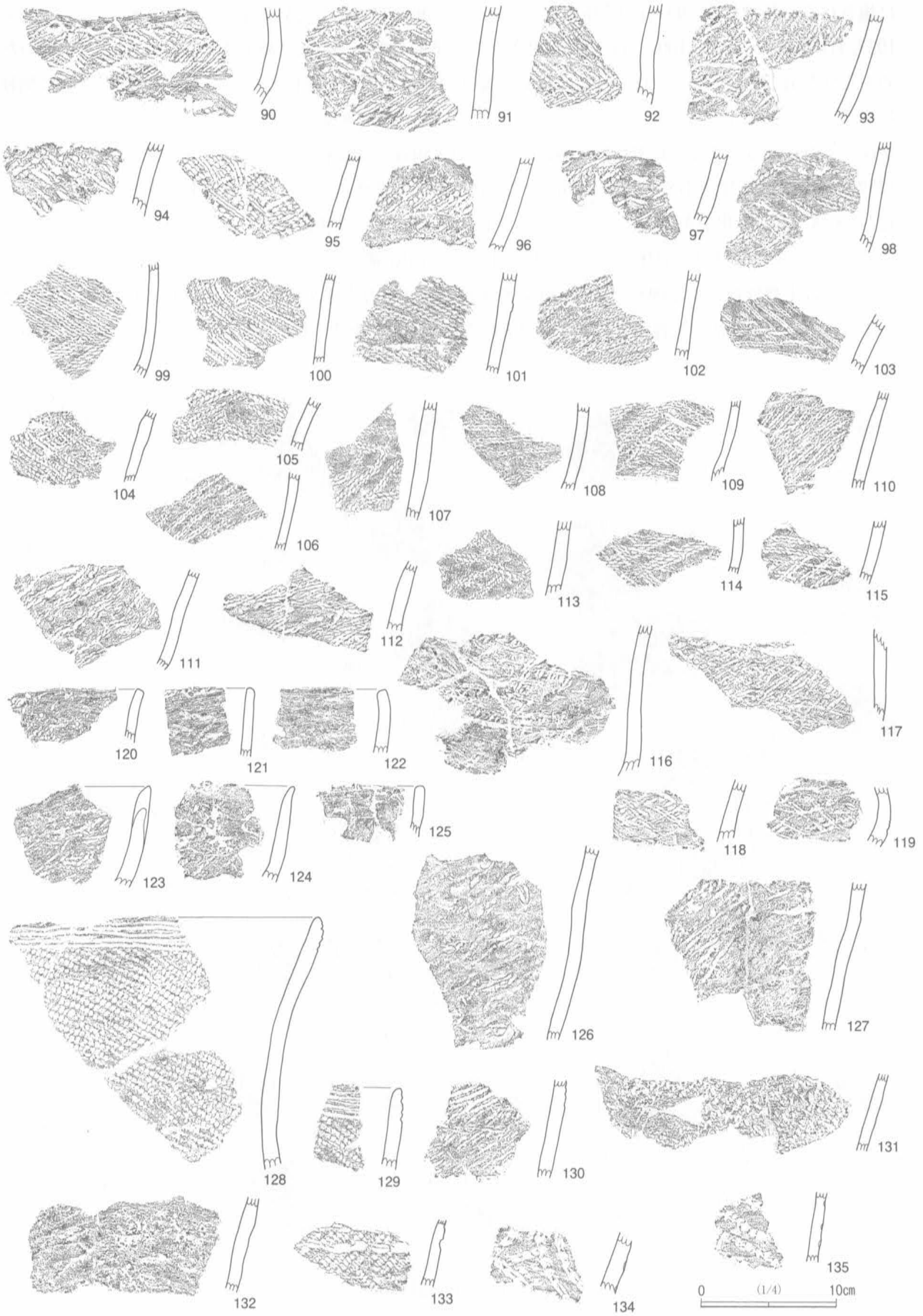
第23図　SI－025（1）


14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
0
(1/4)
10cm

第24図　SI－025（2）

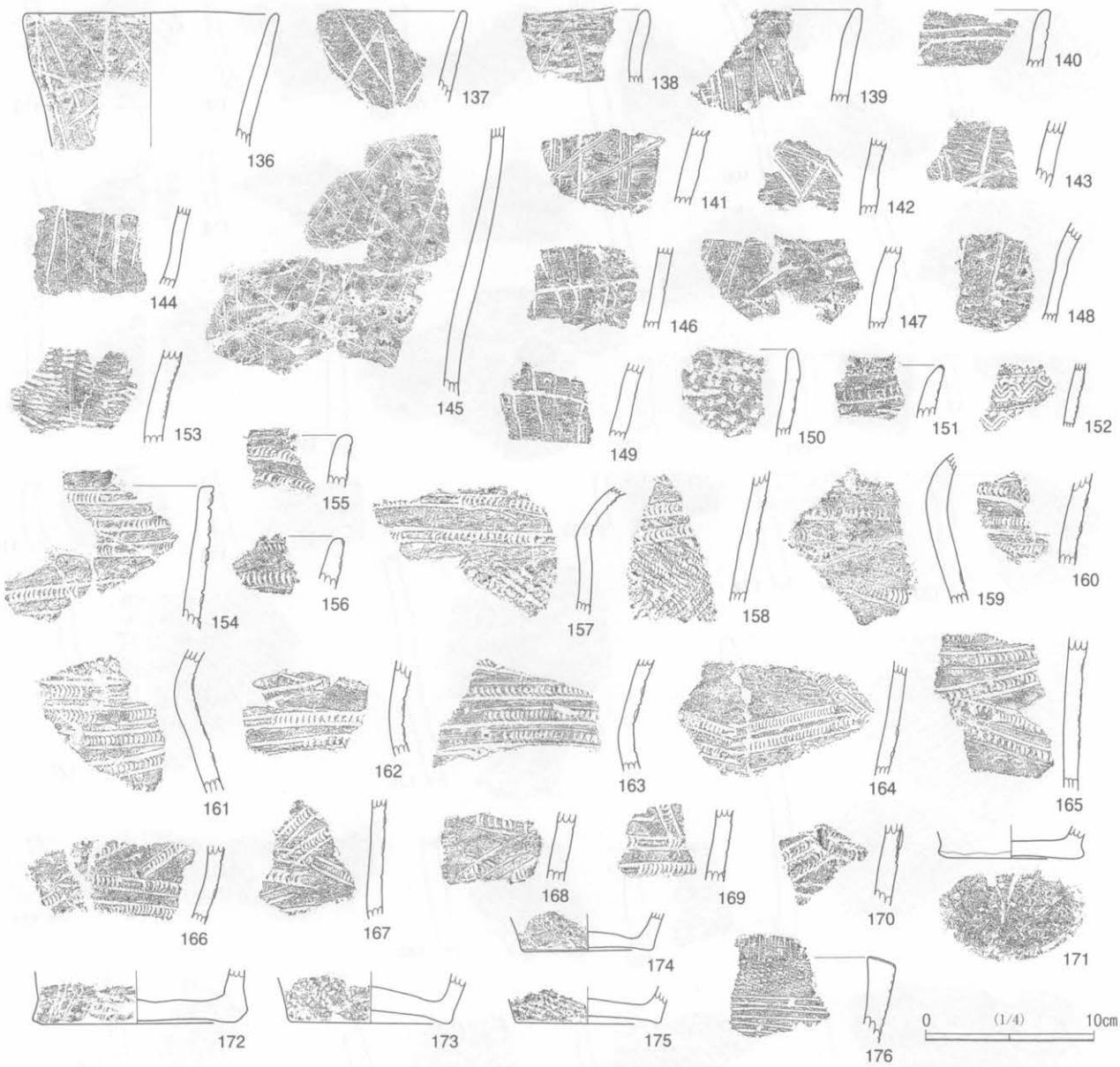
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
0
(1/4)
10cm

第25図　SI－025（3）


90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
0
(1/4)
10cm

第26図　SI－025（4）

に施される一群である。99・100は棒軸で、３条単位の無節ＬとＲを交互に施して羽状としている。102・103も羽状となる。105～109、111～115は２条～３条単位の撚糸文が粗く施文される。111は撚りが弱いため不規則な条を呈している。116～119は施文が浅い。117は無節Ｌを原体としているようである。他は縄軸に２条単位の撚糸を付加しているものと思われる。120～125は無文とした一群であるが、120には無節Ｌが疎らにみられる。また、123は波状口縁を呈し、貝殻復縁による刺突が不鮮明ながら確認される。121・125の器面調整は丁寧である。126～128は施文が浅く無文のようにみえるが、無節Ｌが疎らに観察される。127は被熱による赤化が顕著である。129には無節Ｌがみられる。130は無文で、被熱による器面の荒れが顕著である。131・132は同一個体となる可能性がある。単節RL縄文を地文とし、口縁部に数条の沈線が巡る。133～135は半截竹管による押し引き状の沈線や連続爪形文状の文様が施され、133はLRの単節縄文を地文とする。136～149は細い沈線によって文様が表出される一群である。136は推定口径15.5cmを測る小形の深



第27図　SI－025（５）

鉢である。斜位の沈線を組み合わせて格子状を呈する。137は胎土等より136と同一個体になると思われる。138・139は半截竹管による浅い沈線となる。141～149は胴部片である。145・146はヘラ状工具による鋭利な沈線、他は138と同様竹管による沈線表出である。150は繊維を多く含み、細い単沈線と雑な刺突によって文様が構成される。口唇端部には刺突が巡る。151は刺突列と波状沈線を組み合わせたもので、繊維の混入は少ない。152～170は、半截竹管による複数の連続爪形文が施される土器群である。多くは地文を無文とするが、167・168の竹管文下には付加縄文が施文される。この一群には比較的大粒の白色粒を多く含む特徴がある。171～175は繊維を多く含む土器の底部で、いずれも黒浜式期の所産である。176は早期の沈線文系土器である。貝殻腹縁文下に平行沈線が配され、口唇部には沈線が施される。

SI－026（第28図、図版４・20）

調査区東側19M－43グリッド付近に位置する。北コーナー部が攪乱されているが、規模は、長軸5.6m、短軸5.1m、床面積21.5㎡を測り、隅丸方形状を呈する。主軸方向は、N－48°－Eを指す。確認面からの深さは0.2m前後と浅い。床面はほぼ平坦であるが、あまり良好な状態ではない。ピットは床面上にいくつか掘り込まれている。配置は不揃いであるが、各コーナー近くに位置するピットが柱穴になると思われる。北コーナーの柱穴は小規模であるが、他は径0.5～0.7m、深さ0.3～0.4mほどである。炉も明確ではないが、北東側の柱穴間に位置する掘り込みが該当すると思われる。長軸1.1m、短軸0.6mと比較的大きく、皿状に掘り込まれる。覆土は自然堆積と思われる。

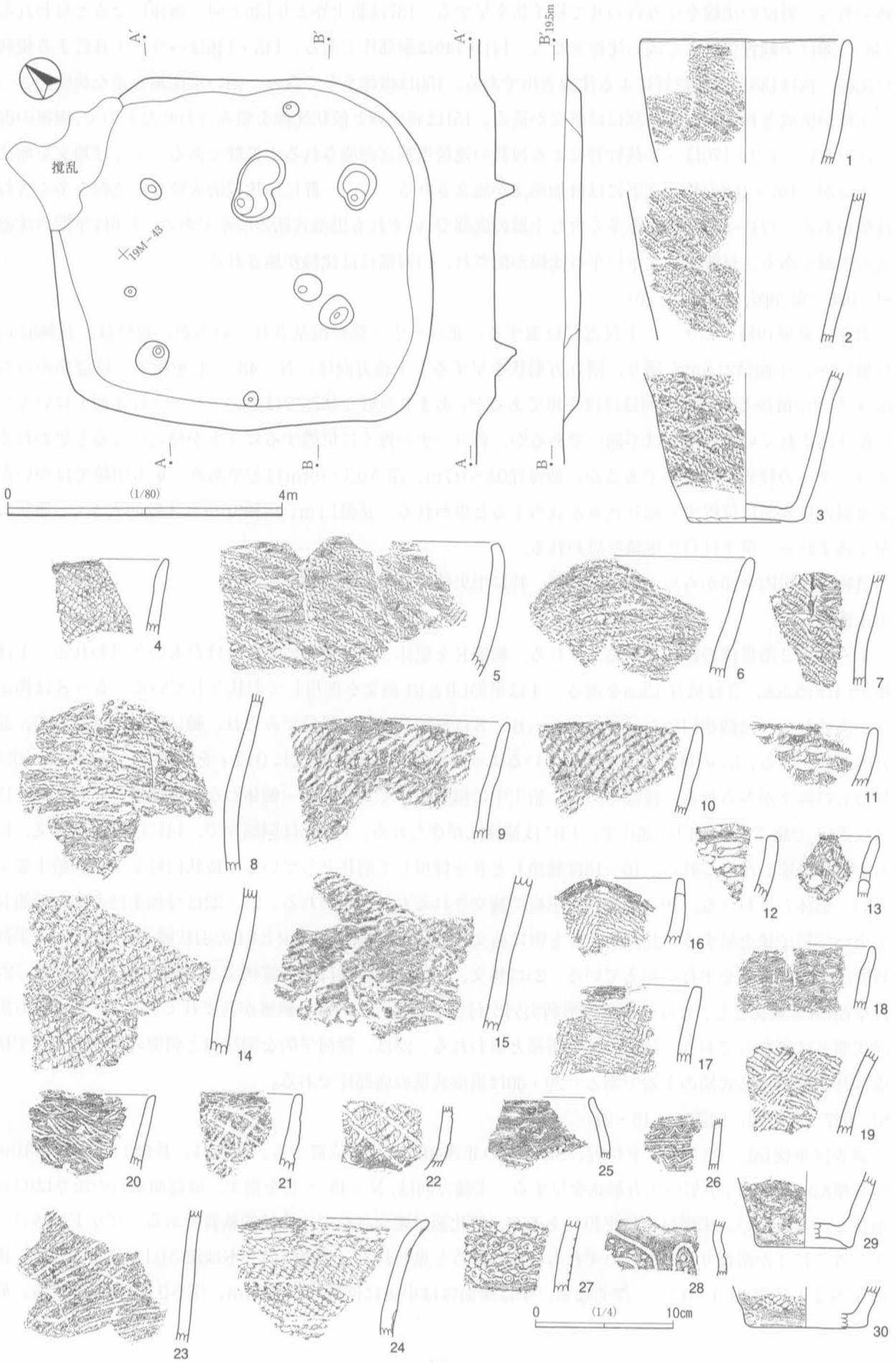
遺物は住居内全面から出土しているが、特に中央部分に集中する傾向がある。

出土遺物

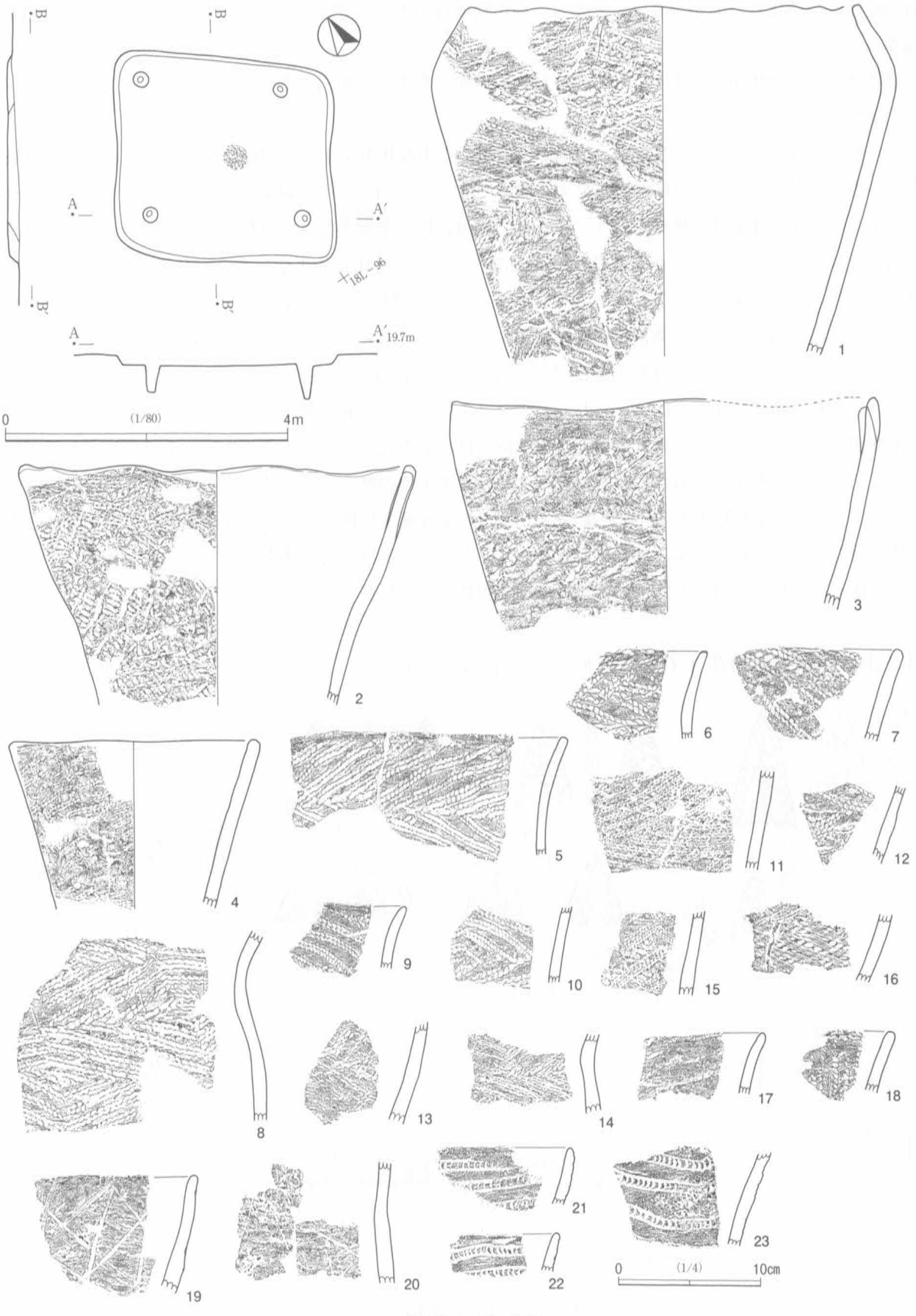
１～３は２条単位の撚糸文が施文される。無節Ｒを原体とし、棒軸に巻き付けたものと思われる。１は推定口径15.2㎝、３は底径9.3㎝を測る。４は単節LRとRL縄文を併用して羽状としている。５～８は撚糸文が施され、６は波状口縁を呈する。５・６・８は無節Ｒが２条単位でみられ、軸は明確ではないが、部分的な観察から、RLの単節縄文を用いているようである。７はRL縄文に０段ｒを付加している。9・10は無節Ｌの縄文がみられる口縁部である。胎土中に繊維を多く含み、同一個体となる可能性が高い。11～13は反撚LLで施文される口縁部片で、13には補修孔が穿たれる。14・15は胴部片で、14には無節Ｌ縄文、15も上位に無節Ｌがみられる。16～18は無節ＬとＲを併用して羽状としている。波状口縁を呈し、胎土等より同一個体と思われる。19・20は貝殻圧痕で施文されるものと思われる。21・22は付加条撚糸文と無節Ｒを用いて格子状を呈する。23は無節Ｌを密に施文している。24は単節LRとRLの羽状縄文を地文とし、半截竹管による刺突列を平行に加えている。25は無文、26は半截竹管による波状文と沈線文で構成される。27は単節LRを地文とし、竹管による円形刺突列が付け加えられている。繊維が含まれておらず、胎土等も黒浜式期とは異なっており、諸磯式期の所産と思われる。28は、幾何学的な細沈線と刺突の組み合わせで構成される称名寺２式期の土器である。29・30は黒浜式期の底部片である。

SI－027（第29図、図版４・15・21）

調査区東側18L－85グリッド付近、SI－026の北西40mほどに位置する。規模は、長軸3.1m、短軸3.0m、床面積8.2㎡を測り、小形の正方形状を呈する。主軸方向は、N－45°－Eを指す。確認面からの深さは0.1m前後とかなり浅い。床面はほぼ平坦であるが、硬化面は確認されず、比較的軟質である。ピットは各コーナー近くに４か所掘り込まれ、いずれも柱穴になると思われる。北東側の２本は深さ0.1mほどと浅く、南西側の２本は深さ0.4～0.5mと深くなる。炉は床面ほぼ中央に位置し、径0.4m、深さ0.1mほどを測る。底


A'
B'
A'
B' 19.5m
撹乱
19M-43
A
B
A
B
0
(1/80)
4m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
0
(1/4)
10cm

第28図　SI－026


B
B
A
A′
18L-96
B′
B′
A
A′ 19.7m
0
(1/80)
4m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
0
(1/4)
10cm

第29図　SI－027

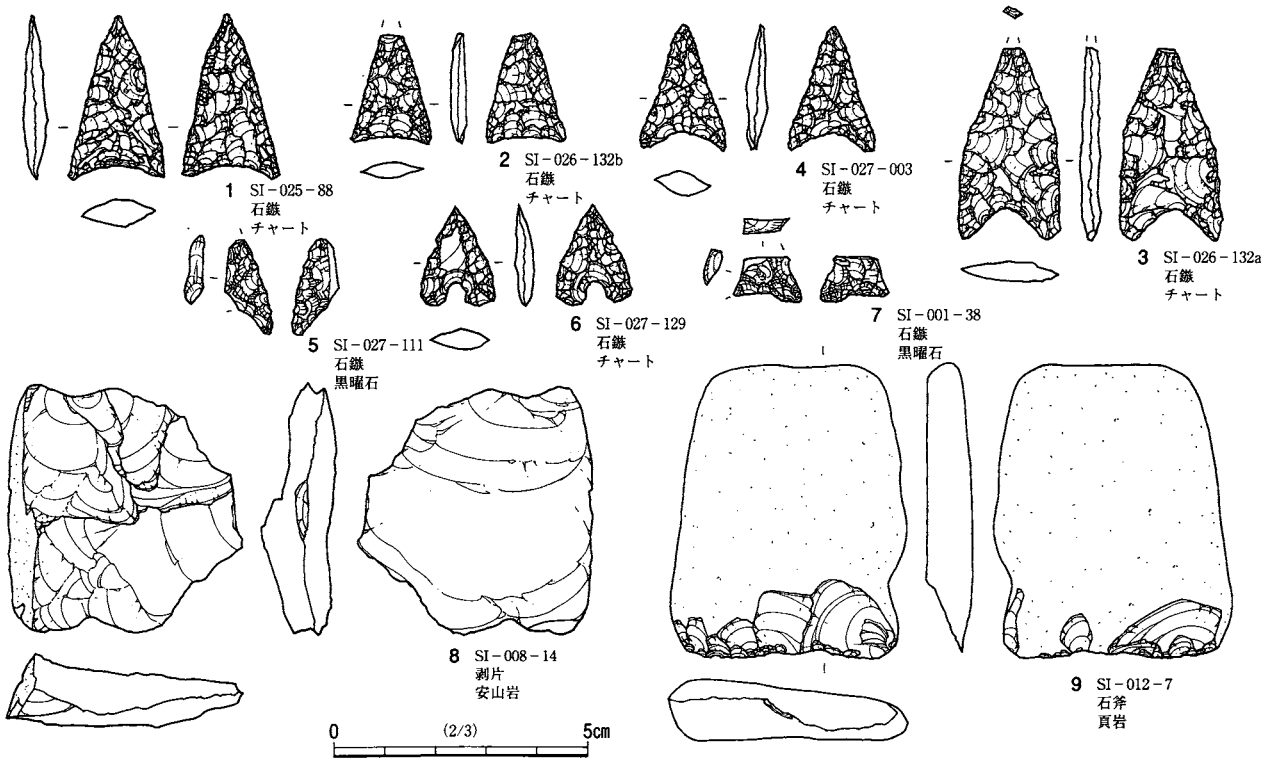
面の被熱痕や硬化した面が少ないことから、使用期間は短かったものと思われる。覆土は自然堆積と思われる。

遺物は住居内全体から出土しているが、特に南西側に集中する傾向がある。

出土遺物

1は推定口径28.5cmを測る深鉢で、口縁部は不規則な小波状を呈する。口縁部から胴部にかけて、2条単位の撚糸文がみられる。口縁部から最大径部までは、LR及びRLの単節縄文に無節RとLを付加した原体を併用して全体に菱形状の構成を示す。以下は、棒軸に撚糸を巻き付けた原体で施文していると思われる。底部近くは、0段のr及びlが確認される。胴部内面のナデは比較的丁寧である。2は推定口径23.3cmを測る深鉢で、口唇部は緩やかな波状を呈する。施文は、反撚LLに0段のlを付加した原体によって行われているが、口唇部直下には2条単位の撚糸文がみられる。3も緩やかに波状を呈し、繊維を多く含む。口縁部はヨコナデされ、以下には無節Lが疎らに浅く確認される。4は推定口径17.9cmを測る小形の浅鉢である。2条単位の撚糸文が全面にみられる。5は2条単位のLとRの撚糸文を併用して羽状を呈する。6は不鮮明であるが、無節Rを地文とし、2条単位の撚糸文を加えているようである。7は無節の軸縄を用いた2条単位の撚糸文がみられる。8～16は2条～4条単位の撚糸文が施される一群である。11は撚糸が密に施文され、15は4条単位の撚糸となる。16はLRの単節縄文に撚りの細かな4条単位の撚糸を付加した原体を用いている。17は無文、18は無節Rとなろうか。19・20は、格子状を呈する単沈線が施されており、同一個体と思われる。21～23は、半截竹管による複数の連続爪形文が施文される土器である。

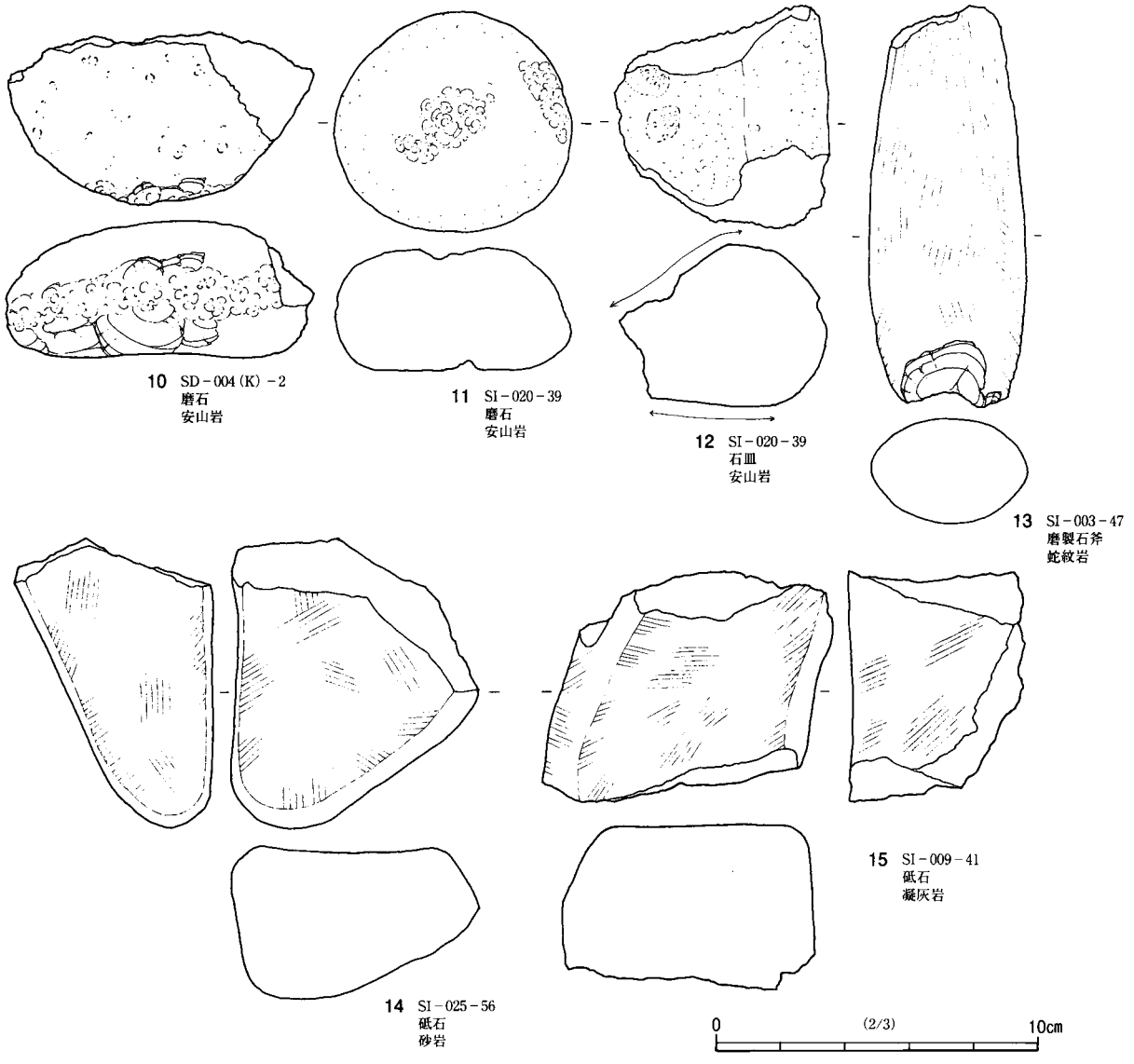
第2節　竪穴住居跡出土石器（第30・31図、図版25・26）



第30図　竪穴住居跡出土石器（1）

1～7は石鏃で、1～4・6はチャート、5・7は黒曜石製である。1～3は二等辺三角形を呈し、1は大形となる。1・2は抉りが浅く、3は抉りがやや深くなる。4は大形品で、扁平な縦長の五角形に近い形状を呈する。5は三角形鏃で、片側を欠く。6も三角形鏃であるが、脚部の抉れが半球形状を呈する。いずれも縄文時代前期の竪穴住居跡から出土している。

8は安山岩製の大形剥片である。9は頁岩製の石斧で、原石に近い素材を用い、剥離によって刃部を作出している。10・11は安山岩製の磨石である。10は側面に摩耗痕及び部分的な剥離がみられ、11は表裏面に窪みが残る。12は安山岩製の石皿片である。側面付近の遺存のため研磨痕はほとんどみられないが、表面に窪みが残る。13は蛇紋岩製の磨製石斧で、頭部及び刃部を欠く。全体に丁寧に研磨される。14・15は砥石であろう。11・14のみが縄文時代前期、他は古墳時代前期の竪穴住居跡出土である。混入品と思われるが、当該期の所産の可能性もある。



第31図　竪穴住居跡出土石器（2）

第９表　縄文時代石器属性表（１）

挿図番号	グリッド・遺構	遺物番号	器　種	石　材	重量(g)	標高(m)	備　考
第30図１	SI－25	88	石鏃	チャート	1.84		
2	SI－26	132b	石鏃	チャート	0.92		
3	?	3	石鏃	チャート	1.09		遺構番号不明
4	SI－26	132a	石鏃	チャート	2.69		
5	SI－27	111	石鏃	黒曜石	0.34		縦半分
6	SI－27	129	石鏃	チャート	0.83		
7	SI－1	38	石鏃（脚のみ）	黒曜石	0.30		
8	SI－8	14	剥片	安山岩	25.43		
9	SI－12	7	打製石斧？	頁岩	42.33		被熱によるはじけあり
第31図10	SD－4	2	磨石	安山岩	264.91		
11	SI－24	81	磨石	安山岩	265.44		敲打痕あり
12	SI－20	39	石皿	安山岩	216.80		
13	SI－3	47	磨製石斧	蛇紋岩	334.40		
14	SI－25	56	砥石	砂岩	460.14		
15	SI－9	41	砥石	凝灰岩	504.35		

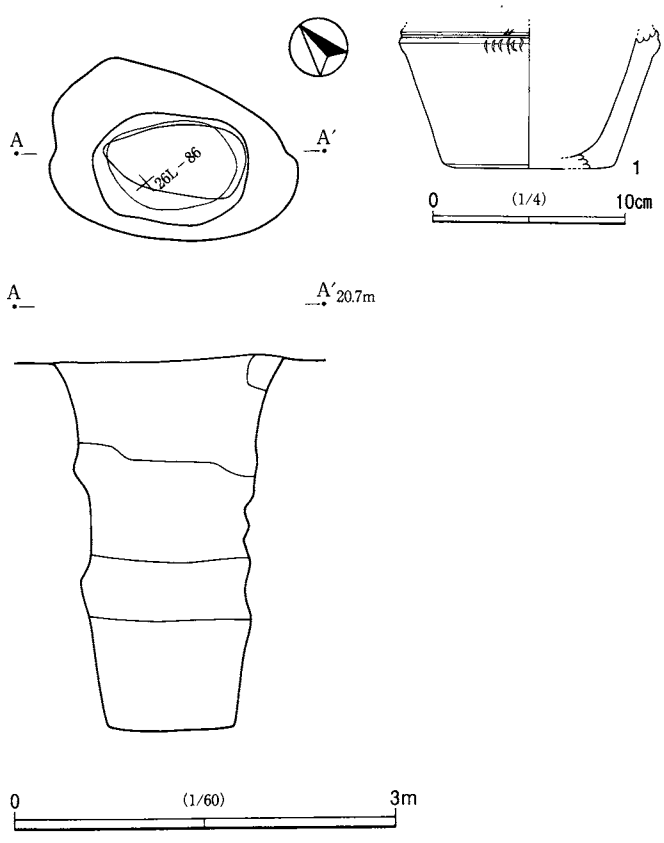
第３節　土坑

SK－008（第32図）

調査区南西端26L－76グリッドに位置し、SI－005により南西側をやや削平される。長軸2.0m、短軸1.3mの楕円形を呈し、深さ3.2mを測る。覆土中にロームブロックを多量含んでおり、埋め戻された可能性が高い。陥穴になると思われる。

出土遺物

深鉢形土器の底部のみ図示できたが、本遺構に伴うものではなかろう。上部を沈線で区切られた隆帯上に連続爪形文が施されている。胎土中に白色粒・雲母粒を含む。阿玉台式期の所産であろう。



第32図　SK－008

第４節　グリッド出土縄文土器（第33～36図、図版15・21～25）

本遺跡からは、前期を主体として、早期から後期までの土器が確認される。

第Ⅰ群土器（１～４）

早期の条痕文系土器である。１～３は表裏とも条痕を地文とし、表面に竹管による刺突が充填される。２には、頂部に刻みを施した隆帯が巡る。４は密な条痕が施文される。

第Ⅱ群土器

本遺跡出土縄文土器の主体を占める前期の土器を本群とした。

第１類（５～74）本遺跡で最も出土量の多い黒浜式土器を本類とした。全体の縄文土器片総量の72％を占める。

第１種（５～12）単節縄文が施される一群である。５～８は口縁部で、５・６は波状口縁を呈し、RLの単節縄文が施される。９は推定口径20.2cm、器高11.1cmを測る浅鉢で、無節Ｌ縄文が全面に施文される。胎土中に繊維を多く含む。

第２種（13～24）無節縄文が施される一群である。13～19は口縁部で、無節Ｌ（14～16、19）と無節Ｒ（13、17、18）の両者がみられる。20～24は胴部片で、23・24は無節ＲとＬを併用して羽状となる。

第３種（25～49、56～58）撚糸文が施される土器群である。25は施文が浅いが、無節Ｌの細かい付加状縄文と思われる。26～49は縄文を軸に付加したものと、棒軸のものの両者がみられる。26はRL縄文に撚りの弱い無節Ｒを２条付加している。28は棒軸で、２条単位の撚糸文を格子状に施文する。30は３条単位の撚糸文を格子状に配する。31は２条単位の撚糸文が比較的密に施される。36は太めの単節縄文に３条単位の撚糸文を付加した原体を用いている。37～39はＬとＲの原体を用いた２条の撚糸のため、矢羽根状を呈する。40～49は細かい撚糸を用いて、比較的密に施される。50～52は施文が雑で、部分的に無節縄文が確認される。56～58も雑な施文である。

第４種（53～55）無文と思われる一群であるが、54にはきわめて浅い撚糸が若干みられる。

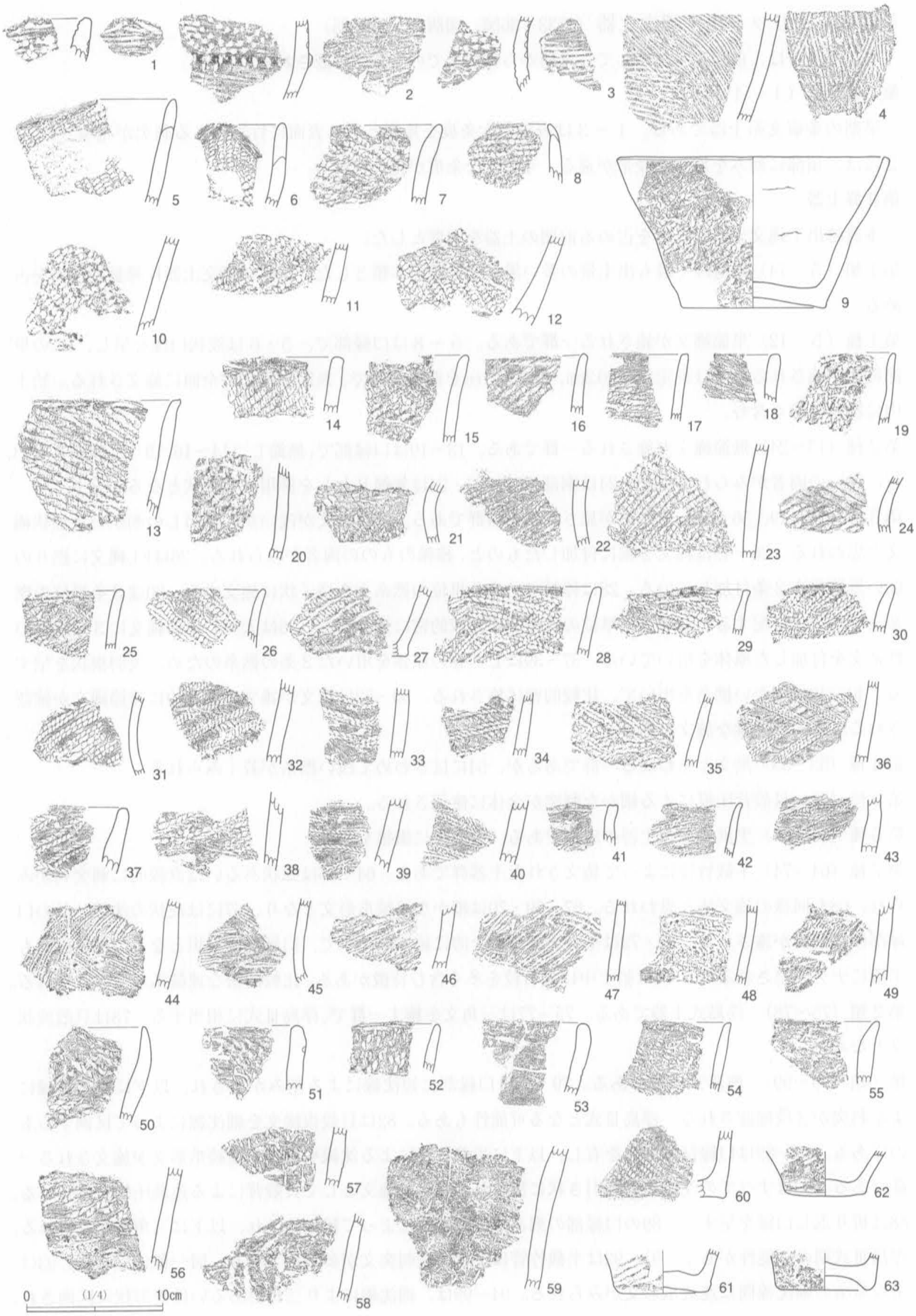
第５種（59）貝殻背圧痕による細かな刺突が全体に確認される。

第６種（60～63）黒浜式期の土器の底部である。胎土中に繊維を含む。

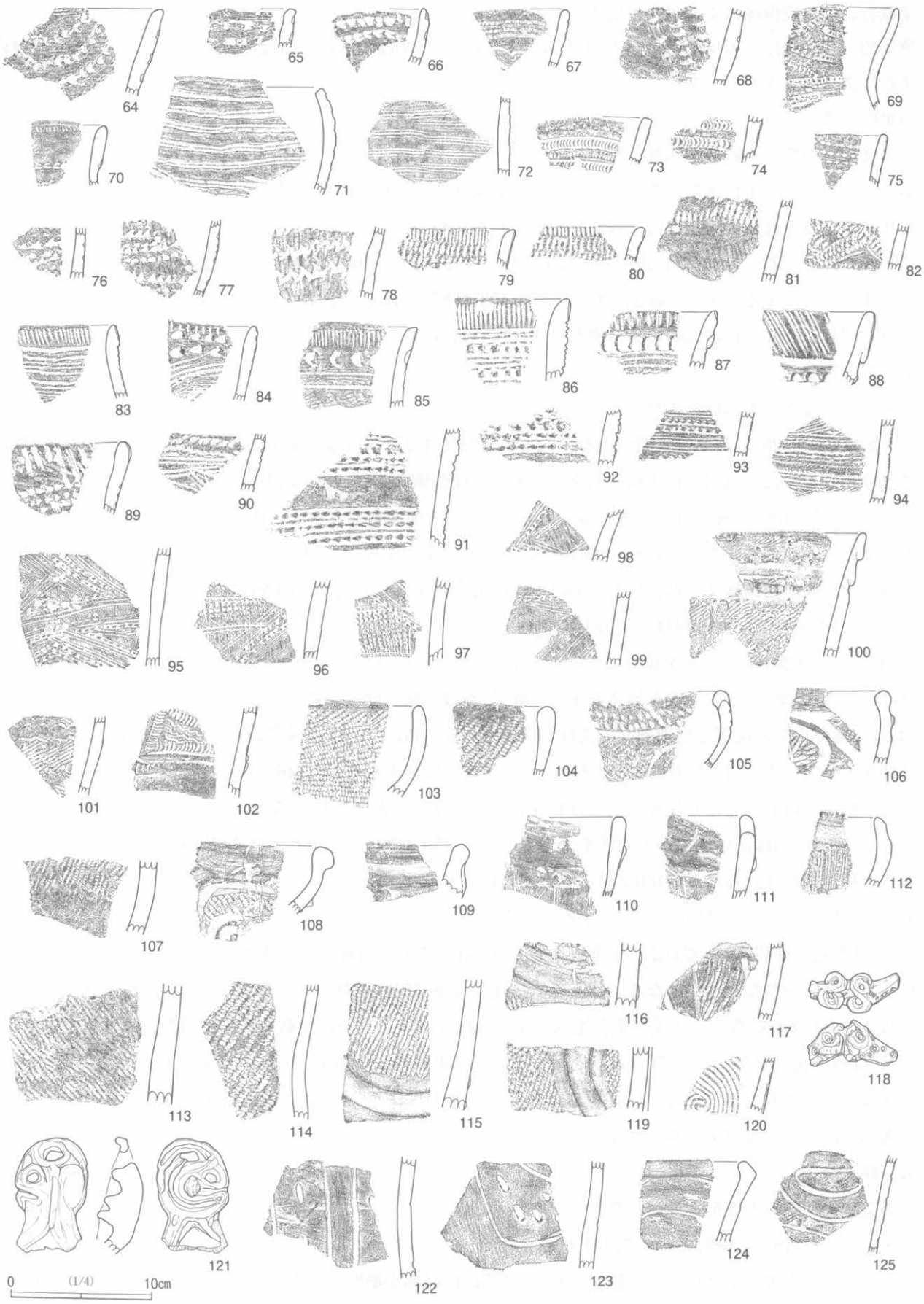
第７種（64～74）半截竹管によって施文された土器群である。64～66は弧状あるいは直線的に刺突列がみられ、68も同様の施文法と思われる。67・69・70は細かな連続爪形文となり、67には波状の沈線、69の口縁部には刻みが施される。71・72は平行沈線を集合的に施すタイプで、口唇部は平坦となる。内外面とも平滑にナデ調整される。73･74は胎土中に長石粒を多く含む特徴がある。比較的密な連続爪形文がみられる。

第２類（75～78）　浮島式土器である。75～77は三角文を施す一群で、浮島Ⅲ式に相当する。78は貝殻波状文となる。

第３類（79～99）　興津式土器である。79・80は口縁部に短沈線による刻みが施され、以下に貝殻復縁による刺突が２段確認される。浮島Ⅲ式となる可能性もある。82は貝殻復縁文を細沈線によって区画するものである。83～89は口縁部に刻みを有し、以下に半截竹管による沈線や刺突、連続爪形文が施文される一群である。83はすべての沈線が押し引き状に施され、85には地文として貝殻背による連続圧痕がみられる。88は折り返し口縁を呈する。89の口縁部の刻みは半截竹管によって雑に施され、以下に三角文がみられる。浮島Ⅲ式期の可能性がある。91・92は半截竹管による連続刺突文が多条施される。同一個体である。93は密な多条の細沈線間に連続爪形文がみられる。94～99は、細沈線により三角形あるいは菱形状に区画され、



第33図　グリッド出土縄文土器（1）



第34図　グリッド出土縄文土器（2）

半截竹管や貝殻復縁による刺突が加えられる。

第４類（100、101） いわゆる下小野式土器に含まれる。100は折り返し口縁で、無節Ｌ縄文が、101はいわゆる綾洛文を施すものである。

第Ⅲ群土器

縄文時代中期の土器群を本群とした。

第１類（102） 阿玉台式期に含まれる。連続爪形文が加えられた隆帯による区画内に間隔の密な爪形文や波状文が充填される。胎土中に、長石粒や雲母粒を含む。

第２類（103～122） 加曽利Ｅ式期の土器を主体とする。103・104は単節LR縄文で施文され、105の口縁部には棒状工具による刺突列が確認される。106・108は隆帯、110～112は垂下する集合沈線がみられる。113～119は胴部片で、119は沈線による渦巻き文が施される。

第Ⅳ群土器

縄文時代後期の土器群を本群とした。

第１類（120～126） 称名寺式期の土器である。120・121は波状口縁の把手で、120は８の字状の隆帯が貼り付けられる。123・124は細沈線と刺突の充填で文様が構成され、125は口縁部が内屈する。

第２類（127～136） 堀ノ内式期の土器である。126はLR縄文を地文とし、沈線で区画する。127も太沈線と縄文の組み合わせである。128・129は無文、130は２条の沈線下にLRの単節縄文が施される。131・132は細沈線が曲線的に施文され、133～136は単節縄文を地文とし、幾何学的な沈線が配される。

第３類（137～160） 加曽利Ｂ式期の土器である。

137は、口径28.2cmを測る深鉢で、条線文を地文とする。口縁部及び頸部下端に押捺を加えた細紐が貼り付けられる。138～141も条線を地文とする一群で、やはり貼り付けが粘土紐の貼り付けが施される。142～145は口縁部片で、沈線と磨消縄文で文様が構成される。142・145は口縁部が内屈し、145の口唇部には瘤状突起がみられる。143は口縁部下の２条の平行沈線間に刻みが巡る。146～148は胴部片で、147には刻みが施される。149～155は太沈線あるいは細沈線により文様が表出され、150にはLRの細かな単節縄文がみられる。154は口縁部の沈線が矢羽状を呈する。157～159は平行沈線と磨消縄文で文様が構成され、縦長の瘤状突起が貼り付けられる。160は無文で、補修孔がみられる。

第４類（161～173） 後期安行式期の土器である。

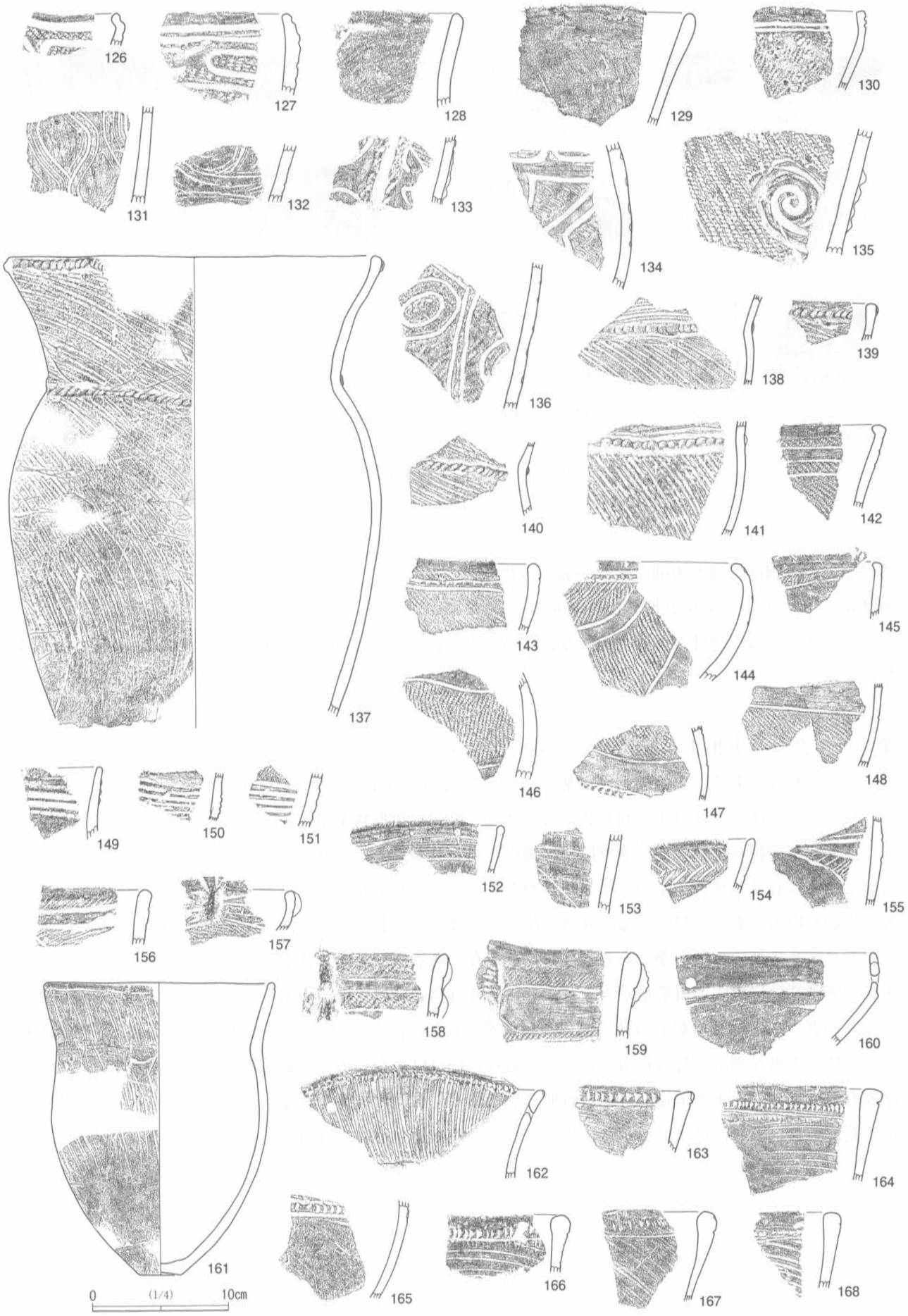
161は推定口径17.5cm、器高21.6cmを測る小形の深鉢である。口縁部に沈線が巡り、以下は条線文が施される。底部は小さな上げ底となる。162～164、166～168は口縁部外面に刻みが巡り、刻み下は沈線で区画される。以下は条線あるいは浅い集合沈線が加えられる。168の刻みは半截竹管による押し引き状を呈する。162には補修孔が穿たれる。170は波状を呈するものと思われる。細かいRLの単節縄文を地文とするが、口縁部は磨り消されて無文となり、沈線による区画が加えられる。173は口縁部外面に細かい刻みが施され、無文部を挟んで無節縄文がみられる。

第Ⅴ群土器

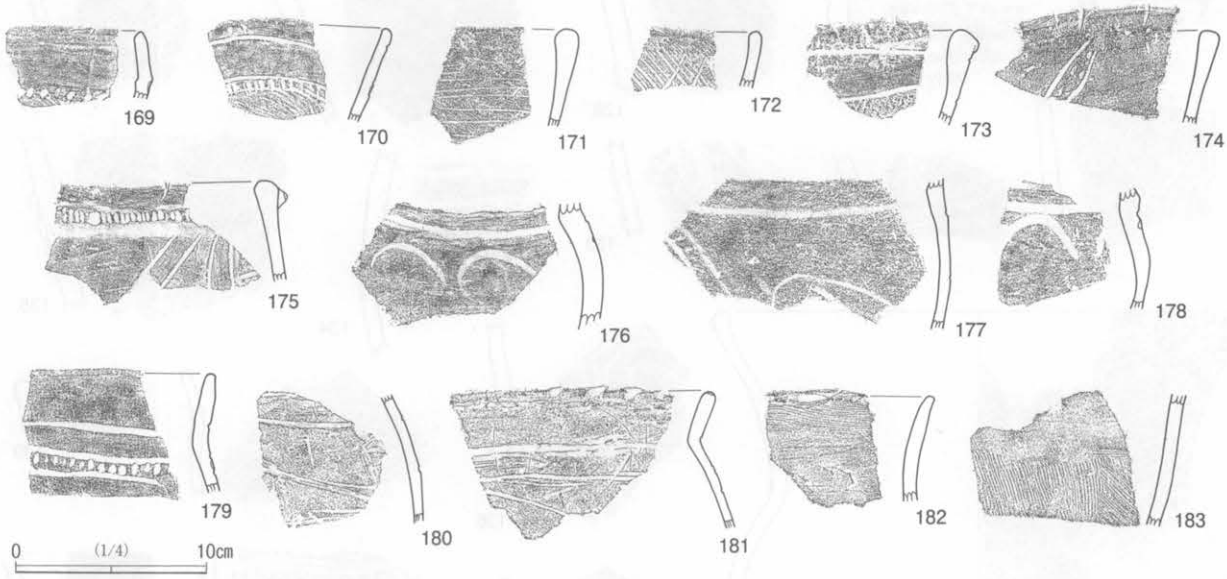
縄文時代晩期の土器を本群とした。

第１類（174～181） 晩期安行式期の土器である。

弧状を呈する沈線が主文様として施文される。175は口縁部が肥厚し、突帯部に刻みが巡る。179は沈線間に刻みが充填される。180・181は同一個体で、口縁部がくの字状に外反する。口唇部には浅い刻みが部分



第35図　グリッド出土縄文土器（3）



第36図　グリッド出土縄文土器（4）

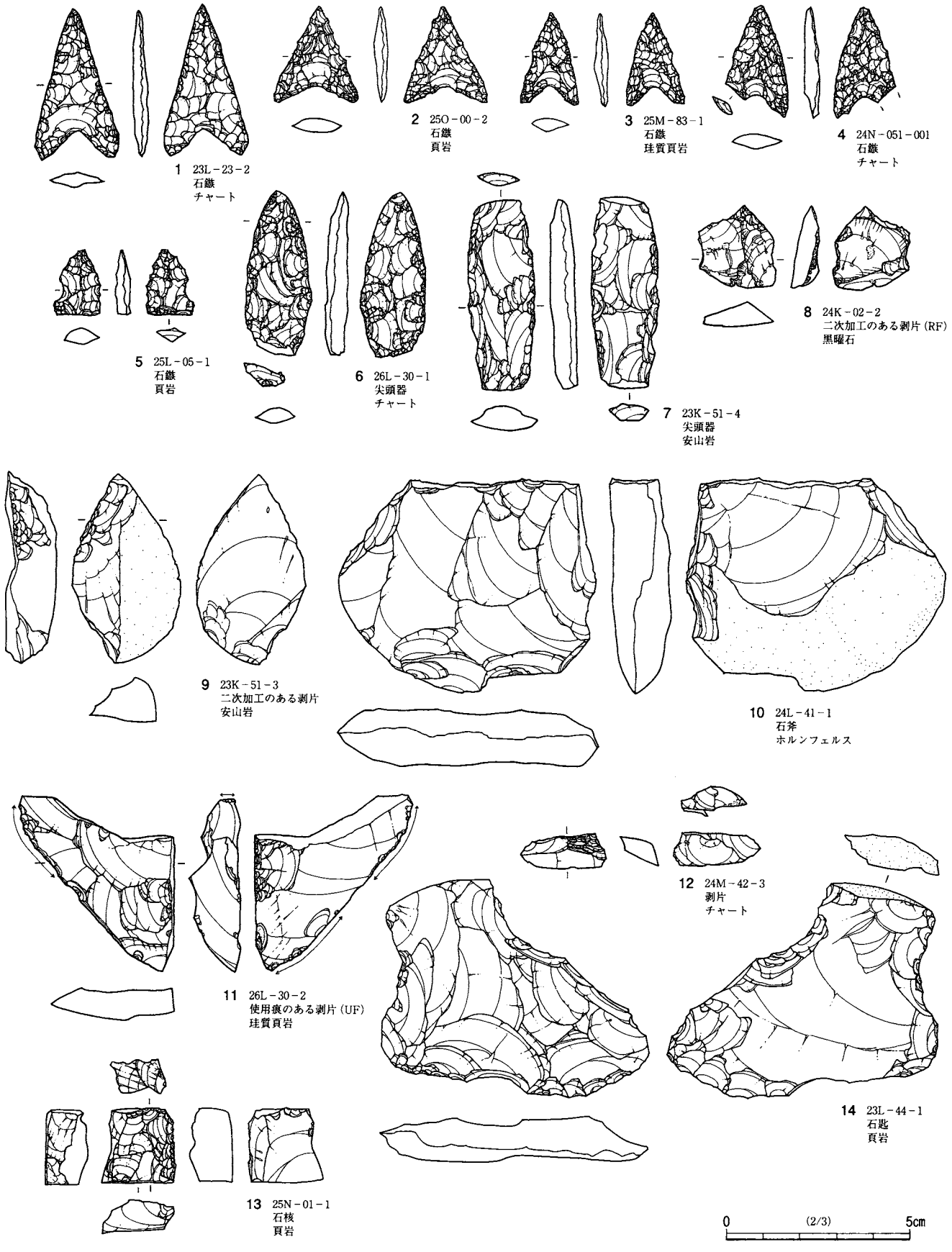
的に施され、胴部には不規則な沈線が加えられる。

第２類（182・183）　荒海式期の土器である。

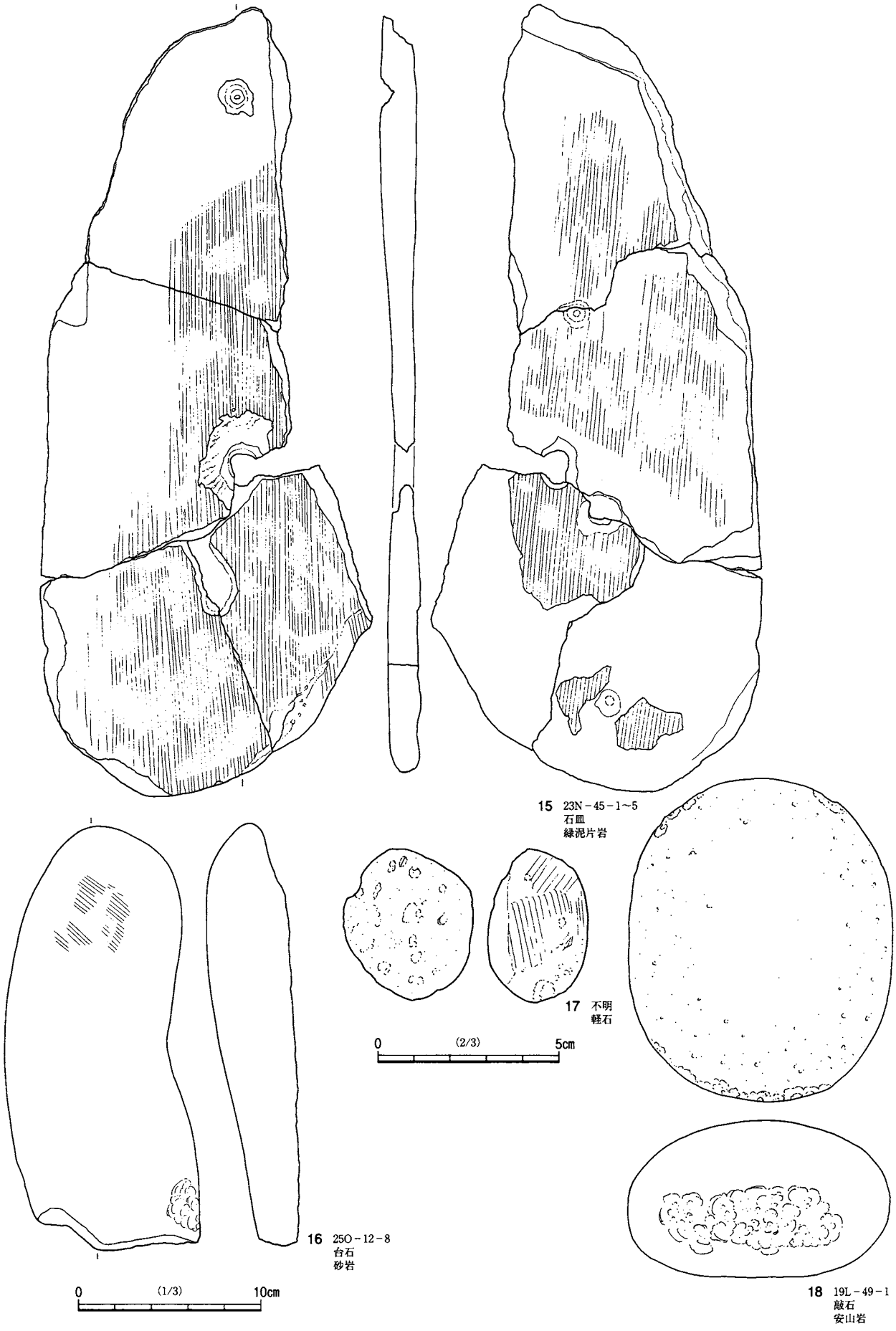
同一個体となる可能性があり、口縁部には横位の条痕、胴部には縦位の条痕が施される。胎土は砂質を帯びる。

第５節　グリッド出土石器（第37・38図、図版25・26）

１～５は石鏃である。１はチャート製で、長さ4.1cm、重さ2.64ｇを測る大形品である。二等辺三角形を呈し、抉りは鋭く深い。２は正三角形状、３・４は二等辺三角形状を呈する。５は頁岩製の石鏃で、脚部を欠く。側縁部が抉れているが、調整段階の破損と思われる。６・７は尖頭器で、６はチャート、７は安山岩製である。６は基部を欠くが、丁寧に調整される。７は基部及び先端部を欠く。調整は比較的雑であり、欠損は調整段階のものと思われる。８は黒曜石、９は安山岩製の二次加工のある剥片（RF）である。10はホルンフェルス製の打製石斧である。部分的な遺存であるが、その形状から、分銅形となるものであろう。刃部の表皮部分には弱い研磨痕がみられる。11は珪質頁岩製の使用痕のある剥片（UF）である。12はチャート製の剥片、13は頁岩製の石核である。14は重さ46.7ｇを測る大形の石匙である。上端部に自然面を残し、全体に丁寧な調整が施される。頁岩製である。15は扁平な形状で、表裏面ともに磨面があり、数カ所窪みもみられる。本来の用途としては石皿と思われる。緑泥片岩製である。16は台石であろう。裏面は平坦に整形され、表面には研磨痕が全体にみられる。17は用途不明の軽石、18は安山岩製の敲石である。



第37図　グリッド出土石器（1）



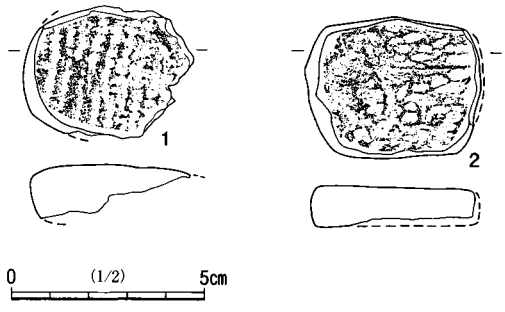
第38図　グリッド出土石器（2）

第10表　縄文時代石器属性表（2）

挿図番号	グリッド・遺構	遺物番号	器　種	石　材	重量(g)	標高(m)	備　考
第37図1	23L－23	2	石鏃	チャート	2.63		一括
2	25O－00	2	石鏃	珪質頁岩	1.40		
3	25M－83	1	石鏃	珪質頁岩	0.98		
4	24N－51	1	石鏃	チャート	1.44		一括
5	25L－05	1	石鏃	頁岩	0.88		
6	26L－30	1	尖頭器	チャート	4.90		一括
7	23K－51	4	尖頭器	安山岩	8.36	20.372	
8	24K－02	2	RF	黒曜石	2.41	20.409	
9	23K－51	3	RF	安山岩	20.45	20.416	
10	24L－41	1	打製石斧	ホルンフェルス	80.29		一括
11	26L－30	2	UF	珪質頁岩	16.83		一括
12	24M－42	3	剥片	チャート	1.83	20.446	
13	25N－01	1	石核	頁岩	6.27		
14	23L－44	1	石匙	頁岩	46.72		一括
第38図15	23N－45	1	石皿	緑泥片岩	2180	19.505	同一個体
	23N－45	2				19.417	
	23N－45	3				19.353	
	23N－45	4				19.380	
	23N－45	5				19.455	
16	25O－12	8	台石	砂岩	1510		
17	？－2？	16？	軽石	軽石	9.85		番号不明
18	19L－49	1	敲石	安山岩	397.17		

第6節　グリッド出土土製品（第39図）

1・2は土器片を利用した円盤である。1はLRの単節縄文、2は無節縄文が粗く認められる。前期黒浜期の所産と思われる。



第39図　グリッド出土土製品

第４章　古墳時代

第１節　竪穴住居跡

SI－004（第40図、図版５・27）

25N－51グリッド付近に位置する。規模は一辺4.4mを測り、正方形を呈する。確認面からの深さは0.1mほどと浅い。主軸方向はN－41.0°－Wを指し、床面積は19.1㎡を測る。床面はほぼ平坦で、比較的堅緻である。壁溝は検出されなかった。柱穴は対角線上に４本配置され、南側に比して北側の柱穴が小さい。南東壁際中央にピットが確認された。深さは浅いが出入口に伴うものと思われる。炉は確認されなかった。

遺物は床面全体に散在している。

出土遺物

１は壺の頸部から胴部上位の一部の遺存である。外面は磨滅が著しい。２～９は甕である。２はＳ字口縁部片で、口唇部が上方向に摘み上げられるタイプである。胎土の違いからも東海産と思われる。３は口縁部が直線的に開く。４は口唇部が肥厚して長く伸び、くの字に外反する。二次的に火を受けており、煤の付着が著しい。５は口縁部が短く端部で緩やかに外反する。ハケ目がしっかりと残っており、口縁部を最終的にナデて、ハケ目が消されている調整痕が明らかに確認できる。６～８はくの字に強く外反する口縁部片である。口唇部がほぼ直角に短く摘み上げられているのが特徴である。特に６・７は強く摘み上げられており、内面に稜線が形成されている。このタイプの甕は、「受け口」状口縁甕と称される一群で、調整はきわめて丁寧である。９は大形の甕、10は小形の台付き甕の台部のみの遺存である。11は小形の甕で、ミニチュアとなろう。

SI－005（第41図、図版５・27）

25N－94グリッド付近に位置する。規模は一辺3.3mの小形の正方形を呈する。確認面からの深さはほとんどない。主軸方向はN－21.5°－Eを指し、床面積は10.1㎡を測る。床面はほぼ平坦で、比較的堅緻であり、炉の周辺に硬化面がみられる。壁溝は検出されなかった。床面上にピットが数本掘り込まれるが、不規則である。深さ0.2～0.5mと一定していない。炉は東壁コーナー近くに検出された。掘り込みはほとんどなく、焼土のみの遺存である。

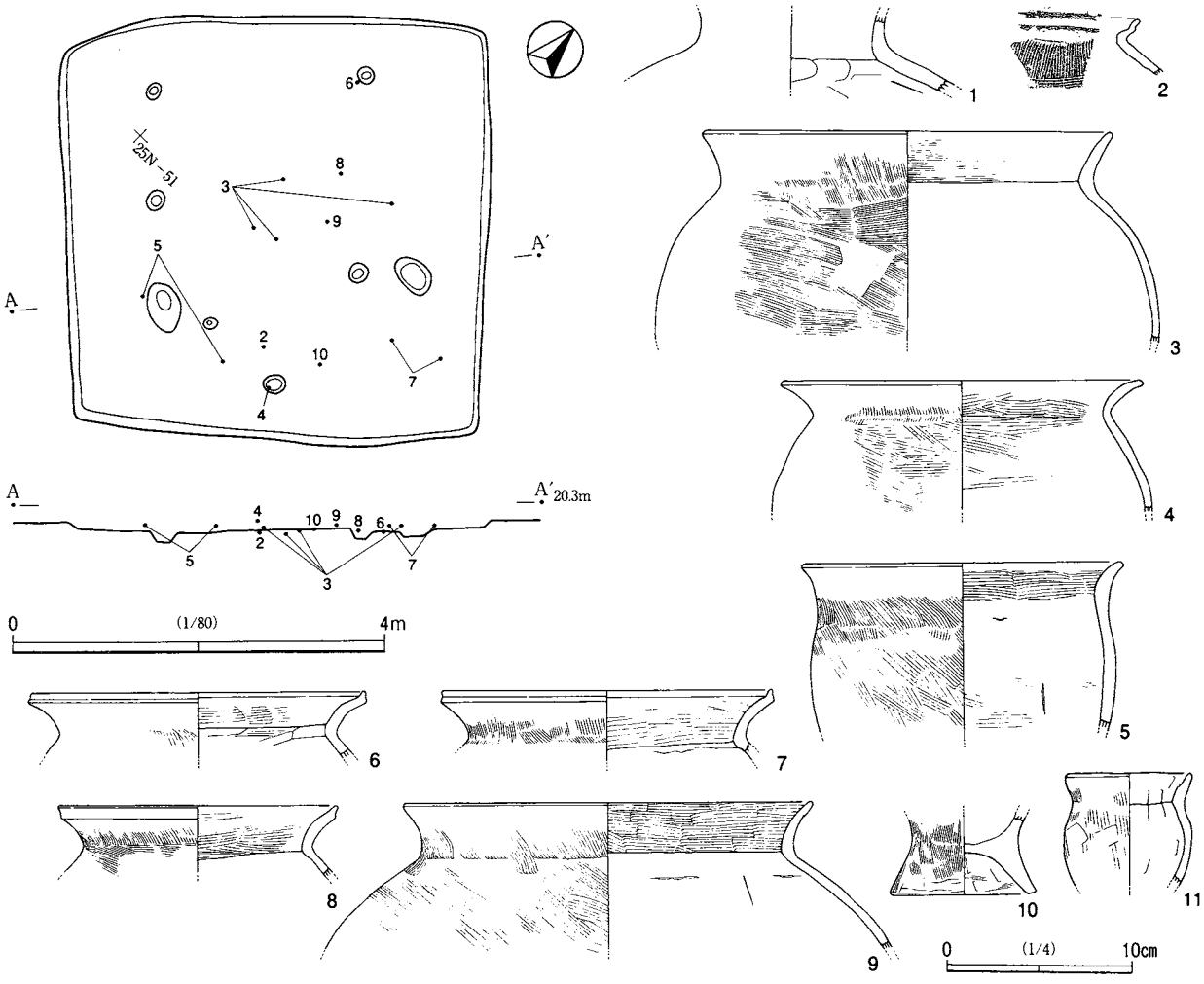
遺物の出土は少なく、壁際の覆土中より甕・手捏ね土器が認められる。

出土遺物

１は器台の台部で、ハの字に開く。台部中位に３か所、透孔が穿たれている。２は壺で、球形の胴部の中位から突出した底部までの遺存である。３・４は甕で口縁部のみの遺存である。口唇部を上方に短く摘み上げた形状である。５・６は台付き甕で、５は胴部のみの遺存で、最大径が胴部中位よりやや下に位置している。６は胴部中位に最大径を有し、台部は僅かに内湾ぎみにハの字に開く。７は手捏ね土器である。８は土製の勾玉で、孔の半分から欠損している。

SI－006（第42図、図版５・27）

26N－32グリッド付近に位置する。規模は長軸5.7m、短軸5.2mでほぼ正方形を呈している。主軸方向はN－57.0°－Eを指し、床面積は27.4㎡を測る。確認面からの深さは0.6mと本遺跡では深くなる。床面はほぼ



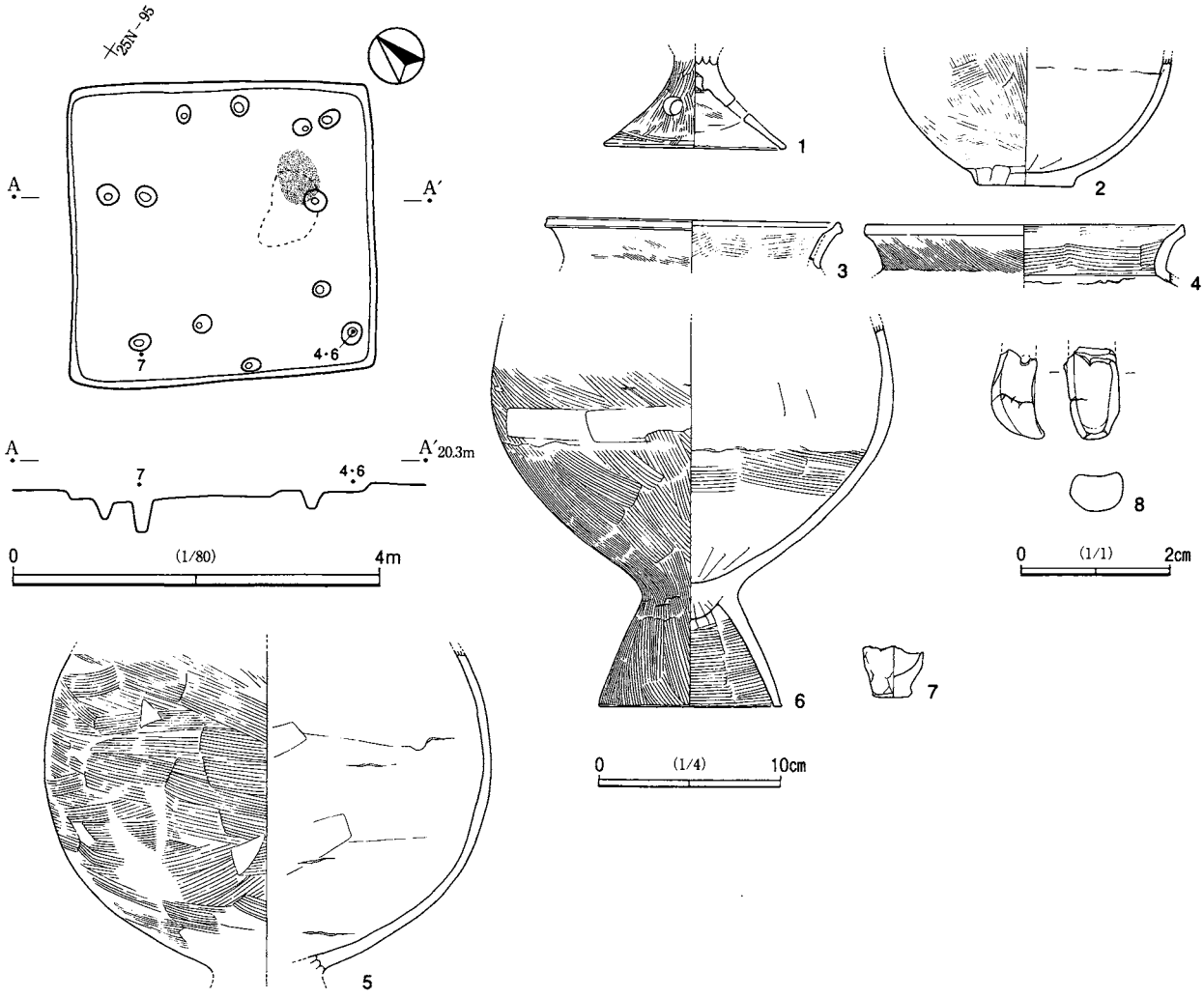
第40図　SI－004

平坦で、硬化面は住居中央の大部分を占めている。壁溝は南東側の一部を除きほぼ全周している。柱穴は対角線上に４本配置される。掘り方の径は小さいが、深さは0.6～0.8m程度と比較的深く、周囲に浅いピットを伴っており、補助柱穴を伴っていたと考えられる。東コーナー近くに貯蔵穴と思われるピットが検出された。径0.4mのほぼ円形で、深さ0.7mを測る。炉は北東側の柱穴間で確認された。土器片が３片立てられており、燃焼効果を高める炉壁として利用されたものと思われる。壁に沿って５cm程度の厚みの焼土が３か所に検出された。

遺物は多く、床面又は覆土下層からの出土で、全体に散在している。

出土遺物

１～４は器台である。全て上下貫通孔の無いタイプである。１～３は浅い小さな器受け部にハの字状に開く台部が付く。台部上位に３か所の透孔が認められる。４は若干深めになるであろう器受け部に直線的に開く台部が付く。穿孔は台部上位に３か所ある。赤彩が施されている。５～９は高杯である。５・６の杯部は同様の形状で、小さな底部を持ち直線的に外上方に開き、底部と体部の境に明確な稜線を有する。５の脚部は裾部が大きく開くタイプである。穿孔は３か所で脚部上位に穿たれている。６・７は放射状の丁寧なミガキが施されている。８の脚部は長く直線的に開く。10～12は壺である。10は折り返し口縁の一部の遺存である。12の底部は突出しているのが特徴である。13・14はいわゆる坩である。丁



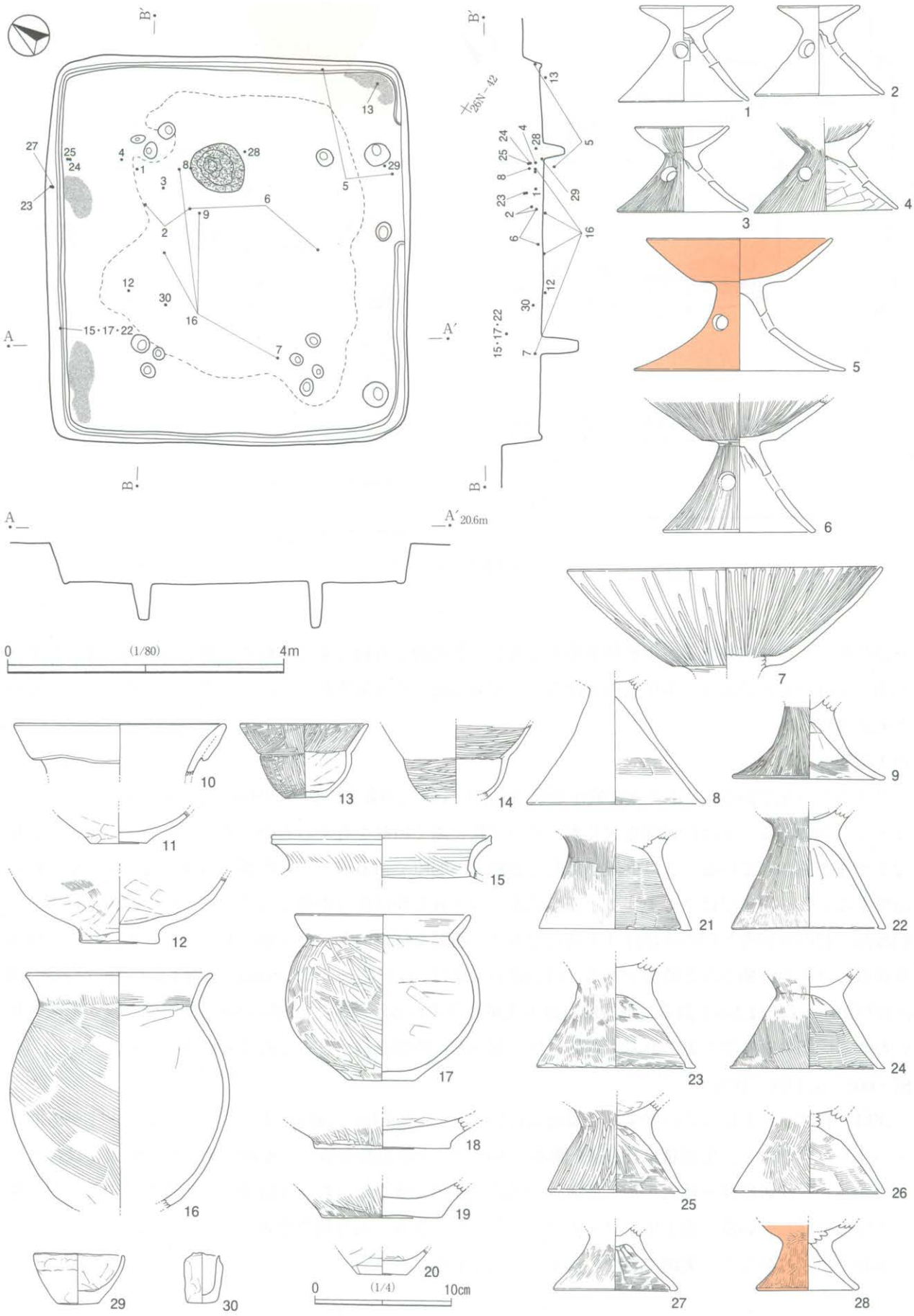
第41図　SI－005

寧なミガキが施されている。15～20は甕である。15は口唇部を上方に摘み上げた形状を呈している。16はやや長胴で、胴部上位に最大径を有し、17は球形の胴部で口縁部は短くくの字状に屈曲する。21～28は台付き甕の台部である。22は若干長めであるが他は短くほぼ直線的にハの字に開く形状である。ほとんどが内外面にハケ調整を施しており、ハケ目が明らかに確認できる。29は手捏ね土器で、内面のヘラ痕が目立つ。30はミニチュア土器である。筒状の胴部で口縁部が若干外方向に摘み上げられている。

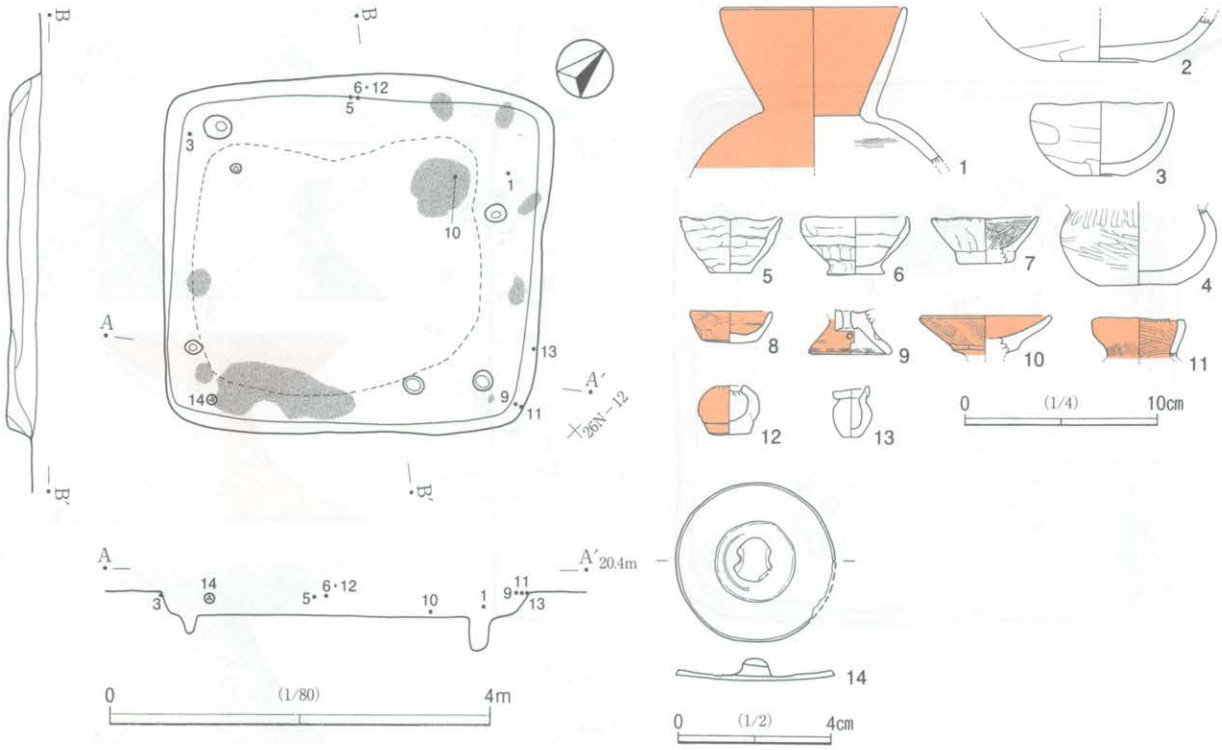
SI－007（第43図、図版6・28）

26N－01グリッド付近に位置する。規模は長軸5.5m、短軸4.0mでやや長方形を呈している。主軸方向はN－50.0°－Eを指し、床面積は12.5㎡を測る。確認面からの深さは0.3～0.4mである。床面はほぼ平坦で、硬化面は住居中央の大部分を占めている。壁溝は検出されない。柱穴は対角線上に不規則に3本検出されている。炉と思われる掘り込みは確認されなかった。焼土は、覆土中層と壁際の床面近くに検出されたが、床面・壁面とも火を受けた痕跡は認められない。これらの焼土は、住居廃絶後の投棄と思われる。覆土は自然堆積の様相を呈する。

遺物量は少なく、ほとんどが覆土中からの出土である。住居跡南西コーナー付近の覆土中から、鏡表面を外に向けた状態でほぼ垂直に青銅製の仿製鏡が出土している。ミニチュア土器が多く、特に、東コーナ



第42図　SI－006



第43図　SI－007

一部に集中する傾向がある。小形仿製鏡とともに、祭祀的な遺物と考えられる。焼土も含めて覆土中からの出土がほとんどであり、本住居内ではなく、屋外祭祀に伴う遺物群が一括して本住居に投棄されたものと考えられる。

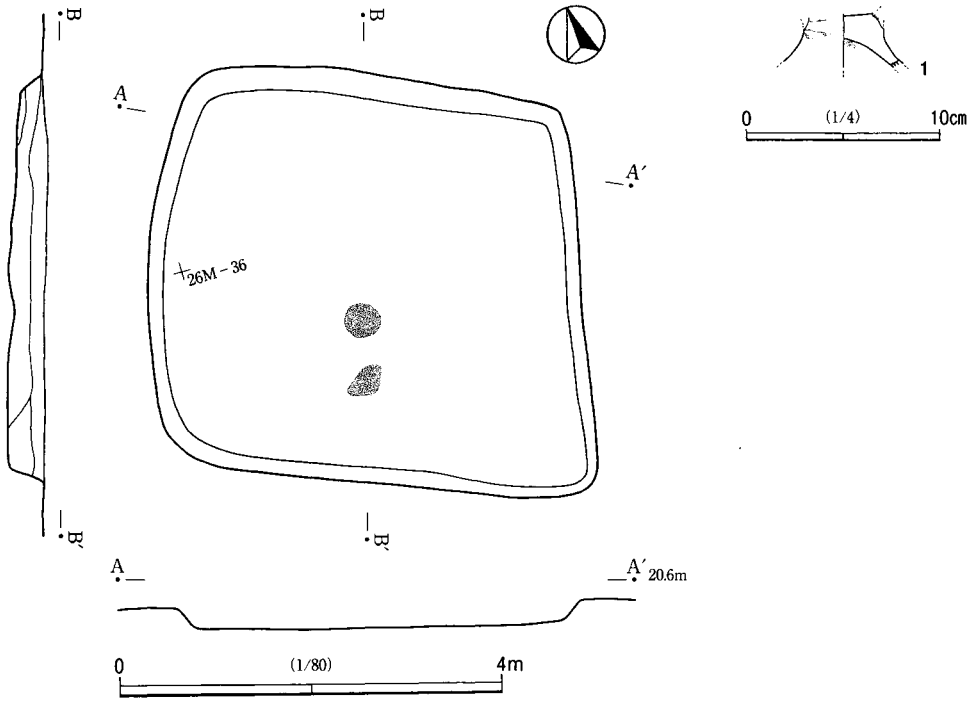
出土遺物

３は小形の椀である。若干の上げ底が形成され、体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる。１・２・４は壺である。４は口縁部を欠くが、くの字状に開く口縁を有するものと考えられる。外面には丁寧なミガキが施されている。３は磨滅が著しく調整は不明瞭であるが、口縁内部と外面には赤彩の痕跡が確認できる。５～14まではミニチュア土器である。５～８と10は作りが粗雑であるが、９の器台と11の壺の口縁部、12の無頸壺と13の壺は作りが精巧であり、粗雑な杯形のものと区別される。特に器台、壺の口縁、無頸壺には赤彩が施される特徴がある。14の鏡の法量は、面径4.1cm、反り0.8mm、紐径1.1cm、紐厚4.8mm、内区面厚0.9mm、縁厚1.4mmを測る。形式的には素文鏡に含まれるが、外区と内区の境には明瞭な段が形成され、いわゆる広縁のタイプと思われる。内区には、部分的に圏線を示すような高まりがみられる。

SI－008（第44図、図版６）

26M－47グリッド付近に位置する。規模は長軸4.5m、短軸4.3mでほぼ正方形を呈している。主軸方向はN－64.0°－Wを指し、床面積は15.9㎡を測る。木の根による撹乱が激しく壁面、床面とも明確には捉えられなかった。住居に伴う柱穴・炉・壁溝等の施設は検出できなかった。住居中央部の覆土中に部分的に焼土が厚く遺存している。覆土中にロームブロックを多く含み、人為的な埋め戻しの可能性がある。

遺物の出土は少なく、実測できたのは１点のみである。



第44図　SI－008

出土遺物

1は器台の台部片である。器受け部との接合面に、接着力を高めるために施したハケ目状の擦痕が確認できる。

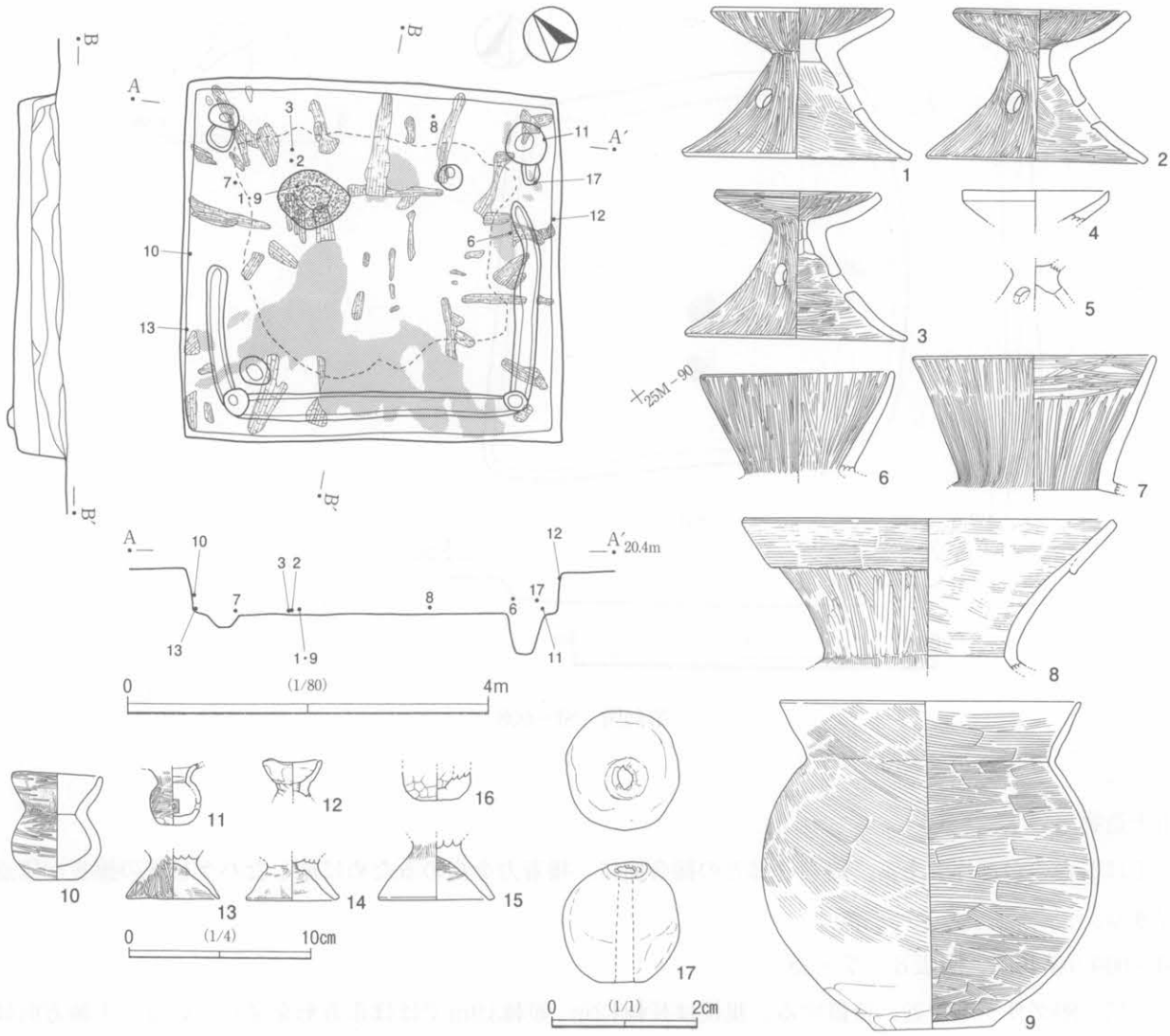
SI－009（第45図、図版6・7・28）

25M－89グリッド付近に位置する。規模は長軸4.2m、短軸3.9mでほぼ正方形を呈している。主軸方向はN－48.0°－Wを指し、床面積は15.0㎡を測る。確認面からの深さ0.5～0.6mと比較的深い。床面はほぼ平坦で、硬化面は柱穴間に全体に広がっている。壁溝は検出されなかったが、壁に沿ってコの字状に幅0.2～0.3m、深さ0.1mほどの溝が確認された。拡張住居を示すものと思われる。柱穴は対角線上に4本配置される。深さは0.2m程度と浅いが、その配置から柱穴と判断した。北コーナー近くに貯蔵穴と思われるピットが検出された。長軸0.7m、短軸0.4mの楕円形を呈し、深さは0.5m程である。炉は北側に偏って確認された。長軸0.80m、短軸0.6mの不整な楕円形を呈し、深さ0.2mの皿状の掘り込みを呈する。覆土下層から多量の炭化材・炭化物が検出された。また、焼土はこれらの炭化材を覆うように堆積している。炭化材は中央に向けて放射状に遺存しており、垂木と思われる。また、北側には壁に平行にのびる炭化材があり、梁と考えられる。住居南西側には炭化材上に茅材の炭化物が広範囲に広がっている。茅も中央に向かって遺存しており、屋根を葺いたものと思われる。全体に屋根材が良好に認められる。覆土中にローム粒・ロームブロックを多く含み、人為的な埋め戻しの様相が伺える。

遺物はほとんど床面直上からの出土である。器台は炉の北側に集中し、ミニチュア・手捏ね土器は壁沿いに散在している。

出土遺物

1～5は器台である。1～3は完形または完形に近い遺存である。小さく浅い器受け部で中空のタイプ



第45図　SI－009

である。台部はハの字状に大きく開き、上位に３か所の透孔が穿たれている。２・３の口唇部は平坦に面取りされる特徴を有している。調整は３点とも同様でハケ調整ののち丁寧なミガキが施されている。６・７はいわゆる坩の口縁部である。胴部への移行部で欠損している。２点とも内外面丁寧なミガキが施されている。８は壺の口縁である。折り返し口縁で粗いハケ調整痕が全面に施されている。９は小形の甕である。胴部中位に最大径を有する球形の胴部である。口縁部はくの字状に直線的に屈曲する。内外面全面に丁寧にハケ調整が施されている。10～15はミニチュア土器である。10･11は壺である。10は胴部が算盤玉状の形状で、口縁部はくの字状に屈曲して外方向に伸びる。口唇部で若干摘み上げられている。11は口縁部がくの字状に開き、端部で水平方向に稜を有して屈曲するところで欠損している。胴部の下位には小孔が穿たれている。焼成前のものである。きわめて小さいにもかかわらず、調整は非常に丁寧で、ハケ調整の後ナデが施されている。12～15は器台である。12は器受け部で、手捏ねに近いつくりである。13～15は台部でハの字状に直線的に開く。ハケ調整ののちナデまたはミガキが施されている。16は手捏ね土器で、粗雑なつくりである。17は土玉である。

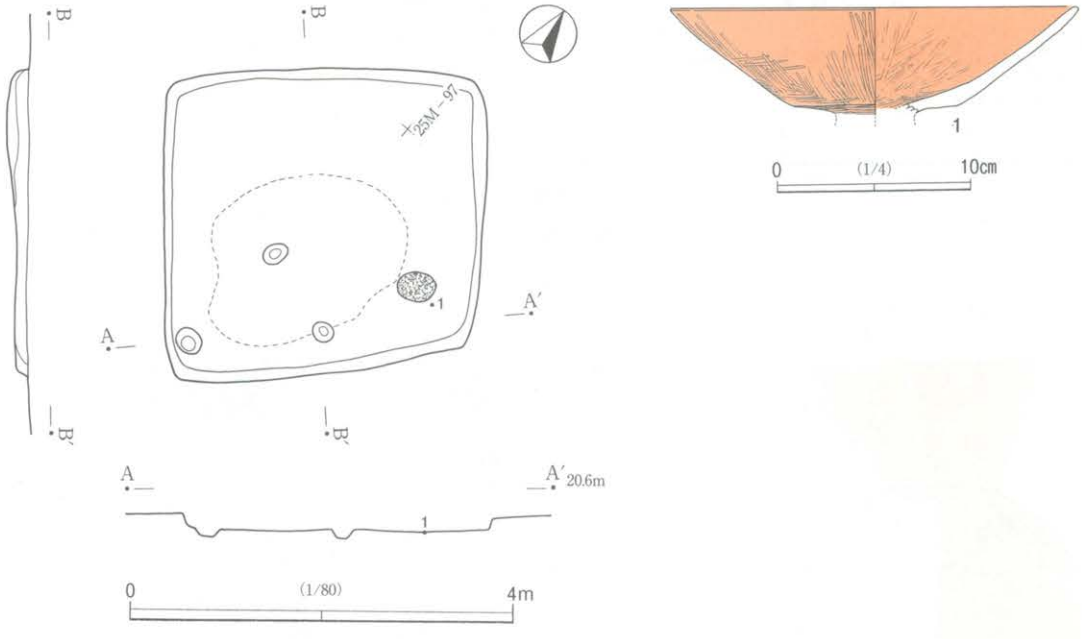
SI－010（第46図、図版７）

25M－96グリッド付近に位置する。規模は長軸3.3m、短軸3.2mを測り、小形の略正方形を呈している。主軸方向はN－54.0°－Eを指し、床面積は9.0㎡を測る。確認面からの深さは0.1～0.2mと浅い。床面は全体に凹凸がみられるが、硬化面が住居跡南側で確認できた。壁溝・柱穴は検出されなかった。炉は東コーナー近くに偏って位置しているが、掘り込みはほとんどない。長径0.4m、短径0.3mの楕円形を呈する。

遺物は少なく、１の高杯が炉に接して出土したのみである。

出土遺物

１は高杯の杯部である。小さな底部から体部は直線的に外上方に開く。体部下端に明瞭な稜線が認められ、内外面ともにミガキが施されている。



第46図　SI－010

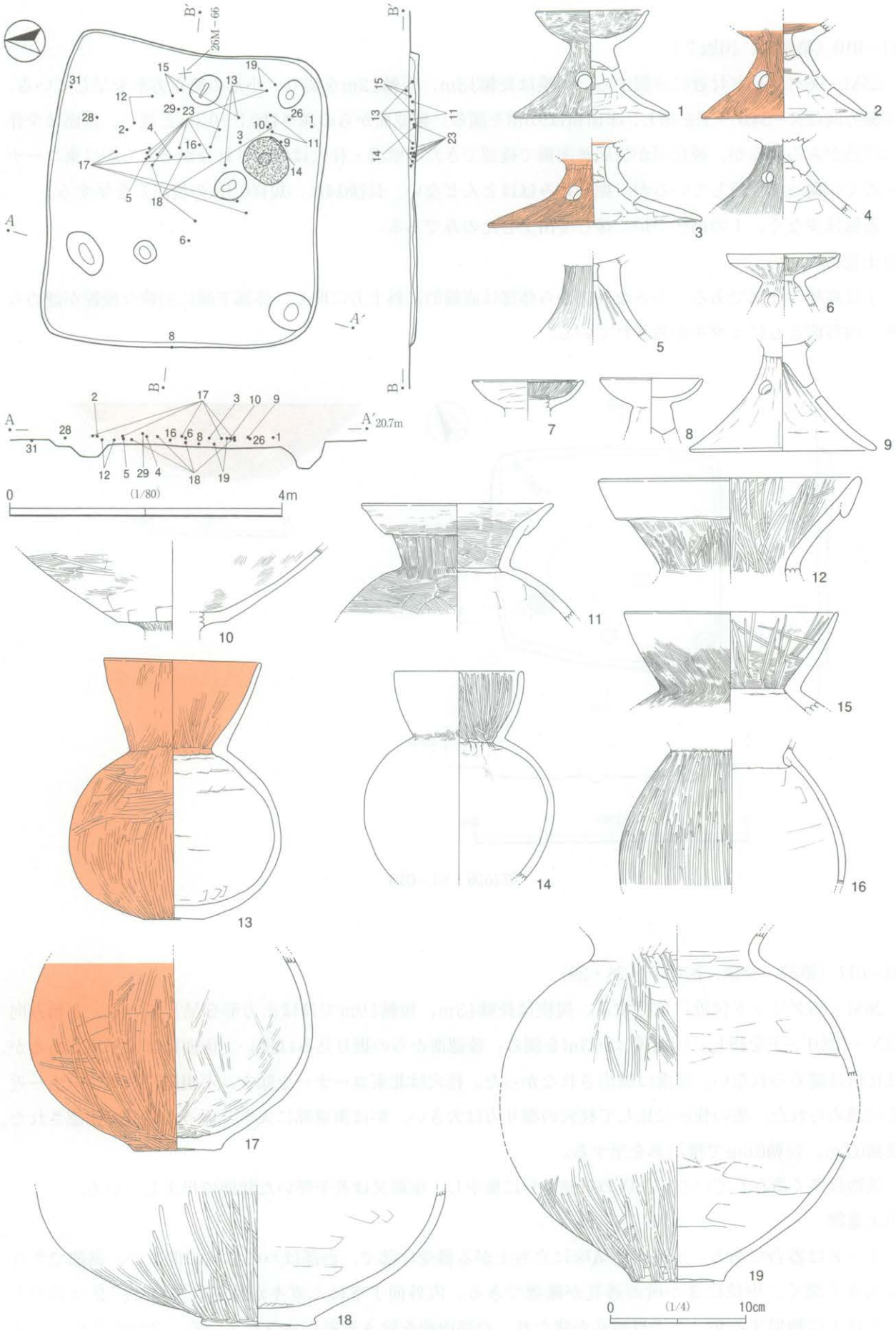
SI－011（第47・48図、図版７・28・29）

26M－65グリッド付近に位置する。規模は長軸4.3m、短軸4.0mでほぼ正方形を呈している。主軸方向はN－108.0°－Eを指し、床面積は16.3㎡を測る。確認面からの掘り込みは浅い。床面はほぼ平坦であるが、硬化面は認められない。壁溝は検出されなかった。柱穴は北東コーナーを除き、不規則に３本コーナー近くに認められた。他の住居に比して柱穴の掘り方は大きい。炉は南東部に大きく偏った位置で確認された。長軸0.7m、短軸0.6mで楕円形を呈する。

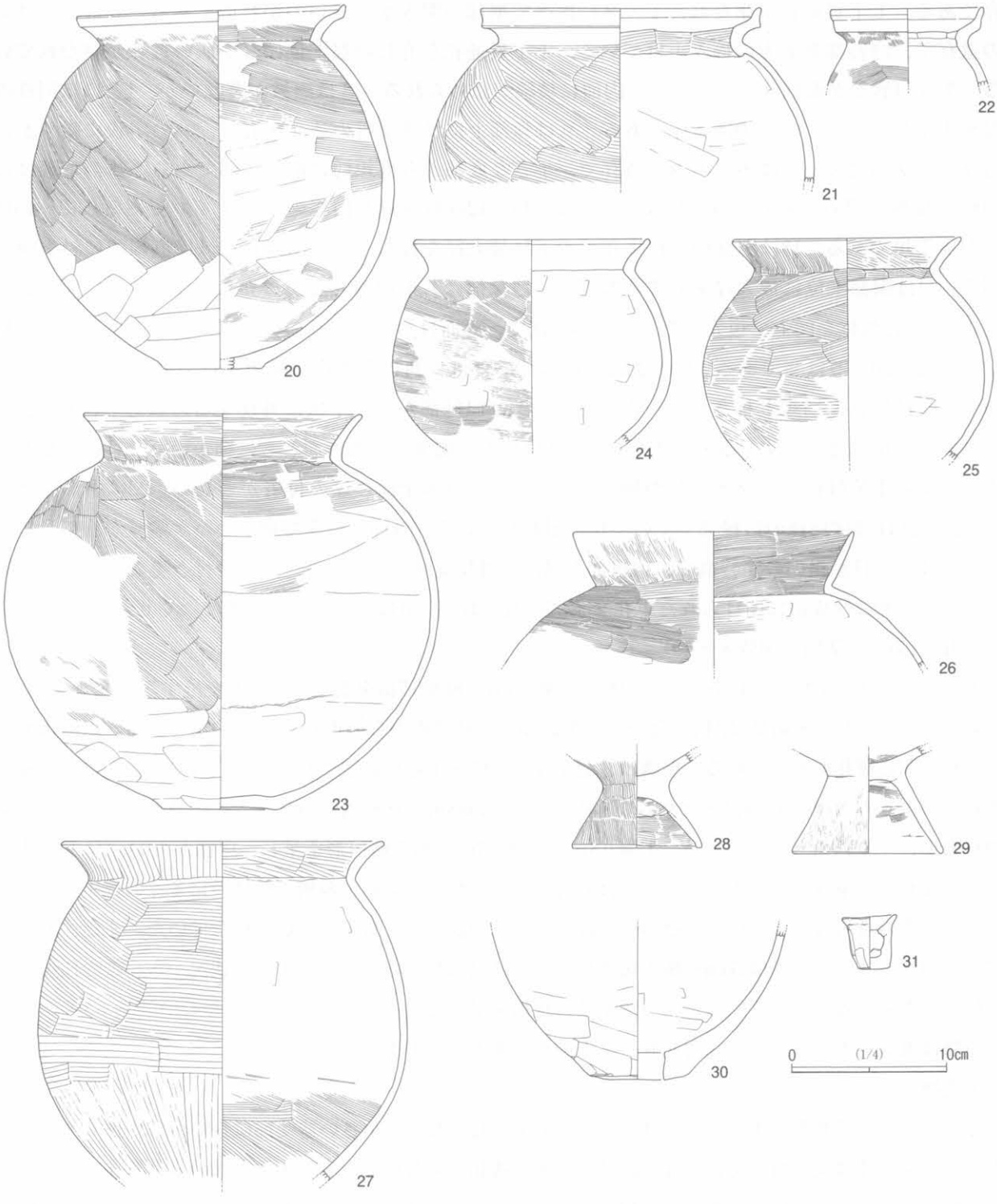
遺物は多く遺存していた。住居の東側半分に集中し、床面又は若干浮いた状態で出土している。

出土遺物

１～８は器台である。１は内湾気味に立ち上がる器受け部で、台部はハの字状に開くが、裾部でさらに大きく開く。中位に３か所の透孔が確認できる。内外面丁寧にミガキが施されている。２は器形としては１に類似するが、上下貫通孔が穿たれ、台部内面を除き赤彩が施されている。３は台部のみの遺



第47図　SI－011（1）



第48図　SI－011（2）

存である。上下貫通孔が穿たれ、１・２に比べて裾部の開きが大きいのが特徴である。６は器受け部の遺存で、口唇部を上方に摘み上げている。上下貫通孔を有し台部上位に３か所の透孔が穿たれている。７は口唇部が面取りされており、内面に稜線が認められる。８は磨滅が著しいが、1とほぼ同様の器形を呈している。９・10は高杯である。９は脚部上位に３か所の透孔を有し、ハの字状に緩やかに外反しながら開く。10は杯部のみの遺存で、小さな底部から直線的に開く体部である。体部下端には明確な稜線が認められる。11～19は壺である。11・12は折り返し口縁の付くタイプである。13～19はいわゆる坩である。13は胴部の中位よりやや下に最大径を持ち、口縁部は長くほぼ直線的に外方向に開く。14は胴部上位に最大径を有する器形で、口縁部は若干内湾しながら立ち上がる。19は同一個体と思われる2個体を図上で復元した。球形の胴部で、外面はヘラケズリの後丁寧に縦方向にミガキを施している。20～27は甕である。20～22は、口唇部がほぼ直角に上方向に摘み上げられる器形で、いわゆる「受け口状」口縁と称される一群である。20は口縁部がくの字状に外反するのに対し、21・22は「コ」の字状に近く外反するタイプである。20は球形の胴部で、内外面ともに細かいハケ目の調整が施され、胴部下位は後にヘラケズリが加えられている。外面全面に煤の付着が著しい。22は小形品となる。23～26はほぼ同様の口縁部でくの字状に屈曲している。外面には全て細かいハケ調整が施されている。27はハケ目が粗いのが特徴で、口縁部の屈曲も外反気味である。28・29は台付き甕の台部のみの遺存である。30は焼成前に開けられた単孔タイプの甑である。31はミニチュア土器でつくりが丁寧である。

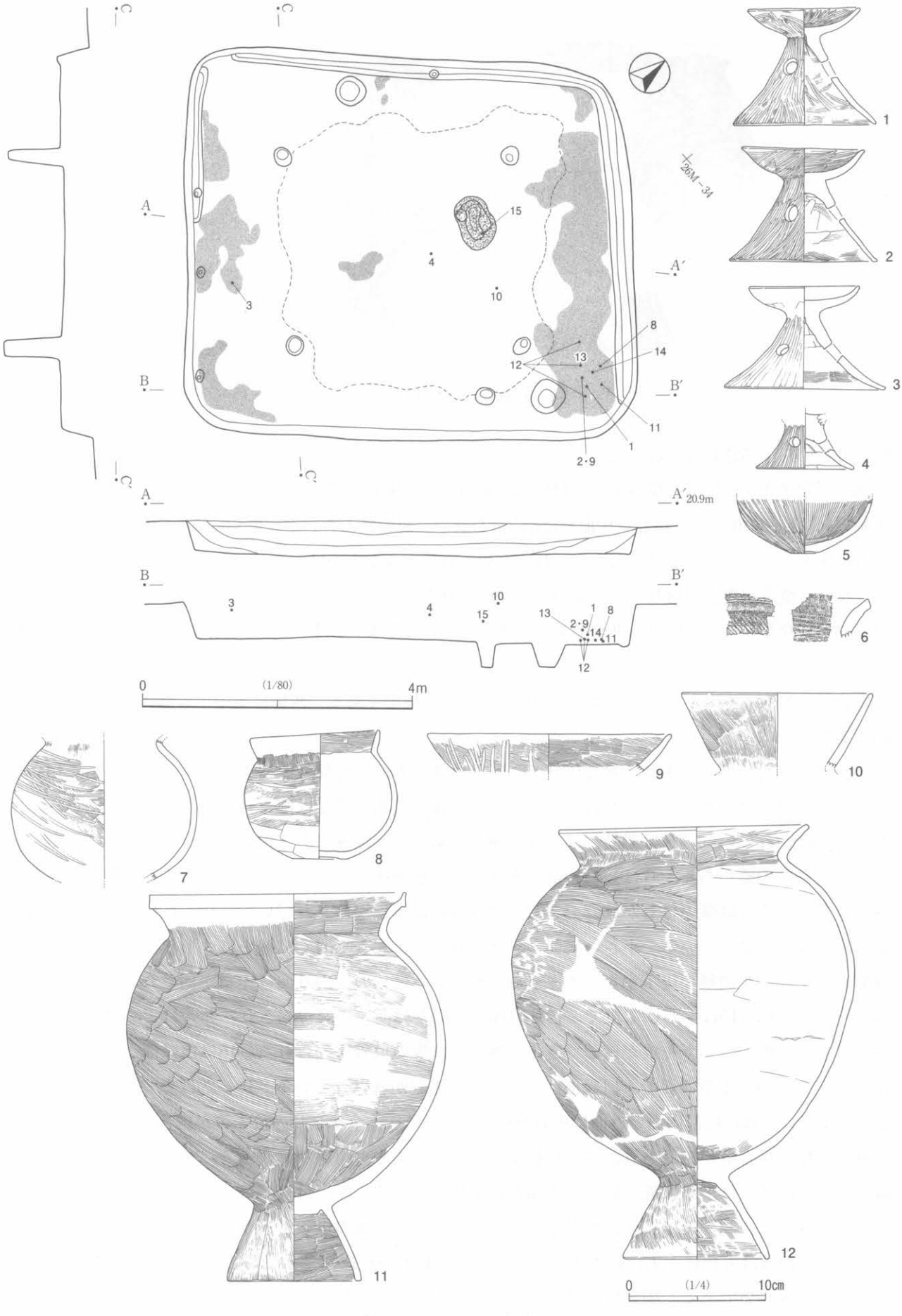
SI－012（第49・50図、図版８・29）

26M－43グリッド付近に位置する。規模は長軸6.6m、短軸5.7mを測り、長方形を呈する。主軸方向はN－41.0°－Eを指し、床面積は34.7㎡とやや大形になる。確認面からの掘り込みは0.4mである。床面は平坦で、柱穴間に硬化面がみられる。壁溝は、北壁及び西壁を中心に確認される。柱穴は対角線上に４本検出された。掘り方の径が0.3mほどと小さいものの、深さが0.8mと比較的深いピットも確認された。炉は北東の柱穴間、やや西寄りに位置する。長軸0.8m、短軸0.5mを測る楕円形を呈し、床面から0.1mほど皿状に掘り込まれる。東コーナー近くのピットは貯蔵穴と思われる。東側と西側の壁付近に多くの焼土が検出された。焼土の堆積は３cm前後で、その下にはローム粒の混じった暗褐色土が堆積していた。また、焼土中には、幅２～３cm、長さは５cm程度の炭化材が僅かに混入している。このような状況から、この住居は焼失住居であると考えられる。覆土は自然堆積の様相を呈する。

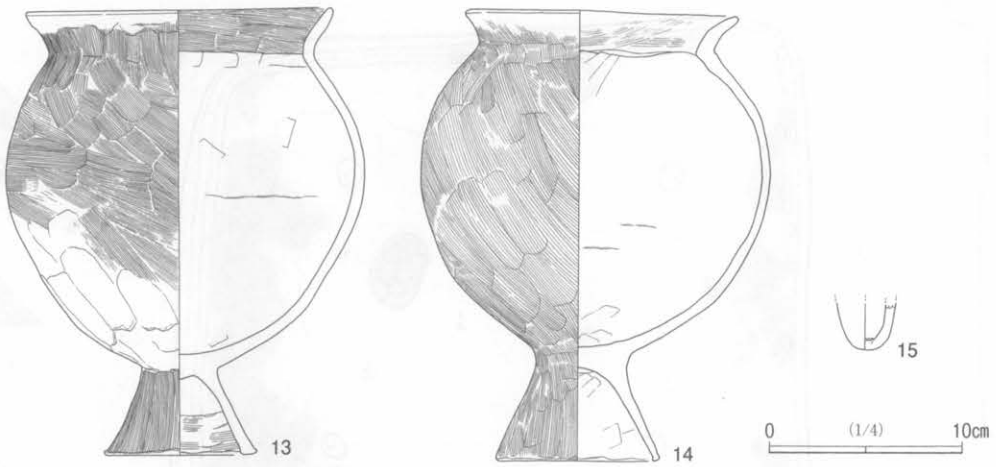
遺物は東コーナー付近の貯蔵穴北側、焼土中から集中して出土している。

出土遺物

１～４は器台である。１～３はほぼ同様の器形を呈しており、小さい器受部に長い台部が付くタイプである。器受け部は浅く皿状で、台部上位に３か所の透孔が穿たれている。４は台部のみの遺存である。高さは低くハの字状に外反しながら開く裾部である。５・７・９・10は壺である。５は底部から胴部下位の遺存で球形の胴部になると思われる。内外面ミガキが丁寧に施されている。６は口縁部片であるが、叩きが確認できる。８は小型の甕である。内外面ともに器面の荒れが著しい。ハケ調整ののち、胴部外面下位にはヘラケズリが施されている。11～14は台付き甕である。11は内外面ともに細かいハケ目が明確に残る。口唇部がほぼ直角に摘み上げられており、いわゆる「受け口状」口縁の形態を示す。12～14は口縁部がくの字に屈曲し、胴部内面を除きハケ調整が施されている。外面に煤の付着が認められる。胴部の形状は、13と14はほぼ球形であり、12は最大径を胴部上位に有している。15はミニチュア土器と思われる。



第49図　SI－012（1）



第50図　SI－012（2）

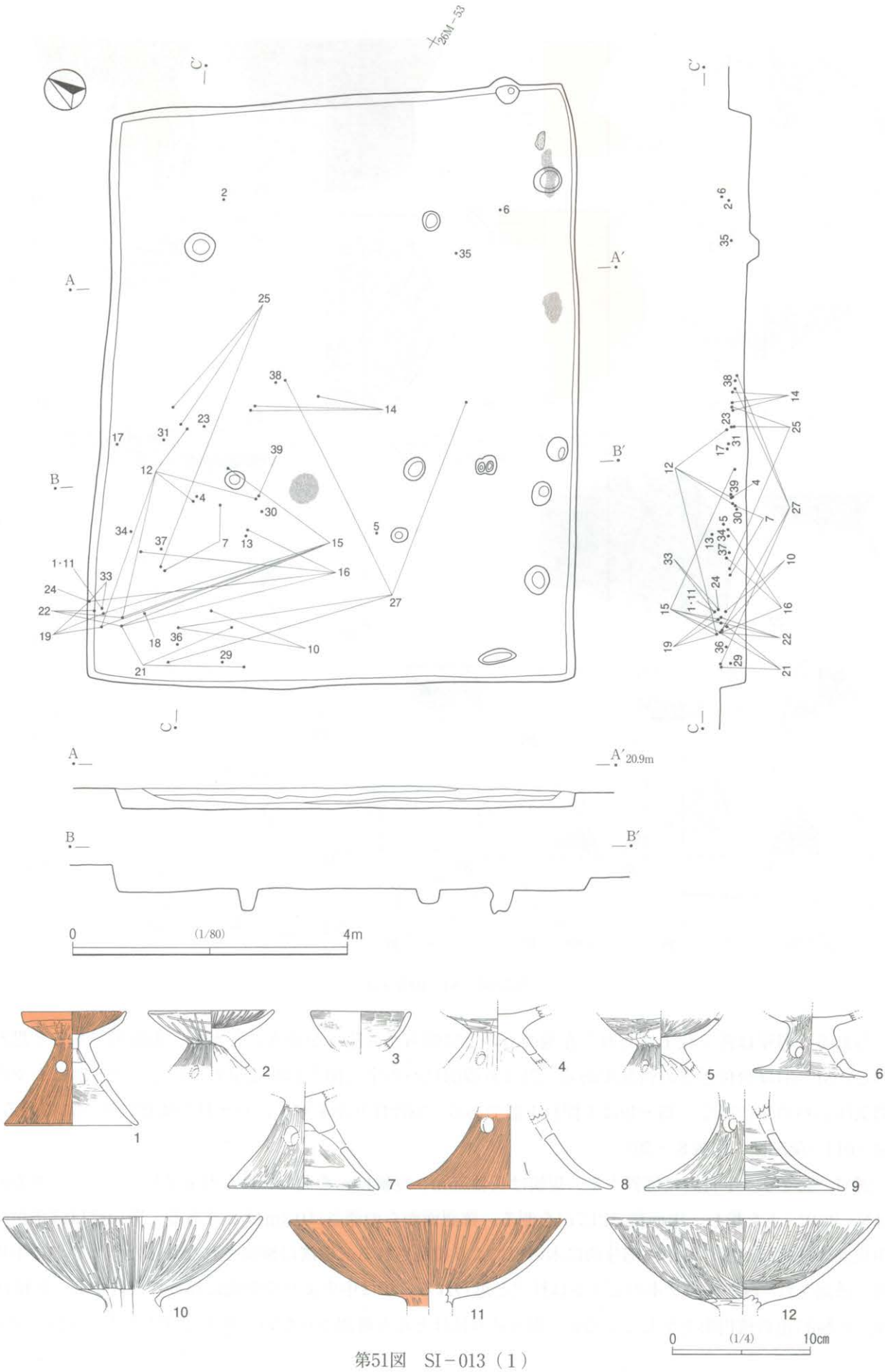
SI－013（第51・52図、図版８・29・30）

26M－52グリッド付近に位置する。規模は長軸8.6m、短軸6.9mを測り、大形の長方形状を呈している。主軸方向はN－60.0°－Eを指し、床面積は64.3㎡を測る。規模は大きいが、壁・床面とも明確ではない。ピットは床面上にいくつか確認されたが、柱穴と思われるようなものはみられなかった。炉及び壁溝も認められない。焼土が覆土上層及び中層部分的に検出されたが、いずれも希薄である。覆土中層から下層にかけてローム粒及びロームブロックが多量に含まれていることより、本住居は人為的に埋め戻された可能性が高い。

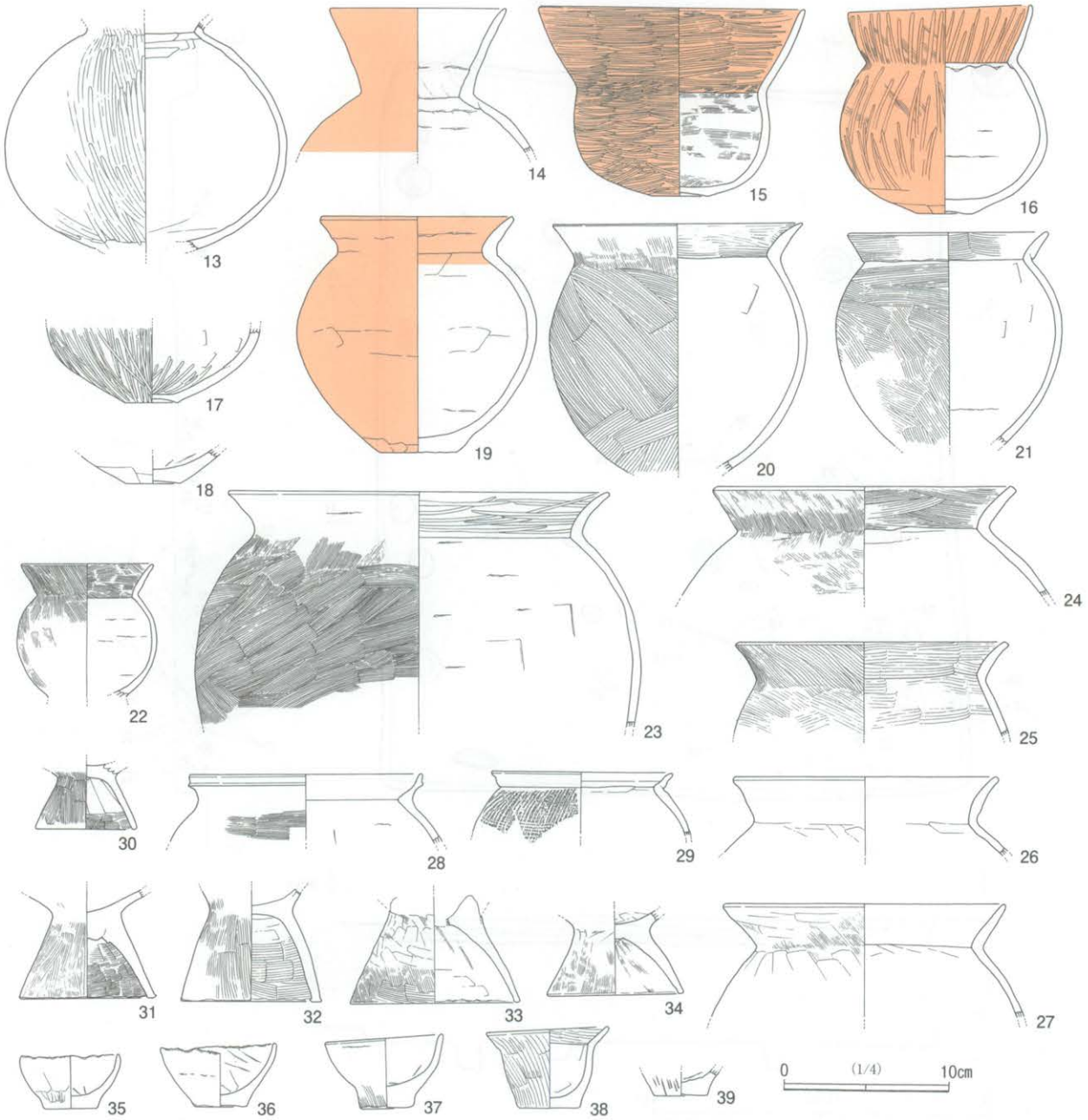
遺物は比較的多く出土するが、ほとんど覆土中からの検出である。西側に集中する傾向がある。

出土遺物

１～６は器台である。１は丁寧な作りで、器受け部内外面と台部外面に赤彩が施されている。口唇部が上方に摘み上げられているのが特徴である。２は浅い皿状の器受け部と台部上位の遺存である。器面が丁寧に磨かれている。３は器受け部のみの遺存であるが、深みのある椀状の形を呈している。他とは違い手捏ね風の感がある。６は短い台部で裾部で強く屈曲する。７～12は高杯である。７～９は脚部のみの遺存で、７には煤の付着が確認できる。８は外面に赤彩が施されている。10～12は杯部のみの遺存で同様の器形を呈している。小さい底部からほぼ直線的に大きく開く口縁を持つ形状で、口縁部下端に稜を有する。ハケ調整の後丁寧なミガキが施されている。12のみ内外面に赤彩が施されている。13～18は壺である。13～15はいわゆる坩で、15は口縁部内面と外面に赤彩が施され、非常に丁寧にミガキが施されており、細かいミガキ痕が確認できる。外面には煤の付着がみられる。16は口縁部が僅かに内湾しながら立ち上がる小型の壺で、口縁部内面と外面に赤彩が施されている。19～29は甕である。19～22は小型の甕で、19は口縁部内面と外面に赤彩が施されている。ヘラケズリの後ナデが施されているものの、内外面に粘土接合痕が確認され、他と比較すると、作りにやや粗雑な感がある。20は大きく外反する口縁を持ち、胴部には丁寧に施されたハケ調整痕が観察できる。煤の付着が著しい。21はくの字に屈曲する短い口縁部で、胴部との接合部が明確に残されている。外面の煤の付着が著しい。28は口縁部片である。口唇部がほぼ直角に上方に摘み上げられている。胎土が在地の甕とは異なり、外来系と考えられる。29は小型のＳ字甕である。胴部外面は粗いハケ目が丁寧に施されている。縦ハケ後部分的に横ハケが加



第51図　SI－013（1）

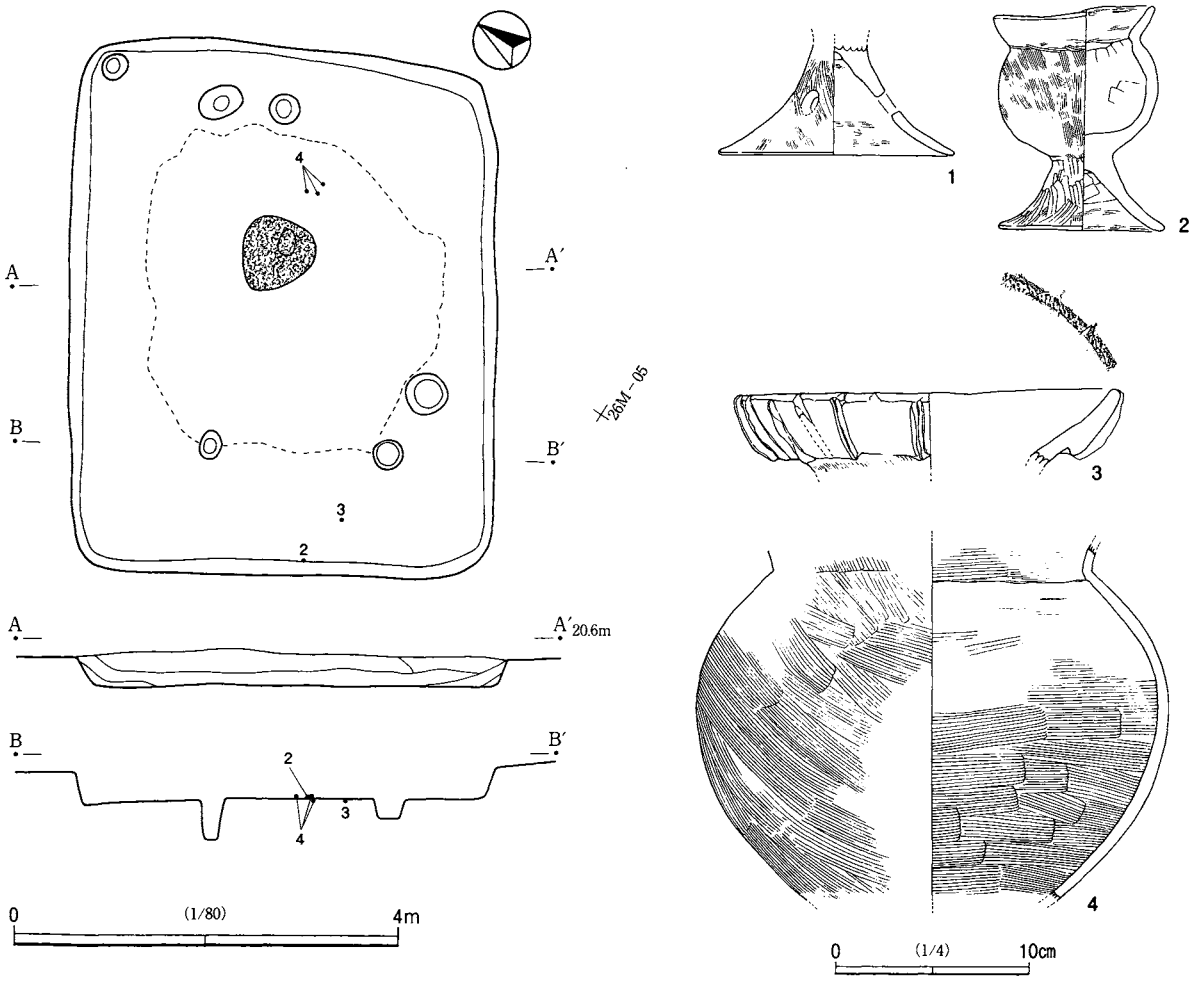


第52図　SI－013（2）

えられる。器壁は薄く仕上げられ、在地のものとは明らかに胎土が違うことから、東海系であると思われる。31～34は台付き甕の台部である。31は直線的にハの字に開く形状を呈している。32～34はやや内湾気味にハの字に開く。35～39は手捏ね土器である。38は作りが丁寧で、ハケ目が明確に残されている。

SI－014（第53図、図版８・30）

25M－94グリッド付近に位置する。規模は長軸5.5m、短軸4.5mを測り、長方形を呈している。主軸方向はN－30.0°－Eを指し、床面積は21.7㎡を測る。確認面からの深さは0.3mほどである。床面はほぼ平坦で、中央部に硬化面が広がるが、部分的に木の根により撹乱される。壁溝は検出されなかった。ピットは不規則に確認され、西壁側の２本のピットは柱穴と思われる。炉は中央よりやや北に偏って位置する。長軸1.0m、短軸0.7mの楕円形を呈しているが、掘り込みはほとんど確認されない。覆土は自然堆積の様相を呈す



第53図　SI－014

る。

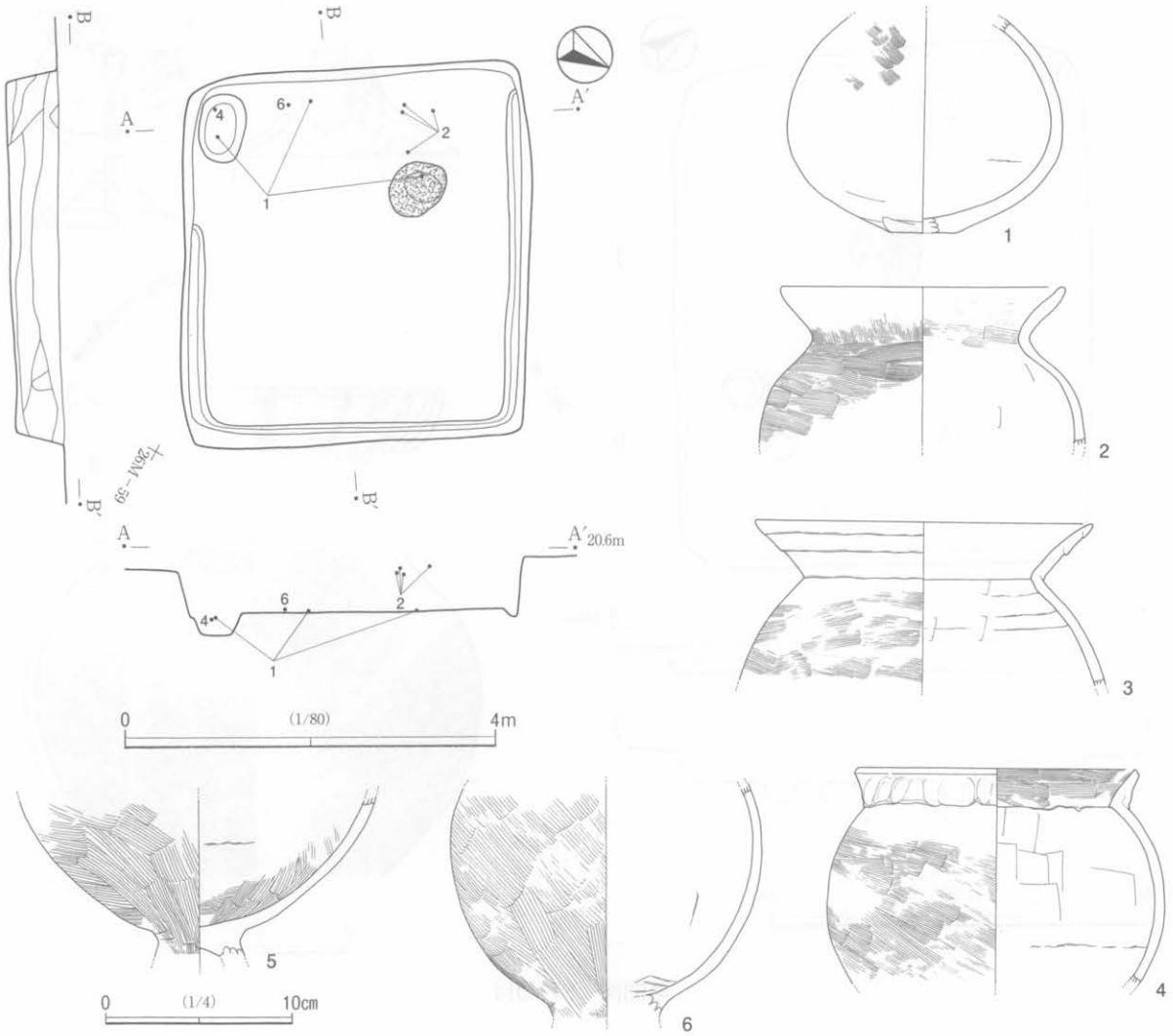
遺物の出土は少ないが、図示された遺物は床面からの出土である。

出土遺物

1は器台である。台部上位には3か所の透孔が穿たれている。裾部は大きくハの字状に開く形状を呈している。3は壺の口縁部片である。複合口縁で、3本一単位の棒状浮文が認められる。口唇部には縄文が施文される。4は甕の胴部のみの遺存である。内外面ハケ調整が丁寧に施されている。外面には煤の付着が著しい。2は完形の小型の台付き甕である。胴部にはハケ目が残され、台部ハケ調整の後に丁寧に縦方向のミガキが施されている。

SI－015（第54図、図版9・30）

26M－48グリッド付近に位置する。規模は、長軸4.0m、短軸3.7mでほぼ正方形を呈している。主軸方向はN－120.0°－Wを指し、床面積は13.5㎡を測る。確認面からの深さは0.6mほどと比較的深い。床面は全面的に硬く締まっているが、硬化面は確認されなかった。壁溝は、西側部分を除きコの字状に巡るが、柱穴と思われる掘り込みはなかった。炉は中央よりやや北西コーナーに偏って位置する。長軸0.7m、短軸0.6mの楕円形を呈し、深さ0.1mほどを測る皿状の掘り込みである。南西コーナーに接して掘り込まれたピットは貯蔵穴と思われる。長軸0.8m、短軸0.5m、深さ0.2mの隅丸長方形プランを呈する。覆土中にロームブ



第54図　SI－015

ロックを多く含んでおり、人為的な埋め戻しの可能性がある。

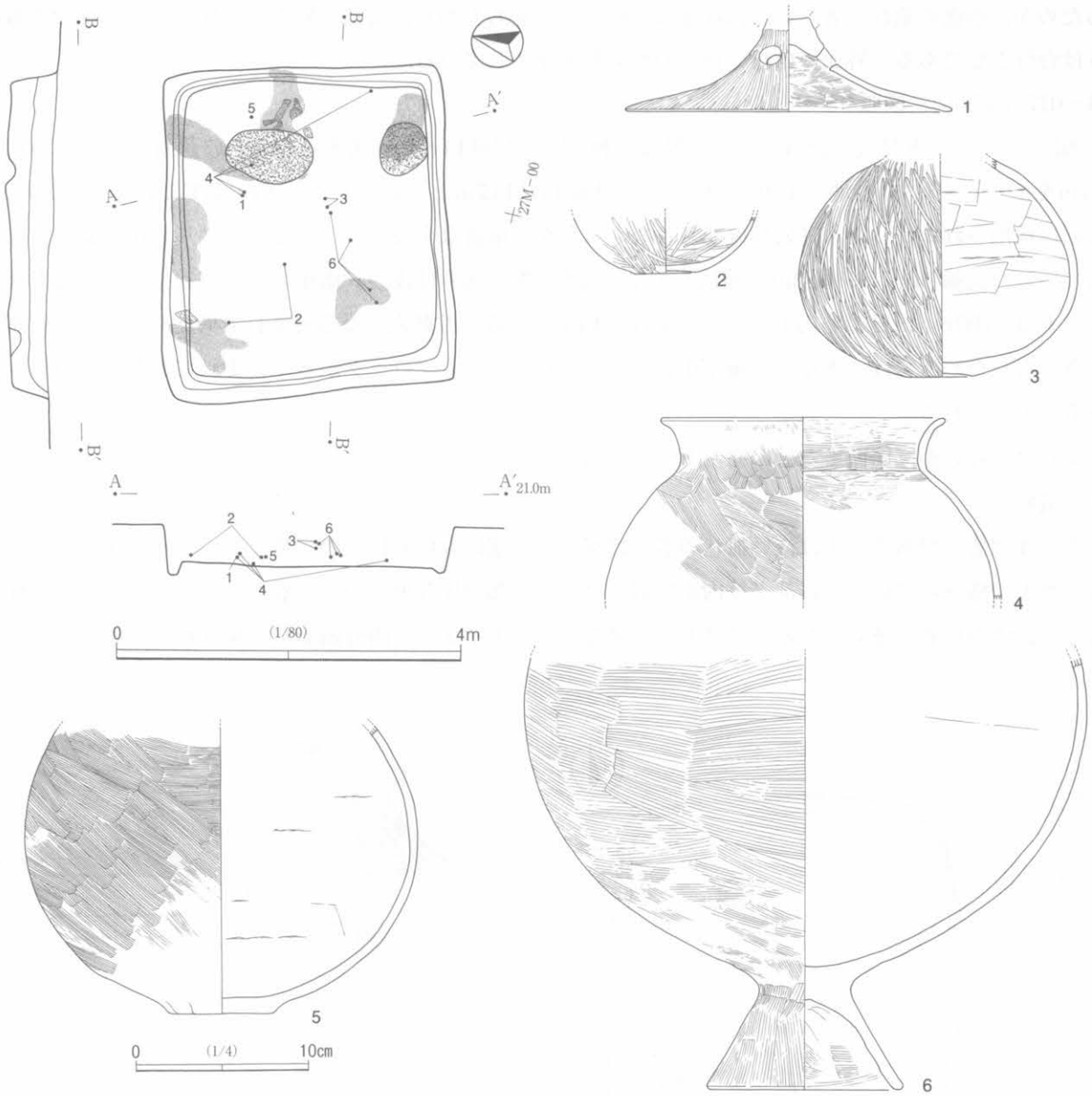
遺物の出土は多くないが、炉及び貯蔵穴の付近から検出された。

出土遺物

１は壺である。口縁部を欠くが、胴部中位よりやや下に最大径を有する球形の胴部である。ハケ調整ののちナデられている。２～４は甕である。２はくの字状に屈曲する口縁部で口唇部が肥厚している。胴部には細かい目のハケ調整が施されている。外面には煤の付着が著しい。３は長めのくの字に屈曲する口縁部で、接合痕を帯状に残している。４は口縁部の接合痕が明瞭で、接合面を指で押さえている押圧痕が明確にみられる。５・６は台付き甕の下半部である。いずれも球形胴を呈し、細かなハケ目がみられる。

SI－016（第55図、図版９・30）

26L－99グリッド付近に位置する。規模は長軸3.8m、短軸3.3mの長方形を呈し、確認面からの深さ0.5～0.6mを測る。主軸方向はN－76.0°－Eを指し、床面積は13.0㎡ときわめて小形である。ピットや硬化面は検出されなかったものの、壁溝は全周している。炉は２か所確認された。北東壁に近くやや北よりに１基、



第55図　SI－016

南壁際に１基である。北側は長軸1.0m、短軸0.6mの楕円形、南側は長軸0.7m、短軸0.5mでほぼ円形を呈しているが、掘り込みはほとんどない。北側から東側の壁沿いに焼土や炭化材がほぼ床面上から集中して検出されており、焼失家屋となる可能性が高い。覆土中にロームブロックを多く含み、人為的な埋め戻しと思われる。

遺物の出土は少なく、床面から覆土中にかけて散在している。

出土遺物

１は高杯である。裾部が大きく広がることが特徴である。台部上位に３か所、透孔が認められる。２・３は壺である。２は器肉が薄く堅緻である。３は胴部下位に最大径を有する球形の胴部で、外面は丁寧にミガキが施されている。４・５は甕である。４は炉の中または周辺からの出土で、二次的に火を受けてい

るためか、器面の荒れが著しい。口縁部は一度上方に立ち上がり、端部で外方向に伸びるのが特徴である。6は台付き甕である。外面には粗い目のハケ調整が施されている。

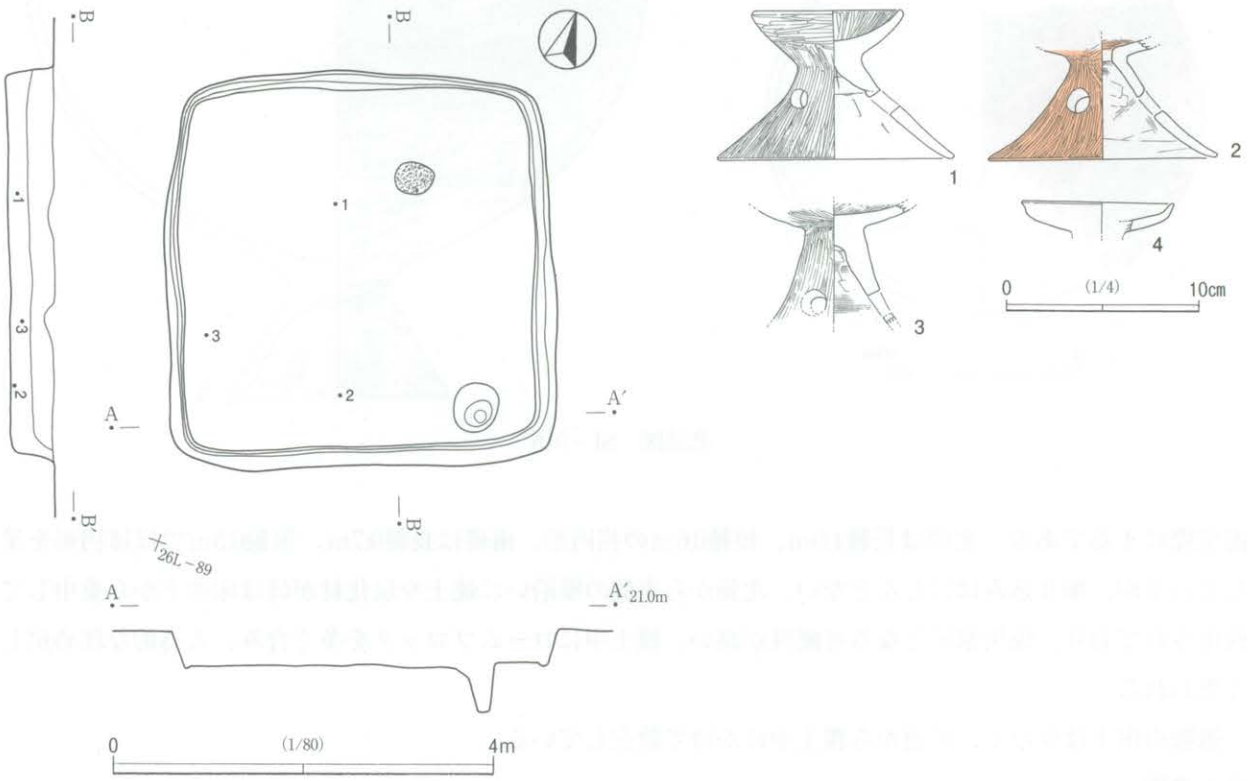
SI－017（第56図、図版9）

26L－79グリッド付近に位置する。規模は長軸4.2m、短軸4.1mの正方形を呈し、確認面からの深さ0.3～0.4mを測る。主軸方向はN－16.0°－Wを指し、床面積は13.7㎡と小形である。床面はほぼ平坦であるが、硬化面は検出されなかった。柱穴は確認されなかったが、壁溝は全周する。炉は中央より北東に偏って位置している。長軸0.4m、短軸0.3mの略円形を呈するが、掘り込みは浅い。南東コーナー近くに掘り込まれるピットは、径0.6mほどの略円形を呈し、深さは0.5mを測る。貯蔵穴となる可能性も考えられるが、底面が小さくなるため断定はできない。覆土中にはローム粒・ロームブロックが多く含まれており、埋め戻されたものと思われる。

遺物は少ないが、床面または床面直上からの出土である。

出土遺物

1～4は器台である。1は浅い皿状の器受け部で、台部は直線的にハの字状に開く。ハケ調整の後丁寧なミガキが施されている。台部上位内面に器受け部と台部の接合痕が明確に残されている。器面の荒れが著しく、煤の付着も認められる。2は上下貫通孔のあるタイプで、内外面赤彩が施されている。



第56図　SI－017

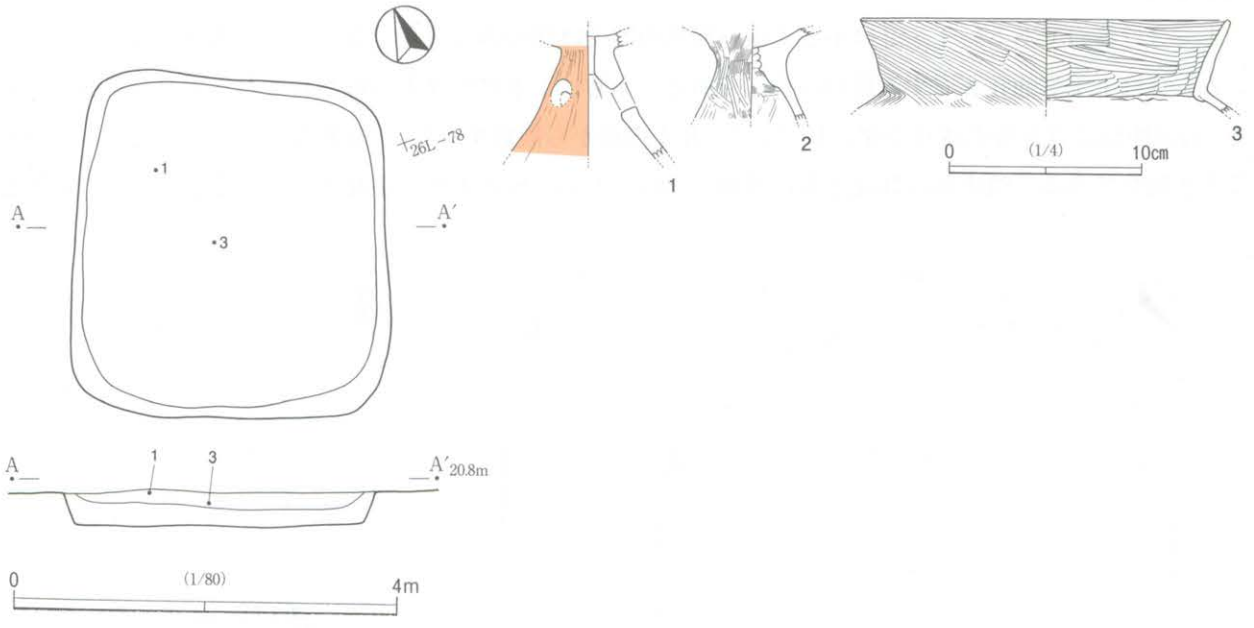
SI－018（第57図、図版10）

26L－77グリッド付近に位置する。規模は長軸3.5m、短軸3.3mのほぼ正方形を呈している。主軸方向はN－25.0°－Wを指し、床面積は9.4㎡ときわめて小形である。床面はほぼ平坦であるが、硬化面は認められない。壁溝・柱穴等の内部施設は検出されなかった。ローム土の混入状況から、本住居は埋め戻された可能性が高い。

遺物は少なく、覆土中からの出土である。

出土遺物

1は器台である。外面には赤彩が施されているが、残りは非常に悪い。脚部上位に3か所の透孔が認められる。2は台付き甕の底部から台部の遺存である。3は甕の口縁部片である。内外面丁寧なハケ調整痕が残されている。外面には煤の付着が確認できる。



第57図　SI－018

SI－019（第58図、図版10）

26L－75グリッド付近に位置し、北東壁で縄文時代の陥穴を切る。規模は長軸5.6m、短軸5.4mを測り、不整な隅丸方形状を呈している。主軸方向はN－57.0°－Wを指し、床面積は23.0㎡を測る。確認面からの深さは0.3m前後である。床面はほぼ平坦であるが、あまり締まりが認められない。ピットは、北コーナー付近に1基のみ検出したが、0.4mと深いことから、柱穴になる可能性もある。壁溝及び炉は確認されなかった。焼土及び炭化物が部分的に検出された。

遺物は少なく、図示した遺物はすべて覆土中からの出土である。

出土遺物

1・2は高杯の杯部である。1は深さのある椀形の形状を呈している。器面の荒れが著しいが、丁寧なミガキが施されていたという痕跡が確認できる。2は平らな底部を有し、ほぼ直線的に外方向に開く体部である。体部下端には明確な稜を形成している。3は器台の台部と思われる。やや外反しながらハの字に開く形状である。台部上位に3か所の透孔が穿たれている。4は高杯の脚部である。裾部が大きく開くタ

イプで内面には細かい目のハケ調整、外面には縦方向のミガキが丁寧に施されている。透孔は脚部上位に3か所認められる。5は甕の底部のみの遺存である。

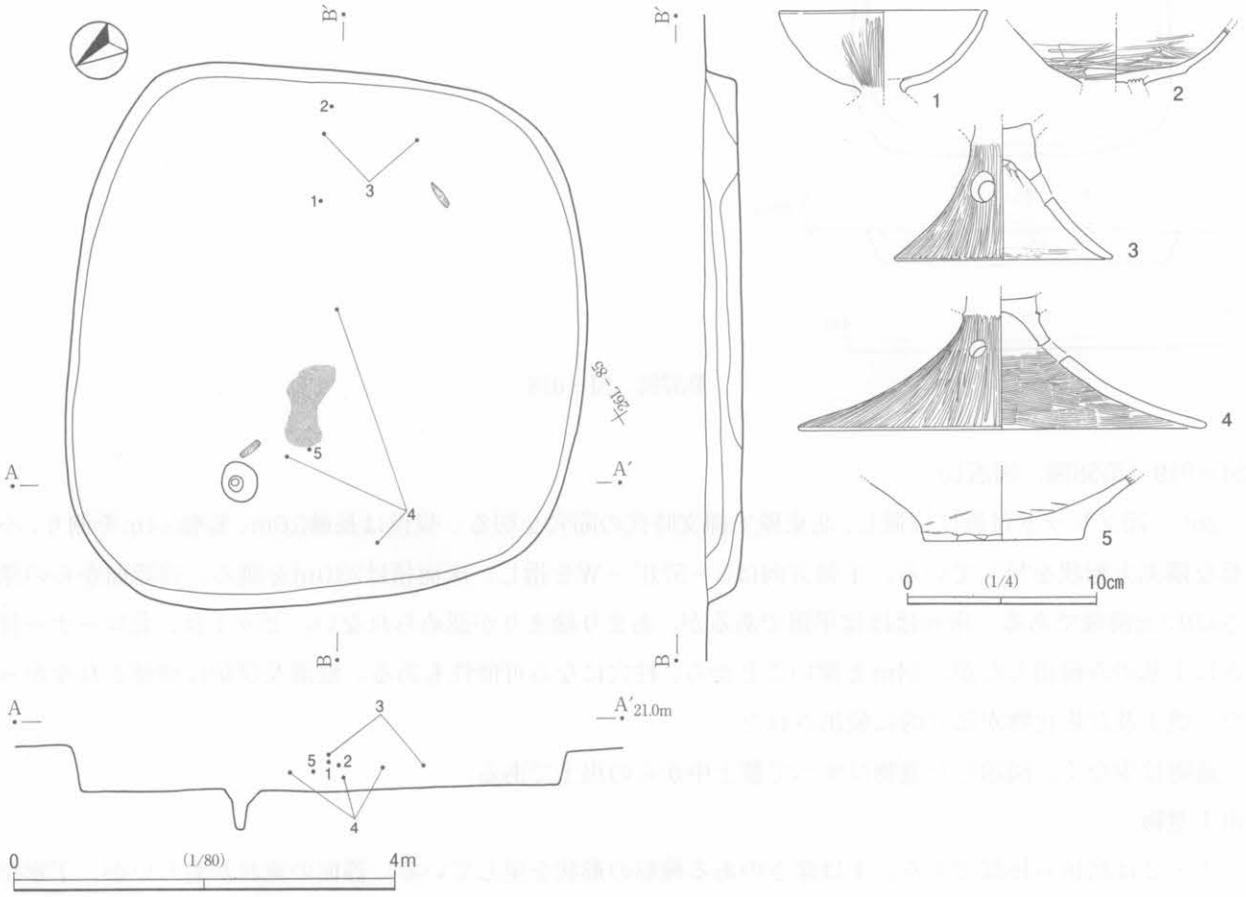
SI－020（第59・60図、図版10・30・31）

26L－48グリッド付近に位置する。規模は長軸4.4m、短軸4.1mを測り、ほぼ正方形を呈している。主軸方向はN－32.0°－Wを指し、床面積は14.2㎡を測る。確認面からの深さは、0.6～0.7mと比較的深い。床面はほぼ平坦であるが、硬化面は確認されなかった。ピットは東コーナー近くで2基が連結されたような状況で確認されたが、性格は不明である。他に柱穴と思われるピットは検出されなかった。炉は中央より北に偏って確認された。長軸0.9m、短軸0.6mの楕円形を呈しているが、掘り込みはほとんどない。覆土は自然堆積の様相を呈する。

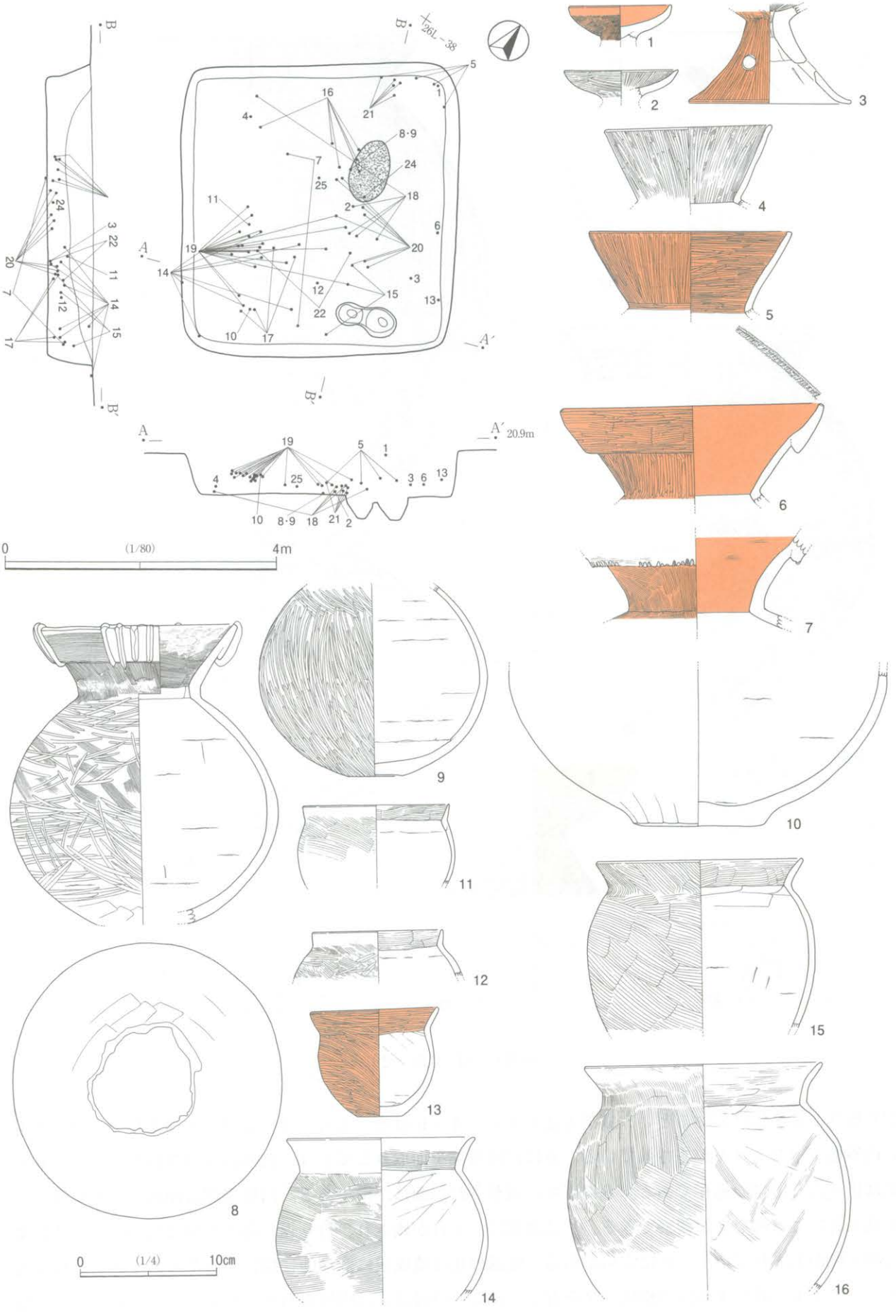
遺物は多く、床面直上から覆土中層にかけての出土である。

出土遺物

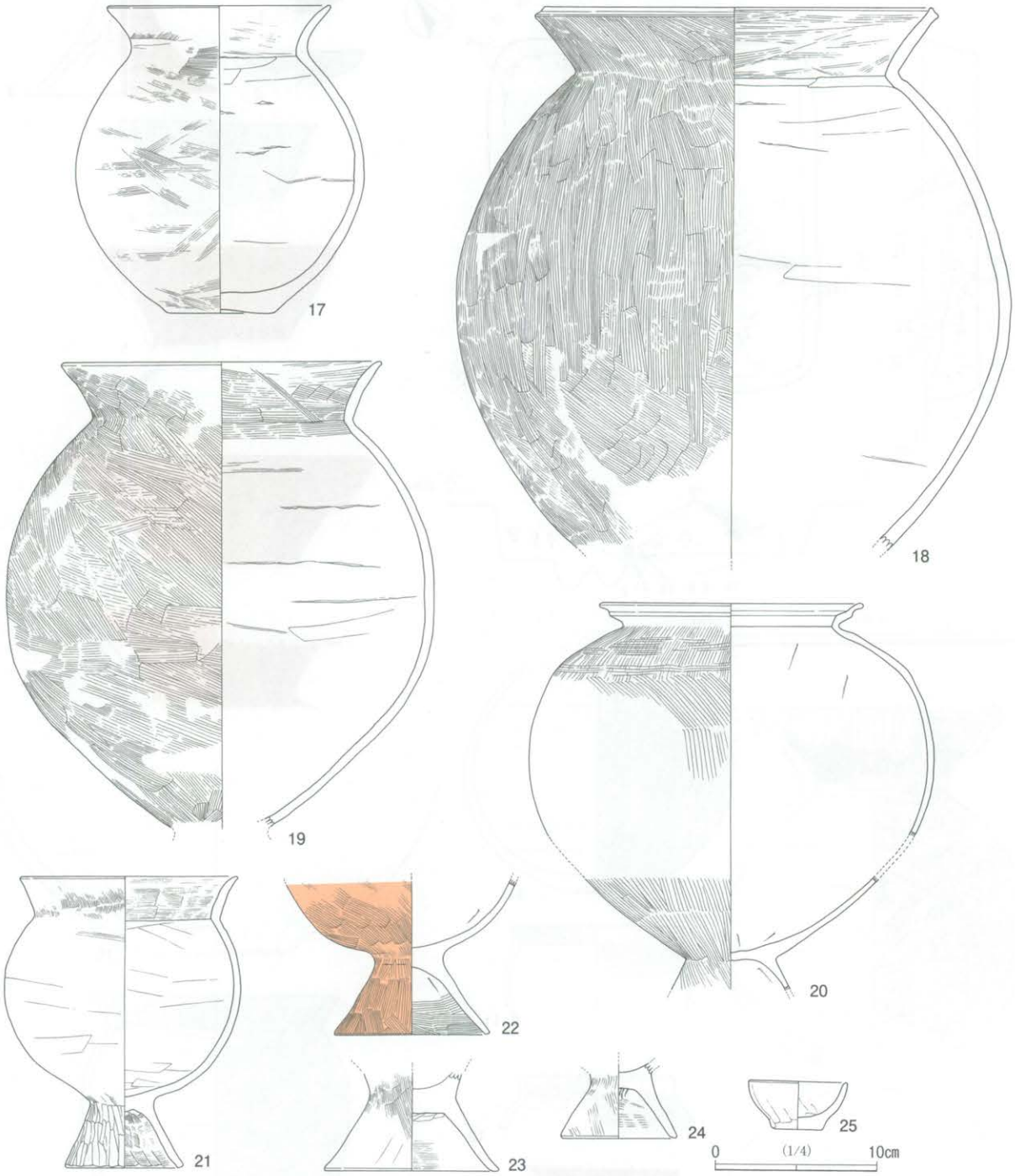
1～3は器台である。1・2は小さく浅い皿状の器受け部のみの遺存である。1は内外面赤彩を施している。3は上下貫通孔を有する器台の台部である。非常に丁寧にミガキが施されており平滑な器表面である。台部中位に3か所の透孔が穿たれている。孔を内面から観察すると、一般的な穿孔方法とは違っていることが観察できる。焼成前に3孔ともに外面から内面方向に棒状工具で穿孔されているが、後に内面側を



第58図　SI－019



第59図　SI－020（1）



第60図　SI－020（2）

削り取り、孔を広げているという成形方法である。4～10は壺である。4・5はいわゆる坩で、2点ともに内外面丁寧なミガキが施されている。6は口唇端部を面取りしており、内外面赤彩を施している。6・7は折り返し口縁の遺存である。6は丁寧に調整され器面は平滑である。口唇端部は面取りされた後、ハケ状工具による刺突文が観察できる。7は頸部にハケ目が残され、折り返し部の下端にはハケ状工具による押圧痕が刻まれている。8は完形である。底部の孔は焼成後に意図的に開けられたものである。折り返し口縁に4本一対で4単位の棒状浮文を有している。口縁部には内外面ハケ目が丁寧に施されている。胴

部はハケ調整の後、ナデを施しミガキで整えている。器面は大変平滑である。口縁部から胴部にかけて黒斑が確認できる。9は球形の胴部の遺存である。非常に丁寧なミガキが施されている。外面には赤彩が施されており、煤の付着も確認できる。11～18は甕である。11・12は口縁部が短く外傾する。13は丁寧なミガキが施されており、口縁部内面と外面に赤彩が施されている。15・16は胴部上位に最大径を有し、口縁部内面と外面に丁寧なハケ調整が施されている。外面に煤の付着が著しい。17は胴部中位に最大径を持ち、球形を呈している。18は強くくの字に屈曲する口縁で、口唇部は面取されて沈線が形成されている。外面にはハケ目が明確に残されている。19～24は台付き甕である。20は胴部上位に最大径を有したS字甕である。器肉は薄く仕上げられ、口縁の開きは大きい。外面は丁寧なハケ調整が施されている。他の在地の土器と比べると、肩部に横方向のハケ目が確認され、胎土も明らかに異なっていることから、東海産ではないかと考えられる。煤の付着も確認できる。21は小型の台付き甕で、口縁部から頸部にかけて細かいハケ目が認められる。台部には縦方向に細かいヘラナデが施されている。25はミニチュア土器で作りは丁寧である。

SI－021（第61図、図版11・31）

26L－56グリッド付近に位置する。規模は長軸4.3m、短軸3.7mの長方形を呈し、確認面からの深さは0.4～0.5mを測る。主軸方向はN－155.5°－Eを指し、床面積は14.1㎡を測る。床面はほぼ平坦で、硬化面はみられないものの比較的良く締まっている。ピットは南西コーナー近くに1基確認された。その形状より、柱穴よりは貯蔵穴となる可能性がある。炉は中央より南東に偏って位置している。径0.5mほどの円形を呈し、床面より15cmほど掘り込まれる。覆土全体にローム粒・ロームブロックを多く含んでおり、埋め戻された可能性が高い。

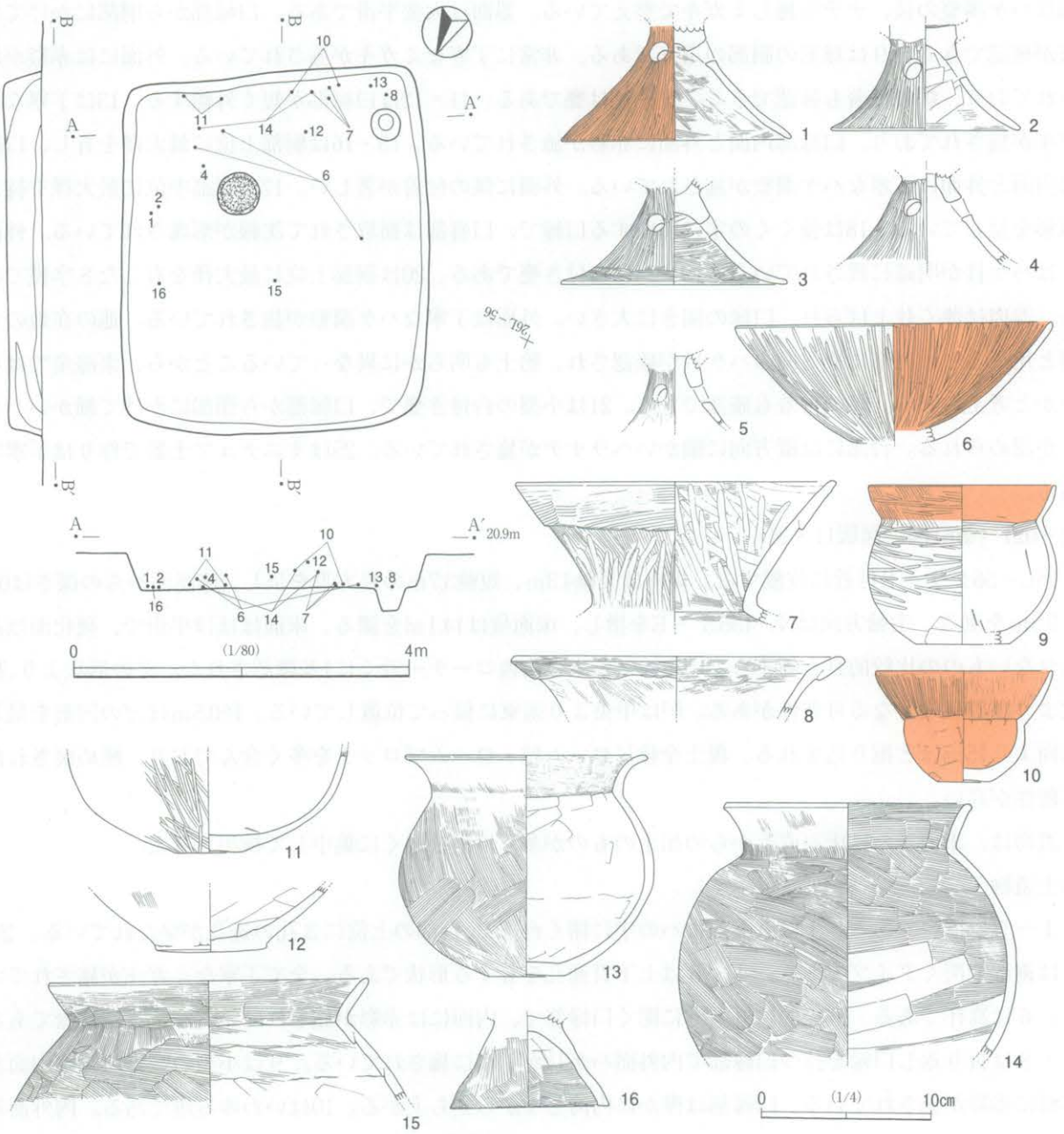
遺物は、床面または床面直上からの出土のものが多く、南壁近くに集中して検出された。

出土遺物

1～5は器台である。1は直線的にハの字に開く台部で、台部の上位に3孔の透孔が穿たれている。2・3は裾部で開くタイプである。4・5は上下貫通孔を有する形状である。全て丁寧なミガキが施されている。6は高杯である。直線的に外上方に開く口縁部で、内面には赤彩が施されている。7～12は壺である。7・8は折り返し口縁を持つ口縁部で内外面ハケ目が丁寧に施されている。9は小型の壺で口縁部内面と外面に赤彩が施されている。口縁部は僅かに内湾しながら立ち上がる。10はいわゆる坩である。内外面赤彩が施されているが、磨滅が著しく残りが悪い。13～15は甕である。13は胴部中位に最大径を持つ球形の胴部で、口縁部は外反しながら外上方に開く。外面には煤の付着が認められる。14・15はくの字に屈曲する口縁で、内外面に丁寧なハケ目が施されている。14は外面に煤の付着が著しい。16は台付き甕の台部である。

SI－022（第62図、図版11・31）

26L－35グリッド付近に位置するが、西壁部分を近世の溝により若干削平されている。規模は長軸4.7m、短軸4.7mの正方形を呈する。主軸方向はN－16.0°－Wを指し、床面積は16.4㎡を測る。確認面からの深さは0.4～0.5mである。床面はほぼ平坦であるが、硬化面は確認されない。柱穴と思われるピットは認められないが、南西コーナーに接する位置に、径0.5m、深さ0.5mほどの円形のピットが掘り込まれている。位置及び形状から貯蔵穴と考えられる。壁溝は狭い幅で全周している。炉は中央より西に偏って位置している。長軸0.7m、短軸0.4mの楕円形を呈し、床面より0.1mほど皿状に掘り込まれる。覆土中にローム粒・ロー



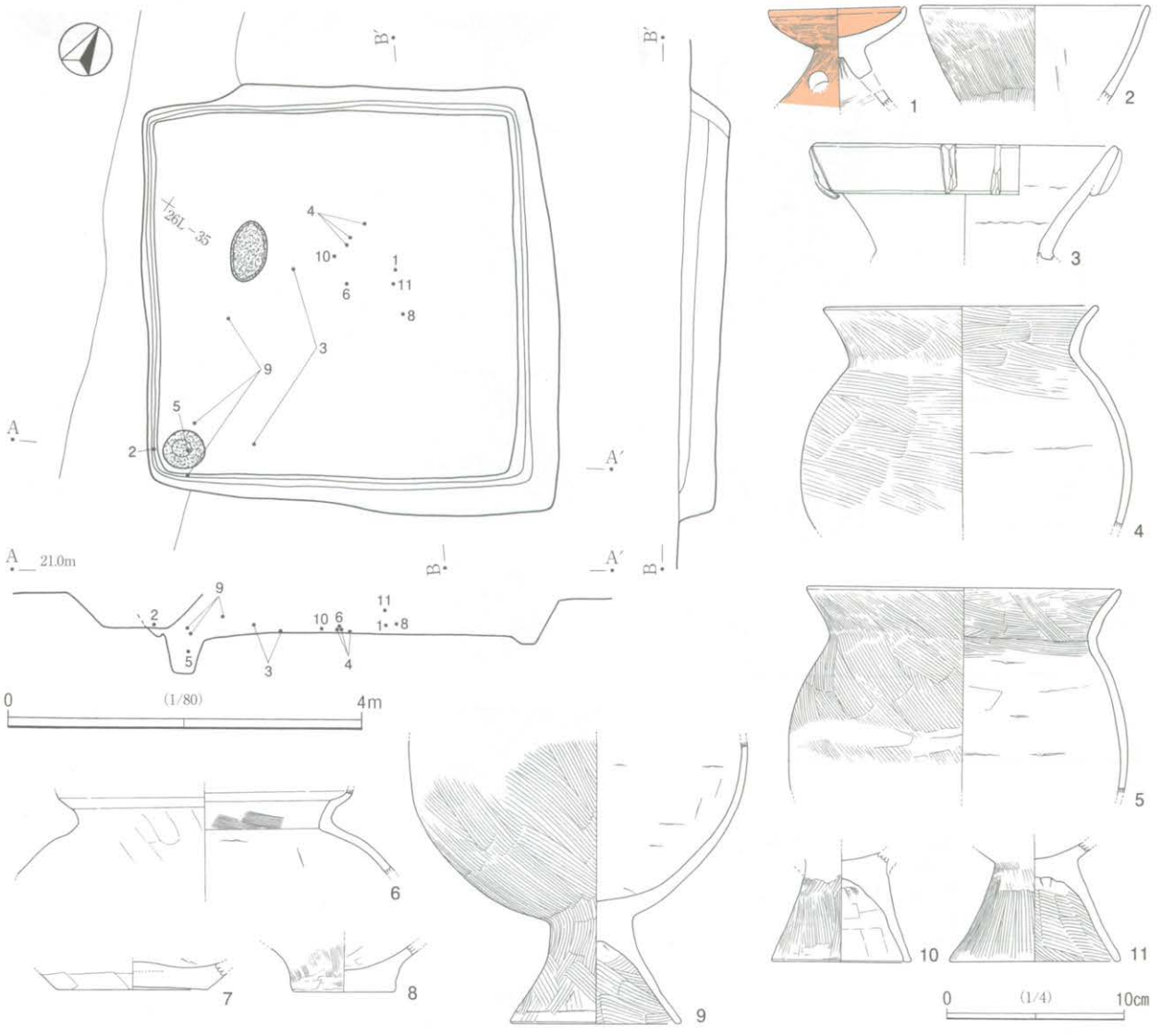
第61図　SI－021

ムブロックを多く含んでおり、人為的な埋め戻しの可能性がある。

遺物は床面または直上からの出土がほとんどで、貯蔵穴内及び周囲から甕が検出された。

出土遺物

1は器台である。小さな皿状の器受け部で口唇部が直立する。内外面に赤彩が施されている。2・3は壺である。2はいわゆる坩の口縁部で、3は2本一対の棒状浮文が貼り付けられる。おそらく5単位と思われる。4～8は甕である。4・5は緩やかに外反する口縁部で、4は粗いハケ目、5は細かいハケ目が残されている。5の外面は煤の付着が著しい。6は口唇部を欠くが、特徴的な口縁部形態で、5の字状口縁に近いものであろう。9～11は台付甕である。9は胴部中位から台部の遺存で、ハケ調整が丁寧に施されている。外面に煤の付着が著しい。



第62図　SI－022

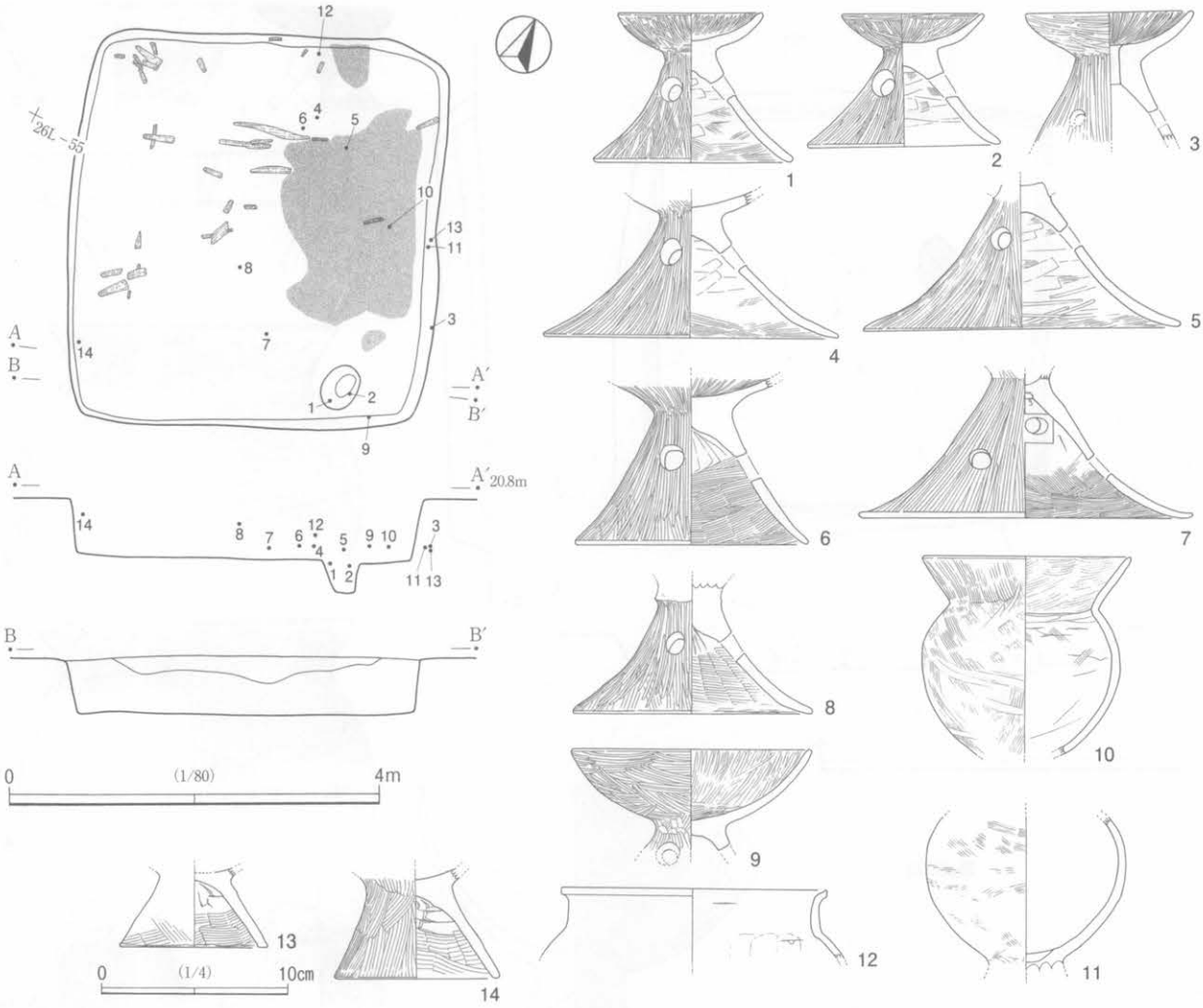
SI－023（第63図、図版11・32）

26L－55グリッド付近に位置する。規模は長軸4.2m、短軸4.0mのほぼ正方形を呈し、確認面からの深さ0.6～0.7mと比較的深い。主軸方向はN－22.0°－Wを指し、床面積は15.0㎡を測る。床面はほぼ平坦で比較的堅緻であるが、硬化面は認められなかった。柱穴と思われるピットは検出されなかったが、南東コーナー付近に位置するピットは、長径0.5m、短径0.3m、深さ0.4mの略楕円形を呈する。貯蔵穴になると思われる。床面上東側で焼土が広範囲に検出され、中央から西側にかけては構築材と思われる炭化材が確認された。状況から、焼失住居の可能性が考えられる。

図示した遺物は、器台や高杯が主体を占めている。焼土中や周辺からの出土が多く、貯蔵穴上部から器台が認められる。

出土遺物

1～9は器台である。1・2は小さい皿状の器受け部で、台部はハの字状に開く。台部上位に透孔が3か所確認できる。3も同様の形状であるが、上下貫通孔が開けられている。透孔は台部中位に穿たれてい



第63図　SI－023

る。4～8は台部のみの遺存で、高坏の脚部の可能性もある。4・5・7は裾端部で大きく開く形状を呈して、7は上下二段、合計6か所に透孔が穿たれている。9はやや深めの椀状の器受け部で、台部上位に透孔が確認できる。10は壺である。長い口縁部が直線的に外上方に開く。11は台付き甕である。球形の胴部の一部のみの遺存である。12は口縁部片で端部を摘み上げられている。13・14は台付き甕の台部のみの遺存である。

第2節　土坑

SK－001（第64図）

26M－71グリッド付近に位置する。長軸3.2m、短軸2.1m、確認面からの深さ0.6mを測る長方形状を呈する。北西コーナー部分を除き、壁溝が深さ10cmほどでしっかりと掘り込まれている。底面はやや凹凸がみられるが、比較的堅緻である。覆土中層に焼土層がみられ、全体的にローム粒・ロームブロックが含まれる。竪穴状遺構と考えられる。

遺物は覆土中層から下層にかけてみられる。

出土遺物

１・２は器台である。２は台部上位に３か所透孔が確認できる。３・４は壺である。２点ともに遺存が少ないため詳細は不明である。

SK－002（第64図）

26L－18グリッドに位置する。径1.2～1.3mの円形を呈し、確認面からの掘り込みはほとんどない。中央部分に焼土の堆積がみられる。確認面や周囲の状況から、古墳時代前期の遺構と考えられる。

遺物の出土はなかった。

SK－003（第64図）

24L－86グリッドに位置する。長軸3.2m、短軸2.4mの長方形状を呈し、確認面から深さ0.7～0.8mと比較的深い掘り込みである。底面は凹凸がみられるが、比較的良好に硬化している。

遺物の出土はなかった。

SK－004（第64図）

24L－65グリッド付近に位置する。長径2.0m、短径1.8mの略円形を呈し、確認面から深さ0.4mほどを測る。覆土上層に焼土粒が含まれる。

遺物の出土はなかった。

SK－005（第64図）

24L－75グリッドに位置する。径1.0mほどの不整円形を呈し、確認面から深さ0.2mほどを測る。底面は凹凸がみられる。覆土中にローム粒を含む。

遺物の出土はなかった。

SK－006（第64図）

26M－12グリッドに位置する。長軸1.7m、短軸1.3mの長方形状を呈し、確認面から深さ0.5mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや締まりがある。覆土中にローム粒を多く含む。

図示できる遺物の出土はなかった。

SK－007（第64図）

26L－88グリッド付近に位置する。径3.2mの大形の円形を呈し、確認面から深さ0.9～1.1mと深い掘り込みである。底面は平坦で比較的良好に硬化している。覆土下層にロームブロックを多く含む。

図示できる遺物の出土はなかったが、土器片からは古墳時代前期の遺構と考えられる。

SK－009（第64図）

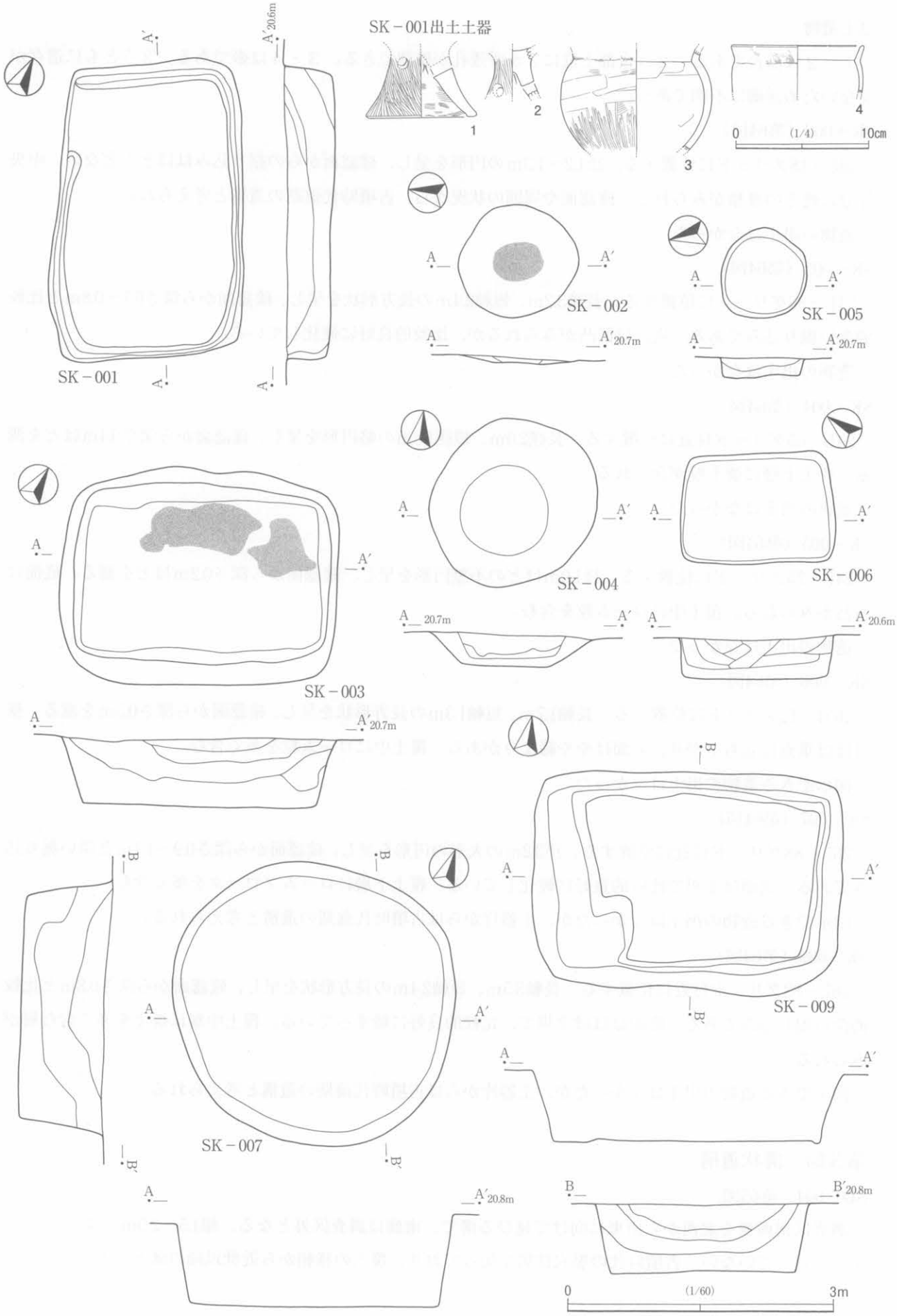
26L－83グリッド付近に位置する。長軸3.5m、短軸2.4mの長方形状を呈し、確認面から深さ0.8mと比較的深い掘り込みである。底面はほぼ平坦で、比較的良好に締まっている。覆土中層に焼土を多く含む層がみられる。

図示できる遺物の出土はなかったが、土器片からは古墳時代前期の遺構と考えられる。

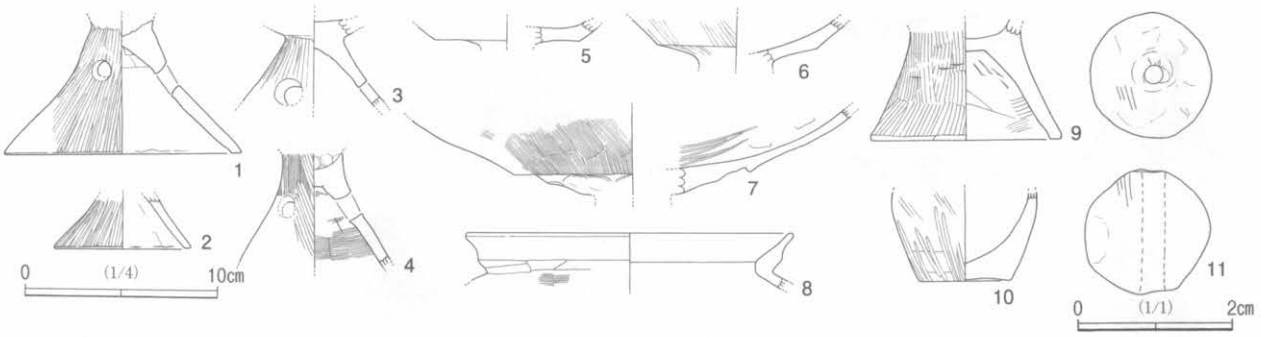
第３節　溝状遺構

SD－004（第65図）

調査区南西側を北西から南東に向けて延びる溝で、南側は調査区外となる。幅1.5～2.0m、深さ0.3～0.6mと一定していない。古墳時代の竪穴住居を切っており、覆土の様相から近世以降の溝と思われる。



第64図　SK－001～007・009



第65図　SD－004出土土器・土製品

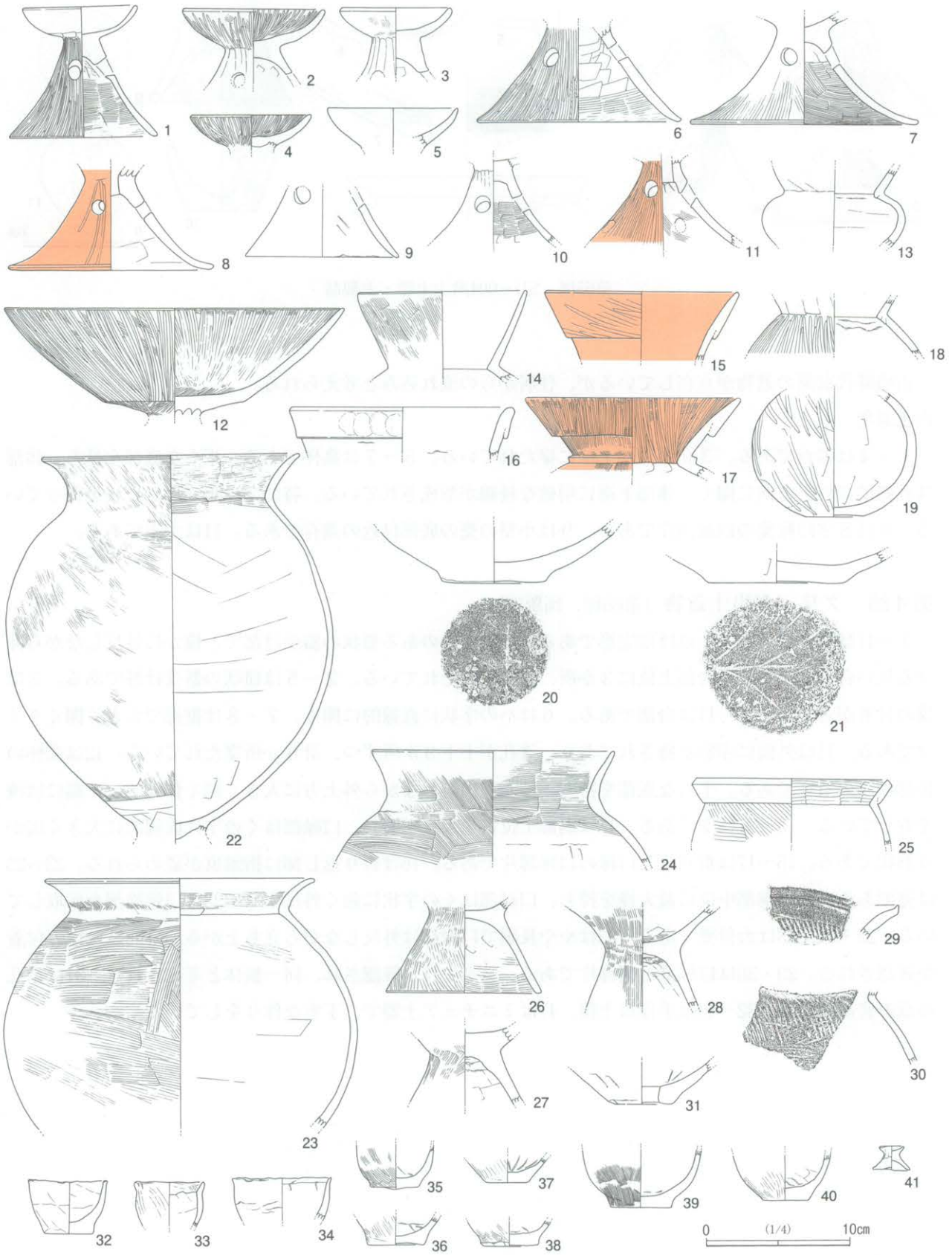
古墳時代前期の遺物が点在しているが、住居からの流れ込みと考えられる。

出土遺物

１～４は器台である。３孔が台部上位に穿たれている。５～７は高杯である。平らな底部を持ち、体部は直線的に外上方向に開く。体部下端に明確な稜線が形成されている。特に７は張り出した稜を作っている。８はＳ字口縁甕の口縁部片である。９は小型の甕の底部付近の遺存である。11は土玉である。

第４節　グリッド出土遺物（第66図、図版32）

１～11は器台である。１はほぼ完形である。やや深さのある皿状の器受け部で、僅かに外反しながら伸びる長い台部を有する。台部上位に３か所、透孔が穿たれている。２～５は皿状の器受け部である。３は煤の付着が著しい。６～11は台部である。６はハの字状に直線的に開く。７・８は裾部で大きく開くタイプである。11は外面に赤彩が施されており、透孔が上下３か所ずつ、計６か所穿たれている。12は高杯の杯部のみの遺存である。平らな底部を持ち、僅かに内湾しながら外上方に大きく開く体部で、下端には稜を有している。13～21は壺である。13は胴部上位に最大径を有し、口縁部はくの字に直線的に大きく広がる形状である。15～17は折り返し口縁の口縁部片である。16は折り返し部に指頭痕が認められる。23～25は甕である。23は胴部中位に最大径を持ち、口縁部はくの字状に強く外反する。25は口唇端部を面取している。22・26～28は台付甕である。22はやや長胴で口縁部は外反しながら立ち上がる。外面には煤の付着が確認される。29・30は口縁部と胴部片である。タタキ目が確認され、同一個体と考えられる。31は単孔の甑の底部である。32～40は手捏ね土器、41はミニチュア土器で、丁寧な作りをしている。



第66図　グリッド出土土器

第11表竪穴住居跡一覧表

遺構No	規模（m）長軸×短軸	主軸方向	面積（㎡）	壁高（cm）	柱穴深さ（cm）	貯蔵穴（cm）長径×短径×深さ	壁溝（cm）幅×深さ	カマド・炉（cm）長径×短径	出入口ピット（cm）長径×短径×深さ	特記遺物備考	時代区分
SI－001	4.1×3.7	N－35°－W	12.5	7.0～18.9	P1 26.9 P2 13.1 P3 35.6 P4 20.4	—	—	70×60 65×39	—		黒浜期
SI－002	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番	
SI－003	5.2×4.5	N－21°－E	19.18	12.7～22.0	P1 16.5 P2 10.5	—	—	—	—		黒浜期
SI－004	4.6×4.6	N－41°－W	19.07	6.3～11.9	P1 12.1 P2 10.6 P3 17.0 P4 13.0	—	—	—	26×20×5.3		古墳時代前期
SI－005	3.3×3.3	N－21.5°－E	10.13	4.6～24.5	P1 14.2 P2 28.9 P3 23.6 P4 69.5	—	—	—	—		古墳時代前期
SI－006	5.7×5.2	N－57°－E	27.43	45.5～63.0	P1 72.3 P2 69.5 P3 54.5 P4 20.8	—	4.0×3.7	82×59	—		古墳時代前期
SI－007	4.0×5.5	N－50°－E	12.45	26.9～33.9	P1 33.0 P2 17.8 P3 14.3	—	—	—	—	青銅製仿製鏡出土	古墳時代前期
SI－008	4.5×4.3	N－65.3°－E	15.85	21.0～31.0	—	—	—	40×34	—		古墳時代前期
SI－009	4.2×3.9	N－48°－W	14.98	45.6～59.0	P1 19.4 P2 13.6 P3 15.0 P4 25.5	68×44×45.1	30.0×8	80×64	—	壁から15cm位の所にコの字形に帯状の溝検出	古墳時代前期
SI－010	3.3×3.2	N－54°－E	9.00	17.0～23.2	—	—	—	40×30	—		古墳時代前期
SI－011	4.3×4.0	N－108°－E	16.31	8.2～18.3	P1 28.6 P2 33.4 P3 20.6	—	—	71×66	—		古墳時代前期
SI－012	6.6×5.7	N－41°－E	34.69	44.8～54.4	P1 34.3 P2 85.6 P3 83.1 P4 53.0	—	5×5.4	79×52	—		古墳時代前期
SI－013	8.6×6.9 7.3×6.9	N－60°－E	64.30 48.93	20.5～76.0	P1 29.6 P2 16.1 P3 43.0 P4 19.3	—	—	—	—		古墳時代前期
SI－014	5.5×4.5	N－30°－E	21.70	26.8～33.9	P1 43.5	—	—	140×124	—		古墳時代前期
SI－015	4.0×3.7	N－60°－E	13.50	49.9～58.5	—	71×49×26.5	15×1.8	42×30	—		古墳時代前期
SI－016	8.7×3.3	N－76°－E	12.99	33.8～56.1	—	—	7.0×19.7	98×64 65×54	—		古墳時代前期
SI－017	4.2×4.1	N－16°－W	13.67	29.4～38.7	—	60×58×50.2	2.0×0.7	42×32	—		古墳時代前期
SI－018	3.5×3.3	N－25°－W	9.39	24.7～37.2	—	—	—	—	—		古墳時代前期
SI－019	5.6×5.4	N－57°－W	23.03	32.9～40.5	—	—	—	—	—	SK－008と重複関係	古墳時代前期
SI－020	4.4×4.1	N－32°－W	14.18	65.0～80.5	—	—	—	90×56	—		古墳時代前期
SI－021	4.3×3.7	N－155°－E	14.14	30.3～44.9	—	—	—	53×50	—		古墳時代前期
SI－022	4.7×4.7	N－16°－W	16.38	1.8～48.0	—	—	14×6.3	67×38	—		古墳時代前期
SI－023	4.2×4.0	N－22°－W	15.03	60.4～72.7	—	—	—	—	—		古墳時代前期
SI－024	4.7×4.6	N－54.3°－W	17.11	10.7～17.0	—	—	—	67×49 30×29	—		黒浜期
SI－025	6.2×－	N－32°－W	(28.2)	14.9～23.8	P1 45.0	—	—	125×80	—		黒浜期
SI－026	5.6×5.1	N－48°－W	21.46	15.9～25.2	P1 27.0 P2 41.9 P3 33.0 P4 28.6	—	—	—	—		黒浜期
SI－027	3.1×3.0	N－45°－E	8.17	5.9～11.1	P1 12.5 P2 48.4 P3 38.3 P4 11.6	—	—	40×36	—		黒浜期

第12表　古墳時代出土土器観察表

挿図番号	遺構番号	器質	器形	遺物番号	口径	底形	器高	遺存度	色調	胎土	調整　内面	調整　外面	備　考
第40図1	SI-004	土師器	壺	2、4	—	—	(4.2)	5%	褐　色	密	ヘラナデ	不明	
2	SI-004	土師器	甕	12	—	—	(3.0)	5%	褐　色	密	ナデ	ナデ	被熱
3	SI-004	土師器	甕	1、3、4、24、26、30、50	(22.0)	—	(11.2)	10%	赤褐色	密	ハケ→ナデ、ナデ	ハケ→ナデ	被熱
4	SI-004	土師器	甕	3、4	(19.4)	—	(6.9)	10%	黒褐色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	被熱
5	SI-004	土師器	甕	2、3、4、17、24	(17.2)	—	(9.5)	20%	赤褐色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
6	SI-004	土師器	甕	51	(18.0)	—	(3.5)	5%	褐　色	密	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	
7	SI-004	土師器	甕	5、8	(18.0)	—	(3.8)	10%	褐　色	密	ナデ→ハケ	ナデ→ハケ	被熱
8	SI-004	土師器	甕	1、28	(15.0)	—	(3.6)	5%	黄褐色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
9	SI-004	土師器	甕	1、3、4、27	(22.0)	—	(8.0)	10%	褐　色	密	ハケ、ヘラナデ	ハケ	
10	SI-004	土師器	台付甕	11	—	7.8	(4.3)	20%	褐　色	密	ヘラナデ	ハケ	
11	SI-004	土師器	手捏ね	5	6.8	—	(6.0)	40%	黄褐色	密	ヘラナデ	ハケ→ナデ	被熱
第41図1	SI-005	土師器	器台	1	—	(10.0)	(4.9)	30%	黄褐色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ→ミガキ	黒斑
2	SI-005	土師器	壺	1	—	—	(6.7)	15%	褐　色	密	ヘラナデ	ハケ→ヘラナデ	
3	SI-005	土師器	甕	1	(16.0)	—	(2.5)	5%	褐　色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
4	SI-005	土師器	甕	6	(17.2)	—	(3.2)	5%	黒褐色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	被熱
5	SI-005	土師器	台付甕	1	—	—	(17.3)	35%	黒褐色	密	ヘラナデ→ナデ	ハケ→ナデ	被熱
6	SI-005	土師器	台付甕	1、6	—	10.0	(20.6)	60%	褐　色	密	ヘラナデ→ハケ	ヘラナデ→ハケ	被熱
7	SI-005	土師器	ミニチュア	8	3.2	2.2	2.8	90%	黒褐色	密	ナデ	ナデ	
第42図1	SI-006	土師器	器台	9、32、37	6.8	9.5	7.1	80%	赤褐色	密	ヘラケズリ→ナデ	ヘラケズリ→ナデ	
2	SI-006	土師器	器台	29、37、38、67	(6.0)	9.4	6.6	70%	黄褐色	密	ヘラケズリ→ナデ	ヘラケズリ→ナデ	黒斑
3	SI-006	土師器	器台	9、33、37	(6.9)	9.5	6.3	60%	黄褐色	密	ナデ	ナデ→ミガキ	被熱
4	SI-006	土師器	器台	63	—	10.5	(6.4)	60%	赤褐色	密	ミガキ、ヘラケズリ	ミガキ	
5	SI-006	土師器	高杯	23、55	(13.4)	(15.3)	9.6	50%	褐　色	密	不明	不明	赤彩
6	SI-006	土師器	高杯	6、44、67	—	(11.0)	(9.6)	25%	黄褐色	密	ナデ→ミガキ、ナデ	ナデ→ミガキ	
7	SI-006	土師器	高杯	40	(23.4)	—	(7.2)	10%	褐　色	密	ミガキ	ケズリ→ナデ→ミガキ	
8	SI-006	土師器	高杯	37、64	—	13.0	(9.0)	35%	灰褐色	密	ハケ→ナデ	ナデ	被熱
9	SI-006	土師器	高杯	68	—	11.2	(5.8)	50%	黄褐色	密	ハケ→ヘラケズリ→ナデ	ハケ→ミガキ	
10	SI-006	土師器	壺	36	(15.4)	—	(3.8)	5%	黄褐色	密	ナデ	ナデ	被熱
11	SI-006	土師器	壺	35、36	—	4.2	(2.3)	5%	黄褐色	密	ナデ	ヘラケズリ→ナデ	被熱
12	SI-006	土師器	壺	36、37、56	—	5.8	(4.8)	10%	黒褐色	密	ヘラナデ	ハケ→ヘラナデ	被熱、黒斑
13	SI-006	土師器	坩	26、36、37	13.3	3.0	5.5	70%	黄褐色	密	ヘラケズリ→ナデ→ミガキ	ヘラケズリ→ナデ→ミガキ	被熱、黒斑
14	SI-006	土師器	坩	7、8、10	—	—	(5.6)	30%	褐　色	密	ハケ、ナデ	ナデ、ミガキ	
15	SI-006	土師器	甕	5、21	(16.0)	—	(3.1)	5%	褐　色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
16	SI-006	土師器	甕	36、40、57、65、68	13.6	—	(17.0)	50%	橙褐色	密	ヘラナデ	ヘラケズリ→ハケ	黒斑
17	SI-006	土師器	甕	21	(12.8)	4.8	11.9	80%	黒褐色	密	ヘラナデ→ナデ	ハケ→ヘラナデ→ミガキ	被熱
18	SI-006	土師器	甕	1	—	(9.8)	(2.3)	5%	黄褐色	密	ヘラナデ	ハケ→ナデ→ミガキ	被熱
19	SI-006	土師器	甕	11	—	8.8	(2.5)	5%	黄褐色	粗	不明	ハケ→ナデ→ミガキ	黒斑
20	SI-006	土師器	甕	8	—	3.7	(1.8)	5%	黒褐色	密	ヘラナデ	ヘラケズリ→ナデ	
21	SI-006	土師器	台付甕	1、4、5	—	(11.0)	(6.7)	30%	橙褐色	密	ハケ	ハケ→ナデ	
22	SI-006	土師器	台付甕	21	—	11.2	(8.6)	40%	橙褐色	密	ヘラナデ、ナデ	ハケ、ナデ	
23	SI-006	土師器	台付甕	18	—	11.5	(7.5)	20%	褐　色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	被熱
24	SI-006	土師器	台付甕	13	—	11.2	(6.6)	30%	褐　色	密	ヘラケズリ→ハケ	ハケ→ナデ	
25	SI-006	土師器	台付甕	14	—	10.0	(6.7)	15%	褐　色	密	ハケ→ヘラケズリ→ミガキ	ハケ→ヘラケズリ→ミガキ	被熱
26	SI-006	土師器	台付甕	2、4	—	(11.0)	(6.0)	10%	黄褐色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	被熱
27	SI-006	土師器	台付甕	19	—	9.0	(4.5)	10%	褐　色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	被熱
28	SI-006	土師器	台付甕	34	—	(7.6)	(4.7)	10%	赤褐色	密	ナデ	ナデ→ミガキ	赤彩
29	SI-006	土師器	ミニチュア	22	6.6	3.0	3.7	70%	黄褐色	密	ヘラナデ→ナデ	ナデ	
30	SI-006	土師器	ミニチュア	31	(1.8)	2.2	3.6	95%	黄褐色	密	ナデ	ナデ	
第43図1	SI-007	土師器	壺	1、21	9.8	—	(8.3)	10%	橙褐色	密	不明	不明	赤彩
2	SI-007	土師器	壺	3	—	(5.6)	(2.2)	5%	橙褐色	密	ナデ	ヘラケズリ→ナデ	
3	SI-007	土師器	ミニチュア	17	7.0	2.6	3.8	100%	黄褐色	密	ヘラナデ→ナデ	ヘラケズリ→ヘラナデ→ナデ	
4	SI-007	土師器	ミニチュア	8、13	—	(4.2)	(4.0)	20%	赤褐色	密	ナデ	ミガキ、ナデ	赤彩
5	SI-007	土師器	ミニチュア	24	(5.4)	(2.2)	2.9	30%	褐　色	密	ナデ	ナデ	
6	SI-007	土師器	ミニチュア	25	(5.6)	(3.0)	3.1	40%	黄褐色	密	ナデ	ナデ	
7	SI-007	土師器	ミニチュア	4	(5.6)	(3.0)	2.35	25%	黒褐色	密	ミガキ	ナデ	
8	SI-007	土師器	ミニチュア	27	(4.2)	3.0	1.6	70%	赤褐色	密	ナデ	ナデ	赤彩
9	SI-007	土師器	ミニチュア	9	—	4.2	(2.4)	50%	赤褐色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	赤彩
10	SI-007	土師器	ミニチュア	26	(6.9)	—	(2.0)	5%	赤褐色	密	ナデ	ハケ	赤彩
11	SI-007	土師器	ミニチュア	10	4.8	—	(2.0)	5%	赤　色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	赤彩
12	SI-007	土師器	ミニチュア	25	1.5	2.2	2.6	95%	赤褐色	密	ナデ	ナデ	赤彩
13	SI-007	土師器	ミニチュア	11	1.8	0.8	2.7	95%	黄褐色	密	ナデ	ナデ	
第44図1	SI-008	土師器	台付甕	12	—	—	(2.7)	10%	褐　色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
第45図1	SI-009	土師器	器台	36	11.0	12.7	8.2	100%	橙褐色	密	ナデ→ミガキ、ハケ→ナデ	ハケ→ミガキ	
2	SI-009	土師器	器台	38	9.4	12.4	8.2	80%	橙褐色	密	ナデ→ミガキ、ハケ→ナデ→ミガキ	ハケ→ナデ→ミガキ	

挿図番号	遺構番号	器質	器形	遺物番号	口径	底形	器高	遺存度	色調	胎土	調整　内面	調整　外面	備　考
3	SI－009	土師器	器台	37	9.0	12.3	8.1	100%	橙褐色	密	ナデ→ミガキ、ハケ→ミガキ	ハケ→ナデ→ミガキ、ハケ→ミガキ	
4	SI－009	土師器	器台	7	(8.0)	—	〔1.7〕	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	
5	SI－009	土師器	器台	8	—	—	〔1.9〕	10%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	
6	SI－009	土師器	壺	3、11、14、27	10.6	—	〔5.5〕	20%	橙褐色	密	ミガキ	ミガキ	
7	SI－009	土師器	壺	35	13.4	—	〔7.5〕	30%	橙褐色	密	ミガキ	ナデ→ミガキ、ハケ	
8	SI－009	土師器	壺	39	20.6	—	〔8.0〕	30%	橙褐色	密	ハケ	ハケ、ハケ→ミガキ	
9	SI－009	土師器	甕	36	(16.5)	6.5	18.3	90%	黒褐色	密	ハケ	ハケ→ナデ、ヘラケズリ	被熱
10	SI－009	土師器	ミニチュア	30	5.0	2.4	5.9	100%	褐　色	密	ナデ	ハケ→ナデ→ミガキ	
11	SI－009	土師器	ミニチュア	29	—	1.6	〔3.3〕	90%	橙褐色	密	ヘラナデ	ハケ、ハケ→ナデ→ミガキ	
12	SI－009	土師器	ミニチュア	33	(3.2)	—	〔2.1〕	20%	褐　色	密	ナデ	ナデ	
13	SI－009	土師器	ミニチュア	34	—	(5.2)	〔2.4〕	20%	黄褐色	密	ハケ→ナデ	ミガキ	黒斑
14	SI－009	土師器	ミニチュア	12	—	5.2	〔2.2〕	50%	褐　色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
15	SI－009	土師器	ミニチュア	7	—	(6.4)	〔3.2〕	5%	褐　色	密	ナデ→ミガキ	ハケ→ナデ	
16	SI－009	土師器	ミニチュア	11	—	(1.7)	〔1.6〕	20%	褐　色	密	ヘラケズリ→ナデ	ヘラケズリ→ナデ	
第46図1	SI－010	土師器	高杯	4、8	(20.0)	—	〔5.5〕	25%	黒褐色	密	ナデ→ミガキ	ハケ→ミガキ	赤彩
第47図1	SI－011	土師器	器台	1、8	8.3	11.4	7.7	70%	黄褐色	密	ヘラケズリ→ナデ→ミガキ	ヘラケズリ→ナデ→ミガキ	被熱
2	SI－011	土師器	器台	1、12	—	(12.0)	〔6.8〕	30%	赤褐色	密	ミミガキ、ハケ→ヘラナデ	ハケ→ナデ→ミガキ	赤彩
3	SI－011	土師器	器台	16、19	—	(15.8)	〔5.8〕	30%	赤褐色	密	ヘラナデ	ヘラケズリ→ミガキ	赤彩
4	SI－011	土師器	器台	15	—	—	〔5.8〕	5%	橙褐色	密	ヘラケズリ→ヘラナデ	ミガキ	黒斑
5	SI－011	土師器	器台	49	—	—	〔5.8〕	40%	褐　色	密	ヘラナデ	ハケ	
6	SI－011	土師器	器台	18	(8.4)	—	〔3.9〕	25%	褐　色	密	ナデ→ミガキ、ヘラナデ	ヘラケズリ→ミガキ	
7	SI－011	土師器	器台	1	(8.2)	—	〔2.3〕	15%	黄褐色	密	ナデ→ミガキ	ヘラケズリ→ナデ	
8	SI－011	土師器	器台	1、68	7.6	—	〔4.0〕	30%	橙褐色	密	不明	不明	
9	SI－011	土師器	器台	10	—	13.8	8.0	50%	橙褐色	密	ナデ	ヘラケズリ→ナデ	
10	SI－011	土師器	高杯	1、19、32	—	—	〔6.0〕	10%	赤褐色	粗	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ→ミガキ	被熱
11	SI－011	土師器	壺	2、5、19、23、25	(14.2)	—	〔8.7〕	10%	橙褐色	密	ハケ→ナデ、ヘラナデ	ハケ	
12	SI－011	土師器	壺	45、46	19.2	—	〔7.0〕	20%	黄褐色	密	ナデ→ミガキ	ナデ、ハケ→ミガキ	
13	SI－011	土師器	壺	1、11、19、28、36、43	11.6	4.4	19.0	75%	橙褐色	密	ヘラケズリ→ナデ→ミガキ	ヘラケズリ→ナデ→ミガキ	赤彩
14	SI－011	土師器	壺	20、26、26M－45－1、26M－11－1	(9.6)	—	〔15.2〕	35%	黄褐色	密	ナデ→ミガキ、ナデ	ハケ→ケズリ→ナデ	
15	SI－011	土師器	壺	6、11、44	(15.7)	—	〔6.8〕	20%	橙褐色	密	ハケ→ミガキ	ハケ→ナデ	
16	SI－011	土師器	壺	1、19、20、37、57、59	—	—	〔10.1〕	5%	橙褐色	密	ヘラナデ	ミガキ	
17	SI－011	土師器	壺	1、17、30、39、47、55	—	6.4	〔11.0〕	25%	赤褐色	密	ヘラケズリ→ナデ→ミガキ	ヘラケズリ→ナデ→ミガキ	赤彩
18	SI－011	土師器	壺	1、2、14、24、40、54	—	8.4	〔10.0〕	20%	黄褐色	密	ヘラナデ	ヘラケズリ→ミガキ	被熱
19	SI－011	土師器	壺	1、33、34	—	6.8	〔25.8〕	50%	黄褐色	密	ヘラナデ	ヘラケズリ→ミガキ	黒斑
第48図20	SI－011	土師器	甕	1	17.4	6.2	23.7	85%	黒褐色	密	ハケ→ヘラケズリ	ハケ、ヘラケズリ	
21	SI－011	土師器	甕	1、33、34	(18.2)	—	〔11.5〕	20%	橙褐色	密	ハケ、ヘラケズリ→ナデ	ハケ	
22	SI－011	土師器	甕	1	(10.0)	—	〔5.0〕	10%	赤褐色	密	ヘラケズリ→ナデ	ハケ→ナデ	
23	SI－011	土師器	甕	1、5、21、30、31、42、43、51、53、54、57、59、61、62	(18.0)	7.4	25.5	60%	黄褐色	密	ハケ→ナデ、ヘラケズリ→ヘラナデ	ハケ、ハケ→ヘラケズリ	黒斑
24	SI－011	土師器	甕	1、19	15.4	—	〔13.2〕	20%	橙褐色	密	ヘラナデ	ヘラケズリ→ハケ→ナデ	
25	SI－011	土師器	甕	33	(14.2)	—	〔14.4〕	25%	褐　色	密	ハケ→ナデ、ナデ	ハケ	被熱
26	SI－011	土師器	甕	2、22	18.2	—	〔8.5〕	10%	褐　色	密	ハケ、ハケ→ヘラナデ	ハケ→ナデ、ハケ	
27	SI－011	土師器	甕	1、20、28	(20.6)	—	〔21.9〕	25%	黒褐色	密	ハケ、ヘラナデ	ハケ	
28	SI－011	土師器	台付甕	5、13	—	8.4	〔6.2〕	40%	橙褐色	密	ヘラナデ、ハケ	ハケ	被熱
29	SI－011	土師器	台付甕	7	—	(9.9)	〔6.2〕	20%	黒褐色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
30	SI－011	土師器	甑	1、34	—	(6.2)	〔10.0〕	20%	赤褐色	粗	ヘラケズリ→ナデ	ヘラケズリ→ナデ	
31	SI－011	土師器	ミニチュア	48	3.1	2.0	3.5	100%	褐　色	密	ヘラケズリ→ナデ	ヘラケズリ→ナデ	
第49図1	SI－012	土師器	器台	14	(8.4)	(10.4)	8.8	60%	褐　色	密	ハケ→ナデ→ミガキ	ハケ→ナデ→ミガキ	
2	SI－012	土師器	器台	13	9.0	11.0	8.6	95%	褐　色	密	ハケ→ミガキ	ハケ→ナデ→ミガキ	
3	SI－012	土師器	器台	1、4、29	(8.2)	12.1	7.6	80%	褐　色	密	ナデ、ヘラケズリ、ハケ	ヘラケズリ→ナデ、ミガキ	
4	SI－012	土師器	器台	9	—	7.2	〔4.2〕	90%	黄褐色	密	ヘラケズリ→ナデ	ミガキ	
5	SI－012	土師器	壺	30	—	2.1	〔3.9〕	10%	褐　色	密	ハケ	ミガキ	
7	SI－012	土師器	壺	1、22、27、29	—	—	〔10.4〕	20%	黄褐色	密	不明	ハケ→ナデ→ミガキ	
8	SI－012	土師器	甕	11	9.6	4.0	9.6	100%	赤褐色	密	ハケ、ナデ	ハケ→ナデ→ミガキ	
9	SI－012	土師器	壺	13	(18.0)	—	〔2.8〕	5%	黒褐色	密	ハケ	ハケ→ミガキ	
10	SI－012	土師器	壺	10、24、29	(14.2)	—	〔5.5〕	10%	橙褐色	密	ナデ	ハケ	
11	SI－012	土師器	台付甕	18	19.0	10.0	28.6	85%	橙褐色	密	ハケ→ヘラナデ	ハケ	黒斑
12	SI－012	土師器	台付甕	15、16、17、30	18.6	10.8	32.0	85%	赤褐色	密	ナデ→ヘラナデ、ハケ	ハケ	黒斑
第50図13	SI－012	土師器	台付甕	17	16.2	16.0	23.1	85%	赤褐色	密	ハケ、ヘラナデ	ハケ、ヘラナデ	
14	SI－012	土師器	台付甕	12	14.3	8.6	23.4	100%	赤褐色	密	ハケ→ナデ、ヘラナデ	ハケ	
15	SI－012	土師器	ミニチュア	8	—	—	〔2.5〕	60%	褐　色	密	ヘラナデ	ナデ	
第51図1	SI－013	土師器	器台	86、89、103	7.1	(9.8)	8.2	80%	赤褐色	密	ミガキ、ハケ→ナデ	ナデ→ミガキ、ハケ→ナデ	赤彩
2	SI－013	土師器	器台	2、53	9.2	—	〔4.2〕	30%	褐　色	密	ナデ→ミガキ、ヘラナデ	ミガキ	
3	SI－013	土師器	器台	2、2(B)	7.4	—	〔2.7〕	10%	黒褐色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
4	SI－013	土師器	器台	31	—	—	〔4.3〕	20%	橙褐色	密	ナデ	ヘラナデ→ミガキ、ヘラケズリ→ナデ	

挿図番号	遺構番号	器質	器形	遺物番号	口径	底形	器高	遺存度	色調	胎土	調整　内面	調整　外面	備　考
5	SI－013	土師器	器台	82	—	—	〔4.0〕	82%	褐　色	密	ナデ→ミガキ、ヘラナデ	ﾊﾗナデ→ミガキ	
6	SI－013	土師器	器台	56	—	(8.4)	〔4.6〕	30%	褐　色	密	ヘラナデ、ハケ→ナデ	ヘラケズリ→ミガキ	
7	SI－013	土師器	器台	27、76、87、89	—	(11.0)	〔7.2〕	25%	橙褐色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ→ミガキ	被熱
8	SI－013	土師器	器台	3、26M－40－1	—	(15.6)	〔5.4〕	20%	赤褐色	密	ヘラナデ	ミガキ	赤彩
9	SI－013	土師器	高杯	2、3、4	—	(14.6)	〔6.6〕	20%	褐　色	密	ハケ→ナデ→ミガキ	ハケ→ナデ→ミガキ	
10	SI－013	土師器	高杯	85、95	(19.0)	—	〔6.6〕	15%	褐　色	密	ナデ→ミガキ	ヘラケズリ→ハケ→ミガキ	
11	SI－013	土師器	高杯	2、2(B)、86、89、102、103、26M－40－1	20.3	—	〔6.4〕	40%	赤褐色	密	ミガキ	ヘラナデ→ミガキ	赤彩
12	SI－013	土師器	高杯	2、29、35、63、86、88、99、101、105	19.8	—	〔6.6〕	30%	褐　色	密	ナデ→ミガキ	ハケ→ナデ→ナデ	
第52図13	SI－013	土師器	壺	1(A)、2、3、79、88	—	—	〔13.8〕	20%	黄褐色	密	ヘラナデ	ヘラケズリ→ナデ→ミガキ	
14	SI－013	土師器	壺	2、11、21、62	(18.8)	—	〔8.6〕	10%	褐　色	密	不明	不明	赤彩
15	SI－013	土師器	坩	2、2(B)、26、88、99、100、101、102	(16.1)	3.4	11.4	70%	赤褐色	密	ナデ→ミガキ、ハケ→ナデ→ミガキ	ヘラケズリ→ナデ→ミガキ	赤彩
16	SI－013	土師器	坩	2、2(B)、68、78、86、87、88、89、100、105	11.1	3.4	12.5	80%	赤褐色	密	ナデ→ミガキ	ハケ→ヘラケズリ→ミガキ	赤彩
17	SI－013	土師器	壺	40	—	3.2	〔4.4〕	15%	褐　色	粗	ヘラナデ→ミガキ	ヘラケズリ→ナデ→ミガキ	
18	SI－013	土師器	甕	98	—	3.4	〔1.7〕	5%	黄褐色	密	ヘラナデ	ヘラケズリ→ナデ	
19	SI－013	土師器	甕	101、102、105	11.8	6.8	14.1	50%	赤褐色	密	ナデ→ヘラナデ	ヘラケズリ→ヘラナデ	赤彩
20	SI－013	土師器	甕	68、86、88、89、104	(15.1)	—	〔14.7〕	50%	黒褐色	密	ハケ→ナデ、ヘラナデ	ハケ	被熱
21	SI－013	土師器	甕	2、87、90、92、100	(12.1)	—	(12.7)	25%	褐　色	密	ヘラナデ	ハケ	
22	SI－013	土師器	台付甕	86、89、99、100、104	(8.0)	—	〔8.0〕	40%	褐　色	密	ハケ、ナデ	ハケ、ハケ→ナデ	
23	SI－013	土師器	甕	2、2(B)、3、33、64、86	(23.1)	—	〔14.0〕	10%	褐　色	密	ミガキ、ヘラナデ	ナデ、ハケ	
24	SI－013	土師器	甕	86、89、105	18.2	—	〔6.5〕	10%	褐　色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
25	SI－013	土師器	甕	2、2(B)、30、38、74	(16.4)	—	〔5.5〕	10%	褐　色	密	ナデ→ハケ	ナデ→ハケ	
26	SI－013	土師器	甕	3、89	(16.0)	—	〔4.7〕	10%	褐　色	密	ナデ→ヘラナデ	ナデ→ヘラナデ	
27	SI－013	土師器	甕	2、2(B)、10、61、95、97	(17.0)	—	〔6.8〕	10%	赤褐色	密	ヘラナデ	ハケ→ヘラナデ	
28	SI－013	土師器	壺	2(B)	(14.1)	—	〔3.9〕	5%	黒褐色	粗	ヘラナデ	ナデ、ハケ	
29	SI－013	土師器	甕	93	(11.0)	—	〔3.6〕	5%	灰褐色	密	ナデ→ヘラナデ	ナデ	櫛状工具によるナデ
30	SI－013	土師器	台付甕	24	—	6.0	〔3.4〕	25%	橙褐色	密	ヘラナデ、ハケ	ナデ→ハケ	黒斑
31	SI－013	土師器	台付甕	37	—	8.2	〔6.6〕	30%	褐　色	密	ヘラナデ、ハケ	ヘラナデ、ハケ→ヘラナデ	
32	SI－013	土師器	台付甕	2、3	—	8.4	〔6.7〕	10%	橙褐色	密	ヘラナデ、ハケ	ヘラナデ→ハケ	
33	SI－013	土師器	台付甕	88、89、103、105	—	10.3	〔6.5〕	20%	褐　色	密	ヘラケズリ→ヘラナデ	ハケ→ヘラケズリ→ナデ	
34	SI－013	土師器	台付甕	67	—	8.3	〔5.0〕	20%	褐　色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
35	SI－013	土師器	ミニチュア	55	(6.1)	(3.2)	〔3.2〕	60%	黄褐色	粗	ヘラケズリ→ナデ	ヘラケズリ→ナデ	
36	SI－013	土師器	ミニチュア	96	7.0	3.2	3.8	100%	褐　色	密	ヘラナデ	ナデ	黒斑
37	SI－013	土師器	ミニチュア	71、87	7.2	3.3	4.3	80%	褐　色	密	ヘラケズリ→ナデ	ヘラケズリ→ナデ	黒斑
38	SI－013	土師器	ミニチュア	20	7.4	3.6	4.8	85%	橙褐色	密	ハケ、ヘラナデ	ハケ	黒斑
39	SI－013	土師器	ミニチュア	23	—	3.2	〔1.4〕	70%	褐　色	粗	ヘラケズリ→ナデ	ヘラナデ	
第53図1	SI－014	土師器	器台	1	—	(12.3)	〔5.6〕	30%	黄褐色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ミガキ	
2	SI－014	土師器	台付甕	2	8.5	8.6	11.6	100%	橙褐色	密	ヘラナデ、ハケ→ナデ	ハケ→ナデ、ミガキ	
3	SI－014	土師器	壺	3	(20.0)	—	〔4.0〕	5%	橙褐色	密	ナデ	ハケ→ナデ	
4	SI－014	土師器	甕	1、4、5、6	—	—	〔18.5〕	20%	黒褐色	粗	ハケ	ハケ	被熱
第54図1	SI－015	土師器	壺	2、17、34、38、42	—	(3.5)	〔11.5〕	30%	黒褐色	密	ヘラナデ	ハケ→ナデ、ヘラケズリ→ナデ	
2	SI－015	土師器	甕	10、19、20、21、26	(15.2)	—	〔8.4〕	15%	褐　色	密	ハケ→ナデ、ヘラナデ	ハケ	
3	SI－015	土師器	甕	32	(18.0)	—	〔8.6〕	15%	褐　色	密	ヘラナデ	ハケ→ナデ	
4	SI－015	土師器	甕	9、28	(15.2)	—	〔11.5〕	25%	黒褐色	密	ハケ、ヘラナデ	ハケ→ナデ	
5	SI－015	土師器	台付甕	42	—	—	〔8.5〕	5%	黒褐色	密	ハケ	ハケ	
6	SI－015	土師器	台付甕	16	—	—	〔12.3〕	5%	黒褐色	密	ヘラナデ	ハケ	
第55図1	SI－016	土師器	器台	26	—	(19.0)	〔5.6〕	25%	褐　色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ→ミガキ	被熱
2	SI－016	土師器	坩	9、27	—	3.4	〔3.2〕	15%	褐　色	密	ヘラケズリ→ナデ→ミガキ	ヘラケズリ→ナデ→ミガキ	
3	SI－016	土師器	壺	13、14	—	3.8	〔12.7〕	50%	褐　色	密	ヘラケズリ→ナデ	ヘラケズリ→ナデ→ミガキ	
4	SI－016	土師器	甕	26、31、33、35、37	(16.6)	—	〔10.5〕	10%	橙褐色	密	ハケ→ナデ、ヘラナデ	ハケ→ナデ、ハケ	
5	SI－016	土師器	甕	1、23	—	6.2	〔16.5〕	50%	黒褐色	密	ヘラケズリ→ナデ	ハケ、ヘラケズリ→ナデ	
6	SI－016	土師器	台付甕	2、15、28、29、30	—	(11.4)	〔25.0〕	40%	褐　色	密	ナデ、ハケ→ナデ	ハケ	被熱
第56図1	SI－017	土師器	器台	9	(8.0)	12.4	7.7	90%	赤褐色	密	ミガキ、ヘラケズリ→ナデ	ミガキ	被熱
2	SI－017	土師器	器台	17	—	12.0	〔6.2〕	30%	赤褐色	密	ナデ→ミガキ、ハケ→ナデ	ヘラケズリ→ナデ→ミガキ	赤彩
3	SI－017	土師器	器台	12	—	—	〔6.2〕	15%	黄褐色	密	ナデ→ミガキ、ハケ→ナデ	ハケ→ナデ→ミガキ	
4	SI－017	土師器	器台	3	(8.0)	—	〔1.6〕	15%	赤褐色	密	ナデ	ナデ	被熱
第57図1	SI－018	土師器	器台	9	—	—	〔6.5〕	10%	赤褐色	密	ヘラケズリ→ナデ	ミガキ	赤彩
2	SI－018	土師器	台付甕	1、10	—	—	〔4.5〕	15%	黒褐色	密	ナデ、ハケ→ヘラナデ	ハケ→ミガキ	
3	SI－018	土師器	甕	3、4、12	(19.8)	—	〔4.7〕	5%	黒褐色	密	ハケ	ハケ	
第58図1	SI－019	土師器	高杯	3、28	(10.8)	—	〔4.3〕	5%	褐　色	密	ナデ	ナデ→ミガキ	
2	SI－019	土師器	高杯	3、36	—	—	〔3.0〕	15%	黄褐色	密	ナデ→ミガキ	ﾊﾗケズリ→ナデ→ミガキ	被熱
3	SI－019	土師器	器台	3、35、37	—	(11.4)	〔7.0〕	25%	黄褐色	密	ナデ、ハケ→ナデ	ﾊﾗケズリ→ナデ→ミガキ	
4	SI－019	土師器	高杯	1、4、6、18、43、58	—	(21.4)	〔7.0〕	30%	橙褐色	密	ミガキ、ハケ→ナデ	ミガキ	
5	SI－019	土師器	甕	50	—	(8.4)	〔3.3〕	20%	黒褐色	密	ヘラナデ	ヘラナデ	

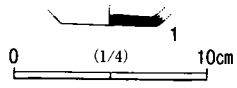
挿図番号	遺構番号	器質	器形	遺物番号	口径	底形	器高	遺存度	色調	胎土	調整　内面	調整　外面	備　考
第59図1	SI－020	土師器	器台	196	7.1	—	〔2.5〕	40%	黄褐色	密	ヘラナデ	ハケ	赤彩
2	SI－020	土師器	器台	203	(8.4)	—	〔2.1〕	10%	橙褐色	密	ナデ→ミガキ	ハケ→ナデ→ミガキ	
3	SI－020	土師器	器台	209	—	12.1	〔7.5〕	70%	褐　色	密	ミガキ、ヘラナデ	ミガキ	赤彩
4	SI－020	土師器	壺	118	12.4	—	〔6.0〕	10%	黒褐色	密	ハケ→ナデ→ミガキ	ハケ→ナデ→ミガキ	被熱
5	SI－020	土師器	壺	12、115、197、198、199	15.0	—	〔6.1〕	25%	赤褐色	密	ミガキ	ミガキ	赤彩
6	SI－020	土師器	壺	212	19.4	—	〔7.3〕	20%	赤褐色	密	ナデ	ハケ→ミガキ	黒斑
7	SI－020	土師器	壺	76、132	—	—	〔6.7〕	10%	橙褐色	密	不明	ハケ	赤彩
8	SI－020	土師器	壺	104	15.4	—	〔22.3〕	90%	褐　色	密	ハケ、ヘラケズリ→ナデ	ハケ、ハケ→ミガキ	焼成後底部穿孔
9	SI－020	土師器	壺	104	—	4.0	〔14.0〕	80%	茶褐色	密	ヘラナデ	ハケ→ミガキ	
10	SI－020	土師器	甕	45	—	(9.7)	〔7.6〕	40%	褐　色	粗	ヘラナデ	ヘラケズリ→ナデ	
11	SI－020	土師器	壺	52	(10.9)	—	〔5.7〕	25%	褐　色	密	ハケ、ヘラナデ	ハケ→ヘラナデ	
12	SI－020	土師器	壺	40	(9.7)	—	〔3.5〕	10%	褐　色	密	ハケ、ヘラナデ	ハケ→ナデ	
13	SI－020	土師器	壺	9、210	9.5	3.4	8.0	70%	褐　色	密	ミガキ、ヘラナデ	ハケ→ナデ→ミガキ	黒斑・赤彩
14	SI－020	土師器	甕	4、5、6、47、53、64、65、74、81、91、95	14.0	—	〔11.7〕	30%	褐　色	密	ハケ→ナデ、ヘラケズリ→ナデ	ナデ、ハケ→ナデ	被熱
15	SI－020	土師器	甕	5、43、44、77	(15.3)	—	〔12.5〕	40%	黒褐色	密	ハケ、ヘラケズリ→ナデ	ハケ	被熱
16	SI－020	土師器	甕	2、3、18、19、25、60、61、62	17.6	—	〔16.7〕	40%	褐　色	密	ハケ→ナデ→ヘラナデ	ハケ→ナデ	被熱
第60図17	SI－020	土師器	甕	79、80、90、93	(14.0)	6.8	14.0	45%	黒褐色	粗	ハケ→ナデ、ヘラナデ	ハケ→ナデ	被熱
18	SI－020	土師器	甕	6、7、9、11、35、102、120、203、206	24.2	—	〔33.5〕	70%	褐　色	密	ハケ→ナデ、ヘラケズリ→ヘラナデ	ハケ	
19	SI－020	土師器	台付甕	4、5、6、8、36、37、38、47、48、50、54、55、70、77、81、86、87、89、94、95、97、98、99、157	20.0	—	〔28.7〕	60%	赤褐色	密	ハケ→ナデ、ヘラナデ	ハケ→ナデ	被熱
20	SI－020	土師器	台付甕	3、6、8、9、37、44、108、165、204、205、207、208	(16.4)	—	〔24.3〕	50%	褐　色	密	ヘラナデ	ハケ	
21	SI－020	土師器	台付甕	12、113、114、115、192、201	13.6	7.4	18.0	85%	黄褐色	粗	ナデ→ヘラナデ、ハケ→ナデ	ハケ→ナデ、ハケ→ヘラケズリ→ナデ	被熱
22	SI－020	土師器	台付甕	87、101	—	9.9	〔9.5〕	30%	褐　色	密	ヘラナデ、ナデ→ハケ	ハケ→ナデ、ハケ	赤彩
23	SI－020	土師器	台付甕	6、11	—	(11.0)	〔6.1〕	5%	褐　色	密	ハケ→ヘラナデ	ハケ→ヘラケズリ→ナデ	
24	SI－020	土師器	台付甕	202	—	7.2	〔4.7〕	10%	橙褐色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
25	SI－020	土師器	手捏ね	14	(6.1)	3.2	2.0	70%	褐　色	粗	ナデ→ヘラナデ	ナデ→ヘラナデ	
第61図1	SI－021	土師器	器台	11	—	13.8	〔6.7〕	50%	赤褐色	密	ハケ→ナデ	ナデ→ミガキ	赤彩
2	SI－021	土師器	器台	12	—	11.2	〔6.2〕	50%	褐　色	密	ミガキ、ハケ→ヘラナデ	ハケ→ミガキ	
3	SI－021	土師器	高杯	3、4	—	13.6	〔5.7〕	35%	橙褐色	密	ハケ→ナデ→ミガキ	ハケ→ナデ→ミガキ	
4	SI－021	土師器	器台	14	—	—	〔5.4〕	10%	橙褐色	密	不明	ヘラケズリ→ミガキ	
5	SI－021	土師器	器台	2	—	—	〔4.3〕	10%	黄褐色	密	ナデ	ミガキ	
6	SI－021	土師器	高杯	3、4、15、33、35	(19.0)	—	〔7.0〕	25%	橙褐色	密	ミガキ	ミガキ	
7	SI－021	土師器	壺	2、25、26、27	19.2	—	〔8.3〕	20%	黄褐色	密	ハケ→ミガキ	ハケ→ナデ、ハケ→ミガキ	
8	SI－021	土師器	壺	6、30	(20.0)	—	〔3.3〕	10%	橙褐色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	被熱
9	SI－021	土師器	壺	4、7	(11.2)	(4.6)	9.4	20%	赤褐色	密	ヘラナデ	ハケ→ミガキ	赤彩
10	SI－021	土師器	坩	24、28	10.6	3.0	6.7	95%	橙褐色	密	ミガキ→ナデ、ヘラナデ	ミガキ、ヘラケズリ→ナデ	黒斑
11	SI－021	土師器	壺	18、19	—	4.0	〔5.6〕	10%	褐　色	密	ヘラナデ	ヘラケズリ→ナデ→ミガキ	黒斑
12	SI－021	土師器	甕	22	—	6.6	〔3.6〕	10%	褐　色	密	ヘラケズリ	ハケ→ヘラナデ	
13	SI－021	土師器	甕	29	14.6	4.6	13.1	80%	黄褐色	密	ハケ→ナデ、ヘラナデ	ハケ	被熱
14	SI－021	土師器	甕	6、17、24、25	14.8	—	〔15.0〕	70%	褐　色	密	ハケ、ハケ→ヘラケズリ	ハケ	被熱
15	SI－021	土師器	甕	9	(19.1)	—	〔7.2〕	10%	褐　色	粗	ハケ→ヘラナデ	ハケ	
16	SI－021	土師器	台付甕	10	—	9.6	〔5.3〕	30%	褐　色	密	ヘラケズリ→ハケ	ハケ→ナデ	
第62図1	SI－022	土師器	器台	28	7.8	—	〔5.6〕	65%	橙褐色	密	ナデ、ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	赤彩
2	SI－022	土師器	壺	24	(13.1)	—	〔5.5〕	5%	黄褐色	密	ヘラナデ	ハケ→ナデ	
3	SI－022	土師器	壺	19、23	(17.3)	—	〔6.4〕	10%	褐　色	密	ヘラナデ	不明	赤彩
4	SI－022	土師器	甕	1、3、4、17、18、25	15.6	—	〔12.5〕	20%	褐　色	密	ハケ	ハケ→ナデ	被熱
5	SI－022	土師器	甕	29	17.8	—	〔11.6〕	45%	褐　色	密	ハケ→ナデ、ナデ	ハケ→ヘラナデ	被熱
6	SI－022	土師器	甕	14	—	—	〔5.6〕	5%	褐　色	密	ハケ→ナデ、ナデ	ヘラケズリ→ナデ	
7	SI－022	土師器	甕	20	—	8.5	〔1.5〕	5%	褐　色	密	ヘラナデ	ヘラケズリ	
8	SI－022	土師器	甕	11	—	5.8	〔2.7〕	10%	褐　色	密	ナデ	ハケ→ヘラナデ	
9	SI－022	土師器	台付甕	1、3、4、20、21、22	—	9.8	〔15.8〕	40%	褐　色	密	ヘラケズリ→ナデ、ナデ→ハケ	ヘラケズリ→ハケ	被熱
10	SI－022	土師器	台付甕	15	—	7.8	〔5.2〕	50%	褐　色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
11	SI－022	土師器	台付甕	9	—	9.7	〔6.7〕	20%	黄褐色	密	ヘラナデ、ヘラケズリ→ハケ	ハケ→ナデ	
第63図1	SI－023	土師器	器台	57	7.9	10.8	8.0	90%	褐　色	密	ナデ→ミガキ、ヘラケズリ→ハケ→ナデ	ヘラケズリ→ハケ→ミガキ	被熱
2	SI－023	土師器	器台	58	7.6	10.4	7.0	95%	赤褐色	密	ハケ→ナデ→ミガキ	ハケ→ナデ→ミガキ	
3	SI－023	土師器	器台	51、26L－65－1	9.0	—	〔6.9〕	60%	橙褐色	密	ミガキ	ナデ→ミガキ、ハケ→ナデ→ミガキ	
4	SI－023	土師器	高杯	43	—	(16.0)	〔7.3〕	35%	赤褐色	密	ナデ、ハケ→ナデ	ハケ→ミガキ	被熱
5	SI－023	土師器	高杯	42	—	17.0	〔7.7〕	55%	赤褐色	密	ハケ→ヘラケズリ→ミガキ	ハケ→ヘラケズリ→ミガキ	
6	SI－023	土師器	高杯	44	—	12.6	〔8.9〕	60%	褐　色	密	ナデ→ミガキ、ハケ	ミガキ、ハケ→ミガキ	
7	SI－023	土師器	高杯	46	—	(17.9)	〔7.3〕	30%	褐　色	密	ヘラケズリ→ハケ	ミガキ	被熱

挿図番号	遺構番号	器質	器形	遺物番号	口径	底形	器高	遺存度	色調	胎土	調整　内面	調整　外面	備　　考
8	SI－023	土師器	高杯	45	—	13.0	〔7.0〕	50%	黄褐色	密	ハケ	ハケ→ミガキ	
9	SI－023	土師器	高杯	56	13.0	—	〔5.3〕	50%	黄褐色	密	ナデ→ミガキ	ハケ→ヘラケズリ→ミガキ	
10	SI－023	土師器	甕	47	11.2	—	〔10.6〕	60%	黒褐色	密	ハケ→ナデ	ハケ→ミガキ	被熱
11	SI－023	土師器	台付甕	49	—	—	〔8.3〕	10%	黒褐色	密	ヘラナデ	ハケ→ナデ	
12	SI－023	土師器	甕	31	(14.4)	—	〔3.6〕	5%	赤褐色	密	ヘラナデ	ヘラナデ	被熱
13	SI－023	土師器	台付甕	48	—	8.0	〔4.2〕	40%	黄褐色	密	ヘラナデ→ハケ	ハケ→ヘラナデ	
14	SI－023	土師器	台付甕	16	—	9.0	〔5.4〕	40%	灰　色	密	ハケ→ナデ	ハケ	被熱
第65図1	SD－004	土師器	器台	3	—	(12.5)	〔7.0〕	10%	黄褐色	密	ヘラケズリ→ナデ	ハケ→ナデ	
2	SD－004	土師器	器台	1	—	7.2	〔2.8〕	20%	黄褐色	密	ヘラケズリ→ナデ	ミガキ	
3	SD－004	土師器	器台	2	—	—	〔4.5〕	10%	黄褐色	密	ナデ	ナデ→ミガキ	
4	SD－004	土師器	器台	1	—	—	〔6.1〕	20%	黄褐色	密	ヘラケズリ→ハケ	ハケ→ミガキ	
5	SD－004	土師器	高杯	1	—	—	〔1.2〕	5%	赤褐色	密	ナデ	ヘラナデ	
6	SD－004	土師器	高杯	1	—	—	〔2.7〕	5%	赤褐色	密	不明	ミガキ	
7	SD－004	土師器	高杯	1	—	—	〔4.3〕	5%	褐　色	密	ヘラナデ、ミガキ	ハケ、ナデ	
8	SD－004	土師器	甕	1	(17.3)	—	〔2.9〕	5%	黒褐色	密	ヘラナデ	ナデ、ハケ	
9	SD－004	土師器	台付甕	3	—	(10.0)	〔6.2〕	5%	褐　色	密	ハケ→ヘラケズリ	ハケ	
10	SD－004	土師器	壺	5	—	(4.8)	〔4.7〕	25%	褐　色	密	ナデ	ヘラケズリ→ミガキ	黒斑
第64図1	SD－001	土師器	器台	1	—	(8.5)	〔4.6〕	20%	黄褐色	密	ハケ→ナデ	ミガキ	
2	SD－001	土師器	器台	1	—	—	〔3.7〕	5%	黄褐色	密	ヘラケズリ→ナデ	ミガキ	
3	SD－001	土師器	壺	1	—	—	〔7.6〕	10%	黄褐色	密	ヘラナデ	ハケ→ミガキ→ヘラナデ	赤彩
4	SD－001	土師器	壺	1	(10.0)	—	〔3.6〕	5%	褐　色	密	ヘラナデ	ハケ→ケズリ→ナデ	
第66図1	26M－91	土師器	器台	1	8.1	10.4	10.1	95%	橙褐色	密	ナデ、ハケ→ナデ	ヘラケズリ→ナデ、ヘラケズリ→ハケ→ミガキ	被熱
2	26L－31	土師器	器台	1	10.0	—	〔5.2〕	60%	黄褐色	密	ヘラナデ→ミガキ、ヘラナデ	ヘラケズリ→ハケ→ミガキ、ヘラケズリ→ナデ	
3	26M－45	土師器	器台	1	(8.0)	—	〔4.7〕	35%	黒褐色	密	ヘラナデ→ナデ	ハケ→ナデ、ヘラケズリ	被熱
4	26M－45	土師器	器台	1	8.5	—	〔2.3〕	30%	黄褐色	密	ナデ→ミガキ	ヘラケズリ→ナデ→ミガキ	
5	26L－95	土師器	器台	1	(9.2)	—	〔2.8〕	10%	黄褐色	密	ナデ	ヘラケズリ→ナデ	
6	26L－91	土師器	高杯	1	—	14.4	〔6.7〕	40%	褐　色	密	ヘラナデ、ハケ	ハラケズリ→ハケ→ミガキ	
7	26L－83	土師器	高杯	1	—	16.0	〔7.5〕	10%	黄褐色	密	ヘラナデ→ハケ	ハケ→ナデ	
8	26M－91	土師器	高杯	1	—	(14.4)	〔7.0〕	20%	橙褐色	密	ヘラナデ	ナデ→ミガキ	赤彩
9	26M－95	土師器	器台	1	—	(9.8)	〔4.7〕	5%	黄褐色	密	ヘラケズリ→ナデ	ナデ	
10	26L－83	土師器	器台	1	—	—	〔5.9〕	30%	橙褐色	密	ハケ→ナデ	ヘラケズリ→ナデ	
11	26M－45	土師器	器台	1	—	—	〔6.1〕	30%	赤褐色	密	ハケ→ナデ	ミガキ	赤彩
12	26M－91	土師器	高杯	1	(24.0)	—	〔7.5〕	20%	黄褐色	密	ハケ→ナデ→ミガキ	ハケ→ナデ→ミガキ	被熱
13	23J－55	土師器	壺	1	—	—	〔5.4〕	20%	黄褐色	密	ナデ	ナデ	
14	26M－91	土師器	壺	1	12.0	—	〔6.2〕	10%	褐　色	密	ナデ	ハケ→ナデ	
15	26L－83・95	土師器	壺	1	(13.6)	—	〔4.7〕	10%	赤褐色	密	不明	ミガキ、ヘラナデ	赤彩
16	SD－008	土師器	壺	1	(16.0)	—	〔3.2〕	5%	黄褐色	密	ナデ	ナデ	
17	26M－52・91	土師器	壺	1	(15.2)	—	〔5.4〕	10%	赤褐色	密	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ→ナデ	赤彩
18	26L－83・95	土師器	壺	1	—	—	〔3.6〕	5%	褐　色	密	ヘラナデ	ヘラケズリ→ナデ、ミガキ	
19	23J－55	土師器	壺	1	—	4.0	〔8.7〕	60%	橙褐色	密	ヘラナデ	ヘラケズリ→ナデ→ミガキ	
20	26M－45	土師器	甕	1	—	(7.4)	〔3.8〕	5%	黄褐色	密	不明	ナデ	
21	26M－91	土師器	甕	1	—	9.6	〔2.2〕	5%	褐　色	密	不明	ヘラナデ	
22	26M－52・91・92	土師器	台付甕	1	18.2	—	〔26.8〕	50%	褐　色	密	ハケ、ヘラケズリ→ナデ	ハケ、ヘラケズリ→ナデ	被熱
23	26M－52・91・92	土師器	甕	1	(19.0)	—	〔17.5〕	20%	黄褐色	密	ハケ→ナデ→ヘラナデ	ハケ→ナデ	被熱
24	26M－52・92	土師器	甕	1	(17.2)	—	〔7.8〕	10%	褐　色	密	ヘラケズリ→ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
25	26L－31	土師器	甕	1	(14.0)	—	〔4.5〕	10%	黒褐色	密	ハケ、ヘラナデ	ヘラナデ、ハケ	黒斑
26	26M－91	土師器	台付甕	1	—	11.0	〔6.4〕	30%	黄褐色	密	ヘラナデ→ハケ	ヘラケズリ→ハケ→ナデ	
27	25N－71	土師器	台付甕	1	—	—	〔5.4〕	5%	褐　色	密	ヘラナデ	ハケ→ナデ	
28	26L－95	土師器	台付甕	1	—	—	〔6.7〕	10%	褐　色	密	ハケ→ヘラナデ	ハケ→ナデ	被熱
31	26L－54	土師器	甑	1	—	4.0	〔3.0〕	10%	黒褐色	密	ヘラナデ	ヘラケズリ→ナデ	
32	26L－83	土師器	ミニチュア	1	(5.5)	3.4	3.8	60%	褐　色	密	ナデ	ナデ	黒斑
33	26L－83	土師器	ミニチュア	1	(5.0)	—	〔3.2〕	10%	黄褐色	粗	ハケ→ナデ、ヘラナデ	ハケ→ナデ	
34	26L－83	土師器	ミニチュア	1	(7.0)	—	〔3.1〕	20%	褐　色	密	ヘラナデ	ナデ	
35	26L－83	土師器	ミニチュア	1	—	3.4	〔3.0〕	60%	褐　色	密	ヘラナデ	ハケ→ナデ	
36	26L－83	土師器	ミニチュア	1	—	4.0	〔2.0〕	10%	黄褐色	密	ヘラナデ	ハケ→ナデ	黒斑
37	26L－63	土師器	ミニチュア	1	—	3.0	〔1.6〕	60%	褐　色	密	ヘラナデ	ハケ→ナデ	黒斑
38	26L－37	土師器	ミニチュア	1	—	3.9	〔1.8〕	20%	褐　色	密	ヘラナデ	ハケ	
39	26L－76	土師器	ミニチュア	1	—	4.2	〔4.0〕	10%	褐　色	密	ヘラナデ	ハケ	
40	26L－83	土師器	ミニチュア	1	—	3.2	〔3.2〕	30%	褐　色	粗	ヘラナデ	ハケ→ナデ	
41	SI－001	土師器	ミニチュア	39	2.6	(1.8)	1.7	70%	黄褐色	密	ナデ	ナデ	

第５章　奈良・平安時代

第１節　グリッド出土遺物（第67図）

１は須恵器杯の底部片である。遺存が少なく詳細は不明である。



第67図　グリッド出土土器

第６章　まとめ

第１節　出土土器と集落の変遷

本遺跡からは、縄文時代前期の竪穴住居跡６軒、古墳時代前期の竪穴住居跡20軒のほか、土坑や溝状遺構などが検出された。市野谷宮尻遺跡の北側に隣接しており、同一の集落となる。ここでは、市野谷宮尻遺跡を含めた古墳時代集落の動向をまとめてみる。

市野谷宮尻遺跡の報告書のなかで、説明上Ａ～Ｄ群に分けたが、西初石五丁目遺跡はこのＡ群に含まれる位置に相当する。市野谷宮尻遺跡では、Ａ群がＩ期の中心的な区域として捉えており、本遺跡は市野谷宮尻遺跡の古い段階の集落が中心となる。本遺跡は、竪穴住居数がそれほど多くなく、しかも土器の変遷が明確に分類しがたいが、ここでは、あえて古段階と新段階に分けてみたい。

古段階（宮尻Ⅰ期）

竪穴住居：011・013・014・016・018・021・022　合計７軒

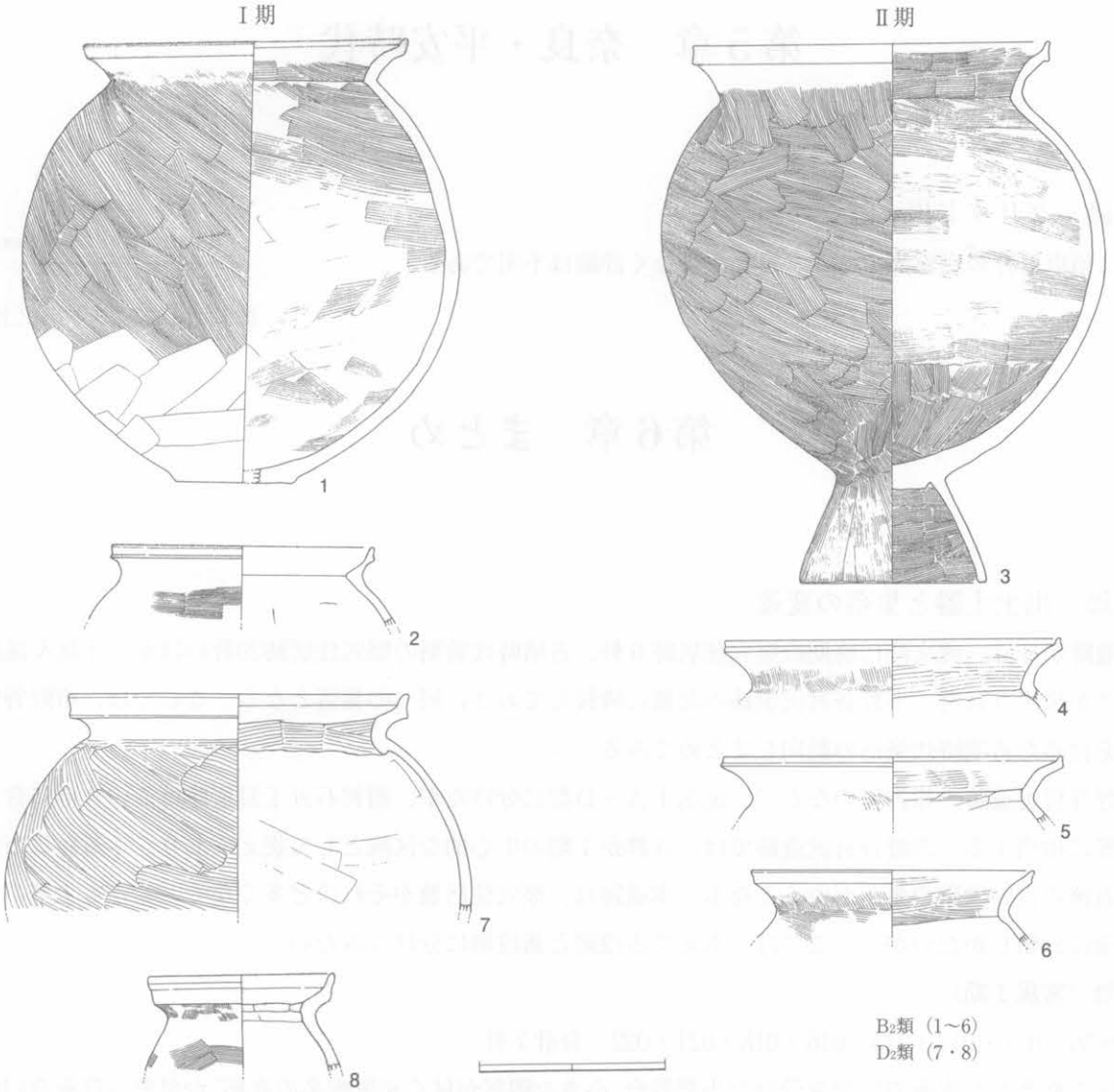
宮尻Ⅰ期とした東海の影響を受けた小型器台、小さな脚部が付く元屋敷系の高杯、台付甕及び複合口縁の壺などで構成される。器台は、器受け部が小さく、裾部が直線的あるいはやや外反気味に開く。ただ、市野谷宮尻遺跡でみられた全体の形状が鼓形に近いものや脚部が内湾気味になるものはみられない。この点からは、古段階は宮尻Ⅰ期のなかでも、比較的新しい様相といえよう。

この時期の良好な資料には、SI－011出土土器群があげられる。器台の器受け部は浅い半球形状を呈し、脚部は比較的短く、外屈する傾向にある。高杯は、元屋敷系の大形の杯部を有するもので、壷は複合口縁になるものが多い。このなかで注目されるのは、いわゆる「受け口」状口縁を呈する甕である（第68図）。このタイプの甕については、比田井氏が詳細に検討し、口縁部や頸部の形状等からＡ～Ｅの５つに分類している[1)]。本遺跡からは数点確認されるが、比田井氏分類のＢとＤに相当し、刻み等の文様が施されないことから、B2・D2類に属するものと思われる。時期的には、Ｂ類を廻間Ⅰ式後半からⅡ式前半併行期とし、Ｄ類は廻間Ⅰ式末からⅡ式初頭併行期としている。宮尻遺跡では、宮尻Ⅰ期を廻間Ⅰ式後半からⅡ期前半と考えており、受け口状口縁甕の時期と合致する。

新段階（宮尻Ⅱ期）

竪穴住居：004～010・012・015・017・019・020・023　合計13軒

古段階の土器と比較してもそれほど大きな変化は伺われないが、器台や高杯の脚部の広がりが大きくな



第68図 「受け口」状口縁

り、裾部の広がりも同様に大きくなる傾向が認められる。甕類も胴部上半に最大径を有するタイプが多くなり、台付き甕の台部は直線的に高く広がる。この時期には、東海系のＳ字口縁甕がいくつかみられる。SI－20の台付き甕は、最大径を胴部上位に有し、Ｓ字口縁部分が形骸化してくる。廻間Ⅱ式後半からⅢ式にかけての資料と思われる。また、古段階にみられた受け口状口縁甕も引き続き認められる。この段階はB2類のみで、SI－012の例をみると、口縁部形態は古段階とそれほど変わらない。しかし、胴部の最大径が上位にある点は新しい様相と思われる。また、SI－004の同タイプと考えられる甕は、口唇部の立ち上がりが形骸化しており、やはり新しくなると思われる。

このように、西初石五丁目遺跡は、市野谷宮尻遺跡のⅠ・Ⅱ期段階の竪穴住居で構成される。宮尻のＡ群に含まれることから、当然の状況と思われるが、Ⅲ期以降の住居は認められない。市野谷宮尻遺跡の集落の変遷で、東側に移行するに従い、新しい時期の竪穴住居が多くなる傾向を指摘したが、本遺跡はまさに西側端部に位置し、集落形成当初から発展段階の様相を示していよう。この点で注目される遺跡に、市野谷入台遺跡があげられる。現在整理中のため明確にはできないが、古墳時代前期から中期にかけての集

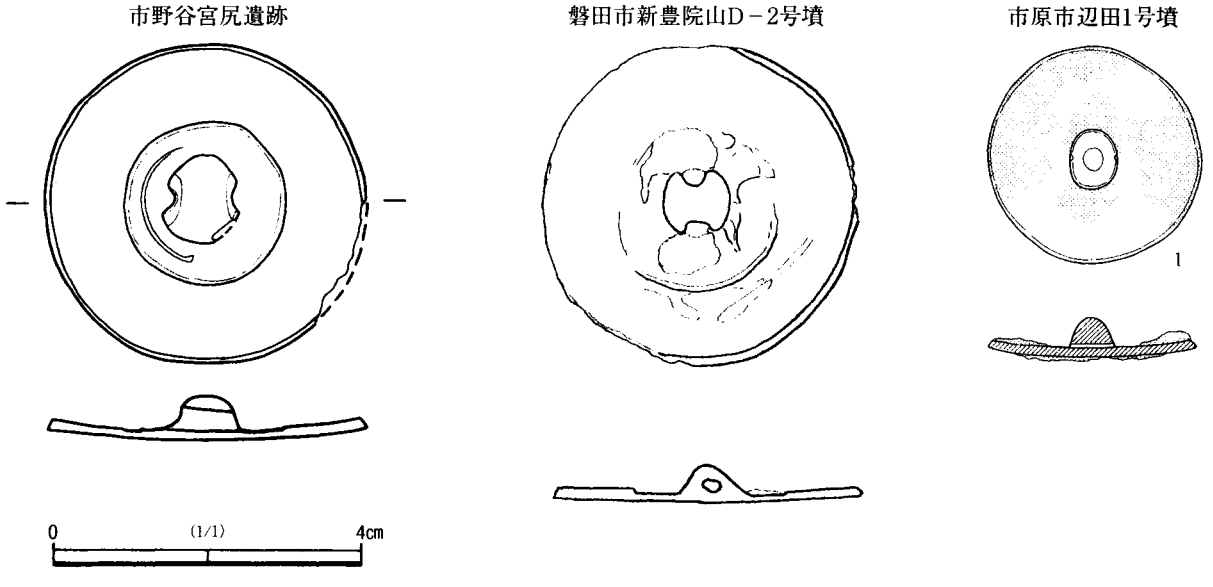
落で、市野谷宮尻遺跡から続く同一の集落と考えられる。宮尻遺跡でD群とした竪穴住居群に含まれる位置にある住居は古墳時代前期であり、空白地域を挟んでさらに東側に中期の集落が展開している。中期の集落からは、剣形品をはじめ多くの石製模造品が検出され、工房跡と思われる遺構も確認されている。中期の住居軒数は比較的多いが、後期以降の住居はまったくみられない。この3遺跡で台地上の集落の全体像を伺うことができ、江戸川側の台地西側から集落が形成され、徐々に東側に広がり、最終的には東側に拠点を移しその後台地上から姿を消すようになる。集落開始の契機は、市野谷宮尻遺跡で示したように他地域からの移植集団による新たな開発があったものと思われる。

第2節　竪穴住居跡出土の素文鏡

本遺跡で検出された遺物のなかで注目されるものに、SI－007竪穴住居跡から出土した小形仿製鏡があげられる。非常に良好な遺存状況で、ほぼ完形である。第13表にあるように、県内における素文鏡の出土遺跡は本遺跡を含めても6例と少なく、集落内出土に限ると4例確認される。美生遺跡群第6地点出土の素文鏡は、遺構に伴うものではないが、弥生時代から古墳時代にかけての集落は竪穴住居のみで構成されており、集落に伴うものと判断される。地域的にみると、これまでは市原市及び袖ヶ浦市という上総北西部、東京湾岸に限られていたが、下総からの出土ははじめてである。本遺跡とほかの遺跡の大きな違いはその

第13表　千葉県内出土素文鏡

遺　跡　名	出土遺構	遺構の時期	所　在　地	面径(cm)	備　　考
草刈六之台遺跡	823号住居	中期後半	市原市ちはら台南	2.95	
西谷古墳群	18号墳	終末期	市原市加茂字西谷	2.12	
辺田1号墳	中央施設	前期前半	市原市惣社字辺田	2.85	
草刈遺跡	L区37号住居	前期	市原市ちはら台西	2.4	鏡背に赤色顔料付着
美生遺跡群第6地点	遺構外	前期	袖ヶ浦市大字久保田字須田連	2.65	
西初石五丁目遺跡	SI－007住居	前期前半	流山市西初石五丁目	4.1	



第69図　各地の素文鏡

面径に表れている。本遺跡例は4cmを超すのに対し、ほかはすべて3cm以下となっている。これらはいずれも鏡背面が平坦で、本例のように内区と外区に段差を有するものではない。森岡氏は、「近畿系小形仿製鏡の二つの方向」のなかで、「布留式期に向けての退化・素文化・衰微の方向であり、やがては弥生期小形鏡の終熄へと至る。」[2] としている。3cm以下の素文鏡はまさにこの流れの終焉期に属するものと思われ、西初石五丁目遺跡のような例はその前段階に位置するのであろう。県外に類例を求めてみると、静岡県磐田市新豊院山D2号墳の主体部から三角縁吾作銘四神四獣鏡とともに素文鏡が1点出土している。法量は本遺跡例と同様で、やはり内区と外区の境に段があり、内区にわずかにもりあがった文様状表現の残存がみられるとされる。報文では、この鏡が出土した2号墳は、前期中葉に築造されたものと考えられており、西初石五丁目遺跡の鏡は、ほぼ同様の時期かやや新しくなるかもしれない。辺田1号墳の報告で、木對氏は、新豊院山D2号墳の素文鏡は、辺田1号墳より先行する可能性が高いとしている[3]。西初石五丁目遺跡例が新豊院山D2号墳の鏡ときわめて類似している状況から、辺田1号墳よりも先行する鏡と考えられる。辺田1号墳の築造時期は、4世紀第1四半期前半代、土器型式では布留Ⅰ式併行期、廻間Ⅲ式2段階から3段階に相当するものとしている。市野谷宮尻遺跡では、布留Ⅰ式併行期を宮尻Ⅲ期と想定しており、西初石五丁目遺跡出土の鏡は、宮尻Ⅱ期に対応するものと思われる。この時期については、先述した出土土器や集落の変遷と合致するものである。

この鏡については、出土竪穴住居の様相から廃棄状況を伺うことができる。覆土上層出土という状況からみると、本住居の廃絶時に遺存していたものではないと考えられる。さらに詳しくみると、床面や壁は火を受けておらず、覆土中層に焼土の堆積がみられる。この点からは、竪穴住居廃絶後の窪みを利用して焼土等の投棄が行われ、さらに鏡や手捏ね土器などを一括して廃棄したことが想定される。すなわち、祭祀行為に伴って使用された鏡や手捏ね土器の廃棄場所として捉えることができよう。

古墳時代前期の小形仿製鏡が集落に伴って出土する点については、これまでもいくつか研究がなされている。弥生時代の銅鐸や銅矛などを使った「地的宗儀」から、銅鏡を用いた古墳時代の「天的宗儀」へと変化していくことが論じられ、古墳時代的宗儀は、畿内から東海、関東へと広がっていったことも指摘されている[4]。

市野谷宮尻遺跡では、宮尻Ⅱ期の段階に屋内祭祀や屋外祭祀が行われていたことを想定したが、鏡を出土したSI－007の周辺にある竪穴住居跡からは、手捏ね土器やミニチュア土器が出土している。特にSI－005からは土製の勾玉が検出されており、鏡や勾玉を用いた祭祀が付近で行われていたことが想定される。また、市野谷宮尻遺跡を含む本集落は、宮尻Ⅰ期の段階に他地域からの移植集団によって開発された可能性が高いことを呈示した。その集団は、宮尻遺跡出土の墨書土器の検討から、伊勢湾周辺を拠点としていたと想定され、鏡を用いた祭祀が東海から関東へと広がっていくことと関連して注目される。

註1　比田井克人　2004「受け口状口縁甕の出自」『古墳出現期の土器交流とその原理』雄山閣

2　森岡秀人　1989「銅鏡」『季刊考古学』第27号　雄山閣

3　木對和紀　2004「辺田1号墳の位置づけ」『市原市辺田古墳群・御林跡遺跡』市原市教育委員会

4　鈴木敏弘　2007「土鐸から土鏡の祭祀へ－集落の祭りと祭祀同盟」『原始・古代日本の祭祀』同成社

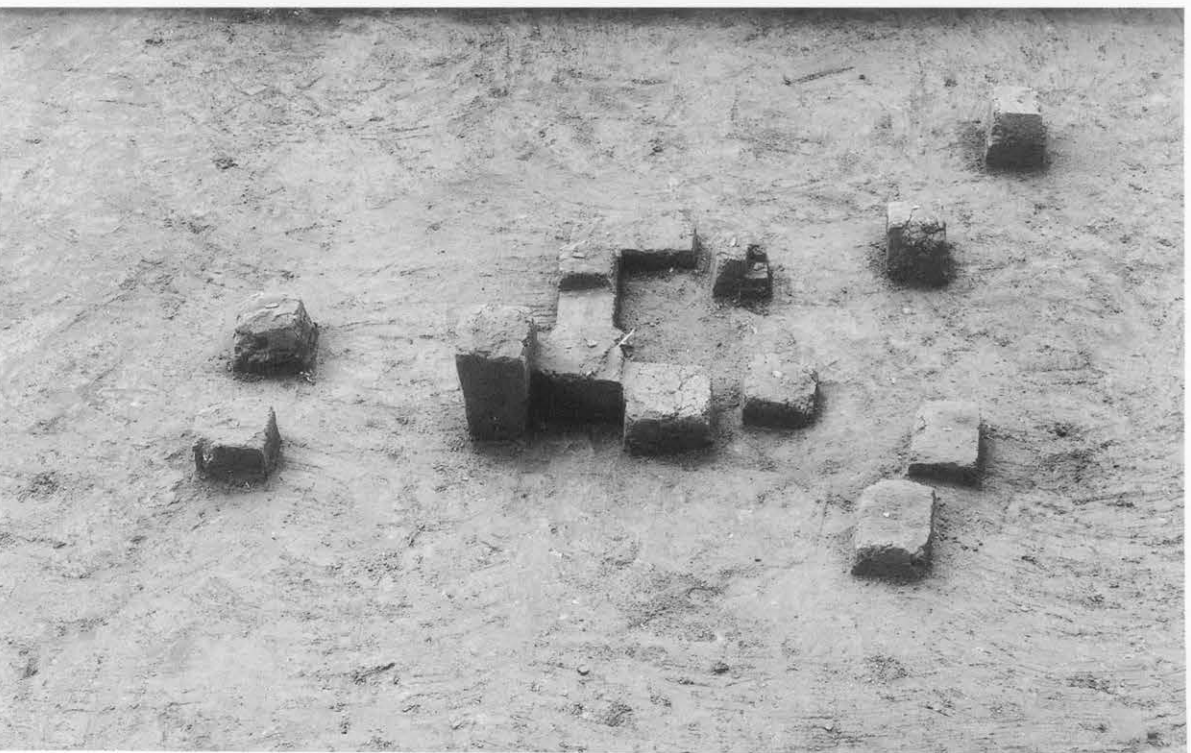
写　真　図　版

遺跡周辺航空写真（1/10,000）

図版2

第１集中地点

第３集中地点



第４集中地点

SI－001

SI－001炉

SI－003

SI－003遺物出土状況

SI－024

SI－024遺物出土状況

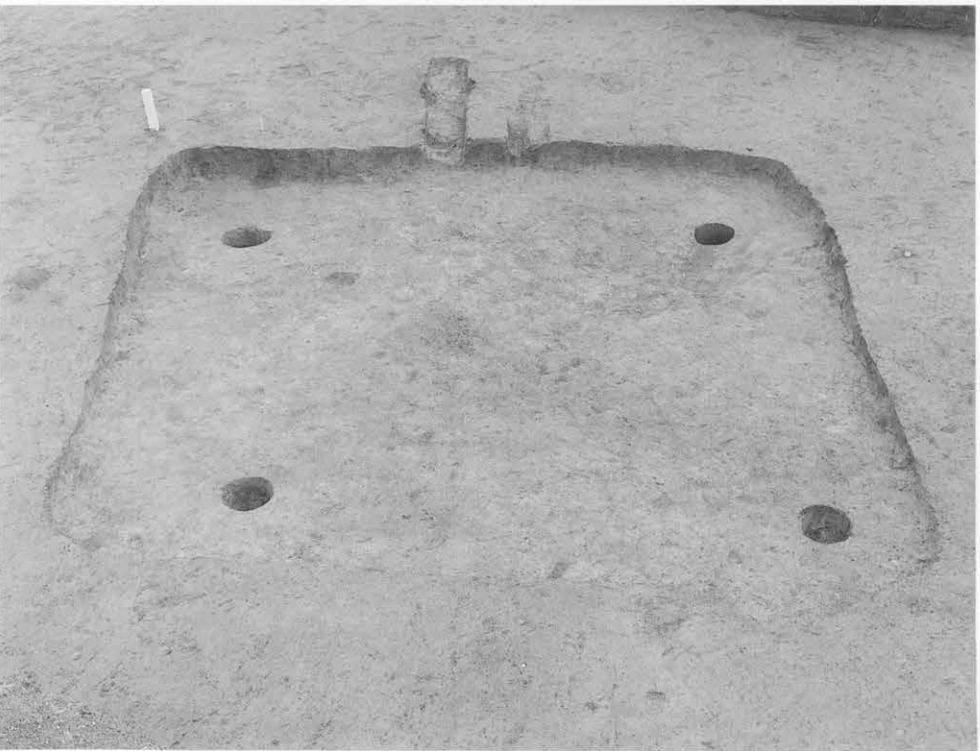
図版4

SI－025

SI－025炉

SI－026

SI－026遺物出土状況



SI－027

SI－027遺物出土状況

SI－004

SI－005

SI－006

SI－006遺物出土状況

図版6

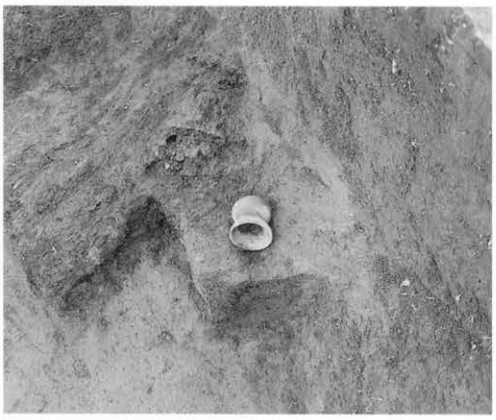
SI－007

SI－008

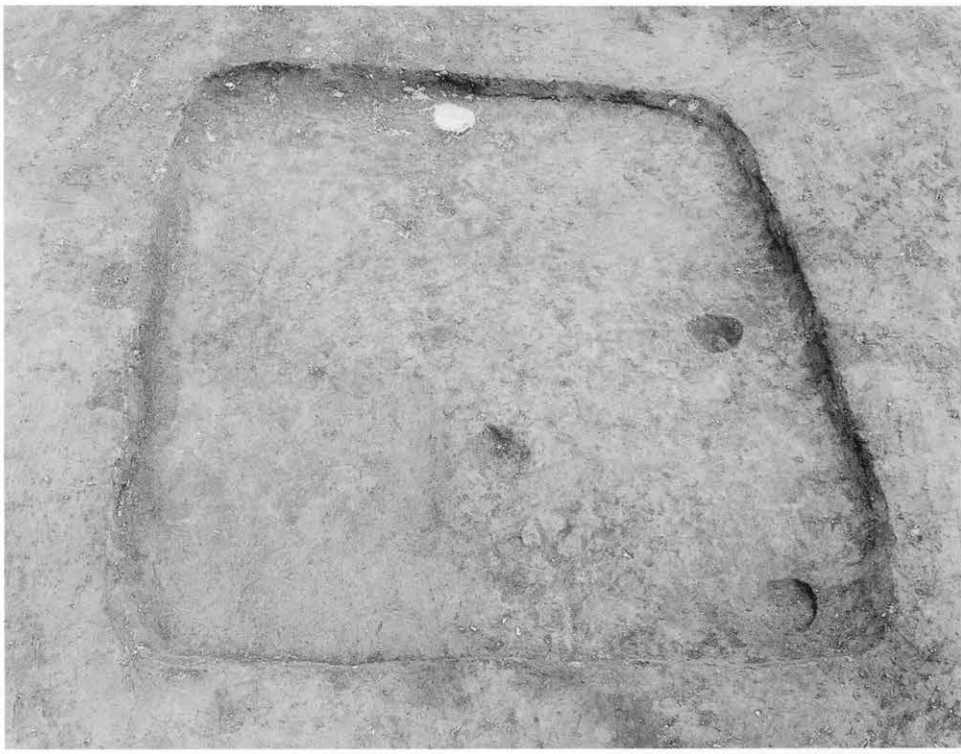
SI－009炭化材出土状況

SI－009

SI－009遺物出土状況

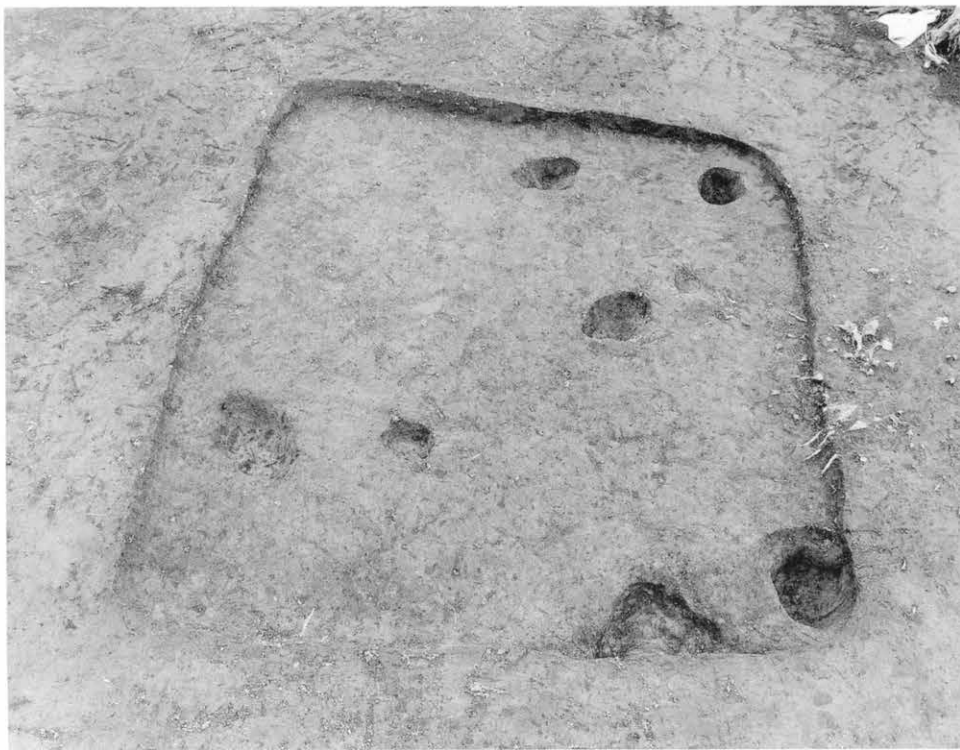


SI－010



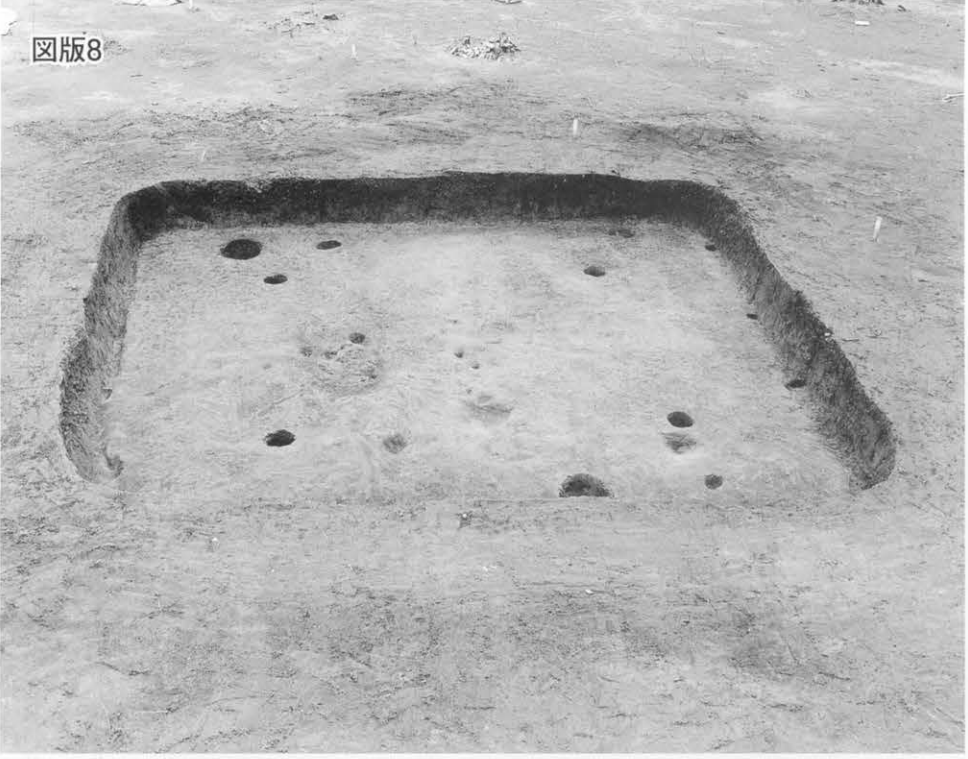
SI－010遺物出土状況

SI－011



SI－011遺物出土状況

図版8



SI－012

SI－012遺物出土状況

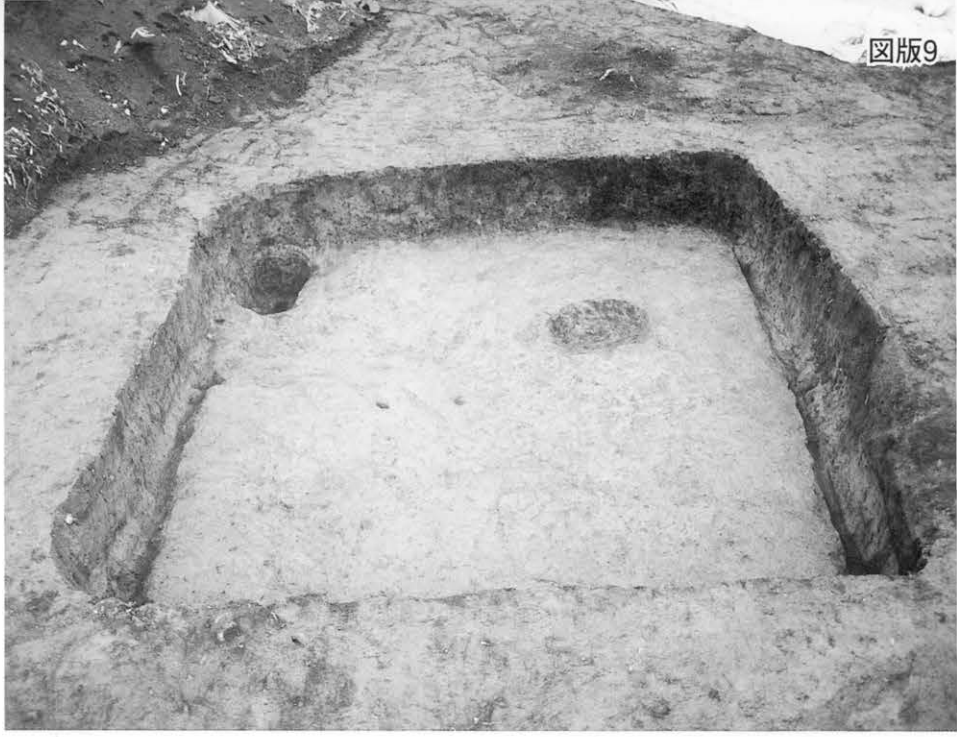
SI－013

SI－013遺物出土状況

SI－014

SI－014遺物出土状況

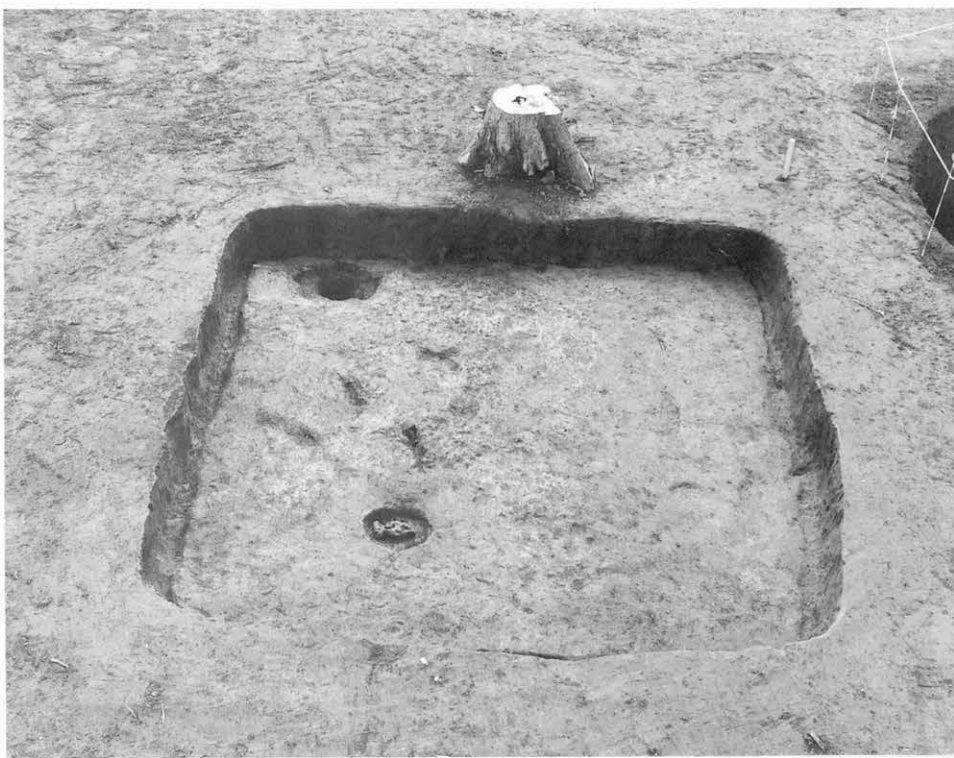
SI－015



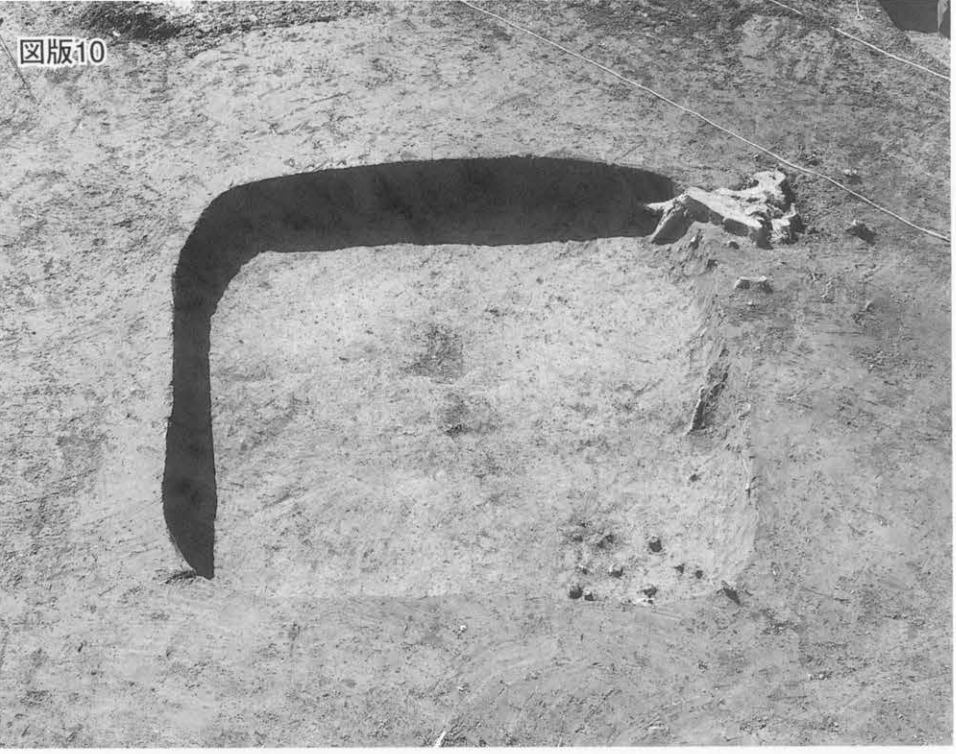
SI－016

SI－016炉

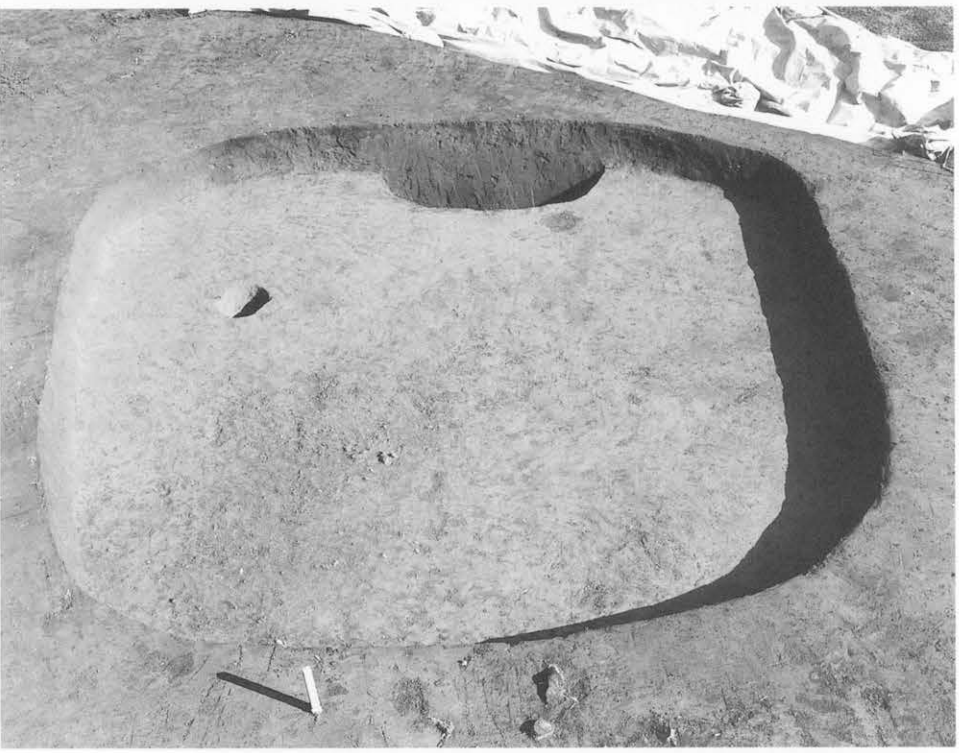
SI－017



図版10



SI－018



SI－019

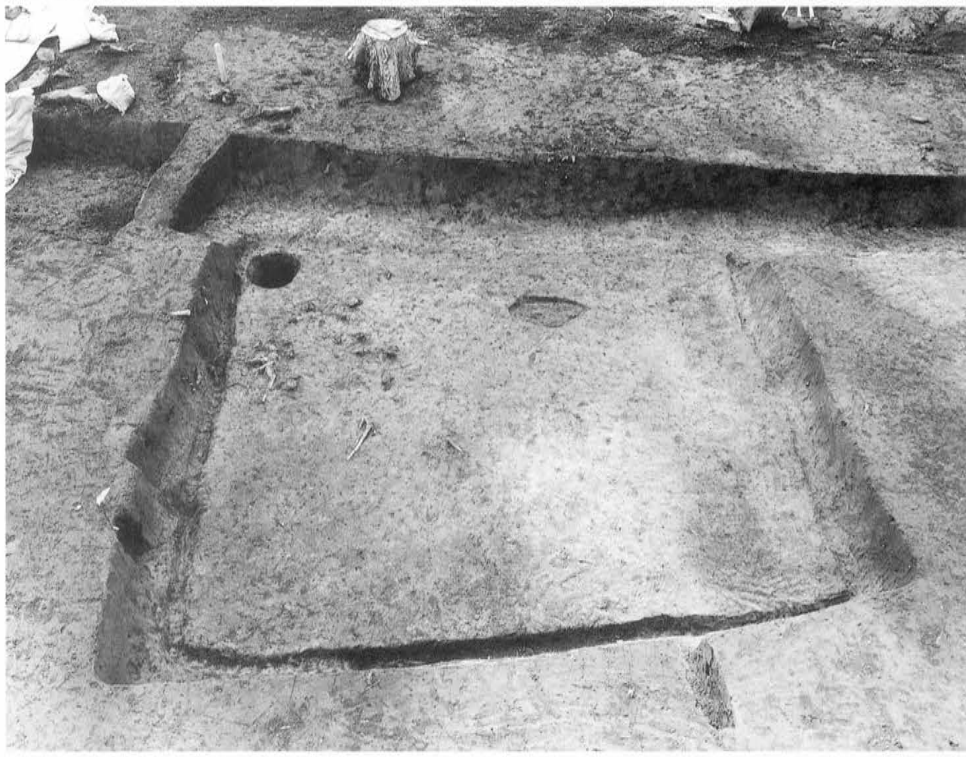
SI－020

SI－020遺物出土状況

SI－021

SI－021遺物出土状況

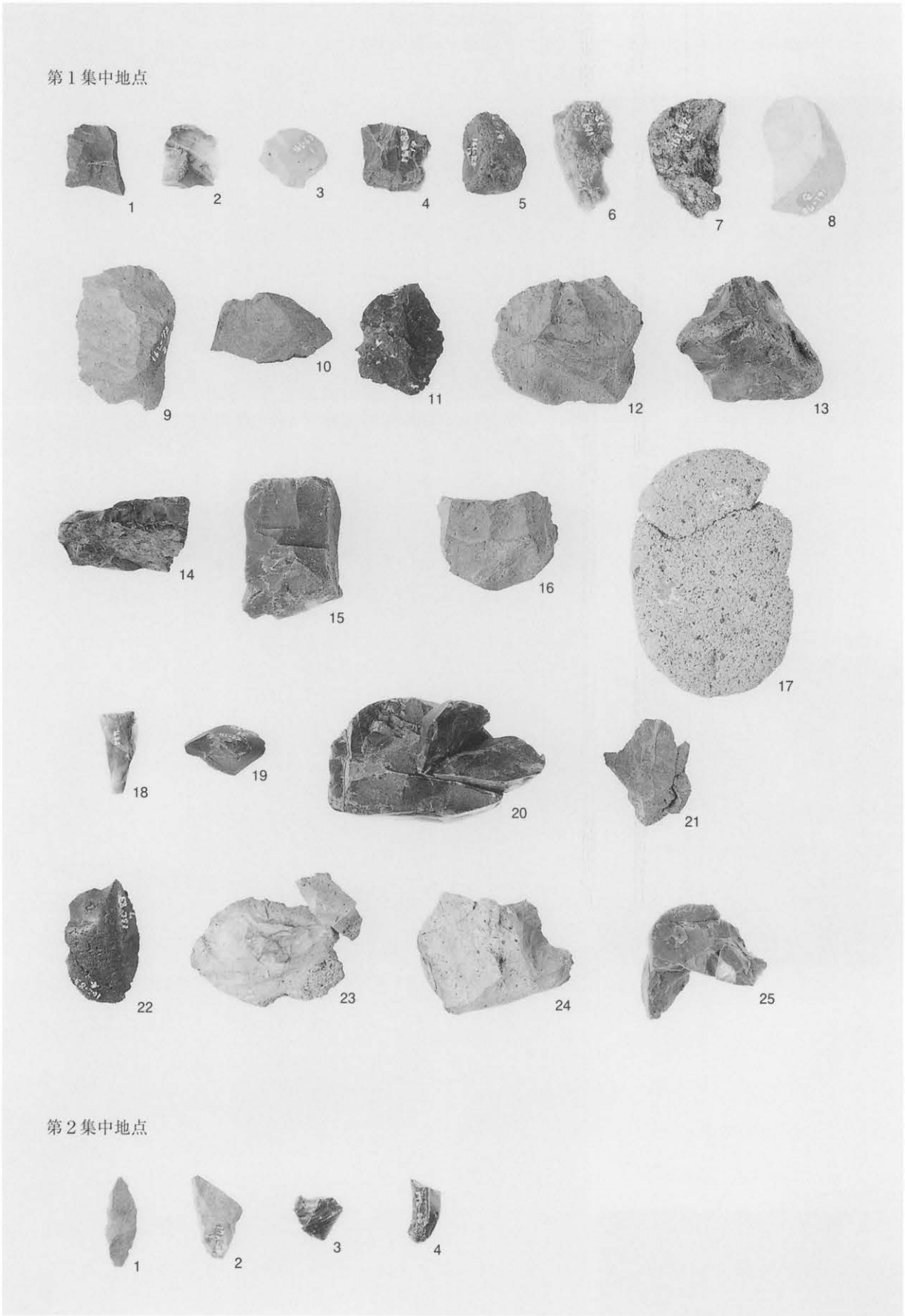
SI－022



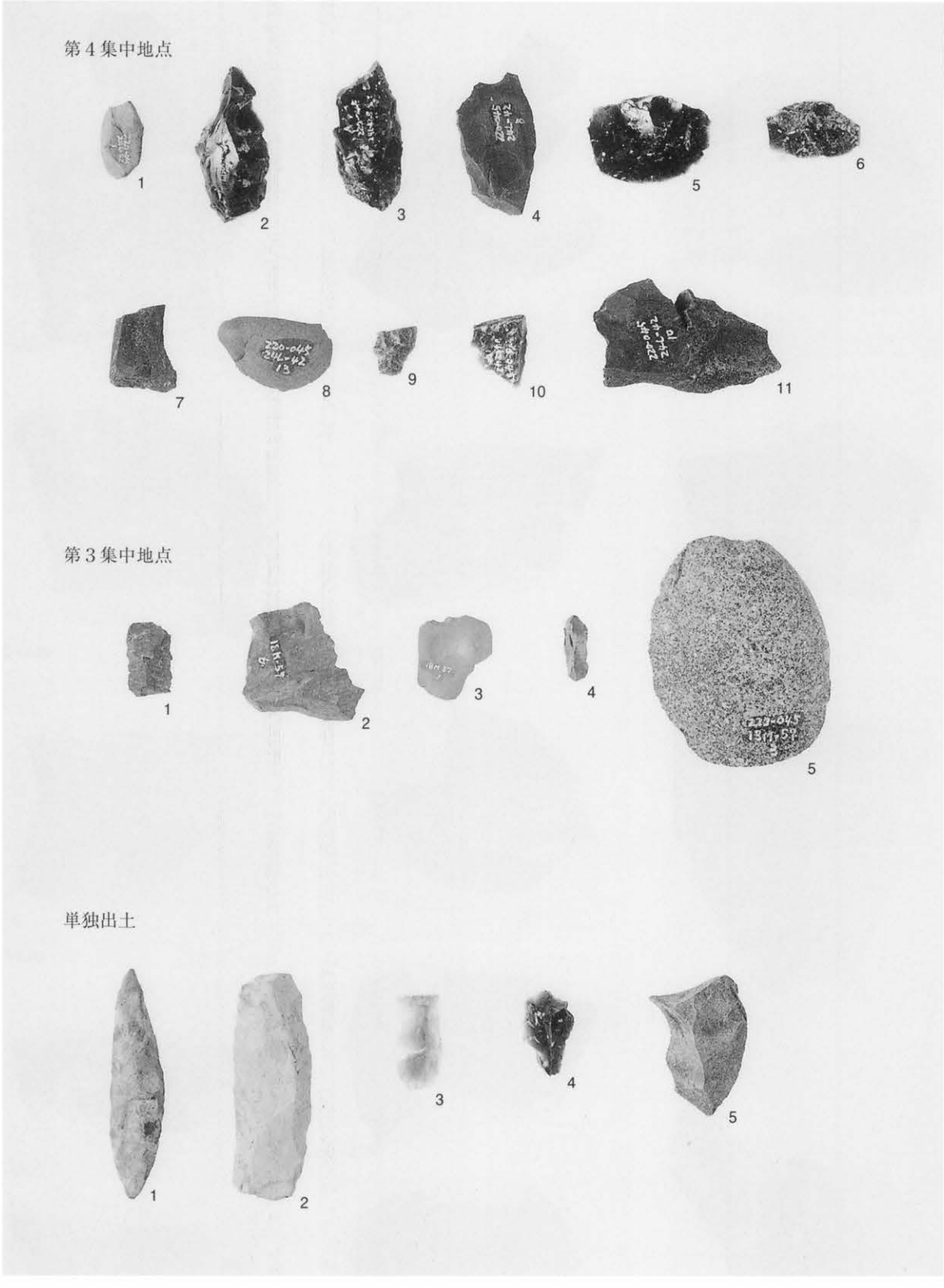
SI－022遺物出土状況

SI－023

SI－023遺物出土状況



第１・２集中地点出土石器



第３・４集中地点、単独出土石器

001−1

003−1

024−3

024−1

024−24

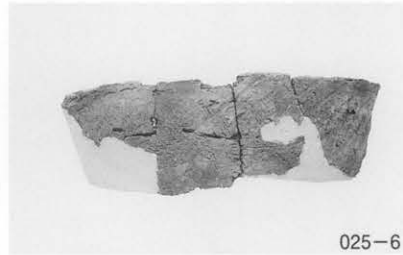
024−25

025−1

025−2

025−5

025−3


025−6

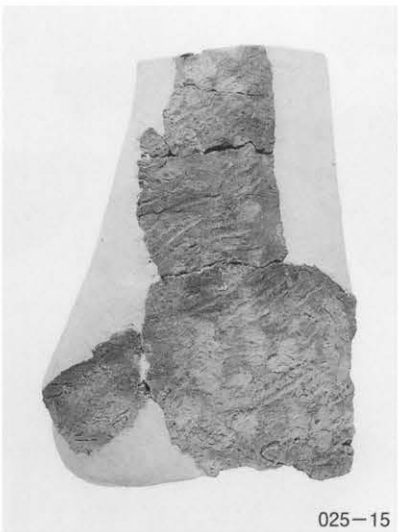
025−7

025−4

025−9

竪穴住居跡出土縄文土器（1）

025−14


025−15

025−16

025−17

027−1

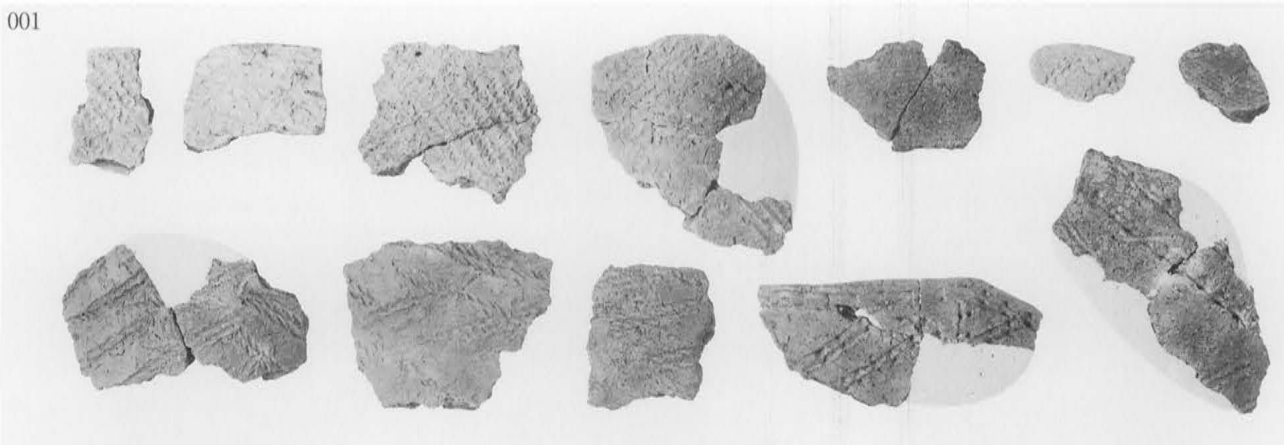
027−2

027−3

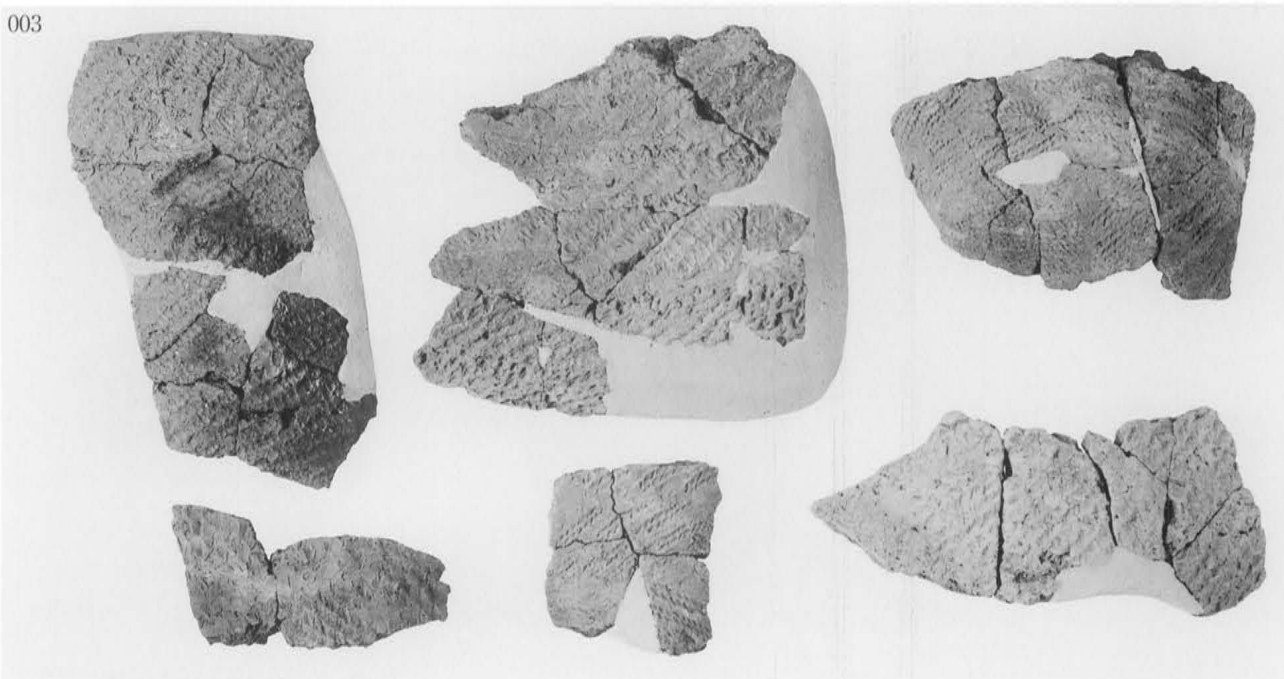
027−4

竪穴住居跡出土縄文土器（2）、グリッド出土縄文土器（1）

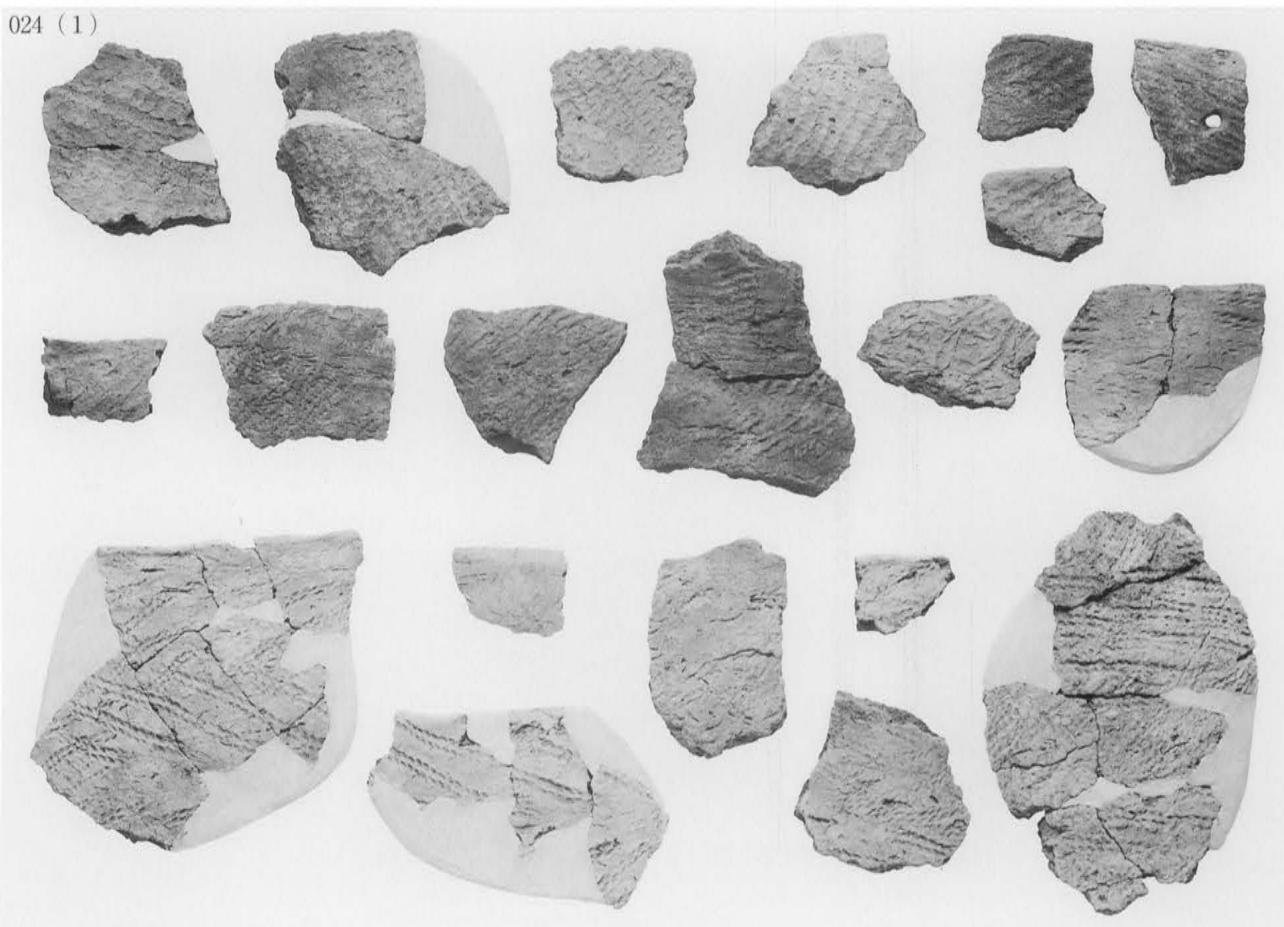
001



003



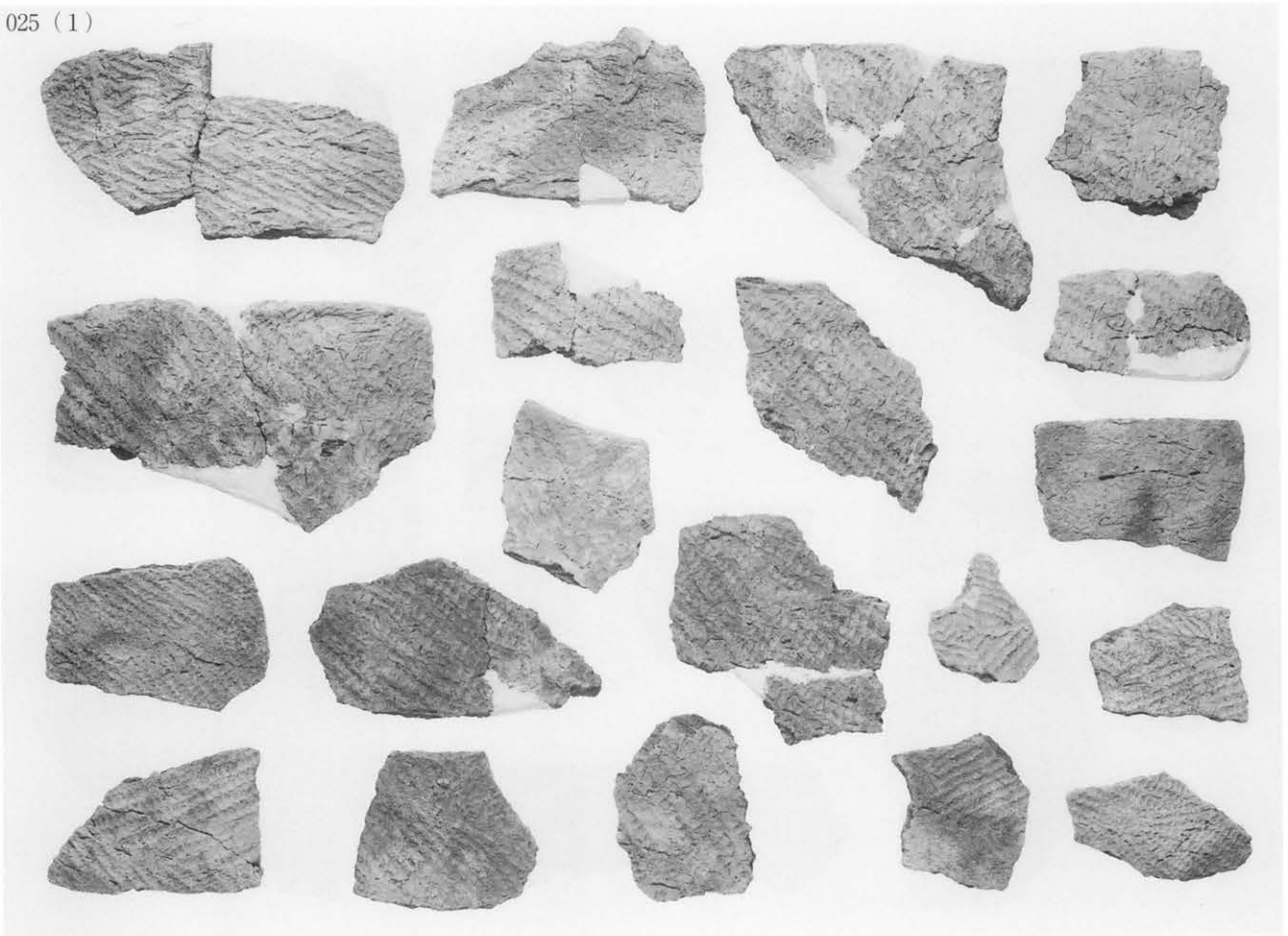
024（1）



竪穴住居跡出土縄文土器（3）

024（2）

025（1）



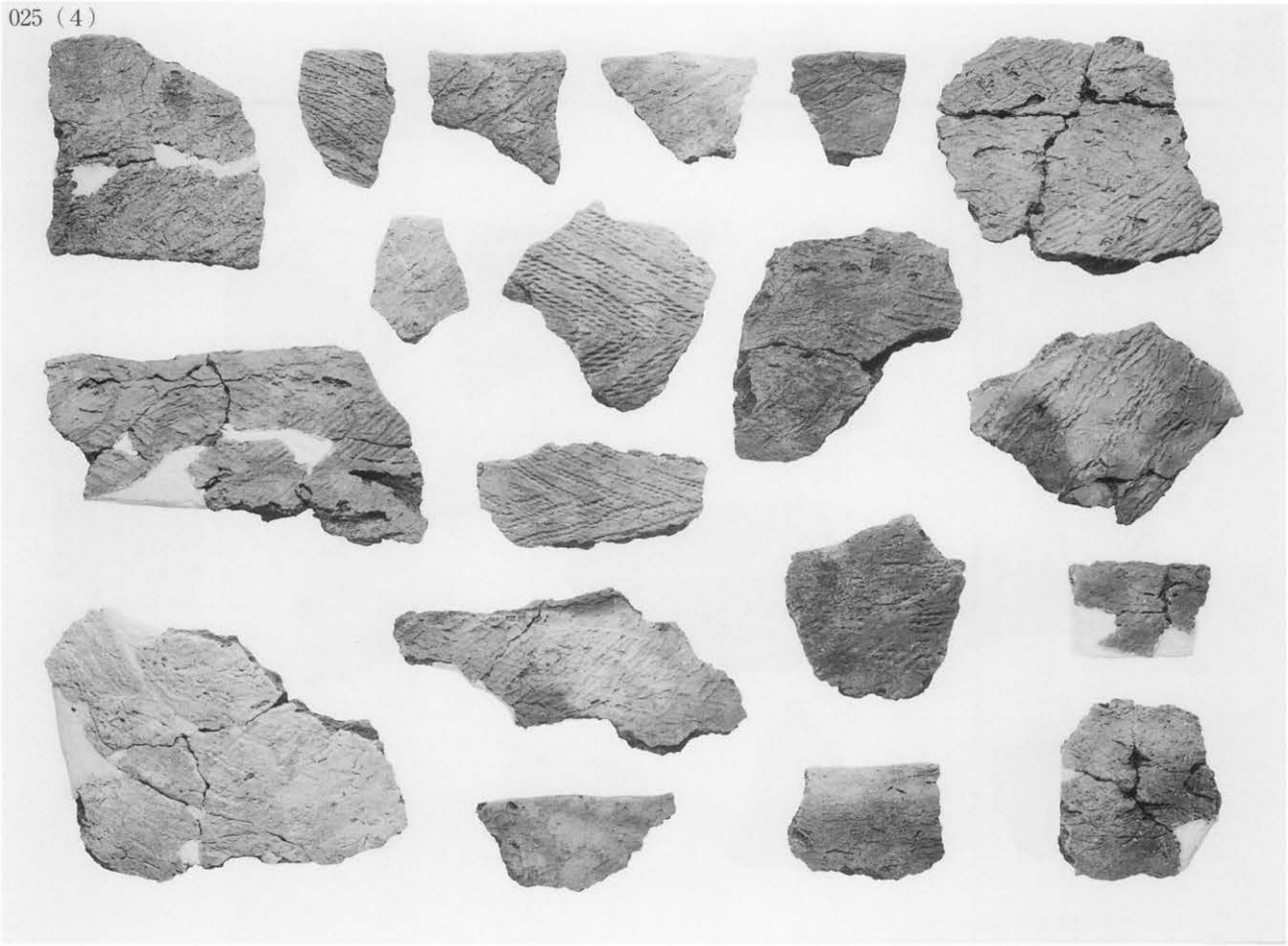
竪穴住居跡出土縄文土器（4）

025（2）

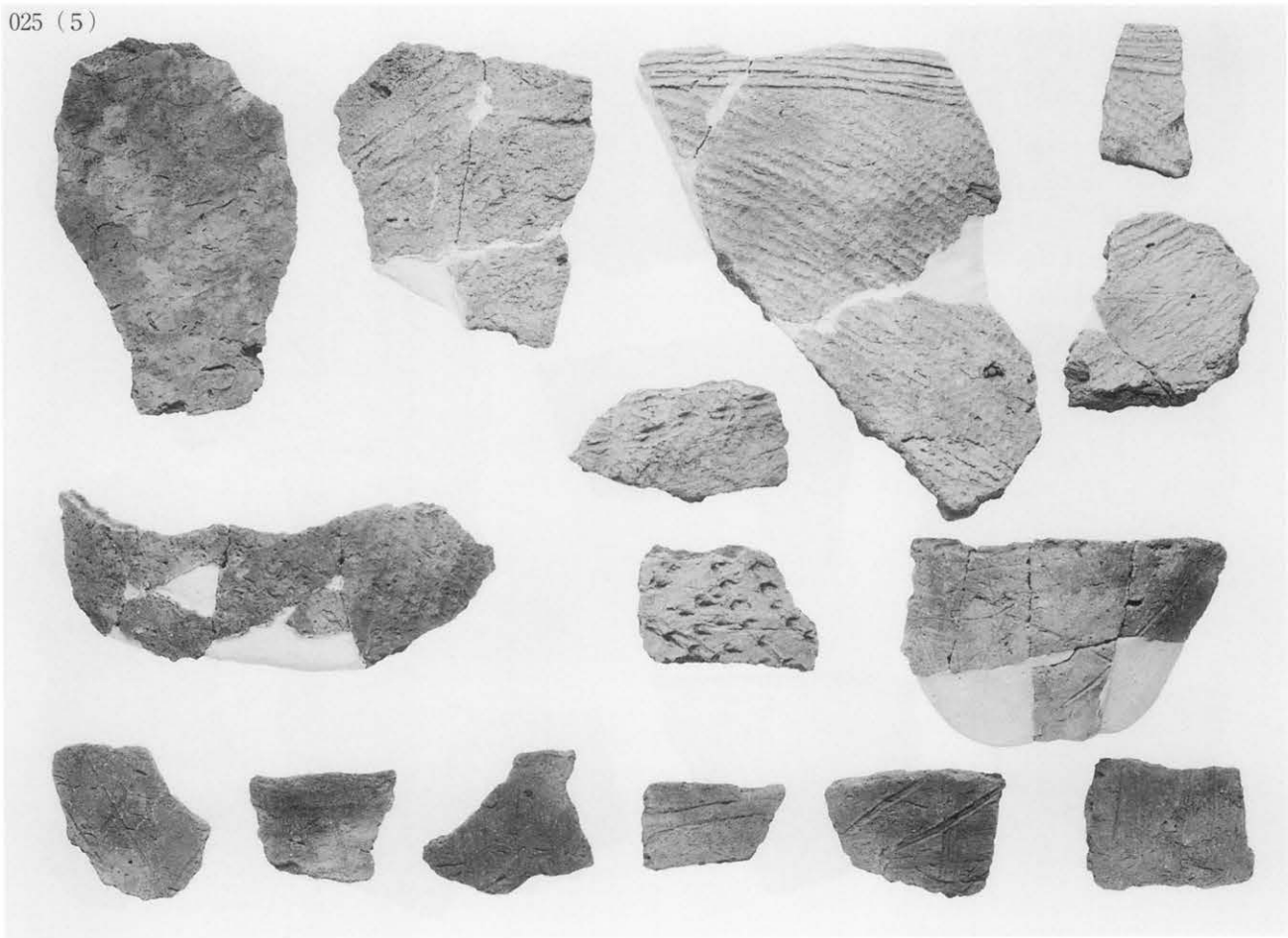
025（3）

竪穴住居跡出土縄文土器（5）

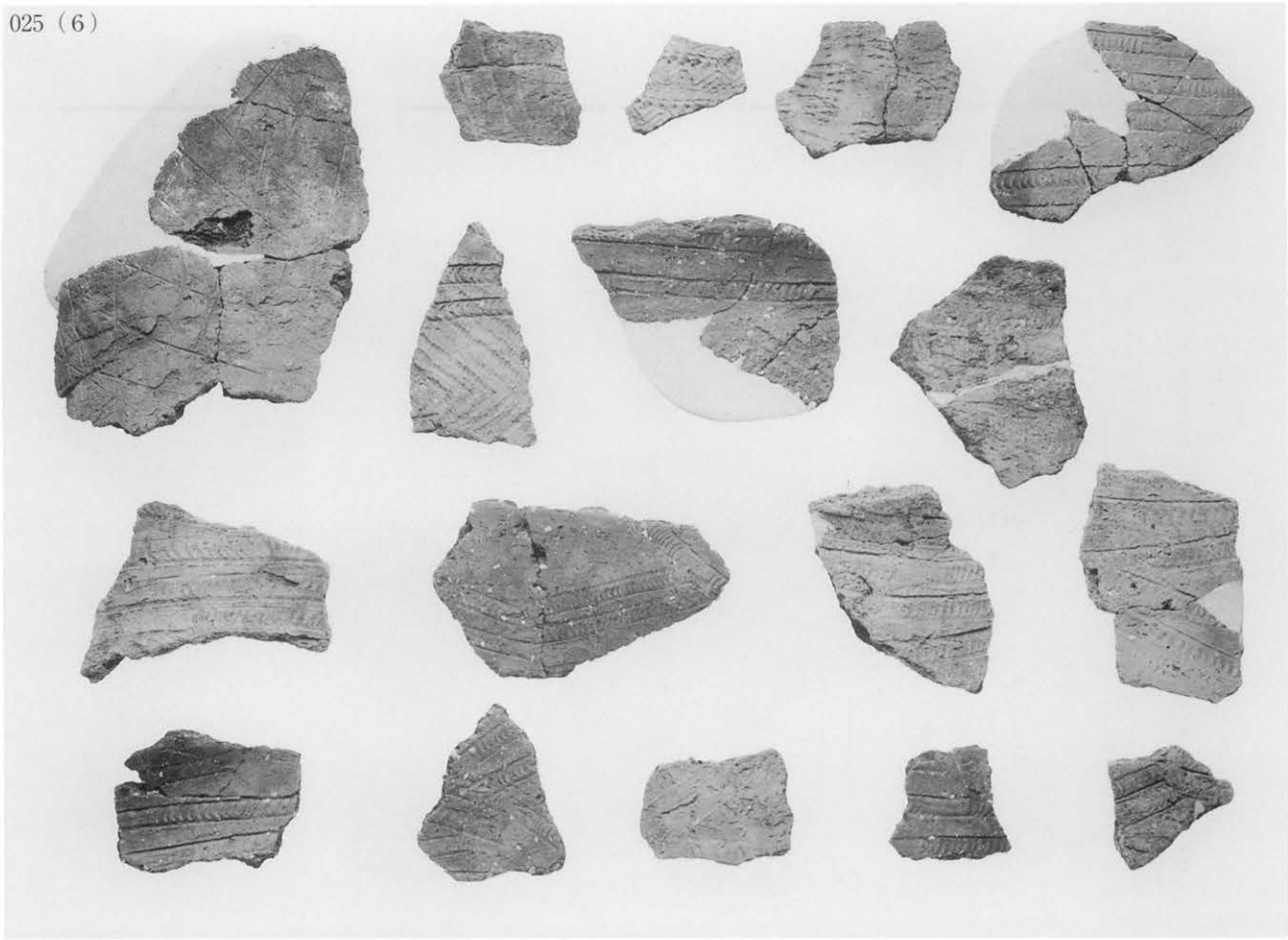
025（4）

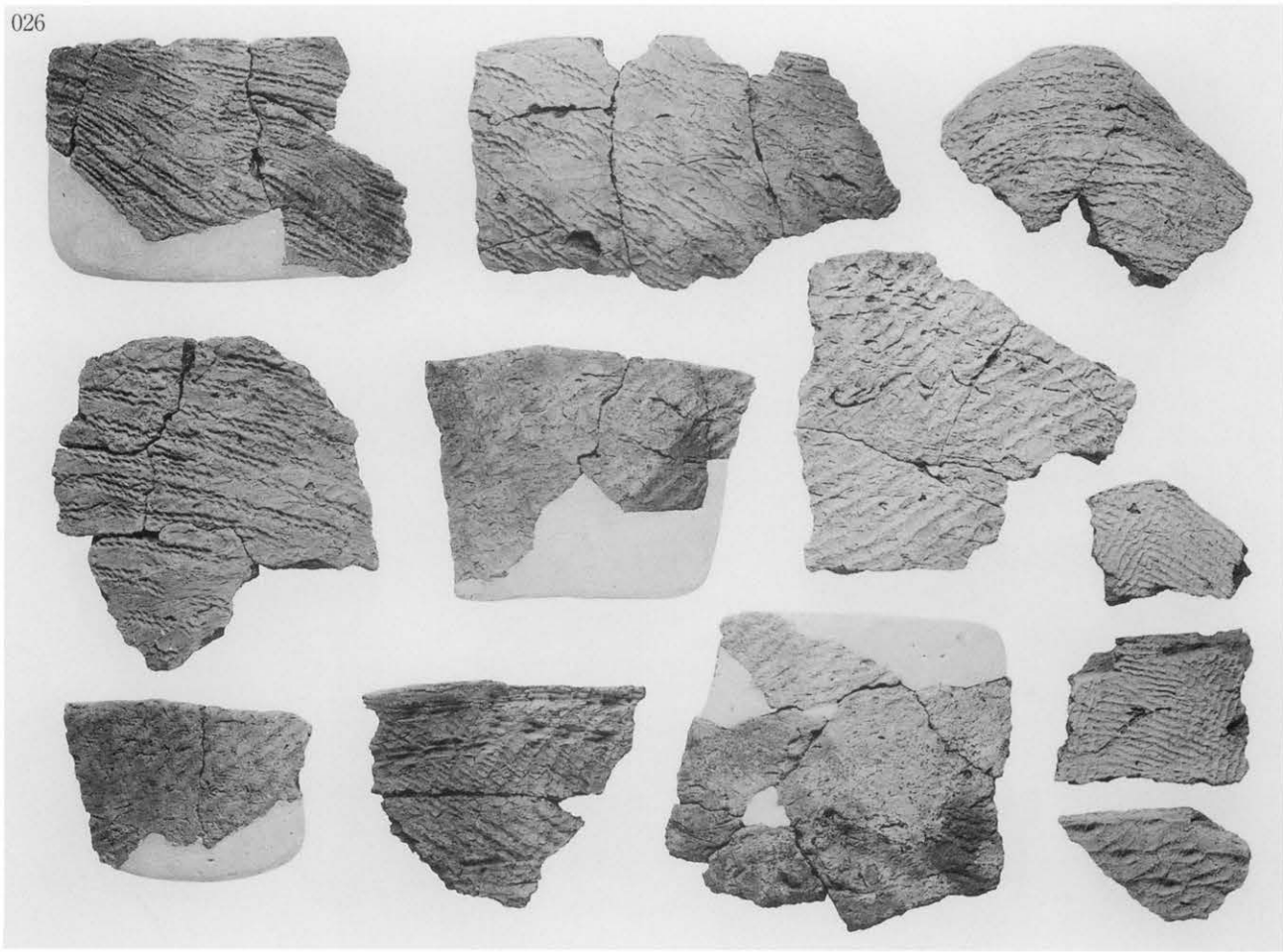


025（5）



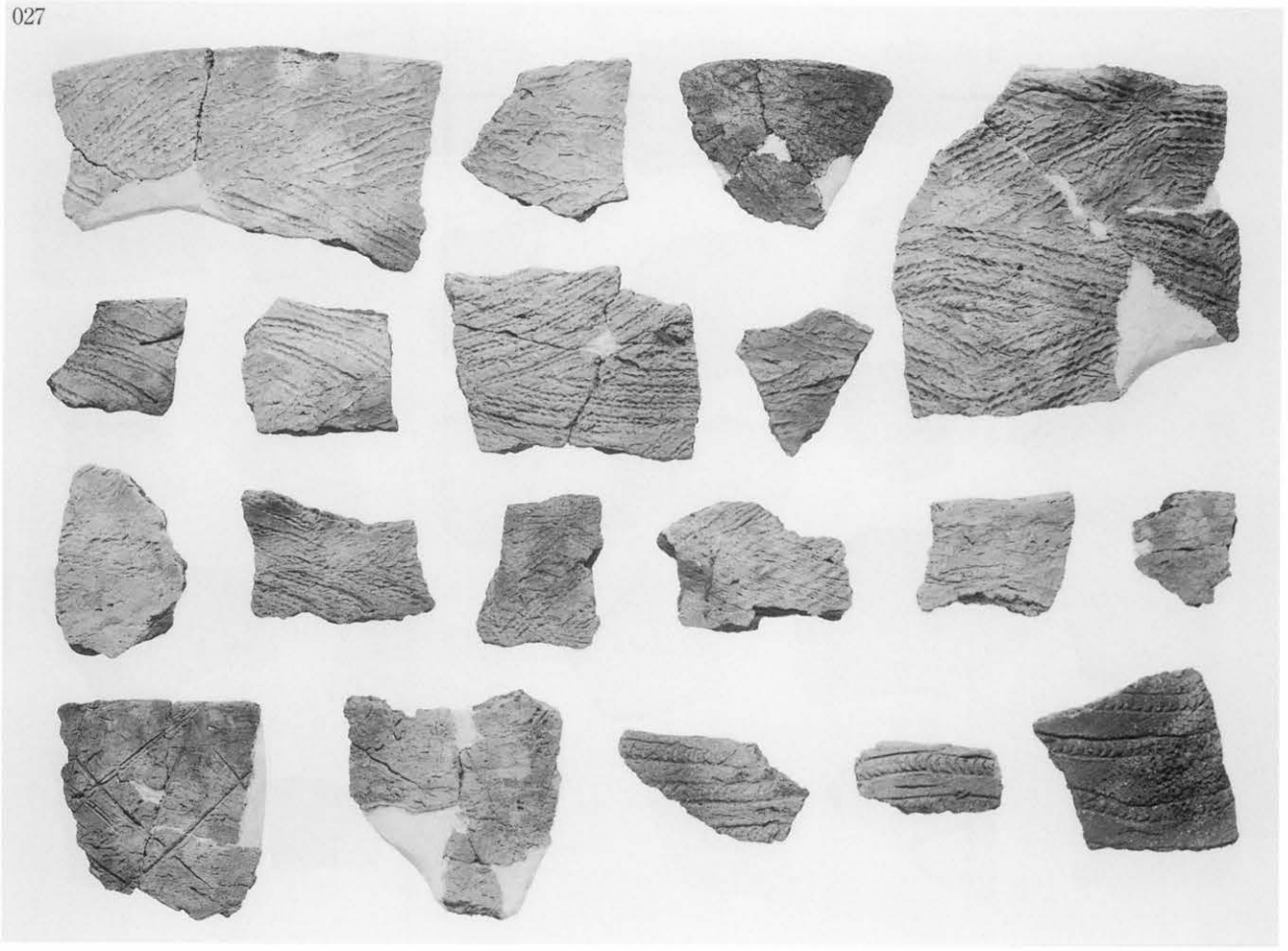
竪穴住居跡出土縄文土器（6）

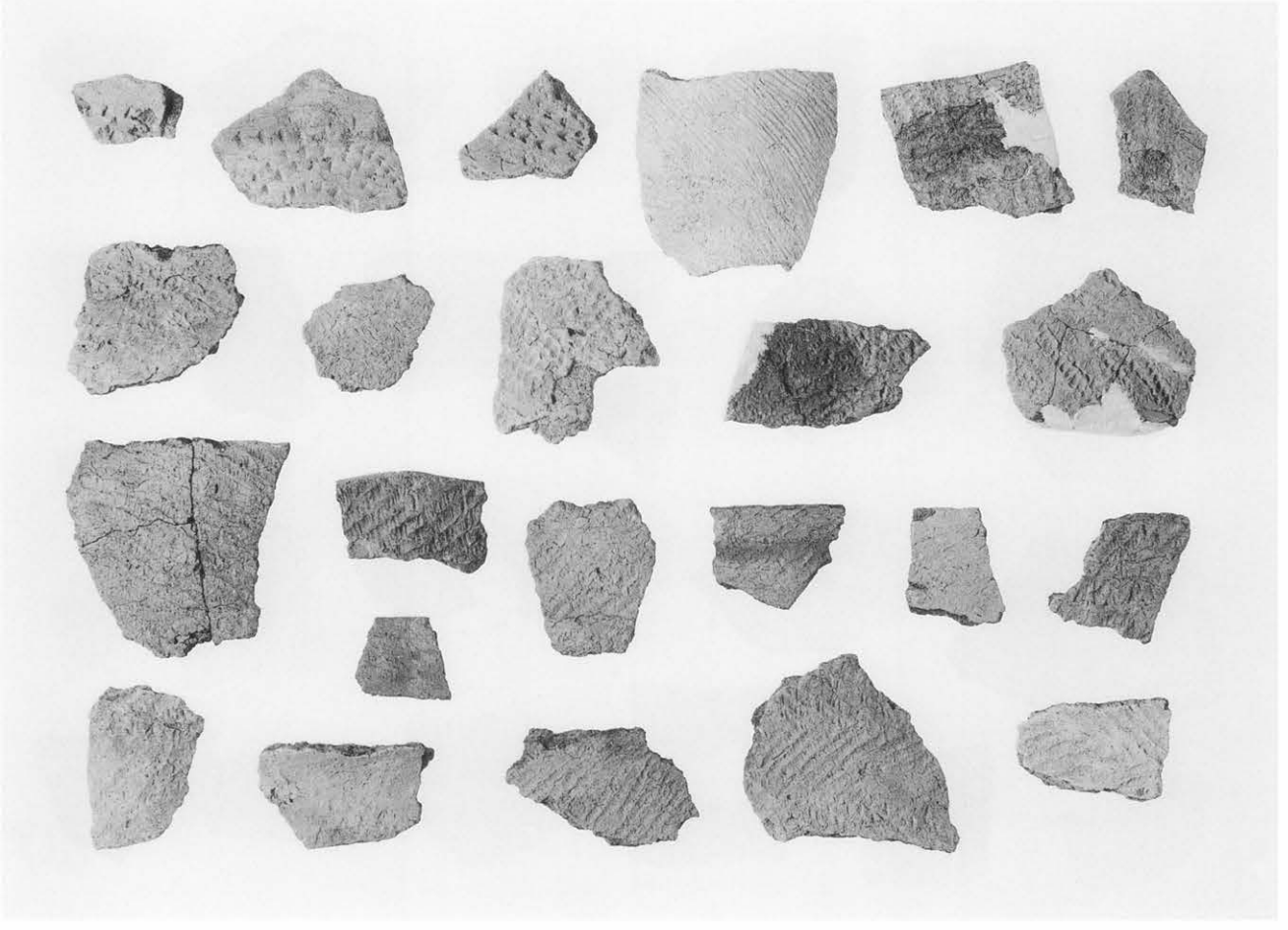




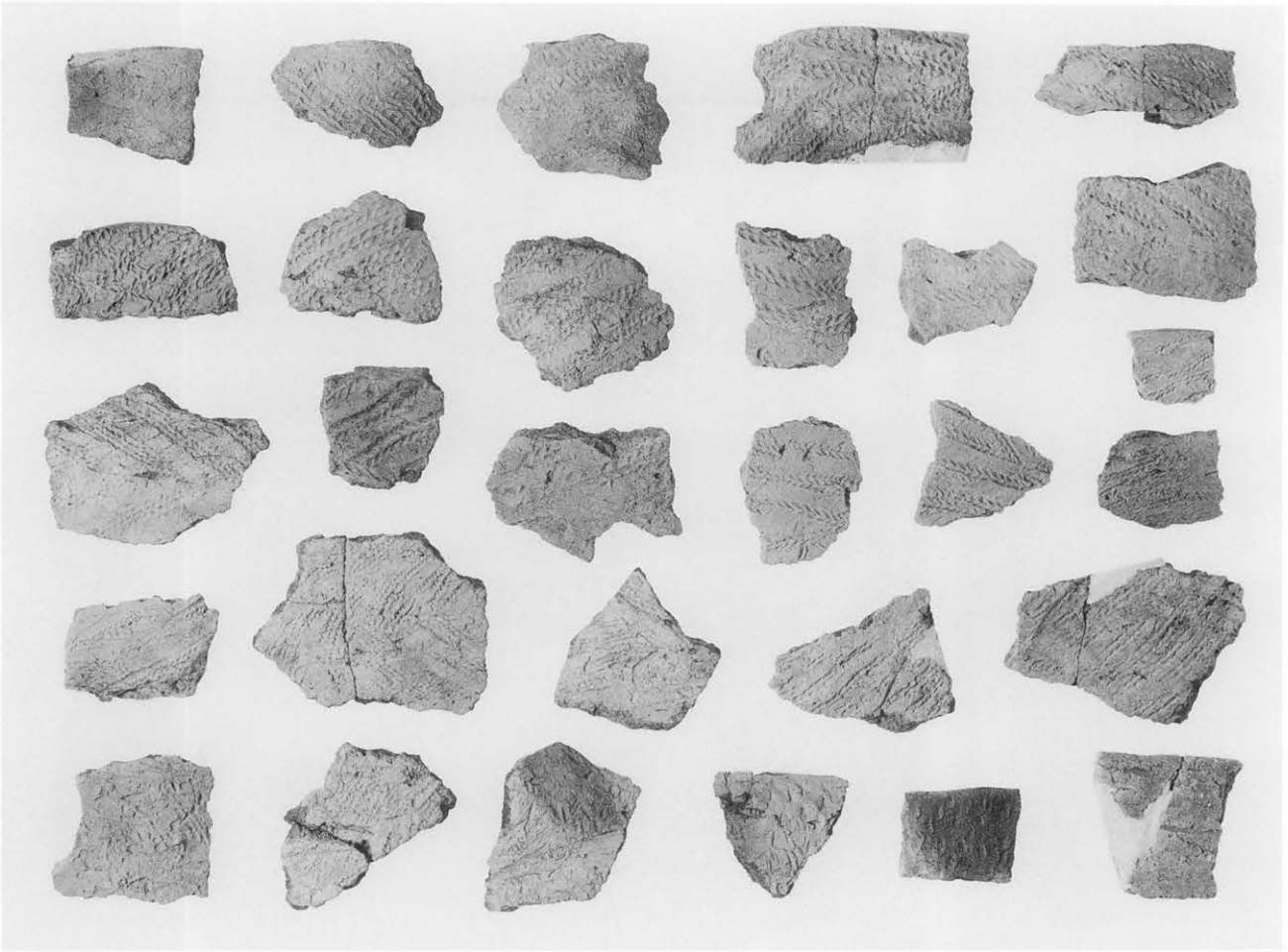
竪穴住居跡出土縄文土器（7）

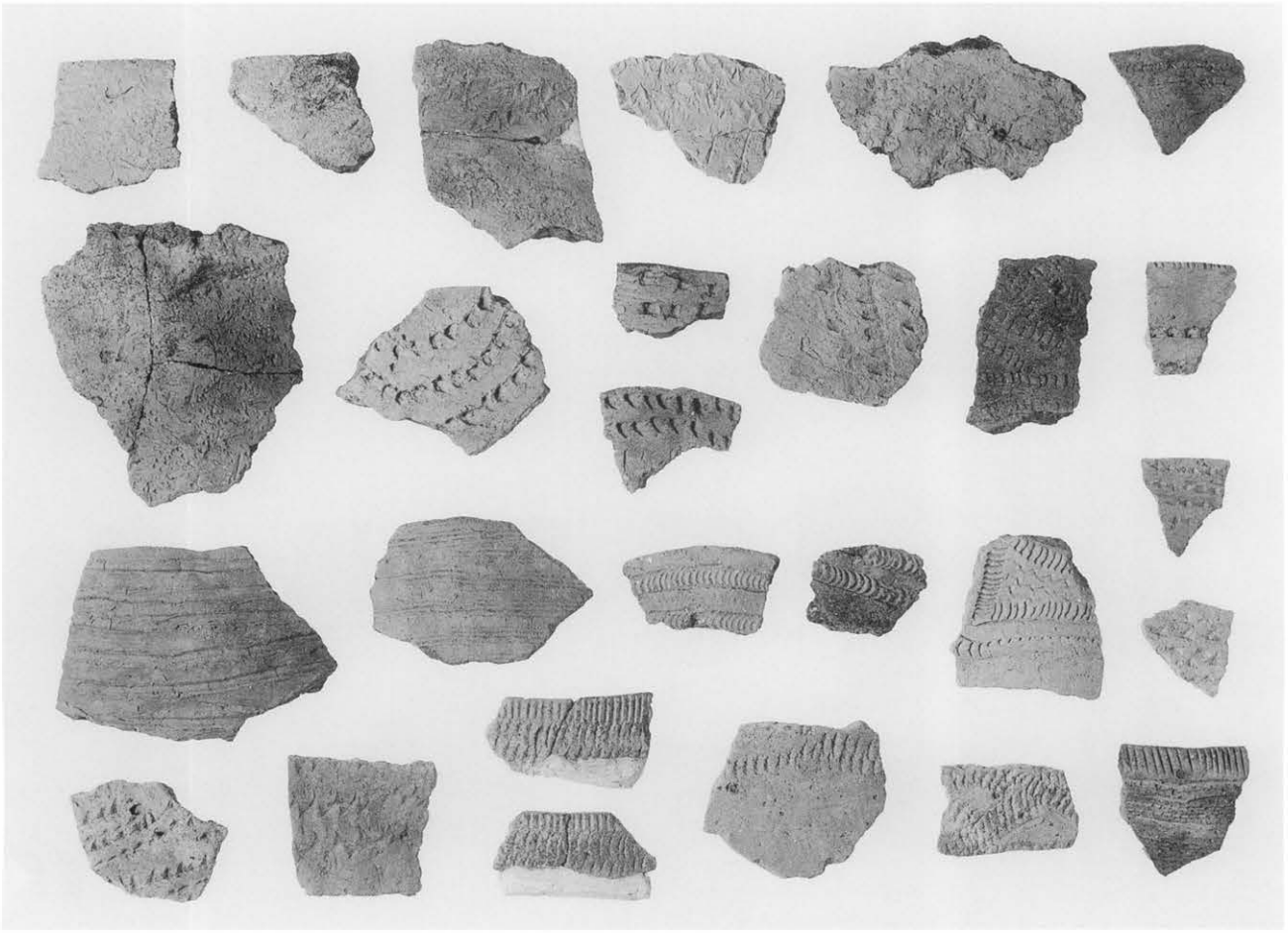
027



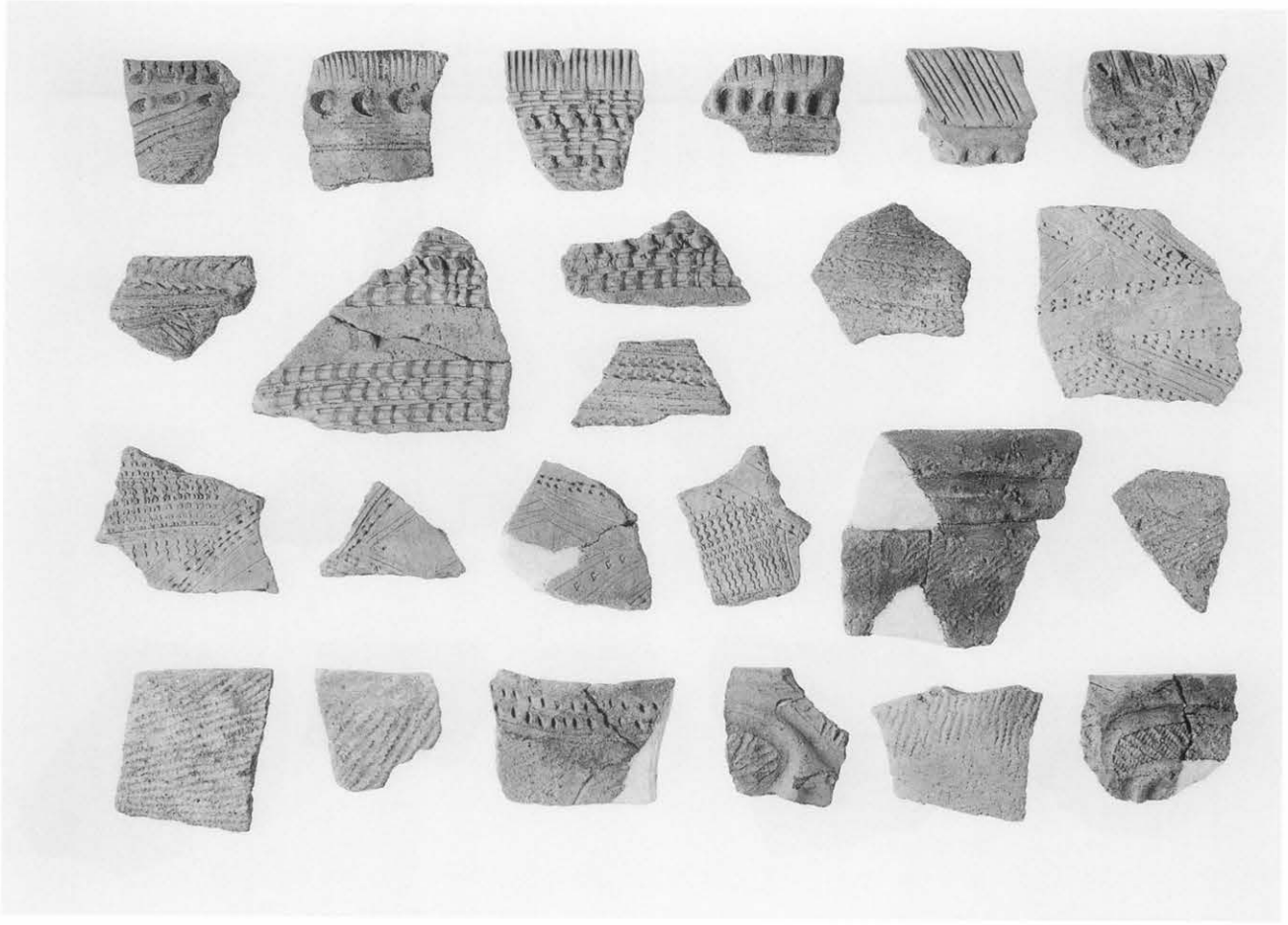


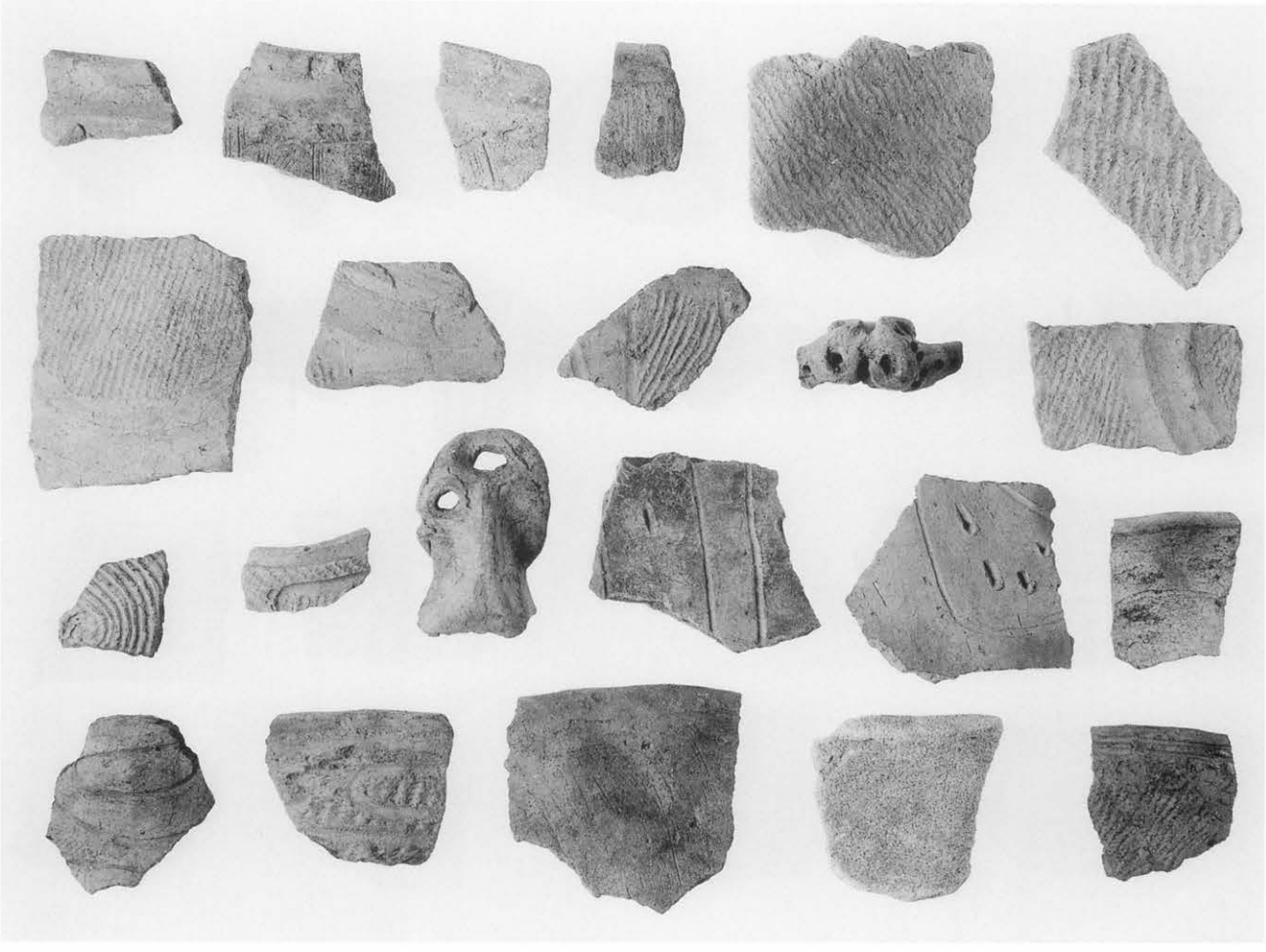
竪穴住居跡出土縄文土器（8）、グリッド出土縄文土器（2）



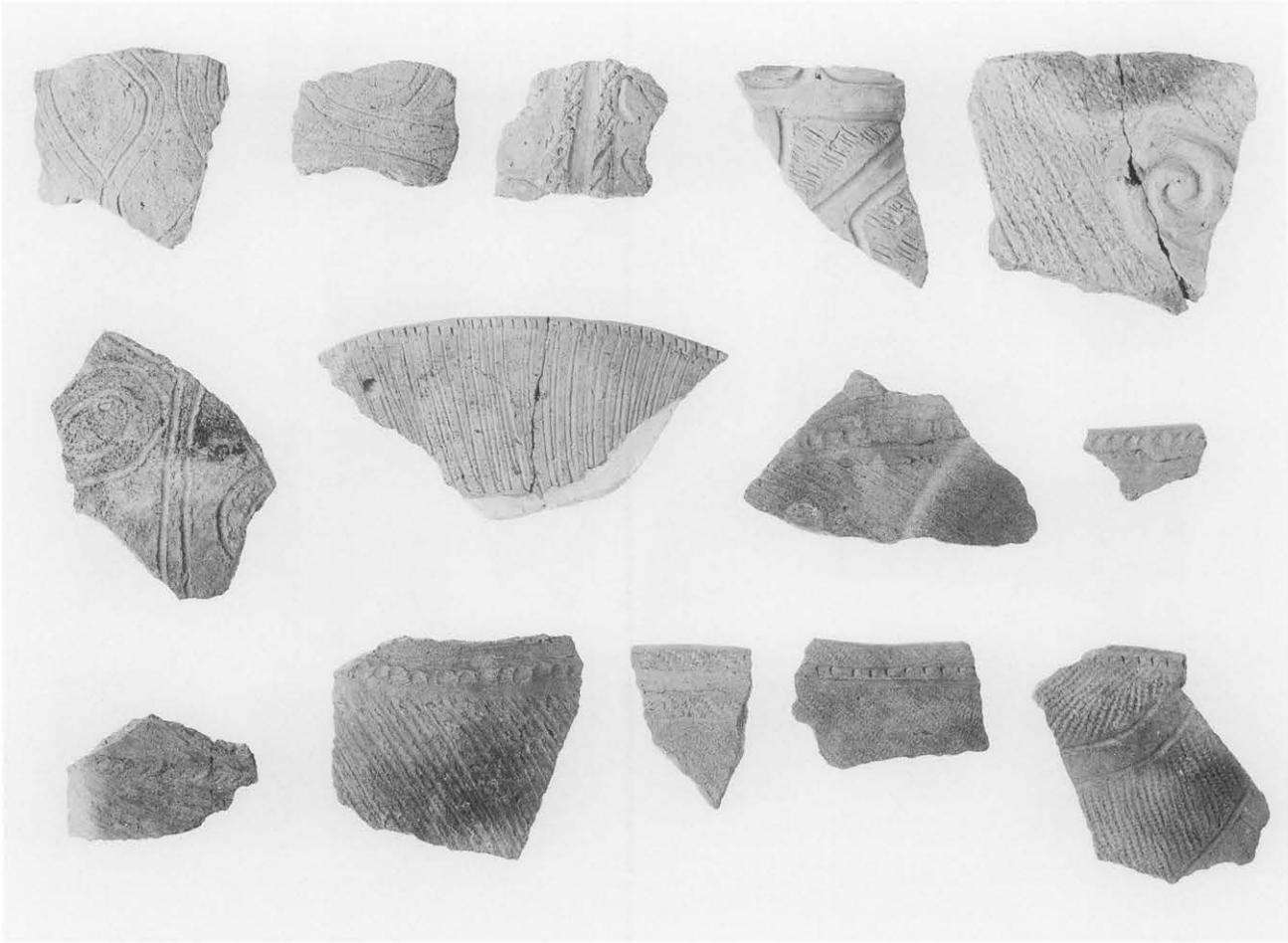


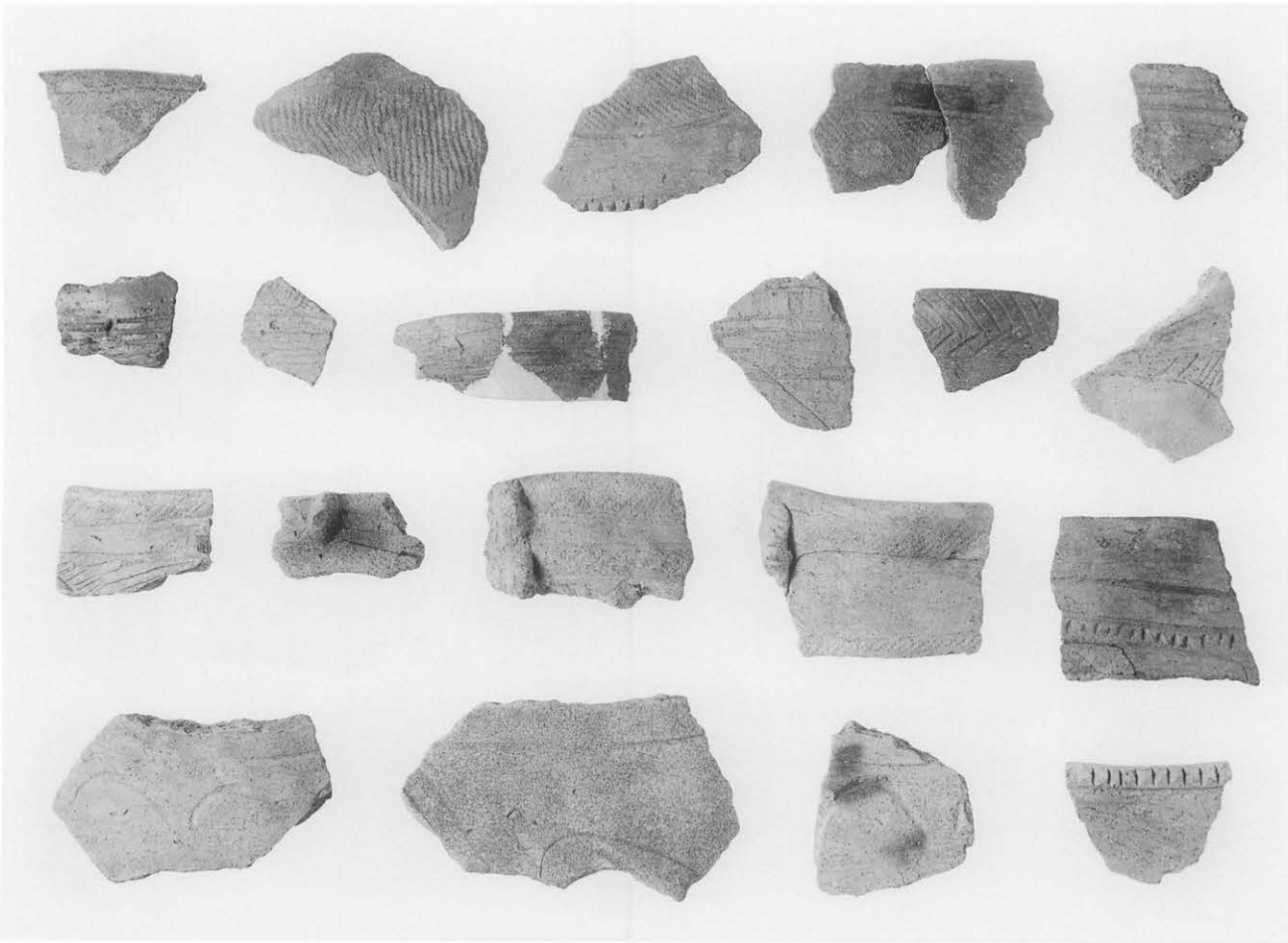
グリッド出土縄文土器（3）





グリッド出土縄文土器（4）





グリッド出土縄文土器（5）

竪穴住居跡

10

11

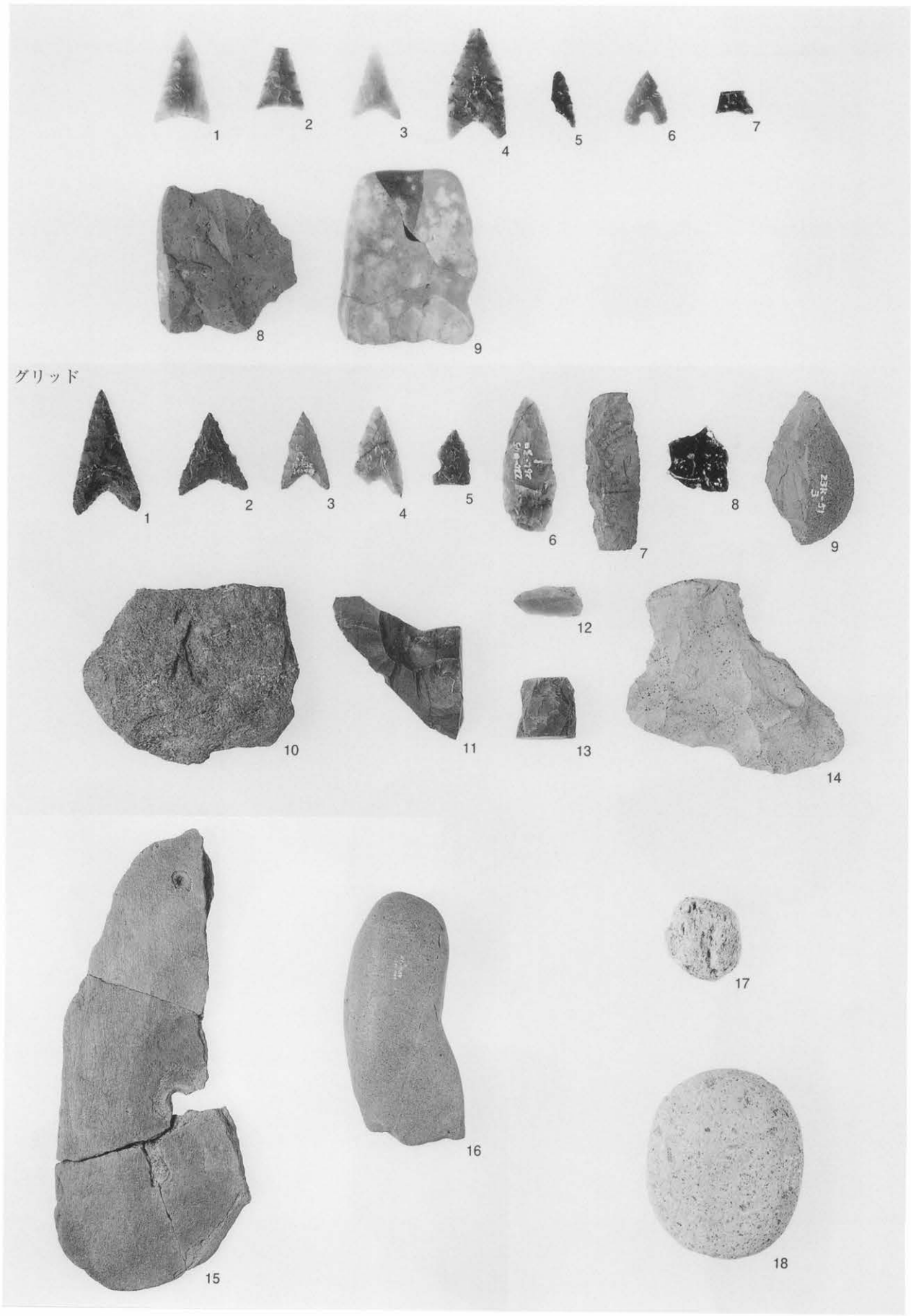
12

13

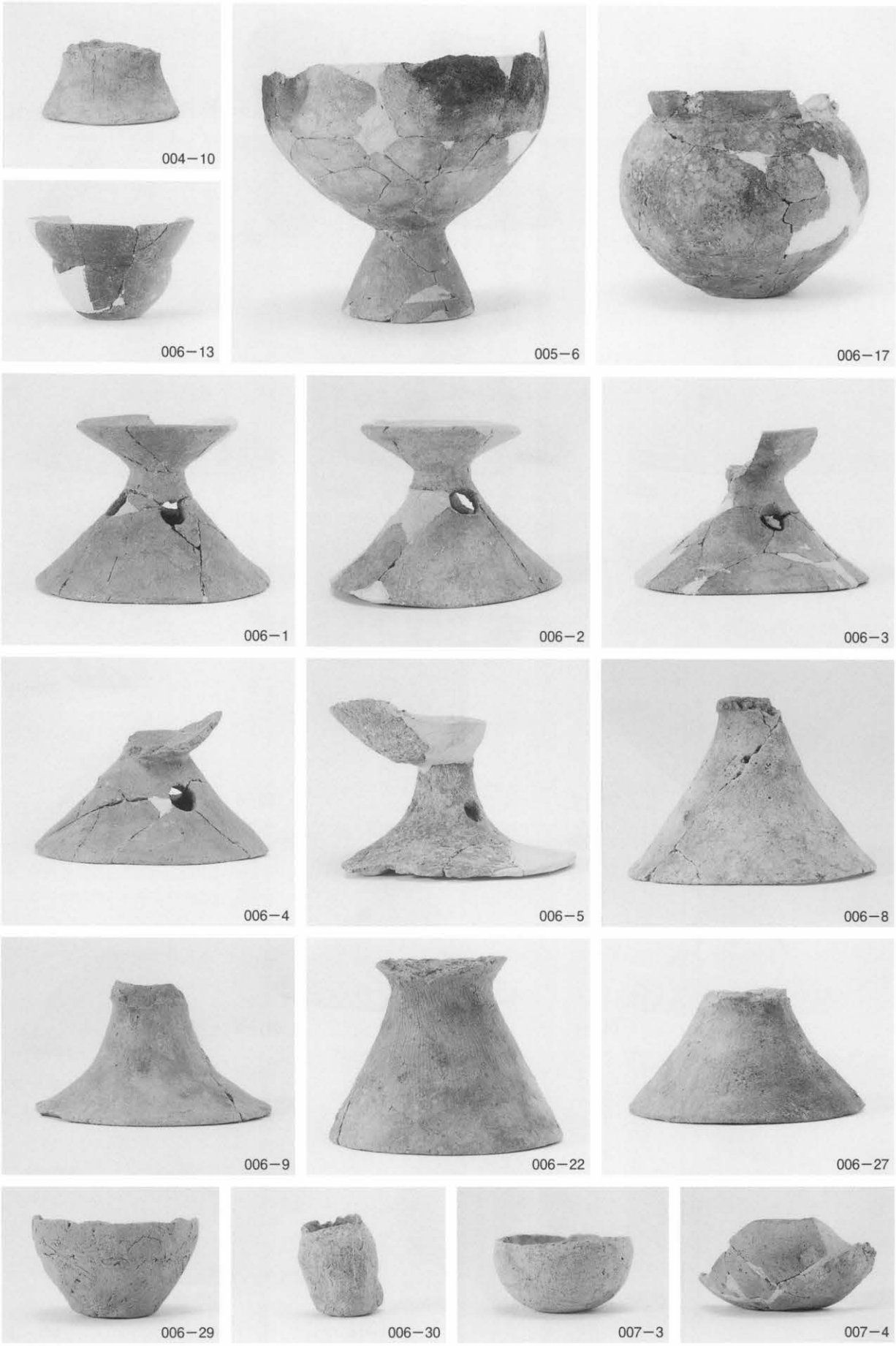
14

15

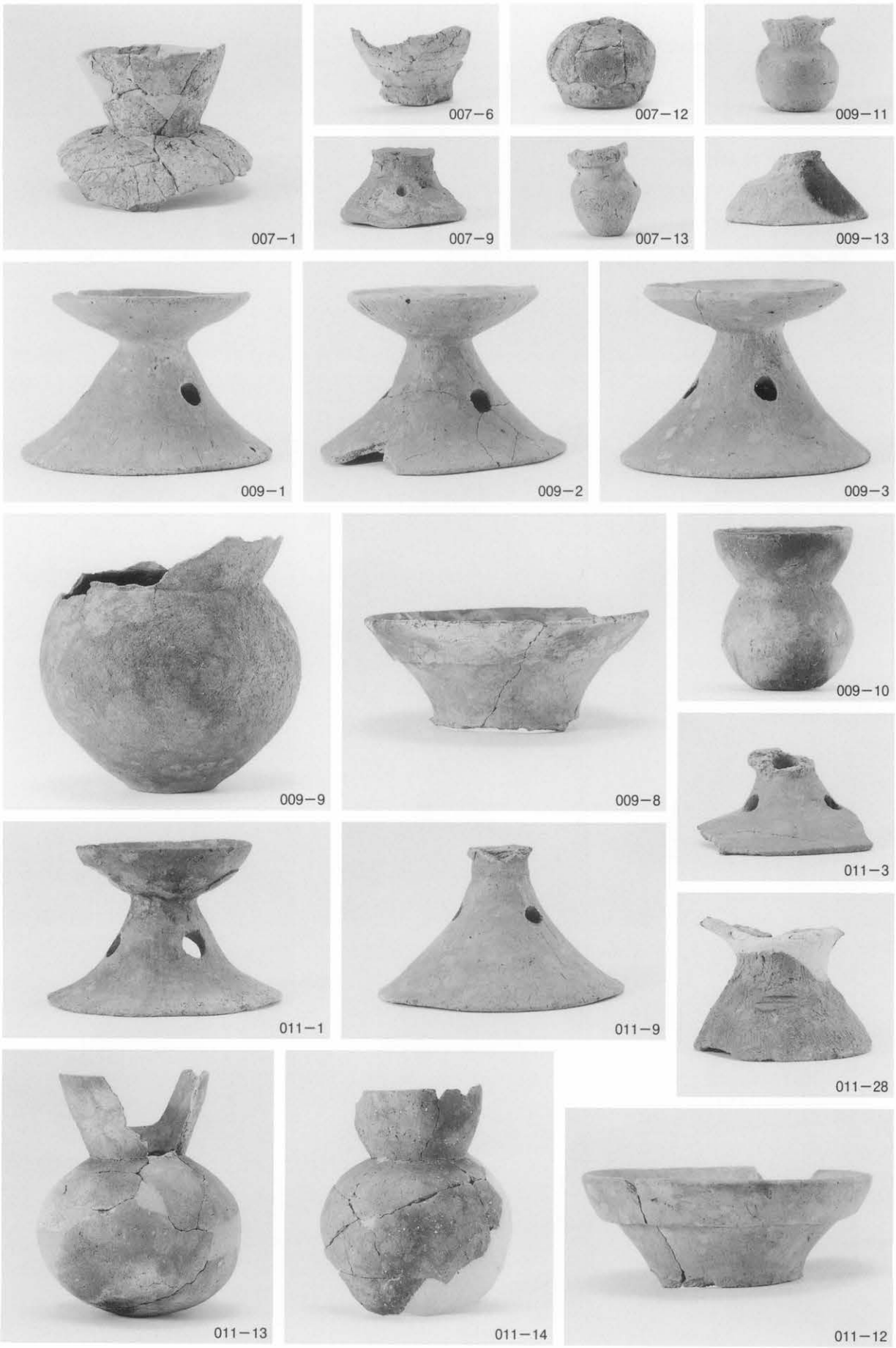
グリッド出土縄文土器（6）、縄文時代石器（1）



縄文時代石器（2）


004−10
006−13
005−6
006−17
006−1
006−2
006−3
006−4
006−5
006−8
006−9
006−22
006−27
006−29
006−30
007−3
007−4

竪穴住居跡出土土器（1）


007−1
007−6
007−12
009−11
007−9
007−13
009−13
009−1
009−2
009−3
009−9
009−8
009−10
011−3
011−1
011−9
011−28
011−13
011−14
011−12

竪穴住居跡出土土器（2）

011−20

011−23

012−8

012−1

012−2

012−3

012−11

012−13

012−14

012−12

013−15

013−16

竪穴住居跡出土土器（3）

013−1

013−6

013−19

013−35

013−36

013−37

013−38

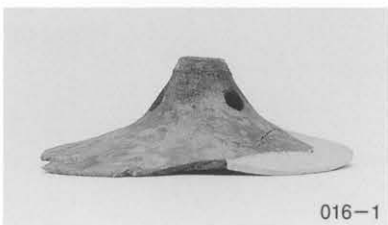
013−39

014−2

015−1

016−5

016−6


016−1

020−3

020−9

020−13

020−8

020−14

020−17

竪穴住居跡出土土器（4）

020−18

020−21

020−25

021−1

020−19

020−20

021−10

021−2

021−3

021−7

021−13

021−14

022−4

022−9

022−1

022−5

022−10

竪穴住居跡出土土器（5）

竪穴住居跡出土土器（6）、グリッド出土土器

報告書抄録

ふ り が な	ながれやましんしがいちちくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書　　名	流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書
副 書 名	西初石五丁目遺跡
巻　　次	2
シリーズ名	財団法人　千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第596集
編 著 者 名	栗田則久　木島桂子
編 集 機 関	財団法人　千葉県教育振興財団　文化財センター
所　在　地	〒284－0003　千葉県四街道市鹿渡809番地の2　TEL 043－424－4848
発行年月日	西暦2008年2月29日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西初石五丁目遺跡（にしはついしごちょうめいせき）	流山市西初石五丁目59－1ほか（ながれやましにしはついしごちょうめ）	12220	045	35度52分15秒	139度55分19秒	20001101～20051221	19,600㎡	土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西初石五丁目遺跡	包蔵地	旧石器時代	石器集中地点4か所	石器	古墳時代前期のみの集落で、小形仿製鏡を伴う祭祀が行われていたことが注目される。
	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡6軒、陥穴1基	縄文土器、石器	
		古墳時代	古墳時代前期住居跡20軒、土坑8基	土師器、小形仿製鏡、石製模造品	

千葉県教育振興財団調査報告第596集

流山新市街地地区埋蔵文化財発掘調査書２

― 流山市西初石五丁目遺跡 ―

平成20年２月29日発行

編　　集　財団法人　千葉県教育振興財団
文化財センター

発　　行　独立行政法人都市再生機構千葉地域支社
千葉市美浜区中瀬１－３

財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の２

印　　刷　株式会社　正文社
千葉市中央区都町１－10－６